
白の完全無欠

虎鉄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白の完全無欠

【Nコード】

N5504V

【作者名】

虎鉄

【あらすじ】

俺、橘四郎は異世界に追放されることになった。

正直…わくわくが止まらない！剣と魔法は男の永遠のロマンだし！！まあ俺の能力がチート臭いのはマジご愛嬌ってことで。

それじゃあ、剣と魔法と青春に彩られた冒険はじめまーす！！

契約

目の前に神様がいるというのに敬わない俺は一体何様か。そうです、橘四郎です。

「おい、話を聞いておったか？橘四郎」

神様、といっても見た目はオッサンがコスプレしているようにしか見えない、が黙り込んでいる俺に非難の眼差しを向けてきていた。

「もちろん！あ、いや、もちろん」

とまあ雑な誤魔化しをする。神様も深く追及するつもりは無いらしく、これ見よがしに一度大きく溜め息を吐いただけだった。

「つまり俺は異世界に行つて、そこで起きている異変を解決すればいんだろ？」

「うむ、異変といつてもまだ予兆程度だがの。これから確実に破滅に向かい始めるはずじゃ」つまり、俺は異世界の破滅を未然に食い止めればいいわけね。まんま勇者じゃん！俺はニヤケを抑えられずにいる。

「ニヤケておる所悪いが真剣に挑んでくれよ？これは契約なんじやから」

「契約？」

「うむ、地球を統べている神がお前さんの存在が強大すぎて地球の理から外れてしまつておると言つておつてな。これ以上は地球に悪影響を及ぼすとして異世界追放をしようとしてたんじゃ」

確かに。地球じゃ俺は浮いてたよな。何故か魔法使えてたし。車程度なら余裕で木っ端微塵に出来る位に。

「そこで自分の世界が危ういと感じていたワシがお前さんを引き取る事にしたんじゃ。これが契約じゃ。もちろん、お前さんとも契約をするがな」

「…何で地球の神様は俺を異世界追放になんてしたんだ？ぶっ殺せば良かったんじゃね？」

素朴な疑問。いくら俺が強いといっても所詮はただの人間。神様が不必要だと感じたんならバツサリと殺してしまった方が楽なはずだ。それとも神様は勝手に人を殺したりはできないのだろうか。

「…その辺は機密故に言えぬが、まあお前さんは特別ということじゃ。今はそれよりも契約を結ぶぞ」

「あいよ！」

「契約内容はワシがお前さんに退屈な日常から脱却させてやるの代わりにワシの世界を救うというものじゃ」

「…なんか俺の方のメリット少なくね？」

言うほど退屈していた訳じゃ無いんだが。一応、彼女もいたし。

「黙れ、リア充は爆発してしまえ」

「…おい！神様がそんな事言つなよ。てか心を勝手に読むなし！」

「ええい、うるさいぞ戯けが！お主なんかさっさと逝ってしまえ！

！」

逆ギレした神様が両の手を前に突き出すとそこから光が溢れ、俺を包んでいく。

「おいこら！てめえ今、行くの発音ぜってーおかしかつ……………！」

最後まで言い切る事は出来ずに光の濁流に呑み込まれる。

そんな俺を見つめる神様の瞳に優しさと親しみが込められていたことに俺は気付くことは無かった。

白い世界

周りが白に包まれた。先程までいた神様も見当たらない。上も下も、右も左もない白の世界。俺はそんな中に一人で漂っていた。

すると前方の方が揺らぎ、そこから人が出てきた。

「うおっ！？……お、俺？」

そこにいたのは俺だった。髪も顔も身体も、紛うこと無き俺。ただし俺とは圧倒的に違う点が一つあった。白いのだ。黒髪に学ラン、黒の運動靴の俺とは全くの逆だ。目の前にいる俺は髪も肌も服も、全て白い。そしてそれは何故か夢げにも見えた。

「誰だお前？」

驚愕はあったが気負うことも無くとりあえず質問する。

「俺はお前だよ。橘四郎」

「おおっ！？」

何やらファンタジーな感じに楽しくなってくる。やっぱり俺は日常が退屈だったのかもしれない。まあ茜とイチヤイチヤこっこするのは楽しかったけどな。

「お前が俺なら何でわざわざ出てきたの？」

白い俺に疑問をぶつける。

「まあただの老婆心からの忠告だよ」

いや、お前が俺なら同い年だし。老婆心も糞もないだろ。

「クク、そんな事はないさ。そんじゃ忠告しとくけど…」

ゴクリと俺は思わず息をのむ。

「ちゃんと避妊はしろよ？」

「……」

そう言つて白い俺は景色に溶けていった。

「な、なんじゃそりゃー！！！！！」

全くいきなり現れて爆弾発言して即退散とか悪趣味すぎんだろ白い俺。本当に俺かよ。てか避妊って…そんな相手いないし。

いや、待てよ？もしかしてあんな事言っつてことは異世界でも彼女出来るのか？

期待に胸が膨らむ。茜には悪いとは思うけど俺らの付き合いはちよつと特別だったし。

そんな事を考えていると突然視界が開けた。自分よりも遙かに下の方に大地が見える。

「つまり落下ですかい！」

うつひよおおー！！と叫びながらそのまま落ちてゆく。

そして思い切り地面に激突した。軽くクレーターが出来ていたのだからの高度と速度で落下したことが窺える。

「それでも俺の身体は無傷でしたよ、はい…」

分かっちゃいたが自分の不死身さには呆れるばかりだな。とか思いながらも俺は周りを見渡してみる。そこは草原だった。アフリカの大地とかよりもゲームのフィールドに近い感じ。

「リアル草原フィールドきたー！！！」

とりあえず叫んでみた。感動して辺りをキョロキョロと見回す。

『感動してくれて神様冥利に尽きるわい』

いきなり頭の中に神様の声が響いてきた。一瞬驚いたがまあ神様だしという事で納得した。

「いやあ、すげーな。ファンタジーだよ。ファイナルよりもファンタジーだよ！」

興奮して訳も分からない台詞を言ってしまった。

『うむ、それだけはないぞ』

ニヤリ、と神様が笑う効果音まで聞こえてくる。すごいけれど確実に能力の無駄使いだろ。

『なんと、このすぐ近くで美少女が魔物に襲われておるのだー！』
神様がそう言い切った直後。

美少女と魔物（表）

声がした方にすぐさま顔を向ける。すると臆気ながらも魔物らしい影が見えた。俺は空を睨みつける。

「まさか、あんたわざと!？」

眉を上げ糾弾の姿勢をとる。

『安心しなされ、ワシもそんな暇ではない。それよりも行かなくてよいのか?』

その言葉（テレパシー?）に俺はハツとしたような顔になる。すぐさま視線を魔物のいる方に戻し、全身に力を込める。

そして走り出した。あまりの勢いにその場には爆音が響き、地面が抉れる。わずか三拍で臆気な影しか見えなかった魔物の所まで一気に近づく。

少女を庇うように魔物と少女の間に割り込む。座り込んで泣いていた少女が目の前に突然割り込んできた俺に驚く。

「…ひっ…!」

俺は構わず少女を抱きかかえ魔物と距離をとるように後方へと跳ぶ。そこに少女を降ろす。未だに状況がのみ込めず固まっている少女の緊張をほぐすように俺は優しく言った。

「大人しくしてないと食べちゃうぞお!」

少女は泣いてしまった。

「…………くそ、なんてこった。これも魔物の巧妙な罠か!」

責任転嫁も甚だしかったが、全て魔物のせいにして振り返る。そこにいたのは巨大なワームだった。

「いやだあああー!?!?!」

ワームだからキヤラ的に恐らく雑魚なんであろうが、虫は嫌だ。気持ち悪い。

「…い、いやあ…さつきは君のせいにして悪かったね…うん…」

脂汗をかきながらワーム相手に謝罪をする情けない俺。

「ムヴヴウウー……！」

ワームはお怒りのようだ。心底嫌だがやるしかない。俺は拳を構える。

「む、むちゃ…です…っ！」

背後から絞り出すような声が聞こえるがかまっている暇はない。素早く身体に>武くを巡らせる。身体からは強烈な威圧感が溢れ出す。ワームが警戒するようにわずかに頭を下げる。

その瞬間、ワームが口から何らかの液体を吐き出す。よけるのは簡単だが今後ろには少女がいる。俺は空気を握るように拳を握り、ただ前へ突き出す。型はただの正拳突きだ。しかし威力はその比ではない。

空気を握るようにした掌から風が生まれる。その拳風はワームの吐き出した体液を吹き飛ばした。吹き飛ばされた体液が落ちた地面からはジュージューと恐ろしい音がしている。どうやら強力な酸性の液体らしい。よけなくて正解だった。

俺は跳躍し、太陽を背にするようにしてワームの真上に移動した。そして先程とは違いしっかりと拳を握り振り下ろす。

ぶっちゃあああ、と不快な音がしてワームの肢体が弾け飛んだ。もちろん絶命していた。

そして俺はというと傷は無いがワームの体液まみれになった。

「……………気持ち悪っ！！最っ悪だぁー！！！！」

ベトベトになりながらも少女の前へ向かう。

「…あ、あの…」

少女も体液まみれの俺に引いているらしく顔がひきつっている。

「…大丈夫か？」

とりあえず体液のことはいったん忘れろとして助けた少女に声をかける。

すると少女はハツとしたような顔になって急にお礼を言い出す。

「あ、あの…助けてくれてありがとうございますっ！」

少女が律儀にもぺこりとお辞儀をする。

「私、コルク村のハネネと申します!!」

美少女と魔物（裏1）

その日私は日課の薬草を採るためにコルク村を出ました。太陽がちょうど真上に来たような時間帯でしたからお昼時だったでしょうが。

最初は森に入ろうかと思いましたが、最近夜になると森から不気味な声が聞こえるといっていた村長の言葉を思い出し結局草原を中心に薬草採りをすることにしました。最初はなかなか見つからなかったんですが、一度見つけると後は簡単です。そのすぐ近くにも薬草が必ず生えているからです。私はホクホク顔で採集にいそしみます。

だいが夢中になっていたようで気付いた時には日が傾き始めていました。ここは結構村から離れているから日が暮れる前にかえろうと思い籠を背負います。薬草以外にも毒消しの葉や甘藷なども見つけられたので私は大満足です。

「フフーン」

鼻歌を口ずさみ（鼻ずさみですかね？）ながら帰路につきます。

それからしばらく歩いて行くと突然ゴオオオオ！という音が背後から聞こえました。私はその声で立ち竦みましたが何とか勇気を振り絞って振り返ります。

するとそこには>ジャイアントワームくがいました。ジャイアントワームの足下には穴が空いています。恐らく地面の中から出てきたのでしょう。

逃げなきゃ！！

そうは思っても身体が動きません。それに今にも泣きそうです。いえ、もしかしたらもう泣いているかもしれません。そこでジャイアントワームがムヴヴウウと叫びました。

私はその声で正氣に戻りました。急いでジャイアントワームとは反対方向に走り出します。しかし、いくら私が全力で走っても向こうは歩くような速度で当然のように追ってきます。

「つい、いやあ……」

声を出してもどうにもならない状況だというのに自然と声が漏れてしまいます。

そしてとうとう体力が無くなり、呆気なく小石に躓いて転んでしまいます。

私は籠を抱えるように抱きます。本来なら籠を投げたりするのかもしれませんが、これは病弱なお姉ちゃんが私のために編んでくれた籠です。そんな事は出来ません。そしてそれを思い出すと急に恐怖が増えていきました。

死にたくないっ！！生きたい！！お姉ちゃんに、お父さんに、村の皆に会いたい！！

でも私自身は何も出来ません。だから、思い切り叫びました。

この声が誰かに届きますようにと。どうか私を助けて下さいと。

ジャイアントワームがどんどん接近して来ます。もうダメだと思っただけの時、目の前に黒い何かが飛び込んで来ました。

「ひっ……！」

思わず驚いてしまいました。なんとそこに現れたのは少年だったのです。

黒い髪に鋭い眼。170くらいの背丈で見たこともない黒い服を着ている。剣も杖も持っていない。

彼はいきなり私を抱きかかえると後ろに跳びました。すごい速さ

です。そしてそこに私を降ろし優しそうな顔で言いました。
「大人しくしないと食べちゃうぞぉ！」

美少女と魔物（裏2）

「大人しくしてないと食べちゃうぞお！」

そのふざけたとしか思えない言葉に何故か私は安心してボロボロと泣いてしまいました。

「……………くそ、なんてこった。これも魔物の巧妙な罠か！」

彼は私が泣いた理由を勘違いしたらしく慌てていました。

「いやだあああー！！！！」

振り返った彼はジャイアントワームを見て叫びました。気持ちは分かりません。気持ち悪いですね。

「…い、いやあ…さっきは君のせいにして悪かったね…うん…」

脂汗をかきながら謝罪をする彼。

「ムヴヴウウー！！！！」ワームの絶叫を聞いて彼は何故か拳を構えました。

「む、むちゃ…です…っ！」

私は声を絞り出しました。心はもう落ち着いていても身体はそう上手く動きません。

すると彼の身体から急に強烈な威圧感が溢れ出しました。それにジャイアントワームが警戒するようにわずかに頭を下げます。

その瞬間、ジャイアントワームが口から何らかの液体を吐き出しました。危ない！！

拳を前へ突き出しました。すると掌から風が生まれ、その風は吹き出された体液を吹き飛ばした。

吹き飛ばされた体液が落ちた地面からはジュージューと恐ろしい音がしていました。

かと思っただけで急に彼の姿が消えました。

するといきなりジャイアントワームが破裂してその中から彼が出てきました。体液でベタベタになっています。何だか可哀想です。

思わず眉間にしわを寄せてしまいました。

「……………気持ち悪っ！！最っ悪だぁー！！！！」
そう言いながら彼はこちらへ向かって来ました。

正直、何が起きたのかよく分からなかったんですが、ただ一つ。彼はとても強いという事だけは分かりました。まあ体液でベタベタですけど。

「…あ、あの…」

大丈夫ですか？と、一応ケガがない聞くつもりでした。しかしそれよりも彼の相貌に気を取られてしまいました。

その顔はやや女性よりなとても魅力的な顔立ちでした。

「…大丈夫か？」

私はその声に思わずハツとしてしまいました。

「あ、あの…助けてくれてありがとうございましたっ！」

急いで助けてもらったお礼を述べます。もちろん丁寧にお辞儀もしました。

「私、コルク村のハネネと申します！！」

これが私、ハネネと彼、シローとの出会いでした。

方向性

ハネネと名乗った少女はこちらをジッと見つめている。照れるぜ。
「ああ、俺は橘四郎だ。よろしく！」

爽やかな笑顔と共に手を差し出す。しかしハネネはその手を握り返さずに首をかしげている。

そうか。この世界に握手の文化はないのか。差し出した手を戻すが、なんか恥ずかしい。

「シロー様ですか…。よろしく願います。それでシロー様はどうしてこのような草原にいらしたんですか？」

「様なんて付けないでシローでいいよ。俺もハネネって呼ぶし」

「そうですか？ 私としては恩人ですし。せめて間をとってシローさんでどうですか？」

「まあそれならいいよ。…んで、俺がここに来たの理由ってのは…」

何か素敵な言い訳を考えろ。この世に受け18年。その18年の中で今が一番考えてるだろうと言っても過言ではないくらい考える。

「来たのは？」

「……き、君がピンチになるって知ってたからさ！」

自分で言うておいてアレだが最悪の誤魔化しだ！悪くて犯罪者、良くてナンパ師にしか見えない。ハネネがジッと真偽を確かめるかのようにこちらを凝視している。とりあえず今は真摯に見つめかえすのが一番だと思い、俺もハネネを見つめる。

か、可愛い！年齢は俺よりもいくつか下だろう。小柄で150くらい、背丈に腰まで届く黄金の髪。そしてそれに合わせるように輝いている黄金の双眸。かといってキツイ顔立ちではない。どちらかというと眼は少し垂れており、周りの者に安らぎを与えるような優しい顔だ。ちなみに胸も大きい。そっちを凝視するのはあまり失礼だからマジマジと見たりはしないが。

「あ、あの…シローさん、そんなに見つめられると……」

いつの間にかハネネの可愛さにトリップしていた俺は現実へと引き戻される。

「…ああ、すまない」

「い、いえ…」

ハネネは頬を染めて照れた様に下を向く。

それから少ししてから上を向いたハネネが俺に話しかけて来る。

「シローさんは何かワケありのようですね。助けてくれたお礼に良かったら村まで案内しますよ？体中ベタベタだと気分が悪いでしょうし」

どうやら俺はハネネに対する認識を改める必要があるらしい。稀少なロリ巨乳というだけではなく大分頭もいいようだ。

というか、いつの間にかハネネをロリ巨乳なんかに関分類したんだ俺？

いや、仕方ない。これは男の性だ。

「あの…シローさん？」

「…んお！いやすまない。ちょっと考え事しててな。じゃあとりあえずコルク村に案内してくれないか？」

「はい！」

ハネネは満面の笑みで頷いた。

こうして俺はひとまずコルク村を目指す事にした。

姉妹

コルク村に着く頃にはすっかり日は落ちていた。

「ついに着いたぜ！」

俺はガッツポーズをする。ファンタジー世界に体一つでやってきてようやくここまで辿り着いた。少々リアクションがオーバーなのはワームの体液のせいだろう。

「ハネネ！」

突然、村の方から甲高い声が聞こえたと思ったら誰かがこちらへ駆けてくる。

「お姉ちゃん！」

その影の方へとハネネも走っていく。

二人は強く抱き合ったが俺は正直置いてけぼりだ。仲良きかな、仲良きかな。とりあえず満足げに頷いた。

「本当にこんな遅くまで！心配したのよ？」

「ごめんなさい…。その…帰り道にジャイアントワームに襲われちゃって…」

姉の言葉にシュンとしながら答えるハネネ。ていうか、ジャイアントワームって。まんまやーん！

「ジャ、ジャイアントワーム!？」

姉の方は大分驚いているようで、声を上擦らせている。

「だ、大丈夫だったの!? 怪我はない!？」

「う、うん。大丈夫。あの人が助けてくれたから」

そう言っただけでハネネは俺の方を指差した。姉の方はそこで初めて俺に気付いたらしい。ハネネと同じ黄金の瞳が少し見開かれたように見

えた。

俺は姉妹の方へと近づく。暗くてよく分からなかったが姉もハネネに似た美人のようだった。

ただハネネと少し違うのは全体的に色素が薄く、腕や足も枝のようになめ細まっていることだった。

「妹が危ない所を助けていただきありがとうございます」

「うん、まあ気にすんな」

俺が気さくに答えると姉は少し驚いた様な顔をした。

「黒い髪に、黒い瞳。珍しいですね…」

「そうだよ！私もびっくりしたもん」

俺の髪って珍しいのか？日本じゃ黒眼黒髪が普通だったからなあ。

「あ、申し遅れました。ハネネの姉のミリナです」

妹と同様にお辞儀をする。ハネネの丁寧さは姉譲りか。

「俺の名前は橘四郎。少し訳あってこちらに来た」

俺も挨拶を返す。

「訳…ですか？」

少しだけ疑惑の視線を向けてくるミリナ。まあ無理もないだろう。

ここでは黒眼黒髪が珍しいらしいし、それも拍車をかけているのだろう。だけど今はその疑惑を解くよりもやらねばならない事があった。

「ああ、だけど今は体の汚れを落としたいんだが」

両手を広げて体液で汚れているのをアピールする。するとミリナは少し眉をひきつらせてから分かりました、と言って俺に着いてくるように促した。

そして俺はコルク村に足を踏み入れようと歩き始める。前方を歩いていたハネネが振り返り一言。

「ようこそ、コルク村へ！」

コルク村にて

村に着いてまず行つたのは水浴びだった。どうやらこの世界で水はそれ程貴重なものではないらしい。ファンタジーだと水不足なんかはありがちなので偏に感心せざるを得なかった。

その後、ハネネ達の親父さんが出てきてこれまた丁寧に礼を述べていた。

「行くところがないのだろう。今日はうちに泊まっていきなさい」
その親父さんの提案を俺はありがたく受けることにした。

そして今、テーブルを囲んでその場には俺とハネネとミリナがいた。

「…色々聞きたい事があるんだがいいか？」

「聞きたい事ですか？」

答えたのはミリナだ。

「まずはお金についてだ。この世界のお金の単位は何だ？」

「……」「……」

俺の質問に返ってきたのは沈黙だけだった。変な事言つたつもりはないんだが…。

「…お金って何ですか？」

「……は？お金が何かって…。お金はお金だよ！そんな事も知らんのかい！？」

とは言わずに必死に二人に説明する。

「食べ物買つたり、仕事をしたりして貰うやつのことだよ」

「…ああ！…t p tのことですね！」

「ていーぴーていー？何だそれ？」

「…知らないんですか？」

二人が信じられないと言ったような瞳でこちらを見つめる。

「この世界で生きているのにt p tを知らない人はいないと思うんですけど。貴男、何者なんですか…？」

部屋の温度が少し下がったように感じられた。どうやら二人が俺に不信感を持ち始めたようだ。

さて、選択肢はいくつかある。無難なのは適当な理由をでっち上げて誤魔化す。リスクが高いのは俺が異世界人だと話す。そして最後は魔法を使って調べる。

個人的にあの二人に魔法は使いたくない。可愛いからね！それにレディには紳士的であるべきだ。

「そうだな。ちょっと信じられないかもしれないが、それでもいいなら事情を話すか…」

結局俺は真実を話す事にした。

「かまいません。話して下さい」

ミリナが少し警戒するように答える。ハネネの方は警戒はしていないが緊張しているようだ。

「実は俺は……」

「異世界なんだ！」

間違えたああ！！！！

「人」が抜けちゃったよ！

むっちゃ恥ずかしい。二人とも目が点になってるし！

「ゴホンッ、実は俺…異世界人なんだ！」

とりあえず何事も無かったかのように言い直した。

「異世界人？この世界の人間ではないということですか？」

ミリナが疑わしげな視線を向けている。

手っ取り早く信じてもらうには俺の記憶を見てもらった方が早いな。

「んじゃ、とりあえずこれを見てくれ。＞共有く！」

俺は自らの記憶を魔法を使って二人に共有させた。

そういえば、あのワームも魔法で倒せば体液まみれにならずに済んだのにな、と今さら気付いた。

もちろん一気にテンションが下がった。

現状把握

俺の記憶を共有した二人は記憶の旅から帰ってきてからは思ったよりスムーズに事が進んだ。曰わく「嘘にしては想像出来る範囲をこえているから」らしい。

まあ確かに車とか飛行機とかはこっちの世界の人じゃ考えは出来ても想像は出来ないだろうね。

そして俺もこちらの世界の事をいくらか教えてもらった。

まずこの世界には硬貨という概念はないらしい。その代わりに「t p t」というものがあるということだ。「t p t」は「トラストポイント」の略で「信頼ポイント」のことである。

ポイントというのは比喻ではなく実際に硬貨ではなくカードにポイントのやり取りで生活しているのだ。そしてこの世界に生を受けた人間は全て「カード」を持っている。というより「カード」と唱えれば誰でも出せるらしい。

そこに「t p t」を入れるということだ。長々と説明したが、つまりは電子マネーと同じ要領だ。

そして「カード」というのは本人の身分証明書であるとのことだ。ギルドに属する人間はこの「カード」に更にいくつかの情報が加わるらしいが詳しい事を知りたいならギルドに行けとの事らしい。

「そういえば俺にもそのカードとやらは使えるのか？」

「わかりません…。>オープン<と言えば出てきますので試してみたいかがでしょうか？」

ミリナの提案にそりやそうだと思ひながら俺は「>オープン<！」

と唱えた。

すると目の前に頭の大きさ位の透明なボードのような物が出てきた。

「お？何か色々書いてある」

その言葉に二人がこちらを覗き込む。

「見せて下さい」「すいません」

と。前者がミリナ。後者がハネネだ。

そしてカードに書いてあった事はというと…。

名前：シロー・タチバナ

年齢：18

出身：異世界

所属：なし

tp t：0

Fリスト：0

「うわぁ、すごい！出身が異世界に！」

「どうやら本当らしいわねえ」

納得する二人。カードは存在そのものだから誤魔化すことは出来ないらしい。

「Fリストって？」

「フレンドリストですよ。お互いが登録すると離れていても>光字<で連絡が取れるんですよ」

>光字<とはメールと同じらしい。この>光字<とカードはこの世界に生まれた時に受ける「加護」らしいので誰でも使えるとのことだ。

結局この日は二人とフリストを交換して終わった。

四郎は知らなかった。地球のメールも電子マネーもこの世界のt
pと>光字<を真似たものだということを。

そしてカードが使えるのも異世界であるはずなのに言葉が通じる
のも、四郎と契約したこの世界の神様のサービスだということも。

2日目

次の日はハネネに起こされた。

「起きて下さい、シローさん。お昼ご飯ですよ」

「…うゝ、あと5分…」

「もうゝ、何言ってるんですか！起きて下さいよお」

「…うゝ、あとご飯…」

「そうですね、ご飯ですよゝ。だから起きて下さいゝい」

ハネネが必死に俺を起こそうとしているので仕方なく起きる事にする。ムクツと起き上がり半眼でハネネに挨拶をする。

「…おはようさんはねー」

「はい、おはようございます。何だかすごく眠そうですね」

クスリと笑ってハネネは立ち上がる。ご飯を食べるのだろう。俺も立ち上がりハネネに続く。

そうして食卓につくが、そこにはミリナがいなかった。

「あれ？ミリナは？」

その質問に親父さんとハネネが一瞬、表情を曇らせる。まずい事を聞いたかとも思い、特に追及はしなかったが不意にハネネが口を開いた。

「最近、お姉ちゃん身体が良くないらしいの。昔から病弱ではあったんだけど普段はとつても元気でただ少し人より病気にかかりやすいってだけだったのに…。身体も随分痩せちゃって…」

その話に親父さんは悔しそうに顔を歪めて下を向いている。ハネネの声にも明るさはなかった。

「それでハネネは昨日、あんな所まで薬草を探しにいったのか？」

「いえ。薬草自体はよく森の方へ取りに行ってたんですが、最近村長さんが森の方から雄叫びが聞こえるって言っていたので…。まあ

原因はあのジャイアントワームだったと思うのでもう安心ですが…」
そう言っているハネネの表情は暗いまだ。

何か急速に暗くなっちまったな…。ご飯とか食べてる空気じゃなくなってるし。ちなみにメニューはパンと野菜スープだ。

重い空気の中、黙々と食事をしていると今度は父親が口を開いた。
「本当は薬草もすっかりしたのを買いたいんですが、何分農民は稼ぎが悪くて…。しかも最近無理し過ぎたのか村人にも風邪にかかるものが多くていけません。父親として情けない限りです…」

……さらに雰囲気が重くなった。

「そんな事ないよパパ。パパが頑張ってるのは知ってるし、私もパパやお姉ちゃんを守りたくてやってる事だから」ハネネがそう言った事で暗く雰囲気から少し暖かいものへと変わった。

そうして食事が終わり、ふと窓の外を見ると辺りはすでに真っ暗だった。あれ？俺、さっき起きたばかりなんだが…。

……どうやら少し寝過ぎたようだ。

そして俺はしっかりと反省して再び布団へともぐった。

推測

暗い夕飯を食べた後、俺はすぐに眠った。しかし皆が寝静まった頃、俺は起き出してこっそりと家を出た。誰にも感づかれないようにとりあえず村の入り口の方へと歩いていく。

わざわざ夜中起き出したのには理由がある。昨日のワーム（正確には>ジャイアントワーム<だが）の件だ。

「ねむねむ」

まだ寝ぼけているのかつい口から歌がこぼれる。それでも眠さを噛み殺し俺は思考を続ける。

あの草原には本来ワームはいないらしい。それだけならハグレモンスター の線が濃厚であるがハネネと親父さんとの会話で、ふとある理由を思い付いた。

今はそれを確かめるために動いている所だ。村の入り口につくと体中にわずかばかりの>魔くを巡らせる。すると俺の身体の神経が急速に敏感になったように感じられる。そのまま感覚にまかせ意識を森の方へと集中する。

「……いた」

やはり俺の考えは正しかったようだ。

これ以上探ると相手に感づかれる可能性があるのだから>魔くを解く。次に森の中を素早く移動するために体中に>武くを巡らせる。底の方から力が湧いてくる。

俺はワームの時とは逆にその場から静かに、かつ猛スピードで森の中へともぐって行った。

音もなく森の中を駆ける。夜で暗くはあるが、武くを纏っている俺には関係ない。昼間と同じように周りの景色がしっかりと把握出来ている。時々森にいる動物が俺が来ると慌てたように逃げていく。動物と魔物の違いは簡単だ。魔くを纏っているかどうか、すなわち魔法を使えるかどうかだ（あくまでワームを見ての俺個人の判断なので絶対とは言い切れないが）。そしてこれから戦いに行くのは魔物のところ。まあいくら魔物でも俺には適わないと思うがな！

そうしていくらか走っているとようやく目的の魔物を見つけた。あのワームと同じくらいの大きさだが姿は全く違う。

うん、でっかいカブトムシだ。ここまで大きいとさすがに子供も喜ばないだろう。まさにム キングだ。

「やっぱりな。あのワーム幼虫っぽかったし、夜の森で慟哭してたのはお前か。お前には悪いけど狩らせてもらうぜ、ムシ キングさんよ」

先ほどと伏せ字の場所が異なっているようだが気のせいだろう。

そして俺はでっかいカブトムシの前へと躍り出た。今、夜の森で戦いが始まるうとしていた。

夜の狩人

「…という訳で目の前にでっかいカブトムシがいます!」

誰に言っているのか分からないが、何か言わないといけないような気がしたので言ってみた。

目の前のデカブトムシ（命名してみた）には恐らく並み攻撃は通じないだろう。あの頑丈な甲殻は伊達ではないだろう。

「ゴオオオオツ!!!」

先に動いたのはデカブトムシだった。羽を震わせ、風の刃は放ってきた。それも6発。俺はあえて前へ飛び上がり、刃と刃の間をくぐり抜けデカブトムシとの距離を詰める。

デカブトムシは休むことなく次の風の刃を放ってきた。距離が近いかわすのは難しいはずだが、今の俺は>武<を纏っているので何ら問題はない。

呆気なくデカブトムシの前まで近づくと俺は拳を放った。

バコオオオオン!!!

と盛大な音がしてこれまた呆気なくデカブトムシは…

ザクッ!!

「痛ったー!!!??」

死んでなかった。しかも油断して思い切り角で刺された。勝利のポーズを決めている最中だったので避ける事は出来なかったのが悔しい。

「くッ！なかなかやるじゃないか」

本気になればデカブトムシを倒せる方法はいくらでもある。

ただ単純に今より>武<を強化すれば一発殴るだけで事足りる。全力で>魔<を纏って一番弱い魔法であるファイアを唱えればデカブトムシどころか森すら焼き尽くせる。

しかしそんなつまらない事はしない。これは橘四郎としてのプライドだ。先ほど傷はないとはいえ油断して一撃貰って醜態を晒した誰が見ている訳でもないがそれを俺、橘四郎は許しはしない。

「結局、俺はクールぶってるけど全然クールじゃねーわな」

むしろテンション上がると謎のギャグとか大ボケもかますしな、と苦笑気味に笑う。

「んじゃ今から面白いもんを見せてやるよ」

「ゴオオオオッ！！！」

俺の言葉に合わせるようにデカブトムシが叫ぶ。

俺はその叫びを軽く受け流し、集中する。身体を強化する>武<を更に強める。そして叫ぶ。

「>武神化<！」

>武<を纏っているその上に魔法を使うための力である>魔<を重ねる。

纏っていた>武<はその上の>魔<を吸収し、本来見えないはずの>武<が具現化する。

全身が漆黒の鎧で覆われる。背後には大きなケルト十字のようなものが浮かんでいる。その神々しさと強さから俺はこれを>武神化<と呼んでいる。

あまりの威圧にデカブトムシだけでなく森も大気も揺れている。

しかしこれでも＞武神化<の出力は抑えている。出力の目安としては色が濃いほど出力が弱い。つまり純白が一番強いことになるが今回は漆黒。出力最低ランクだ。

「ゴオオッ、ゴオオオオオッ！！！」

デカブトムシが俺の威圧に耐えられず突進してくる。

俺は突っ込んで来たデカブトムシの角を片手でつかみ取り枝を折るよりも容易く折った。

「ゴオオオオッヤアアアッ！！！！」

明らかに先ほどまでとは違う苦痛の叫び。俺は容赦する事デカブトムシに拳をふるった。その拳はデカブトムシの身体には直接当たらなかったが、その風圧だけでデカブトムシの全身は後片もなく砕けた。

俺は＞武神化<を解いてとりあえず手に持っている角をポケットに入れた。とはいっても半分以上ポケットからはみ出ているが。

そして周りを見渡し次にやるべき事を考え始めた。

<一族殺し>

「…さてと…次は…」

デカブトムシを殺した俺は次の行動を取るべく地面に目を向けた。

先ほど確かにデカブトムシは倒した。しかし、気配からしてまだ幼虫が地面の下に何匹かいるだろう。幼虫、つまりワーム共だ。

「…どうしようかね。わざわざ地面から出すのも面倒だし、かといって地面を通して強力な魔力を送って殺しても魔力が強すぎて土壌がダメになっちまう…」

うんうん唸りながら様々な方法を考える。そして良い方法を思いついた。

先ほど倒したデカブトムシの角を持って全身に>魔くを纏い、魔法を発動する。

「>一族殺し<！」

するとデカブトムシの角が一瞬強く輝き、次の瞬間に光は消えた。「これで死んだっばいな」

直接見たわけではないが、魔力の反応が消えたから間違いないだろう。とりあえずこれで一件落着だ。

今使った>一族殺し<は>共有<の上位魔法にあたる。簡単に言えば死を共有させたのである。

ただしこれで何でも殺せるという訳ではない。>共有<の魔法は共有させるものによってその発動条件が大きく異なるため使い勝手が悪い魔法なのだ。

例えば感情、喜びや悲しみを共有させる場合は自分を中心とした半径5メートル以内である。それ以上だと魔力はあっても伝える感情が薄くなり上手く伝わらない。

思考を共有するには最低でも知り合いである必要がある。そして親しければ親しい程、より深く思考を共有できる。

先日、姉妹に使った記憶の共有は共有させる記憶の持ち主の許可が無ければ共有できない。

>一族殺しくは死を共有させる。条件の難易度と魔力の消費はダントツトップだ。条件は自分が殺した者の血族に死を共有させる。致し、殺した10分以内に行うことと共有させる相手に悟られてはいけないこと。それと一族は皆殺しであり誰かを特別に生き残らせる事はできない。というものだ。主に魔物の討伐に使う魔法だが消費魔力が大きいためあまり使われない。いや使えない。

ここで当然の疑問として生を共有させることは出来るのか、という疑問が出てくるが答えは否だ。生を共有させるという事は即ち魂を共有をさせるという事である。魂はその肉体と精神の二つが揃って初めて型にはまるもので他者の肉体や精神に宿るものではない。故に生の共有は不可能という訳だ。

「んじゃ、帰って寝ますかね」

一仕事終えた俺はゆっくり歩いて帰った。

しかしゆっくり歩きすぎてコルク村に着く頃には空が明るくなってきたいて結局ゆっくり寝れなかった俺だった。

出発

数時間もしないうちにハネネに起こされてしまった。どうやら睡眠が浅かったみたいで昨日みたいに夜まで無理矢理寝通すことは不可能だったみたいだ。

「をはよー……」

「はい、おはようございます」

ハネネはにつこりと微笑む。その後ハネネに着いて行き食卓へと着く。そこには親父さんとハネネとミリナの姿もあった。

「今日はミリナもいるんだな」

俺のその言葉にミリナがとても嬉しそうに笑う。つられるようにしてハネネと親父さんも笑う。昨日の晩ご飯ではあれ程暗そうにしていたのが嘘みたいだ。

「何だか今日は凄く調子がいいんです。こんなに爽やかな朝は本当に久しぶりよ」

「顔色もいいしね！」

「そっかあゝ。良かったな」

結局問題はあのデカブトムシだったのだ。恐らく産卵と子育ての季節でデカブトムシは常に警戒していたのだろう。人があからさまに感じない程度の魔力を常時放出し続けていたのだ。その魔力のせいで病弱なミリナが真っ先に崩れてしまったのだろう。そして徐々に他の村人にも影響していったという訳である。またこれも推測でしか無いがハネネの体調が崩れなかったのは本人に魔法使いとしての才能があつてそれがデカブトムシの魔力の効果を打ち消していたからだろう。

この事はわざわざ誰かに言うつもりはない。森に魔物がいたとなればいくら退治したといっても村人達は意識せざるを得なくなるだろうから。

だから俺はもうじきコルク村を発つだろう。誰にも気づかれないうちに。

しかし、あと一つだけ分かっていないことがある。それはあのデカブトムシが森に出現した理由だ。ハネネの話を聞いていた限りだと森にも草原にも大型の魔物はいないらしい。という事は何らかの異常でたまたま出現したか、誰かが人為的に出現させたかのどちらかである。

もし人為的なのが原因だった場合、今コルク村から離れるのは良くない判断だろう。しかし俺はこれを人為的なものとは思っていない。これの根拠は俺がこの世界に送られた理由にある。

神様は俺にこの世界を破滅から救って欲しいと言った。問題はその破滅の定義だ。もしこの破滅が今あるこの世界の国や社会基盤を壊すものだとして、その程度のことを解決するためにわざわざ異世界から人を招いたりするだろうか？恐らく答えは否だ。この世界の国や社会基盤なんてこれまで何度も滅び、そしてまた再興してきたはずだ。つまりその程度の破滅は自然であり、神様の想定内の出来事なのだろう。

ならば神様の指す破滅とは？それは恐らく何らかの大きな要因により、この世界そのものが消滅してしまうことだ。そしてその大きな要因というのは神様は分らない。もしくはまだ俺には話せないレベルのものである。

つまり今回の事件はその大きな要因の一部分なのかもしれないということだ。とすれば、この先コルク村だけでなく他の場所にも本来生息しているはずのない魔物が出現するかもしれない。

そうなった時に俺もいつでも対応出来る様に準備しておく必要がある。とりあえずは大きな街を目指すのが無難だ。街ならばギルドや酒場から色々な情報も手に入るだろうし。

「ごちそうさま。暇だし少し散歩に行つて来るわ」

そう言つて俺は席を立つ。それに三人がいつてらっしやいと返事する。

そして俺は村を出て振り返る。するとそこにはハネネがいた。

「行つてしまわれるんですか？」

「…ああ。世話になつたな」

「いえ…。お世話になつたのは私たちの方です。道中何かあるといけません。せめてこれを受け取つて下さい」

そう言つてハネネは俺に薬草を差し出す。これはハネネが採つたやつなのだろう。俺には別に薬草など必要ないがお守りとしてありがたく貰つておくことにする。

「ありがとう。それじゃあ、またな！」

「はい！またぜひコルク村に来て下さいね。私たちはいつでも歓迎しますから！」

そう言つて俺はハネネと別れ、コルク村を出発した。

「お姉ちゃんを助けてくれてありがとうございました」

最後にそんな声が聞こえた気がした。

<先駆車>

ハネネと別れコルク村を出発した俺は重大な事実気がついた。

「…ま、街の場所知らねー…」

ガクツとその場にうなだれる。あんなにカッコつけてコルク村を出てきたのに今さら道を教えて下さいって戻る訳にはいかない。仕方ない。こればかりは危険すぎて使いたく無かったが…。

「テキトーに歩いたら街に着いちゃったよ作戦だ！」

という訳で今まで真つ直ぐ歩いていたが進行方向を右に変える。神様、無事に村に着きますように！というか神様ってあいつだから信用ならんな。

進行方向を右に変えてしばらく歩き続けた俺だが、いつまでも変わらない景色に飽き飽きとし出した。

「せつかくだし魔法で移動するか！」

転移魔法や飛行魔法などのいくらかの候補がある中、俺はあの魔法を使うことにした。

全身に>魔くを巡らせて纏う。目の前に左手をかざし唱える。

「出でよ>先駆車く！」

すると急速に光の粒子が集まりだし一気に収束した。

目の前に現れたのは銀色の大型バイクだった。本来バイクで舗装されていない場所をスピードを出して通るのは自殺行為だが魔法で造ったので心配はいらない。ある程度の道なら柔軟に対応出来るようになってる。もちろん消費するのはガソリンではなく魔力だ。

>先駆車くの魔法の属性は創造だが、この創造魔法というのがこの世界では難易度の高い魔法かどうかは俺は知らない。

そこら辺も街に行ったら調べる必要があるだろう。

俺はバイクに乗ってエンジンをかける。するとバルルルッツ！
！と盛大な音が伴ってエンジンがついた。そして動き出す。最初
はゆっくりと走っていたが20分も経てばある程度のスピードが出
せるようになっていた。

「ひゃっほー！！」

周りの景色が矢のように過ぎていく。風が気持ちいい。俺は調子に
乗ってどんどんスピードをあげていく。

それからしばらくバイクで進み続けると微かながらも街らしき影
が見えて来る。それに上機嫌になった俺は懐かしの歌を歌い始める。

「ぶんぶんぶん 蜂が飛ぶ」

街へ向かって更に速度をあげる。風当たりが強くなるが気にしない。
すると前方に何人かの人影が見えてくるが俺は気付かない。

「お池の周りに野バラが咲いたよ」

人影のすぐ近くまで来たことで向かうがこちらに気付いて目を大き
く見開いている。そのことで俺も人影に気付き衝突しないように僅
かに方向を変える。

「ぶんぶんぶん」

そして見慣れない猛スピードで突っ込んで来るバイクにパニックた
のか向こうも俺を避けようと動いた。その結果、俺はその人間と思
い切り衝突した。

「人が飛ぶー！！??」

跳ねられた人は漫画みたいにピヨンと飛んでいってしまった。俺は一旦バイクを止めてそこから降りる。そして啞然としている残りの二人の男と女に言った。

「飛んでっただけど大丈夫かな？」

「大丈夫なわきゃねーだろ！！ぶっ殺すぞガキイ！！！」
男の方は俺のセリフに怒り心頭の様子だ。女の方は何故か笑いを堪えるかのような表情をしている。

「うわぁ、ちゃんと無事に街に着けるかなぁ？」と心配になる俺だった。

不愉快

その日、私はギルドのクエストで街から出ていた。正直、街にいるのは好きでは無かったからギルドのクエストとはいえ外に出れるのはありがたかった。

街の中だと私は呪い子だからなのか不躰な視線や卑下するかのような視線をよく感じる。

真っ赤な髪に深紅の瞳。どちらも呪い子の証だ。呪い子とは裏切りの民。即ちこのアステリ王国を100年前の戦争で裏切ぎった一族の子孫ということだ。だから私は街に、この国に歓迎されてはいない。

それでもギルドはマシな方だった。ギルドには荒くれ者や訳ありの者、果てには亜人や魔族までいる。それにギルドはアステリ王国だけでなく他の国にもあるのであまり私が呪い子だからと言って目立つような事はない。

が、私は別の意味で名前が売れていた。それは私の持つ二つ名だった。

“鮮血の舞姫”

私自身、ソロプレイヤーでどのチームにも所属することは無いが、その強さは人並み以上だと自負している。しかしこの二つ名は大げさだ。とは言っても二つ名は周りの人たちからの認識によるもので私にはどうしようもない。

街の外は基本的に草原が続いているので見晴らしはいいし、敵の接近にはいち早く気付くことができる。しかし逆に大型の魔物に襲われた場合、逃げ場はないので便利だとは一概には言えないだろう。

「まあそれに…ある程度の奴らなら誰でも魔法で姿は消せるしな…」
姿はないが気配はある。これは三流の証だ。二流なら気配は感じさせないし、一流なら姿を消さなくても接近に気付かれることはない。
「出てきな。一体私に何の用だ？」

すると前方の方から二人の男が現れた。

一人は痩せていて手にはナイフを持っている。服装は灰色の汚れた服に左肩と胸には軽防具をつけている。

もう一人は背の高い男で2m近くある。両手にナックルのような物をつけて頭にバンダナを巻いている。

二人に共通するのは痩せ男は手の甲に、ノツポは肩に同じナイフの形をした刺青が入っていることだろう。

「へへへ、知ってるか？呪い子つてのは貴族にペットとして高く売れるんだぜ？」

痩せ男が言った。その言葉に表面上は反応しないが内心チクリとした。

「ほほう、つまり私に奴隷になれと？」

「話が早くて助かるねえ嬢ちゃん。それで大人しく奴隷になつてくれるかい？」

私の質問にはノツポが答える。私は細剣を抜いて構える。

「ふん。一つだけ教えてやろう。私がこんな所にいるのは最近奴隷狩りをしている二人組を討伐するためだ！」

私は走り出そうとする。二人組も拳とナイフを構えて応戦の体勢に入る。

そして次の瞬間、轟音が聞こえた。私は動くのを忘れ音のした方を見る。二人組もそちらを見ていた。

するといつの間にかすぐ側に轟音を放ちながら突進してくる物体があった。

新手の魔物か！？そう思い、武くを深紅の瞳に集中させ謎の物体を見つめる。すると信じがたい事にその上に人が乗っていた。

それはそのままこちらへ突進してきて私達たちの直前で進路方向

を僅かにズラした。しかし慌てたノツポの方が逃げようとして逆に物体の進路方向へと入ってしまった。

そして盛大な音と共にノツポが吹っ飛んでいった。ノツポを吹っ飛ばした物体に乗っていた男はそれから降りて私たちに向かって言った。

「飛んでっただけど大丈夫かな？」

人を一人吹っ飛ばしたというのにその軽い感じに私は思わず笑いそうになった。しかも見た所、私と同じ年くらいの少年だ。ここらでは見かけない黒眼黒髪に、真っ黒な服。顔はかなり格好良い。ただやや女性寄りの顔であることはいなめない。

「大丈夫なわきゃねーだろ！！ぶっ殺すぞガキイ！！！」

残った痩せ男がナイフを構える。少年はやれやれといった感じに首をすくめる。

「勘弁してくれよ。わざとじゃねーんだしさあ」

その言葉に痩せ男はナイフを前へ突き出し突撃していった。

シャルビィ・ルーラン

「ぶつ殺す!!」

そう言つて男が突つ込んでくる。俺はそれを軽くかわす。いきなり物騒だな。

「ちょ。その美人さん、お助け!!」

俺は側にいた赤い髪の美人に助けを求める。

「自業自得だ」

一刀両断。確かに俺も悪いけどさあ! 避けた方向に相手も避けるつて…。そりゃ跳ねるわ!

「いつまでもちょこまかと逃げてんじゃねーぞ、クラアツ!!」

すると男は身体に>武<を纏い出した。この世界にも>武<は存在してるのか。なら俺も使うか。もしこの世界に>武<が存在していないなら知られると厄介なので人前では使うつもりはなかった。ハネネの時は緊急事態だったのでやむを得なかったが。

俺も瞬時に>武<を纏う。俺としては軽く纏っただけだがそれだけでも男の数百倍はある。

「…なっ!?!」

男が驚いて声を上げていた。女の方も声こそ上げなかったもののその表情は驚愕に彩られていた。「んじゃ、俺の勝ちつてことで」そう言つて驚いて硬直してる男の元まで一瞬で距離を詰め殴り飛ばす。男は先ほど吹っ飛ばされた男と同じ方向に吹っ飛んでいった。「貴様、何者だ?」

残った女が細剣、レイピアを構えて警戒しながら聞いてくる。

真っ赤な髪をポニーテールにしている瞳も真っ赤だ。服も赤いものを着ており、防具は赤と黒の配色がされている。顔立ちは美人と言つて差し支えはないが勝ち気な瞳のせいで好みが別れるだろう。

「おつす、俺は橘四郎！よろしく！」

「私はシャルビィ・ルーランだ。よろし……ってちがーう！！」
「どうかしたか？シャルダン」

「私はシャルビィだ！話をそらすな貴様は何者だ！？」

シャルビィはレイピアを手にしているのも忘れてこちらへとズカズカとやって来た。危なっ！？レイピアしまえや！！と言いたい所だがこれ以上彼女を怒らせたくないので黙っていることにする。

「ただの旅人だよ。別に怪しい者じゃねーよ」
シャルビィが俺の瞳を覗き込んでくる。

「…嘘…ではないようだな。すまないな、剣を向けたりして」

そう言つてシャルビィはレイピアを腰に戻す。どうやら俺の眼を見て真偽を確かめたようだな。

「いや。気にすんな。それよりいいのか？仲間吹っ飛んでいったけど」

「勘違いしてるようだがあいつらは仲間じゃない。ただ私はギルドであの二人の討伐の依頼を受けたから二人を街の役所まで運ばないといけないがな」

「あれ？吹っ飛ばしちゃったけどいいの？」

「全然良くない」

ギロリとシャルビィに睨まれる。これはつまりお手伝いフラグか…。俺としては早く街へ行きたいんだが仕方ないか。原因は俺だし。それに今のうちに知り合いを作っておくのも悪くないな。

「…わかった。俺も手伝うよ。とりあえず後ろに乗ってくれ」

バイクに跨り、後ろの方をバンバンと叩く。するとシャルビィは興味深そうにバイクを見つめている。

「なんだコレは？魔物ではないようだし」

「んー、バイクだよ」

「バイク？何なのだそれは？」

何なのだと聞かれても機械としか言いようがないんだが。でもそれは地球のバイクのことであつて魔力を消費して走るコレはどちらか

という魔道具か。

「魔力を消費して走る魔道具だよ」

「魔道具だと！？貴様、魔法も使えるのか！？」

「まあそれは今はいいからとりあえず後ろ乗ってよ」

「あゝす、すまない。少し興奮してしまっただけだ」

ようやくシャルビィが後ろに乗ったので俺はバイクを発進させた。
もちろん、速度は遅めにした。

道中（前書き）

おかげさまで総PVが1万突破しました。

これからも白の完全無欠をよろしくお願いします！

道中

雑魚二人組を回収した俺らは街を目指していた。さすがに四人はバイクに乗れないので歩きだが。

「そういえばシロー、何でお前は魔法が使えるんだ？」

「いや、使ったといつても魔力を消費しただけで魔法を使った訳じゃないよ」

「だがいくら魔力を持っても魔法が使える者でなければ魔道具に魔力を注入できんだろ。普通は＞武くか＞魔くのどちらか一方を鍛えるものなのだぞ」

「あれま。そうなのか？」

「ああ。まず根本的に男は＞武くに、女は＞魔くに向いていると言われている。理由は定かではないが＞武くは己の中にあるものを爆発させるから。逆に＞魔くは世界に干渉する。これには前提として世界を受け入れているということが必要になる。そしてこれが男女の違いに酷似しているからというのが最も有力な説だ」

「なるほどベイバーね」

「…おい、あんまり露骨に言うな」

意外にもシャルビィは顔を赤くしている。赤い髪に赤い眼、赤い顔。どれだけ赤いんだシャルビィよ。

「もちろん必ずしもどちらがどちらと決まっている訳ではない。現に私は＞武くを選んだしな」

「じゃあ、両方使う奴ってこの世界にはいないのか」

「この世界って…まるで他にも世界があるかのような言い方だな。両方使う奴はもちろんいるぞ。王都騎士団はそれが最低条件だし、ガルトの街の騎士団隊長ミステイオも使えるはずだ」

話の流れからしてガルトってのが今俺らが向かっている街のことだろうな。

それからシャルビィに色々な事を聞いた。>魔<は魔力であり、魔<は>武<と区別するための言い方であり別にどちらを使ってもいいとのこと。魔法の種類は基本属性に木火土金水。中級属性に風雷氷。上級魔法に光闇空間重力。古代魔法が創造時ということらしい。

>先駆車<の魔法は創造だから古代魔法ですな。

>武<は気力や生命力のことであり、肉体強化や回復速度の上昇などを行える力であるらしい。

つまりそのまんま俺が使ってる力と変わりはないということだ。

「貴様ら、そこで止まれ！入街許可証かギルドカードを提示しろ」
街の出入りを管理している関守に止められる。シャルビィはギルドカードを提示する。俺は何も見せられない。

「そちらの男。何もないならカードを見せろ。入街許可証を書いてやる」

「はい、どうぞ」

異世界人だとバレると大変なので創造の魔法で出身をコルク村に変えたカードを作り提示した。すると呆気なく許可証がもらえた。

「ガルトの街へようこそ、シロー・タチバナ！」

門を抜ける時、シャルビィに向けられる関守の蔑みの視線に俺は気付く事はなかった。

もちろん、奴隷狩りをしていた二人組を預けるのも忘れなかった。

ギルドの泉

街について真っ先に向かったのは当然ギルドである。ギルドに着くまでの間やけに街の人々から注視された。俺の黒眼黒髪は珍しいらしいから仕方がないかもしれないが、その中は何故な蔑むような視線も混じっていた。

ギルドの扉をくぐるとすぐに「いらっしやいませ」という女性職員の声が聞こえた。

「討伐クエスト達成だ。これが証明書だ」

そう言っただけでシャルビィは先ほど門で二人組を手渡した時に貰った証明書を受け付け嬢に渡していた。

「はい、お疲れ様でした、シャルビィさん」

のほほんとした感じの受け付け嬢が証明書に判子を押す。

「そちらの方は？」

「こいつはギルド登録したいらしい」

何故か俺が答えるよりも先にシャルビィが答えた。

「そうですか、なら私がギルドの泉に案内しましょうかあ？」

「いや私が案内する。説明も私がしておこう」

「そうですか、ではよろしくお願いします」

受け付け嬢がゆっくりとした動作で頭を下げる。すると服からはみ出んばかりのパイが……

ドスッ！

「いたあっ！」

わき腹に一撃をくらった。

「憤みを持ってバカ者。ほら行くぞ」

俺はシャルビィに首根っこを掴まれズルズルと連れていかれる。受け付けは最後までのはほんど微笑んでいた。

そして引きずられること数十メートル。目の前には室内だと言うのに噴水があった。

「ここがギルドの泉だ。この泉にカードを入れれば自然に報酬や二つ名が手に入る。登録する時もカードを入れればギルド情報がカードに書き込まれる。ただし犯罪者や不正をした者はいくら泉にカードを入れても反応しない」

「なるほど。んじゃやってみるか」

俺はカードを出現させる。あれ？どうやって泉にカードを入れるの？これ実体がない情報体じゃん。

「言い忘れたが出す時に泉の中に出現するようにイメージしろ」

先に言えよ。俺はカードをしまい再び泉の中に出現させるようイメージして開いた。

「うむ。上手くいったようだな」

そう言っただけでシャルビイも泉にカードを入れる。先ほどの討伐の報酬を貰うのだろう。

しばらくしてカードが光ったので泉から取り出した。どうやら光ったら終わりの合図ということらしい。

「登録できたか？」

「ああ……」

俺は自分のギルドカードを見て頬をひきつらせていた。

「なあ称号って何だ？」

「称号というのは生まれながらにしての役割というかこの世界での使命みたいなものだ。これはある人となない人がいて大体の人はないある人はその称号を変更することも消すことも出来ない。逆に二つ名の方は周りからの認識だ。これは誰でも手に入れられるし付け替えも可能だ。だが例えば周りの奴から逃げ腰のやつだと認識されたり噂になったりすると二つ名が逃げ腰な男とかになったりするから気をつけた方がいいぞ」

「なるほど……」

俺はふむふむと頷く。

「なあ、良かったら俺とフリスト交換しないか？」

その提案にシャルビイは僅かばかり眉を歪め覇気のない声で「少し

考えさせてくれ…」と言った。

結局その日はそれでお開きになった。

辛苦の悩み

ポイント（お金）を持っていなかった俺は事情を話して今日だけは特別にギルドに泊めてもらった。おかげさまで受け付け嬢の名前はヘナさんという事が判明した。

そして翌日、ギルドの前でシャルビイが来るのを待つ。すると待ち始めて数分でシャルビイがやってきた。

「おはよっす！」

俺は明るく挨拶をするが対するシャルビイはやや呆れ顔だ。

「…お前なあ、ポイント持っていないなら言ってくれ。ヘナから聞いたぞ、ギルドに泊まったんだって？」

呆れ顔だが昨日より表情が柔らかくなっている。まあ少しは打ち解けたという事だろう。フリストには登録されない程度にね…。

「…ああ。すっかり忘れてたんだ」

「はあ…。なら今からとりあえず必要な物を買に行くから着いて来い。昨日手伝ってくれたお礼だ」

手伝ったというよりシャルビイの獲物を吹っ飛ばして余計な迷惑をかけた記憶しか無いんだが。本人がああいつているのだから好意は素直に受け取っておくべきだろう。

「わかった。助かるよ」

「ならまずは宿だ。安い場所知ってるから行くぞ」

しばらく歩くと「大福帝」という看板が見えた。大福帝ってどんな帝だよ。帝の字それじゃないだろ、と思いつつも中に入る。

「ららららっしゃい！ウエルカムだよん！！」

シルクハットを被ったスーツの女性が俺たちを出迎える。

「すまない、部屋を二つ。1ヶ月ほどだ」

「あいよん！ポイントは先払いだよん！占めて6万tptだよん」
シャルビイはカードを開いてポイントを渡す。

「シャルビイ様にシロー様ですねん。まいどん！」

「ではまた来る」

そう言つて踵を返すシャルビイ。俺も慌ててそれに着いて行く。宿を出るとギルドとは違う方向へと歩いていく。どうやらまだ俺の世話をしてくれるらしい。面倒見が案外いいんだな。

ふと、周りからの視線が気になった。昨日と同じように珍しいものを見るように皆俺を見ている。そして気付いた。蔑みの視線は俺ではなくシャルビイに向いている事に。

シャルビイがこちらを見る。俺が気付いた事に気付いたみたいだ。「昨日のフリストの件だが…シローは本当にいいのか？」

シャルビイは困惑の視線で問いかける。その瞳の奥に悲しみが詰まっているのが見えた。

「なにがだ？」

「お前は本当に何も知らないんだな…。まあいい。教えてやる。私がつて蔑みの視線を受けているのか」

自嘲気味に笑う。

「私は裏切りの一族の末裔。呪い子なんだ」

「のろい子？」

「呪い子だ。私の先祖はかつてこの国、アステルを裏切った一族なんだ。そしてこの赤い髪と深紅の瞳がその証拠だ」

「な、なるほど…。それで？」

段々重い話になってきた。俺はゴクリと生唾をのみ込む。

「いや…それで…つて。だから私は呪い子でこの国の嫌われ者なんだ」

「それから…？」

「そ、それから…？いやだから！私といると迷惑を掛けるかもしれないし、裏切りの一族である私を受け入れられるのかつて聞いているんだ！！気持ち悪いだろう！？この血のように汚れた髪と眼の赤が…！」

「…え、それだけ…？」

「……それだけって……」

お互いがワケ分らないって顔をしたまま時間だけが過ぎていった。

燃えるような赤

「それだけかいっ！裏切りの一族の末裔とか知らんがな」

「…だが…」

「だから呪い子とか言われても至極どーでもいい。でもこれだけは言える。その赤い髪と眼は俺にはすごく綺麗に見える」

その言葉にシャルビイは目を大きく見開く。

「綺麗だと…？嘘を吐くな！こんな汚れた呪いが綺麗なはずあるわけないだろ！！」

「てかさ、そもそも髪と眼が赤いのを呪いだと思うからいけねーんだよ。祝福だと思えばいいじゃん」

「…祝福だと？バカも休み休み言え。これのどこが祝福だ！」

「だからさあー、血のよう赤じゃなくて燃えるような赤ってことだよ。裏切りの一族は風当たりが強いからそれに負けないように、燃え続けるのを忘れないようにってことで赤いんだよ」

「燃えるような赤…。燃え続ける…。？祝福…」

シャルビイは呆然としたように俺の言葉を繰り返している。しばらく呟いていた後、突然大声で笑い出した。

「アハハハハハハ！！！」

流石にこれには俺も驚いた。周りの人の視線も痛い。「ママー、あの人すごく笑ってるよ？」「こら！見ちゃいけません！」おかげさまで完全不審者扱いだ。

しばらく大笑いした後シャルビイは涙を拭いながら言った。

「あんな事言われたのは初めてだ。呪いだと悩んでた私がバカバカしく思える」

「ふ、そんなに嬉しいなら俺の胸に飛び込んで来てもいいんだぜ？」
「調子に乗んな」

思い切り腹を殴られた。ひどいやい。

「んじゃフリスト交換しようぜ」

「ああ。これが私のギルドカードだ」

どこかスツキリした顔で俺にギルドカードを見せてくるシャルビィ。

名前：シャルビィ・ルーラン

年齢：18

出身：ミリセンブルク

所属：ガルト

t p t：2千万

フリスト：6

ランク：A

チーム：なし

二つ名：鮮血の舞姫

称号：裏切りの一族

シャルビィってギルドランクAだったのか。すごいな。しかもt p tが2千万って…。稼いでるなあ。

「次はお前を見せてくれ」

「……フリストって見せなくても交換出来るんだよね？」

「確かに出来るがこれからフレンドになろうというのにそれはあまりにも失礼だぞ」

「う……。確かに」

「それともやっぱ私とフリスト交換するのが嫌になったのか？」

「そういう訳じゃないんだけどね」

仕方ない。創造で造ったカードは見せかけだけのものだから本物を使うしかない。こうなったら素直に見せるか。

「見せるのはいいけど質問は禁止な？」

「ああ。他人の領域にズカズカと踏み込む程私は図々しくないから

安心しろ」

そしてギルドカードを見せるとシャルビィの動きが止まった。

衝撃

私はフリストを交換しようと言ってくれたシローに私の秘密を話した。正直怖かった。私のフリストには六人の人間が登録されているがその内五人は親族だ。残りの一人はギルドの受け付けのヘナで、彼女はギルドの仕事で亜人とかにも慣れているので私にも偏見はなかったようだ。

しかし彼の反応は私が予想していたよりも遥かに斜め上をいった。

「…え、それだけ…？」

「……それだけって…」

シローは何を言っているんだ？あまりに驚き過ぎて混乱しているのかもしれない。無理もない。私は裏切りの一族。穢らわしい存在だ。しかし彼の次の言葉は逆に私を混乱させた。

「それだけかいつ！裏切りの一族の末裔とか知らんがな」

「…だが…」

いや知らんって…。本気で言っているのか？私は真偽を確かめる為に彼の美しい黒い瞳を覗き込む。

「だから呪い子とか言われても至極どーでもいい。でもこれだけは言える。その赤い髪と眼は俺にはすごく綺麗に見える」

その言葉に私は目を大きく見開いた。綺麗！？何を言っているんだ、この男は！？

「綺麗だと…？嘘を吐くな！こんな汚れた呪いが綺麗なはずあるわけないだろ！！」

私は反射的に反論する。この髪と眼は呪いだ。だから少しでも目立たないようにと服装も防具も赤の配色をメインにしている。これなら全身赤なので髪と眼だけに注目がいくという事はないからだ。

「てかさ、そもそも髪と眼が赤いのを呪いだと思うからいけねーんだよ。祝福だと思えばいいじゃん」

「…祝福だと？バカも休み休み言え。これのどこが祝福だ！」

「だからさあー、血のよう赤じゃなくて燃えるような赤ってことだよ。裏切りの一族は風当たりが強いからそれに負けないように、燃え続けるのを忘れないようにってことで赤いんだよ」

その言葉に私は動けなくなる。私の赤は呪いではなく、祝福…？燃え続けるための。私が私でいるための赤だというのは何か。

「燃えるような赤…。燃え続ける…？祝福…」

私は何度もその言葉は繰り返す。まるで自分の内側にそれを刷り込むように。

そして唐突に気付く。そうだ。

捉え方次第だったんだ。呪いだって見方を変えれば祝福。私はただ自分が裏切りの一族だからと諦めていただけだ。何よりもルーランを馬鹿にしていたのは自分自身だ。

だから呪いという逃げ場を作って

赤という憎悪の対象を作った

何てバカバカしい。私は笑わずにはいらなかった。

「アハハハハハハ！！！」

シローや周りの人が引いている。それでも私は笑い続ける。

「あんな事言われたのは初めてだ。呪いだと悩んでた私がバカバカしく思える」

ひとしきり笑った後、涙を拭いながら言った。

「ふ、そんなに嬉しいなら俺の胸に飛び込んで来てもいいんだぜ？」その言葉に思わず飛び込みたくなるが我慢する。その代わり一発殴ってやった。

「調子に乗んな」

「んじゃフリスト交換しようぜ」

「ああ。これが私のギルドカードだ」

私はギルドカードをシローに見せる。

「次はお前のを見せてくれ」

「……フリストって見せなくても交換出来るんだよね？」

シローが戸惑ったような顔をする。

「確かに出来るがこれからフレンドになろうというのにそれはあまりにも失礼だぞ」

「う……。確かに」

「それともやっぱり私とフリスト交換するのが嫌になったのか？」
そうではないと確信しているが意地悪を試してみる。

「そういう訳じゃないんだけどね」

「見せるのはいいけど質問は禁止な？」

薄々察してはいたがシローもどうやらワケありのようだ。だが私は全てを受け入れてくれたシローの事情ならいくらでも受け入れてやろうと思う。

「ああ。他人の領域にズカズカと踏み込む程私は図々しくないから安心しろ」

私はシローに微笑む。するとシローは半ばやけくそ気味にギルドカードを見せてくれた。

さて、どんな事情があるのやらと思い覗き込む。そして今度は私が凍りつく番だった。

その称号は

「…こ、これは…一体何だ…？」

シャルビイが理解不能といった表情をしている。

俺のギルドカードはこうだ。

名前：シロー・タチバナ

年齢：18

出身：異世界

所属：ガルト

tp t：0

Fリスト：2

ランク：F

チーム：なし

二つ名：なし

称号：神の希望

「異世界だと…？」

シャルビイは俺のギルドカードの出身の部分にタッチする。するとギルドカードの画面が切り替わる。

出身詳細：日本国東京都M区

へえ。タッチすると詳細が見れるのか。確かにシャルビイのギルドカードを見た時にtp tが二千万って書いてあってぴったり二千万なのかな？と疑問に思ったんだよな。あれも多分タッチすると端数が見れるのだろう。

次にシャルビイは称号の欄をタッチする。

称号詳細：神の希望を叶えるため異世界から召喚された少年。

「：お、お前：何者なんだ？」

「そのまんまだよ。異世界から来たんだ。これで俺が何もこの世界について知らなかった理由の説明にもなるだろう？」

シャルビイは考え込んでいる。いや理解しようとしているのだろう。俺はそんなシャルビイの態度に好感をもった。

「そうか。私が見込んだ男はやはり規格外だったか」

そう言つてシャルビイはニヤリと笑つてその話は終わった。

そのあとこの世界についてレクチャーしてもらいながら必要なものをどんどん購入していった（というかしてもらった）。

「ギルドでもうクエストには挑戦したか？」

「いやまだだよ」

「そうか。基本クエストは自分のランクより二つ上までしか受けられないぞ」

「なる。じゃあランクを昇格するにはどうしたらいいんだ？」

「それはギルドの泉が判断する。だから一概にこうすればランクが上がるという事はない」

「すげーな。ギルドの泉」

しかもギルドの泉は世界中のギルドにあるらしく情報が全て繋がっているらしい。まるでインターネットみたいだ。

俺は結局ギルドのクエスト、Dランクである『ゴキブリン10体の討伐』を選んだ。

理由はどうしても気になったからだ。

ゴキブリといふあの黒の悪魔を連想させる名前に。

ゴキブリン

「という訳でゴキブリンの討伐に来たんだけど……」

ガルトの街から少し外れた林のような所に俺は来ていた。

そして今、目の前に広がる光景は悪夢だった。ゴキブリンとはあの地球にいる黒の悪魔を巨大化させて油まみれにさせたような魔物だったのだ。

ゴキブリンの全身がぬめぬめしていて寒気が止まらない。しかも10体討伐だったのに明らかに20体はいる。というかそもそも20体じゃなくて20匹だろ！と内心ツツコミをいれる。

ちなみにこの場にシャルビイはいない。最初はついて来るつもりだったらしいが俺がゴキブリンのクエストを取った瞬間、顔を引きつらせて「今日はあの日だったわ……うふふ」

という最低な言い訳と共に去っていった。俺たちに芽生えた友情はいつたいてどこへいったんだ、シャルビイよ。

「や、やるしかねえか。そうだ、虫なんか怖くない！……はずた……」俺は左腕を前へ差し出す。もちろん>魔くを纏った状態で。

「>シュレーディングアの猫く……」

そう叫んだ瞬間、ゴキブリンたちの周りを囲むように結界が出現する。その瞬間、結界の中が大量の煙で覆い隠される。

そして派手な音を立て、結界が割れる。20体中11体が死んでいた。

これは結界の中にいる生物を約50%の確率で必ず殺す魔法である。

ゴキブリンたちは仲間が殺された事に怒りを感じたのか、カサカサカサカサという最悪の音を発しながら突っ込んで来た。俺はそれを難なく回避し、空中に座標を固定させる。これはただの>固定くの魔法で足場の空気を固定しただけだ。

「>楽園の炎<！」

すると白い炎が出現する。熱さが存在していないこの白炎は存在を焼き尽くす。この魔法で焼かれると後片もなく消えてしまう。

みるみる内にゴキブリんたちが存在を焼き尽くされ消えていく。熱さを感じないのでゴキブリんたちは何も感じることはないままただ消滅していくのだろう。それほど時間も掛からずに焼き尽くせた。おかげで呆気なく20体の討伐が終わった。

これからギルドに戻らなければいけない。討伐証明は先に殺した11体の方から剥ぎ取っておく。この作業は地獄だった。なんせ巨大ぬめぬめゴキブリんたちの死骸を触るのだ。途中で何回も吐きそうになった。ちなみにゴキブリんたちから討伐証明の素材を狩り取るためにわざわざ傷跡を残さない>シュレーディングの猫<を使ったのだ。魔法には使い所というのがある。そしてそれを見極められる者こそ真の一流魔術師といえるだろう。

そして剥ぎ取ったゴキブリんの素材を鞆にしまい最悪のテンションで帰路についた。

途中、帰り際に怪しい馬車を見つけたので俺はそいつを追跡することにした。

亜人

とりあえずカードを呼び出しシャルビィに＞光字＜で連絡をとる。すると返信はすぐに来た。

『すぐに行く』

俺は気配を消しつつ馬車を追跡する。馬車は草原の中を猛スピードで走っており、馬と馬車には＞強化＜の魔法が掛けられている。炎天下の中、汗一つ流すことなく姿を＞隠者＜で隠し＞武＜を纏いながら進む。「わざわざ猛スピードで離れていくなんて怪しいな」俺がそう言っている間にも馬車は煙をたてながらどんどん進んでいく。それを追いつつもシャルビィと何回か＞光字＜のやりとりをして合流する。

「確かに怪しいな」

「だろ？最初は奴隷商かと思ったんだが街から離れていくのを見るとそうでもないような気がしてきてな」

「いや、もしかしたら今から奴隷狩りをするのかもしれない」

その言葉に俺は眉をひそめる。地球にはかつて奴隷がいたが今はいない。故に馴染みのないその言葉に過敏に反応してしまう。だがいくら馴染みがないからと言って奴隷という言葉にいい感情を覚えるような人間は少ないだろう。もし奴隷という言葉にいい感情を覚えるような人間がいるとしたらそいつは人間の屑だ。興奮するようなただのエロだ。

「なるほど。結局追跡してみないと分からないって訳ね」

「ま、そういうことだな」

そしてそこからしばらく進んだ所で馬車が止まった。すると入り口が開き、二人の男の男が出てくる。一人はまるまる太ったいかに

も貴族といったような服を着ている男。もう一人はそいつに付き添うように立っている防具をつけたオールバックの男。

「あれは…マルシャワイ男爵か…。何故こんな所に」

「知ってんのか？」

シャルビイは二人の男から目線を外すことなくそのまま俺の質問に答えた。

「ガルトの街に住んでいる貴族の一人だ。位は一番低い男爵。ただの下級貴族だ」

「へー。その下級貴族様が何でこんな所にねえ」

すると、次もまた馬車から二人出て来た。一人は二メートル近くある大男で下品な顔をしている。

手には鎖を巻き付けており、その鎖はもう一方の人物へと繋がっていた。そちらは全身をぼろぼろのローブで覆われていて姿がよく分からない。多分身体の形からいって女だろう。

「恐らくあつちの女の方は奴隷みたいだな。個人取引でもするのか…」

シャルビイはぶつぶつと喋りながら考えている。

不意に奴隷らしき女がフードをとる。

「!？」

フードをとった女の頭には一本の角が生えていた。透き通るような水色の髪に、爛々と輝く黄金の瞳。さらに透き通るような肌がその神秘性をより魅せつける。全体的に透き通るような美人だった。

「…亜人なのか？」

「恐らくな。私も見るのは初めてだ」

一本角の女はマルシャワイ男爵を睨みつけながら口を開いた。

「本当に、あなた達の言うことを聞けば子供たちを開放してくれるんですか？」

しかし目線とは裏腹にその喋りには不安や悲しみがにじみ出ていた。「又フツ、だからその証拠に今からガキ共に会わせてやると言っておるではないか」

マルシャワイ男爵は手につけている宝石をジャラジャラ鳴らしながら笑う。

「つまり亜人は子供たちを人質に取られて脅迫されてる訳か」

「これだから貴族は……！」

シャルビイが怒りを露わにする。俺は手をシャルビイの目の前に差し出し落ち着けと伝える。

「はい、そうでしたね。早く子供たちに会いたいです」

鎖で繋がれていることも忘れ無邪気に笑う女。亜人だから年齢は推測出来ないが見た目だけなら俺らよりも少し年上だろう。

「つまり今から子供たちが来る訳ね。一時的な再会って訳だ。まさに飴と鞭」

俺は四人の観察を続ける。

しばらくすると馬車が来た方向と反対の方向からもう一台の馬車がかけてくる。その馬車は四人のすぐ近くで止まり、まず中から二人の男

が出てきた。

「へへ、マルシャワイの旦那さんよお。連れて来たぜ」

出てきた男たちは下品に笑っている。しかも亜人の女をジロジロと品定めするかのように嫌らしい視線を送っていた。

「……………」

シャルビイは怒りを必死に堪えているように見える。

さて、俺はどう動くべきか。と考えとりあえず見守る事にした俺だった。

慟哭

マルシャワイ男爵とその他数名が何やら小声で話し合っている。さすがにこれは聞き取れず読唇術をするにも少し距離が遠すぎた。

「それじゃガキ共に会わせてやろう。感謝しな、ヌフツ」

いちいち笑い方がキモいんだよクソ男爵が。マルシャワイ男爵以外の奴らが馬車に入り五人の子供たちを引きずって来る。俺は言いようもない嫌な予感がした。

「おら！さつさと歩けガキ共！！」

五人の子供たちはなすがままに馬車の外に放り出される。中には泣いている子供もいる。

「みんな！」

亜人の女がそんな子供たちを見て駆け出す。鎖は男が手に巻き付けている分を解いていたので鎖に邪魔されずに亜人の女は子供たちへと近づく事が出来る。

子供たちも彼女の姿に気付いたらしく、のろのろと立ち上がる。

「…お、おねえちゃあん…」

一人がそう言って歩き始めると残りの四人もそれに習うように歩き始める。

そしてそれは起こった。

子供たちと彼女との距離があと数メートルといった所でマルシャワイ男爵の近くにいたオールバックの男が魔法を放った。初級の魔法だったので発動までが早く、ゼロコンマで放たれた魔法は俺にも止める事は出来なかった。

本来なら大した事はない魔法だ。だが魔法を放ったオールバックの男はプロの護衛ということ。子供たちは男たちに乱暴に扱われ衰

弱していたということ。これが最悪の結末を生み出した。それと同じに俺もある魔法を放った。

魔法で一斉に吹き飛ば子供たち。そこでさらに追い討ちをかけるように魔法を連発させる男。

亜人の女もシャルビイも俺も動けなかった。いや最初の魔法が発動された時点で今さら動いても無駄だと分かっていた。

魔法が終わった頃には物言わぬ五人の子供たち死体が転がっていた。

え？

亜人の女は訳が分からないといった顔をする。

「ナリー？……ルクス？……メイビ？……ホラン？……シャーンズ？」

あ

子供たちの名前を呟きながら死体を茫然とした瞳で見つめている。その瞳には先ほどまでの爛々とした輝きはなく空虚のみが広がっていた。

「又フツ、これで希望も砕かれ何もない貴様は我らに従うしかないだろうなあ」

その言葉に他の男たちが大声で笑う。

「……あ…死んじゃったの…? どうして…? どうしてでござんすか
うっとうしくって」

次第に状況を呑み込んできた亜人の女は壊れたようにどうして、と繰り返す。

マルシャワイ男爵たちは子供たちを目の前で殺す事で反抗心を奪い、亜人を我が物にしようとしたのだ。

「本当に安っぽくて最低で殺したくなる」

俺はこの世界に来て初めて殺意を抱いた。シャルビィもその瞳には怒りと殺意が籠められている。

「どうしてどうしてどうして……そうだ殺された誰にあいつらに殺せ人間を醜い醜い殺せ殺せ殺せ殺せ」

亜人は狂ったように喋り続ける。それをマルシヤワイ男爵は鬱陶し

く思ったのか、亜人の方へと近付いて髪の毛を掴もうとする。

そして掴もうとしたその瞬間、マルシャワイ男爵の頭が吹き飛んだ。

「…は？」

オールバックの男はあまりに一瞬の出来事で何も反応出来なかった。そんなオールバックの男も次の瞬間には身体の上半身が吹き飛ばされていた。

「あ、あ…ば、化け物だああっ！！！！」

残った男たちも馬車を置いて我先にと逃げようとする。だが逃げる暇もなく次々と殺されいった。

『ウアアアアアッ！！！！アアアアアアッ！！！！』

残されたのは亜人の女の慟哭のみだった。

変貌

『ウアアアアアツツ！！アアアアアアツツ！！！！』

亜人の女の慟哭が草原に響き渡る。その身体からは異常な量の＜魔く＞武くが溢れ出している。

「な、なんだアレは……！！？」

シャルビィが立て続けに起こる出来事に理解が追いついていないかのような表情をしている。

そうしている間にも亜人の女の身体からは＜魔く＞武くが放出され続け、やがて変化が起こった。

亜人の女の背中から髪と同じ色をした大きな翼が生え始めた。全身も水色の鱗に覆われ巨大化していく。口からは鋭い牙が生え、顔の形が変わっていく。

「……そんなバカな……！？竜人ではなく竜そのものだ……！！？」

シャルビィが苦しそうにしながらも驚きを露わにする。

「しかも人に変化出来るなんて竜の中でも最高位の竜神クラスのやつのみだぞ……！！」

圧倒的な＜魔く＞武くにシャルビィは膝をつく。

『ウアアアアアアツツ！！！！コロシテヤル、醜イ人間ドモヲ……！！』
完全に竜となった姿は凄まじかった。最初は水色だった全身が今は濃紺色に染まって翼を一振りしただけで嵐が吹き荒れる。五十メートル近くのその圧倒的巨大は見るものに本能的恐怖を悟らせる。口からは白いブレスが溢れている。

これが竜。それも竜神と呼ばれるクラスの。その圧倒的力は災害そのものだ。

「逃げなければ…殺されるぞシロー…」

シャルビィが竜から一瞬たりとも目を離さずに言った。あまりの魔くの強さに俺たちの隠者くの魔法は解かれており、今はあちらからまる見えの状態だ。

『ウグアアアアアアアアッ！！！！』

竜は慟哭を続ける。その黄金の瞳からは涙で潤んでいる。その頭にある一本の角は天を衝くように立っている。大切な子供たちが殺された。だからこそ抑えられなくなったのだろう。

「けどそいつは人を殺していい理由にはならない」

突然の俺の言葉にシャルビィが驚いたようにこちらを見る。が、すぐに視線を竜へと戻す。

竜はしばらく慟哭を続けた後、ゆっくりとした動作で立ち上がった。それだけで、たったそれだけで大地が震える。まるで世界すらも竜を恐れているかのように。

次に竜の顔がこちらを向く。その黄金の瞳には俺とシャルビィの姿が写し出されていた。

「くうっ…！？」

シャルビィが蛇に睨まれた蛙、もとい竜に睨まれたシャルビィになっていた。

『マズハ貴様ラカラダ、人間ドモ』

竜の身体全体がこちらを向く。どうやら俺たちは完全にターゲットにされたらしい。シャルビィを連れて逃げる事も出来るが、それをしたら竜は街を次々と破壊し殺戮の限りを尽くすだろう。そうはさせないためにも俺たちが今ここで竜を倒す必要がある。

殺すのではなく、倒す。このまま竜を殺してしまったのなら残るのは悲しみや憎しみだけだ。もう一度理解し合えるなんて安っぽい事は考えていない。でも、せめて止めてやろう。そう思い俺は立ち上がる。

「シロー…？」

シャルビィが不安そうに俺を見つめる。

「>神域<！」

神のみしか干渉することは出来ないと言われている最上級の結界の中にシャルビィを閉じ込める。

「…何をする！？まさか…シローお前…！無理だ…！逃げろ…！
！相手は竜神クラスだ…！人がどうこう出来る相手じゃない…！！」
俺はシャルビィの言葉を流しながら竜へと近付いていく。

そうしてこの世界に来て初めての大きな戦いが始まった。

竜神戦1

「来いよ竜。叩き潰してやんぜ？」

俺は今、竜神を目の前に傲慢無礼にも笑っていた。まあ相手は人間ではないから無礼も糞もないが。

そして思い返す。この世界での戦いを。ワームとデカブトムシ、ゴキブリ。虫だらけじゃねえかよ！ちなみに奴隷狩りの二人組は戦いというよりケンカだったので除外。

『醜イ人間ガ！！』

竜が>白い息吹<を吐き出してきた。俺はそれを左に回避する。しかし>白い息吹<の影響で地面が凍り付き着地に失敗しバランスを崩す。そこに竜の右腕が飛んで来て俺に直撃する。

派手な音と共に後方まで吹っ飛ばされる。

「シローー！！」

瞬間的に大量の>武<を腹部に集中させたおかげで致命傷は免れる。すぐに攻撃に転じようとするが、いつの間にか竜が間合いを詰めていた。

「速え！」

竜の翼から鎌鼬が乱舞する。動体視力を強化し最小限の動きでそれかわす。しかし攻撃はそれだけではなかった。

竜は口から>氷柱息吹<を放出する。再び攻撃を正面から食らってしまい吹き飛ぶ。しかし地面に落ちる前に空中で座標を>固定<し体勢を整える。

「やるじゃねーか、>武神化<！！」

>武<の上に>魔<を纏い力を具現化させる。現れたのは全身を覆う漆黒の鎧。しかし前回と違うのは背後にケルト十字のようなものが浮かんでいないこと。

その代わりに両脇には俺の身長を遥かに越える大剣が浮いている。

>魔くを使うことで>武くを切り離して具現化させているのだ。

竜が>武神化<したばかりの俺に右腕を叩きつけてくる。俺はそれを左腕で受け止め、両脇の大剣を竜に向かい飛ばした。

大剣は竜の鱗を傷つけはしたが浅く切り裂いただけだった。やはり相当な硬度なようだな。

竜が再び>氷柱息吹くを放つのを二本の大剣を浮かべながら迎撃する。辺りには激しい爆発音にも似た音が響き渡る。草原も凍り付いており、一部では大地が剥き出しとなっている。

「あんまりグズグズはしてらんねえ… なっ！」

大剣で一気に氷柱を切り裂き、その大剣を踏み台にするようにして跳躍。竜の目の前まで行くとそのまま思い切り竜を殴りつける。バゴオオオンと盛大な音と共に竜がよろける。

しかし竜はそれを自らの動きに取り入れ、凶悪な尾をこちらへと叩き付ける。脇から突如来た攻撃に反応が遅れる。

なんとかギリギリの所で二本の大剣でそれを防いだ。恐らく一本だったら大剣は砕かれていただろう。

「>クラツシユ<!!」

魔法で一気に竜の尾を潰しにかかる。しかし魔法を受けてもビクともしない。

『弱イ！人間ハ弱イ！！ナノニ我ヲ怒ラセタ！報イヲ受ケロ！！』その瞬間、氷で出来た竜巻が現れる。氷の竜巻は猛スピードでこちらへと突っ込んで来る。しかも一撃ではない。何撃もだ。

これは>武くでは破壊出来ないと思いつつも大剣で切り裂きにかかる。

予想通り大剣では切り裂けず仕方なく全力で拳を叩き付ける。すると氷の竜巻は割れる。

さて、他の氷の竜巻はどうしようか。もう残りはすぐそこまで迫っていた。

竜神戦2

目の前に迫る氷の竜巻を前に俺が取った行動は動かないこと。

『潰サレロ！！』

>魔<と>武<の出力を更に上げる。すると全身を覆う鎧の色が漆黒から黒に近い灰色へと変わる。俺が出力を上げ終わると同時に氷の竜巻が襲って来た。直撃した瞬間吹っ飛ばされそうになるが地面に足を食い込ませて耐える。全ての氷の竜巻が俺を通過した。もちろん俺は無傷だった。

『ナツ！？』

これには竜もさすがに驚いたみたいだ。俺は>武神化<を解く。

「>魔神化<！！」

先ほどとは全く逆の魔法。>武神化<が>武<の上にさらに>魔<を纏って具現化させるのならば>魔神化<は>魔<の上に>武<を纏って魔法そのものの力を上昇させる。故に>武神化<のような目立った変化はない。ただ俺の瞳が黄金色に輝くだけだ。

吹き荒れる俺の強化された>魔<はすでに竜の>魔<をも超えていた。

竜神はそれに対抗するかのように雄叫びを上げてさらに>魔<を纏っていく。

俺と竜の互いの膨大な>魔<同士が衝突して嵐が吹き荒れる。足に>武<を纏って最低限飛ばされないようにする。>武神化<と>魔神化<の同時使用は無理なので先ほどまでのような肉体に依存した戦い方は使えない。

竜が>白い息吹<を吐き出す。それに俺も>白い息吹<で対抗する。冷たいどころか凍り付くような冷気が周囲に撒き散らされるが気にしている暇はない。

> 白い息吹くと言いつつも俺はそれを右手で放出しながら次の対策を練る。もしこの竜を殺すだけならゴキブリ相手に使った> シュレーディングアの猫<や> 楽園の炎<を使えば事足りる。だが殺さないで倒すというハンデがある以上必然的に魔法もあまり強力なのは使えない。ギルドのクエストも基本、討伐より捕獲の方が難しい。

「> 影人形<!!」

すると俺の影をかたどったかのような人形が出現する。それも竜を取り囲むように数百体。

それと同時に俺は一度後方へと下がる。影人形たちが一斉に竜へと襲いかかる。竜はそれを翼や尾で次々と潰していく。すると潰した影人形は液体となりそれが翼や尾に付着する。

「> 影縛り<!!」

その魔法に竜が身動きを取れなくする。本来、この程度の魔法では竜をわずかにでも足止めすることは出来ない。これは> 魔神化<で魔法を圧倒的強化しているからこそその芸当だ。

しかしそれでも竜の活動を制限を出来る時間は極短い。そのチャンス逃さないように両腕を構える。

「> 大地の左腕<!!」

大地が隆起し巨大な腕が現れる。その腕は竜の方へと放たれる。竜は> 氷柱息吹<で迎撃するも効果はない。

そのまま> 大地の左腕<は竜に直撃する。竜はたまらずに後方へと吹っ飛んでいった。

竜神戦3

>大地の左腕<が竜を後方へと吹き飛ばした。轟音をたてて竜が地面と衝突する。

『グガアアアツツ!!!』

背中からまともに落ちたのか。悲鳴を上げる竜。

「さてと…」

俺は竜の方へと近付いて行き追撃をかける。

「>大地の左腕<！」

再び左腕が出現して倒れている竜を上から叩き潰す。竜は抵抗するように尾の角度を調節して>大地の左腕<を斬り落とす。斬られた左腕は俺の方へと倒れてくる。

「あぶねっ!?!」

左前方へと動き落下してくる腕の下を駆け抜けてかわす。

竜は既に起き上がっており、逆鱗に触れた時のみ使用されるといふ>怒号の息吹<を放ってくる。

まず凄まじい音波の塊が吹き出され、やや遅れて光波の塊が吹き出される。終いには絶対零度の吹雪が吹き荒れる。必殺の魔法。

だがそんなものは所詮自分の前にいる相手にしか使えない技だ。

俺は>武<を足に纏い地面を蹴って跳躍する。たったそれだけで>怒号の息吹<を難なくかわす。

そのまま竜の真上にまで移動する。竜は頭を上げ息吹を出そうとする。この位置関係でもし息吹を喰らったらひとたまりもない。

「悪いけど俺の勝ちさ！」

俺は身体を地面と平行にして左腕を伸ばしながら横に回転をする。左腕には黒い物質が集まっていく。一回転する頃にはそれは竜と同じくらいの大きさの巨大な黒の直方体の物体が出来上がっていた。

「喰らえ！>摩天楼<！！！」

それと同時に竜も>怒号の息吹<を放った。>摩天楼<と>怒号の息吹<が衝突する。しかし圧倒的質量の>摩天楼<を打ち崩すことは出来ずに虚しく>怒号の息吹<は霧散する。>摩天楼<はそのまま竜に衝突する。

『グギアアアツツ！！！！』

竜が断末魔の叫びを上げる。息も切れ切れになっており、吐血もしている。

「やりすぎたー！回復させなきゃ」

スタツと地面に降り立った俺は何の警戒心もなく竜へと近付いていく。

『近寄…ルナ。醜イ人間…風情…ガ！！』

苦しそうにしながらも竜は怒りを忘れない。

「人間を全部否定したらお前が育ててたあの子供たちまで否定することになるぜ？」

『黙レ…！貴様…二何ガ…分カル！！アノ場ニ…イタ…ノ二子供ヲ見…殺シニ…シタ貴様モ…アイツラト…同ジダ…！！』

竜は血の涙を流す。それは戦いでひび割れた大地の中へと染み込んでいく。

「そう決めつけるのは早計だなあ。ま、とりあえず元気出せって！後で面白いもん見せてやつから」

そう言つて俺は竜に手を向けて>遡及<の魔法をかける。この魔法は名前通り対象者や対象物の時間を遡らせる時の魔法だ。竜は光に包まれ元の姿、女の姿へと戻つていった。もちろんその身体には傷一つない。俺はさらに>睡眠<の魔法をかけて女を強制的に眠らせた。

「さて次はシャルビィとアレの回収か」

女から離れて今まで放置していたシャルビィの方へと向かう。

「まさか…竜神クラスに勝ってしまうとは…。さすがは神の希望様だな」

カラカラと笑いながら何故か皮肉を飛ばしてくるシャルビィ。あまりに壮大な出来事に最早笑うしかないのだろう。

「いやあ、あんなに力出したのは初めてだわ。ナイスファンタジーだよな！」

「あれほどの力をほいほい出されたらこの世界が保たんわ」

> 神域くのおかげで元気一杯なシャルビィ。

「んじゃ、シャルは先に竜の所に行つて。あつちで竜が寝てるから」

俺は女のいる方向を指差してからそれとは反対方向に歩み始める。

「お、おい！お前はどこに行くんだ」

「いや、ちよつとした雑用が残つててね」

そう言つて俺は女のいるのとは逆の方へと進んでいく。どうやらシャルビィは諦めて女の方へと向かったようだ。

生命

竜を倒したその後、俺たちは眠っている女を連れて近くの森に移動した。お互いに高い>魔<をぶつけ合って戦ったので、その>魔<を嗅ぎつけてガルトの街の騎士団が来たりすると厄介だからだ。

もちろんマルシャワイ男爵たちの死体は跡形もなく消しておいた。いくら下級貴族といっても貴族なので死体が見つかると思面倒なことになるからだ。

「う……あ……え……？」

ようやく女が目を覚ました。シャルビイはその声にビクツと驚いている。女は周りを見渡し俺らに気付くとキツと睨みつけた。

「私をなぜ助けたんですか？見殺しにした罪滅ぼしですか？」

怒りが言葉が滲み出ている一方、その奥には疑問と恐怖があるのを俺は見逃さなかった。シャルビイは顔を下げている。きっとあの時の光景を思い出して唇をかみ締めているのだろう。

「まさか。俺の人生に恥ずべき事なんか無い！！」

言い切る。そうだ、俺は全力を尽くした。非難される筋合いはない。「ふざけないで！！見殺しにして恥ずべき事はないなんて！！やっぱり人間なんて！！」

金切り声を上げて取り乱す女。俺は一度溜め息を吐く。

「見殺しになんかしてねーよ。なあシャル？」

「……え……ああ……シローはあの時助けようとして魔法を出したんだが一歩間に合わなかったんだ……。だから見殺しにした訳じゃ……」

シャルビイが俺を庇うように弁護する。まあシャルビイが言ってる事は半分しか合っていないけどな。

「そんな言い訳が……！！」

「すーとーっぷ！落ち着け女。まずアレを見る」

そう言つてシャルビイと別れた後に回収してきた物体を指差す。それを
見てシャルビイも女も目を見開いた。

「子供たちの遺体……!?」

「……………」

前者がシャルビイ。後者が女だ。俺は立ち上がり五人の子供の死体
に近付いていく。中には腕や足が千切れている子供もいる。

「>遡及<」

すると子供たちの遺体は光に包まれ、身体が傷一つ無く修復されて
いく。

「…そんな事をしても身体の傷が消えるだけで生き返ったりはしま
せんよ……」

子供たちの遺体を見て怒りよりも悲しみが勝つたのか、先ほどまで
の怒鳴るような声ではなく沈んだ声だった。

「まあこのままならね」

俺はニヤリと笑う。その顔にシャルビイと女が怪訝そうな顔をする。
「どういう事だ?」

シャルビイの質問には答えず、変わりにポケットから小さな紙切れ
を取り出す。

「これ何だか知ってるか?」

二人ともそれには答えない。まあ当然だろう。俺の世界の技術だし。
「これはな…強力すぎて倒しきれない生き物を封印するための御札
さ」

「…まさか!?!」

流石に竜である女は伊達に長生きしていないのか似たような物に心
当たりがあるようだ。

「そのまさかさ。んじゃこれで一件落着だ」

そう言つて御札を破る。するとそこから淡い光が現れ子供たちの身
体へと戻つていった。

「…あ…!…ああ……」

ヨロヨロと女が子供たちに駆け寄り、しゃがみ込んで胸に耳をあて

る。

「…ああ！…聞こえます…！…子供たちの音が…聞こえます…！」
ボロボロと笑いながら泣く女。その顔は俺が今まで見たこともない
不思議な表情をしていた。喜び、驚き、悲しみ、悔しさ、そんな言
葉では現しようなない表情だ。

シャルビィも静かに泣きながら俺の服をギュツと掴んでくる。俺
はシャルビィの頭を一度軽く撫でてから女が泣き止むまで静かにし
ているのだった。

解説

さんざん泣き続けた女は今は泣き止んでこちらを向いている。子供たちはまだ一度も目覚めていないが全員から寝息が聞こえるので大丈夫だろう。

「さて、説明してもらおうか」

シャルビイの言葉に女もコクコクと頷く。どうやらもう先ほどまでのような敵意はないようだ。

「説明って何を？」

「全部だ!!」

一応さつき説明したつもりだったが…。もう少し詳細を話せという事なのだろう。ここで断つてもロクな事にならないと分かっているので話すことにする。

「まずあのオールバックの男がいきなり魔法を子供たちに放った」

「ああ。お前はそれを迎撃しようとして…」

「まずそこが違う。俺はそこで子供たちの魂を御札に封印したんだ」

「つまりあのオールバックの男が魔法を放つよりも先に魂を回収したのか？」

「いやオールバックの魔法の方が早かったよ」

「なら間に合ってないじゃないか。もしかしてあの世に行く途中に魂をかすめ取ったのか？」

「それも違う。ならまず何でオールバックの男は何回も魔法をかけたんだと思う？」

「それは…より確実に殺すためだ」

「そう！つまり子供たちは一撃目では死んでなかったんだよ。確かに致命傷で助からない程の傷だったが即死ではなかった。放っておいても子供たちは確実に死んでいただろうが竜に回復させられる恐

れがあつたから致命傷を負つた子供たちに更に追撃をかけたんだ」
「だからオールバックの男の魔法の後でも魂が回収できたのか…」
「そゆこと。どれだけ致命傷だろうが生きてれば封印出来るからね。ていうかむしろ弱つてた方が魂を引き離しやすいしね」

「なるほどな…。あの一瞬でそれほどの事を…。ってちよつと待て！」

「ん？」

「ならわざわざ竜と戦ふ必要無かつたんじゃないか!？」

その言葉に竜である本人もコクコクと頷いている。

「あつたよ。ならお前は言えるのか？大切なものを傷つけられた人に生き返るから怒るなよって」

「それは…」

そうだ。だから俺は戦つたんだ。いくら回復させられるといつても目の前で大切なものを傷つけられたのだ。誰だつて怒るし悲しむ。実際、あの時俺がすぐに子供たちを回復させても女の怒りは収まらなかっただろう。

「子供たちだけでも、竜だけでも駄目だったんだ。どちらも助けなきや意味がない」

俺はそれだけ言い切つて横になる。

今日はもう疲れた。そう思い俺は瞼を閉じる。すぐに睡魔は訪れた。

キャラが違う！

後日、俺たちは孤児院の前にいた。

竜の女、ミリー・サウノーズンは子供たちに別れを述べていた。

「みんなちゃんと元気にやっていくのよ？」

必死に涙を堪えながら笑顔で想いを伝える。

「うん…。大丈夫だよお姉ちゃん！」「わ、私も…頑張る…！」

子供たちも泣かないように空気で答える。その声にはミリーに心配をかけないようにという配慮を感じ取れた。純粹に優しい子供たちなのだろうと思う。そしてそんな子供たちを育てたミリーも。

「じゃあね、みんな…」

そう言つてミリーは子供たちに背を向ける。その途端に彼女の瞳から涙が溢れる。子供たちもミリーが背を向けると涙を流し始めた。

「ばいばいおねえちゃん…！」

彼女はきつと分かつている。これが今生の別れではないことを。だから振り返りはしない。

「行きましょう」

強い瞳で俺たちに語り掛ける。俺は無言で頷き歩き出す。一步遅れて涙目のシャルビィもそれに続く。てか意外に涙もろいんだなシャルビィは。

「ミリーは子供たちと別れて本当に良かったのか？」

「ええ…。私がそばにいたらまた巻き込んでしまつかもしれません。そんな事は許せません」

「そっか…。ならこれからどうするんだ？」

その質問にミリーがフッフと不気味に笑う。そうして俺の腕に絡みついてくる。

「そんなのシロー様について行くに決まってるじゃないですか」

何が嬉しいのかミリーはニコニコしている。シャルビイはミリーの突然の行動に目を白黒させている。

「ミリー、お前何を……」

「何って愛しのシロー様に絡まってるんですよー」

「い、愛しの……!?」

シャルビイが俺以上に取り乱しているの俺は逆に落ち着いていた。てかミリーってこんなキャラだったっけ？

「そうですね。シロー様は私の救世主ですから」

キラリンとウインクするミリー。今やガルトで一番目立つ三人組だろう。この地方には珍しい黒眼黒髪の俺。裏切りの一族と呼ばれているシャルビイ。頭から立派な一本角が生えている竜のミリー。まあ大抵の人はミリーが竜だとは分かっておらず、亜人だと思っているだろう。それでも亜人はそれはそれで目立つが。

「じゃ、ミリーも今日から仲間ってことで」その言葉にミリーは嬉しそうに顔を輝かせる。

「ならならフリスト交換しましょうシロー様!……あ、シャルも」

「何かついでっぽい私だけ呼び捨てか!？」

「そうだよ。別に俺に様なんて付ける必要ないぜ!」

「いいえっ! そんな訳にはいきません。そこだけは如何にシロー様といえど譲れません!」

「……あ……さいですか……」

あまりの迫力に思わず畏縮する俺。さすが竜だな。この俺を黙らせるとは。

「うーん……別にハーレム成分はいらないんだがなあ……」

このままではエロファンタジーになってしまうよ。俺が目指しているのはファイナルなファンタジーなんだよっ!とまあ新しい仲間に結局テンション上げ上げの俺だった。

俺ら三人はとりあえずギルドに行ってミリーのギルド登録とゴキブリン討伐の報告をすませた。もちろんゴキブリンの素材とコルク村で倒したデカブトムシ(正確には「ビートル」)の素材の換金も忘

れなかった。

「それではFリスト交換しましょう」

そう言つてミリーが俺らにギルドカードを差し出す。

名前：ミリー・サウノーズン

年齢：526

出身：ドラゴア

所属：シロー様

tp t：50万

Fリスト：20

ランク：F

チーム：なし

二つ名：なし

称号：竜神の娘

「竜神の娘だと！？位は高いと思つてたが凄いな…」

感心しながらもシャルビイは自らのギルドカードをミリーに見せる。

「いやそこじゃねーだろ！明らかにおかしい所あんだろ！？」

「年齢ですか！？竜族は基本何千年も生きるので私はまだピチピチですから安心して下さい！！もちろん生娘です！」

「ちげえよ！！…い、いやそこも確かに気になつてはいたんだが…所属だよ！！所属シロー様つて何だよ！？ガルトじゃねえの！？」

「私の居場所はシロー様の元ということです。問題はありません！」
結局、宿に戻るまでガヤガヤと騒ぐ俺たちだった。

金髪娘

宿に戻って俺のギルドカードをミリーに見せた。すると彼女は何故かキラキラとした目でこちらを見つめてきた。

「スゴいとは知っていましたけど…こんなにスゴいなんて！！今夜は一緒に寝て下さい！！」

「おい、最後おかしかつただろ」

などと言つやりとりがしばらく繰り返された後ようやく俺たちは自分の部屋（ミリーの部屋も新しく取った）で寝た。

翌日、シャルビィは一人で討伐クエストに行ってしまったので今はミリーの二人きりだ。かといって何をしているという訳でなく俺の部屋でただゴロゴロしている。

「シロー様はこの街にどれくらいいらつしやるんですか？」

「まだ二、三日だよ。何で？」

ゴロゴロしているので返事も気の抜けたものとなる。

「なら街へ一緒にデー…散歩に行きませんか？」

「おお、いいね。あんま金ないけど大丈夫かなあ」

という事で街へ出る事になったんだがこれが実は面倒な出来事の始まりだった。

「ふふん～ふん～ふん～」

横を歩いているミリーが楽しそうに鼻歌を歌っている。時々物珍しそうに街に視線を巡らせている。

「そついえばミリーは今までどこに住んでたんだ？」

「ミルバートって街から少し東にいった森の中ですよ」

「てことはあの子たちは捨て子か」

「はい…。時々お子さんを森に置きに来る方がいらっしやるんで見殺しにも出来ないの…」

少し悲しそうにミリーは答える。俺は何て言おうか迷っていると誰かと肩がぶつかった。

「お、わりい」

とりあえず謝っておいた。

「ミリーは優しいんだなあ」

俺は素直にミリーを誉めることにした。するとミリーは頬を赤くして顔を横に振っている。

「さいよ！」

後ろから何か聞こえたような気がしたが特に気にはしない。

「もうそろそろ昼だし飯でも行くか」

「そうですね。私も歩いたのでお腹ペコペコです」

俺の提案にミリーは即賛成する。まあ俺の意見ならミリーは何でも賛成しそうだけだな。

「ちょっと待ちなさいよ！！」

また背後から声が聞こえたような気がするが頭は既に今から何を食べるかで一杯だ。

「ガルトライスカガルトバーガーどっちがいい？」

「私はガルトライスの方が…」

「アンタよアンタ！！その黒髪！！ちょっと待ちなさいって言うてんのよおっ！！！」

ミリーの台詞を遮るように入ってきた発言。どうやら俺をご指名らしい。振り返るとそこには金髪にツインテールの少女がいた。しかも黒いドレスみたいな服を着ている。

「お嬢ちゃん何か俺に用かい？」

とりあえずドレスを着ているので貴族だろうと思われる。これは貴族が必ずしもドレスを着ているという事ではなく街中でその様な目立つ格好をしているのは貴族しかないという事だ。

「お、お嬢ちゃん！？アンタ人にぶつかっておいて何なのその態度！！馬鹿なの！？」

馬鹿、という言葉にミリーが反応する。俺はミリーに目配せをしておく。気にするな、と。少し不満気にミリーは頷いた。

ていうかこいつ。さっきぶつかった奴か。

「ちよつとちよつとー！！何で黙ってんのよつ！だいたいアンタらね最近目立ちすぎなのよ！！まああの赤い女は強いから目立つのは仕方ないわ。そっちの亜人も、だいたい亜人は厳しい環境で育つてから大抵は強いし目立つのは許せるわ！！でもアンタよアンタ！！黒眼黒髪だっただけで貴族であるあたしより目立つなんてアンタ馬鹿なの！？そうなのね！？」

上品そうな目鼻立ちとは裏腹に弾丸のように喋り続ける少女。正直やかましい。

「はあ…すいません」

貴族相手に事を構えるつもりは無いので謝しておく。

「謝って済むなら騎士団はいらないのよ！！こうなったら決闘よ！！アンタに身の程って奴を教えてやるわ！！」

「えつと…じゃあチェンジで」

「ななななな、何がチェンジよつ！！失礼無礼残念な奴ね！！泣いて謝ったって許さないんだから！！」

こうして俺は不本意ながら名も知らぬ金髪貴族娘と戦うことになった。

決闘前

今日の前には金髪の少女がいる。ツインテールをゆらゆらと揺らしながらこちらを見ている。というより睨んでいる。迫力がないので見方によっては拗ねているようにも見える。

「覚悟はいいわね！！黒髪！！」

「……………」

俺は喋らずに無言でいる。街中で何を始めるつもりだ。

（シロー様、どうなさるおつもりで？）

（逃げてもガルトにいる限りは無駄のようだし、てきとーに戦って負けるのが一番だろ）

「ちよつとちよつとー！！アンタら何あたしに内緒で話してるのよ！！」

勝手に怒り出す金髪。もう返事をするのも面倒臭い。出来ればさっさと負けて帰りたい。

「何よその顔は！！何か不満でもあるわけ！？」

いや不満しかないんだが。とはもちろん言わない。火に油だ。これだけ騒いでいるのに街の人が騒がないのは金髪がいつも騒がしいからなのだろう。

「そういえばアンタの名前まだ聞いてなかったわね。特別に名乗る事を許してあげるわ！！」

「橘四郎だ。シローと呼んでくれ」

「アンタなんかアンタで充分よ！！」

なら何故に名前を聞いた。全く無茶苦茶な奴だと思いバレないように溜め息を吐く。

「んで？お前の名前は？」

すると金髪が固まる。目を見開いて信じられないといった表情でこ

ちらを見つめている。

「あ、ああああアンタ！！あたしの名前知らないの！？本っ当に信じらんない男ね！！いい！？あたしはティカ・ファーフード、このガルトの領主ドルリア・ファーフードの娘よ！！……三番目の」最後にボソツと何か言ったようだがそれは聞きとれなかった。にしても領主の娘か。思った以上に厄介な人物に絡まれた。金髪、もといティカは腕を組んで胸を張っている。張るほど胸が無いのはご愛嬌ってことかな。

「あつそ。てか決闘ってここですんの？」

「……え？確かにそれもそうね！！アナタはぎったんぎったんにあたしが潰してやるわ！！」

「いやだから何処で決闘すんのって聞いてるんだけど……」

「あたしの城よ！！！騎士団やメイドたちの前で大恥かかせてやるわ！！この街にいらなくなる位にね！！！」

城？それって街の中心に見えるヤツのことか。

「わかったわかった。決闘してやるから落ち着け」

こうして俺らは城に案内される。城にシロ……。なんつって。……

自分で言ってて悲しくなってきた。

ティカに城へと連れていかれる。途中、人混みに隠れるようにティカの護衛らしき奴らがいることに気がついた。俺は暇だったので気配がした方向を凝視すると護衛が動揺していたりして面白かった。「さあ着いたわよ！！いよいよあたしが華麗で美麗で華麗な姿を魅せる時が来たわね！！！」

「今華麗って二回言いましたよね」

不機嫌そうに呟くミリ。せっかくの散歩を邪魔されて怒っているのだろう。

「うつうつるさいわね！！細かい事を気にするのは小者の証拠よ！」腰に手をあてこちらを指差して言うティカ。

城の門が開く。中から一人の騎士が出てくる。

「お帰りなさいませ、ティカ様。そちらの方々は？」

騎士が値踏みするような視線でこちらを見てくる。俺は堂々とミリ―は少し居心地悪そうにしている。

「あたしの客人よ！今から騎士やメイドを全員庭に集めて！！」

「ぜ、全員ですか…。しかし今仕事中の者が…」

「全員といったら全員よ！！」

はあ。随分と面倒な事になったなあ。早く負けて帰るとするか。

しかしまだこれは面倒事の始まりでしかなかった。

決闘

城は思った程高くないが大きかった。城の周りには緑が多く手入れも非常に行き届いていた。門を通され庭へと案内された俺たち庭には沢山のギャラリーがいた。主にメイドとか騎士とかメイドとかメイドとか。

「さあさあさあ！！いよいよ決闘の時が来たようね！！」

ティカは完全に暴走していた。隣にいる執事らしき爺さんが何か言っているようだ。ティカは全く聞く耳をもっていない。

「シロー様頑張ってください」

ミリーが手を振っている。頑張るも何も負けるつもりなんだが。これはあれか。負けるのを頑張れってことか。

「それでは今より決闘を開始します。勝利条件は相手を戦闘不能もしくは降参させること。敗北条件は相手を殺害することです。では、決闘開始！！」

俺らを門からここまで案内した茶髪の騎士が開始を宣言した。ティカはいきなり全力で魔法を放ってきた。

「黒こげになりなさい！！>雷墮く！！」

俺の真上から雷が落ちてくる。それを>武くでかわしつつ、どう負けようか考える。ティカは魔法が避けられたのが意外なのか驚いたような顔をしている。

「何で避けられるの！？なら！>雷球く！！」

プラズマのような物体が出現し俺に向かって飛来してくる。速さはなかなかだが>武くを纏っている人間なら誰でもこの程度はかわせる。

「くうっ……！！？」

ドバァァンと激しい音がして俺は吹き飛ばされる。わざとくらった

のだ。これで負けて決闘は終わりだ。

「ふん！！やっぱり口ほどにも無いようね！！」

ティカは勝ったので非常に上機嫌だ。そしてそのまま「お腹が空いたわ！！」とか言つて城の中へと戻つていつてしまった。俺はそれを見届けてから事もなさに立ち上がる。周りの騎士団の人たちやメイドがギョツとしている。

「お、おいあんた。大丈夫なのか？いくら>武くを纏つていたとは言え>雷球くが直撃したんだぞ！？」

驚いている人の気持ちを代弁して先ほど開始宣言を行つた茶髪の騎士が話しかけてきた。

「ん、問題ない！」

「も、問題ないって…」

騎士が青ざめた顔をしている。周りの人たちも似たようなリアクシヨンド。そんなに凄いことなんかな。別に大した魔法じゃなかったし。

「てか、俺らもう帰つていい？さすがにワガママなお嬢様の相手は疲れたし…」

「あ、ああ…」

未だに驚きの抜けきらない顔で返事をする騎士。俺たちは再びティカに見つからないうちにさっさと城を出ようと門へ向かう。来た時に通つた道は覚えていたので迷うことなく門までは行けた。

「今帰つたぞ！！」

もの凄い勢いで門が開いた。そこには一人の女の騎士がいた。黄色い甲冑に背丈ほどある大剣を背負い、短いオレンジ色の髪をした女だ。顔立ちはシャルビィをさらにキツくした感じ。

「ん？貴様ら見掛けん顔だな。さては不審者か！！」

その女騎士はいきなり大剣を抜刀し即座に間合いを詰めてくる。

「成敗する！」

大剣をあり得ない程のスピードで振った。俺はそれを最小限、首をズラしてかわす。

「かわされただど！？ならばこれなら！！」

大剣が熱を帯びた様に赤くなる。大剣に＞魔くを流しているようだ。先ほどは＞武くを使つて距離を詰めていたので＞魔くと＞武くの両方使えるのだらう。シャルビィ曰わくこの世界では珍しいらしい。

「＞熱融く！」

赤い斬撃がこちらへ向かつてくる。俺がそれに対処するよりも早くミリーが対処した。

「＞水の檻く」

すると赤い斬撃は水に包まれ呆気なく消えてしまった。俺はその間に女騎士を討とうとするがいつの間にか姿を消していた。

「シロー様」

「わかつてる。近くにいる」

よく分からないが早くこの勘違いしている女騎士を止めねばと思った。

女騎士

気配だけは確実に感じるのだがどうも居場所が掴めない。ミリーもどうやら同じらしく辺りを慎重に警戒している。

不意に右後ろの方でカサカサと音がした。それにすぐさまミリーが反応する。

「そこですか！>水矢<！」

シュバツという音と共に水で出来た矢が高速で草むらに飛んでいく。ガサガサッと音がしてそこから飛び出すように現れたのは猫だった。

「……………」

「……………」

「にゃ」

二人とも思わず黙り込んでしまった。そんな俺たちを気にする事はなく猫はそのままこの場を去って行った。

「ど、どんまい」

「……………ガクッ」

ミリーは何故か自分でガクッと言ってからその場に崩れ落ちた。どうやら恥ずかしくて落ち着くまで戦えません。とのことらしい。

もちろん姿を消していた女騎士がこのチャンスを見逃すはずもなく、突然目の前にいくつも炎の玉が出現する。これに対処するのは問題ないが、あまり城で暴れる訳にもいかない。それこそ本当に捕まrikaねない。

「おい、何を勘違いしてるのか知らんが俺たちはお嬢様に招待されたただの善良な一市民だ。敵意はない」

すると何処からともなく女騎士の声が聞こえて来た。

「黙れ。何の罪もない猫を殺そうとしていたくせに何を言う。それでも敵意は無いが悪意はあるということか」

勘違いを加速させていらつしやる！？これは少しヤバいかもしれない。とりあえずさつさと気絶させてずらかるとしますか。いや待てよ。相手はどこにいるか分からないがいい魔法があった事を思い出した。俺はミリーを抱えて跳躍し、適当な場所に足場を固定する。

「>ニルアドミラリ<」

魔法の発動によって周囲が白い光に包まれる。その白い光は大気に溶けるようにして消えていく。すると右の方からすうっと女騎士が現れる。その顔には表情がない。

空間魔法>ニルアドミラリ<。これはまず周囲に白い光が発生する。その白い光はあつという間に大気に溶け込む。これが溶けた空気を吸い込むとその相手は感情が無くなってしまふ。つまり無関心になってしまふのだ。

「おゝい、大丈夫か」

パチンと手を叩いて魔法を解除する。女騎士はそれに反応して目をぱちくりさせた。

「何だ、何があった！？」

ちょうどそこに茶髪の騎士その他数名が現れる。俺たちの戦闘の音を聞いて駆けつけたのだろう。

「て、隊長！？」

俺たちの前でうずくまっている女騎士を見て茶髪の騎士が驚いたように言った。他の騎士たちも呆れているような表情をしている。

「彼女隊長だったんですね…」

ミリーも呆れ顔で言っている。どうやら猫のことからは立ち直ったらしい。

「お、お前ら！こいつらはいつの間にか城に侵入していた賊だ！早く捕まえる！」

「いや隊長…。彼らはお嬢様のお客様ですよ…」

「…何？ウルお嬢様のか？」

「いえティカお嬢様のです」

隊長がこちらをジーツと食い入るように見つめてくる。その顔色は

だんだん赤から青に変わっていく。

「す、すいませい…痛…舌嚙んだわ…んでした」

と横を向きながら謝られた。まるで自分に非はないといつかのような様な雑な謝罪だった。

「隊長！しっかり謝って下さいよ！」

茶髪の騎士が隊長の頭を無理矢理こちらに向ける。

「客人に刃を向けたなんてガルトの騎士の名折れですよ」

その茶髪の騎士の言葉に隊長はハッとして今度はいきなり俺らに土下座してきた。

「申し訳無かったご客人どの！出来ればこの事はお嬢様方にはご内密にお願い致します！」

「俺らからも謝ります。すいませんでした。隊長、ドジっこなもんで…」

茶髪の騎士と他の騎士も土下座とはいかないまでも頭を下げてる。

「私はドジっこではない！！」

隊長が土下座して下を向いたまま怒っていた。全くこの家はどんなってるんだ。

ワガママお嬢様にドジっこ騎士隊長。しかしファーフード家はまだまだこんなもんじゃなかった。

後にシャルビィから聞いた話だがファーフードの一族は街人たちから「残念貴族」と呼ばれていることを聞いた。一族（騎士などの関係者も含めて）の全員が優秀だが変た…個性的なのだという。

竜ヲタ（前書き）

総PV20万突破！！お気に入り600件突破！！ありがとうございますw

これからペースは落ちると思いますがこれからも頑張ります

竜ヲタ

あれからドジっこ隊長は報告のため一旦城の中へと戻って行つた。他の騎士たちも持ち場に帰り俺たちの前にはあの茶髪の騎士（ヒント・ハーテナーと名乗っていた）だけしか残っていない。

「本当にすいませんでしたね。シローさんにミリーさん。隊長は一度思い込んだら修正が効かないんですよ…」

茶髪の騎士が再び申し訳なさそうに俺たちに謝罪をしてくる。

「それなのによく隊長なんか務まるな」

「それは隊長が美人でドジっこですから野郎共からは人気があるんですよ」

苦笑しながら答えるヒント。

「じゃあ見せかけだけの隊長なんですか？」

「ん？いやいや。もちろん実力はありますよ。お二方もさつき戦つたなら分かるんじゃないですか？ガルト騎士団長ミステイオといえは有名ですよ」

そう言えば前にシャルビイが言っていたな。ガルトの騎士団長はこちでは珍しい＞魔く＜武くの両方が使えるタイプの騎士だって。噂は聞いている。でもまさかあんな人だとは思わなかった」

「ですよ。今日だつて朝早くから一人で街の外に出てたんですよ。街の外で大きな＞魔く＜武くの残滓を感じとつたつて言つて行つちやつたんですよ」

「え？それって…」

ミリーがその言葉に反応する前に口を塞ぐ。

「んむぐっ…」

「何かご存じなんですか？」

「いや知らないッス！」

めつつちゃ怪しくなつてしまつたがとりあえず誤魔化した。ミリーは

何故か口を塞がれてうつとりしている。怖い。

「は、はあ…。それにしてもシローさんって何者なんですか？」

「シローでいーよ。何者って？」

「いやいくら隊長がドジっこって言うてもギルドランクSSはあるんですよ。それなのにいと簡単に無力化してたじゃないですか。もしかしたら何処か国の密偵なんかですか？」

「全然。俺ギルドランクFだし」

「えええええ！！？？」

シャルビイから聞いた話だがこの国に限らず何処の国でも仕官するにはギルドに入っていないといけないらしい。つまりギルドランクFという事はどこにも仕官していない明確な証拠にもなるのだ。

「そんなに驚くなつて。それより街の外で起きた残滓については何か分かったのか？」

「さあ？でも隊長がチラツと少なくとも人間同士の争いにしては巨大すぎるって言うてましたよ」

失礼な。ミリーは確かに竜だが俺は人間だぞ。まあ異世界のだが。

「じゃあ魔物か。案外竜とかだったりしてな」

笑いながら俺は真偽を確かめるようにヒントに呟く。もしあそこで竜が暴れていたとバレているならカマを掛ける事で何らかのリアクションを取れるだろうと踏んだからだ。

「竜族かあ…。カッコいいですよねえ」

ヒントは俺の言葉に動揺する素振りは見せない。ミリーの方は動揺していたが。

「知ってますか？竜族にはそれぞれ特徴があるんですよ」

そう言うて目を輝かせたヒントは竜族について語り出した。どうやらマニア魂に火をつけてしまったらしい。

「火竜族は尻尾の先端に火が灯ってるんですよ。我こそが炎の先に立ち導く者であるっていう証なんです」

尻尾に火って…。どこかのポケットな世界のモンスターのリザードんじゃないか。

「風竜族には立派な鬣が生えているんです。これは誰より風を感じるためです」

俺の中で風竜族のイメージはペガサスになってしまった。

「雷竜族の翼は鋼鉄の翼なんです。自ら雷を引き寄せるための翼らしいです」わざわざ雷を引き寄せるなんて物好きな種族だ。隣のミリーはさっきからヒントの話に感心していた。お前竜族だろ。何で知らないんだよ。

「それで最後に水竜族は頭に一本の角が生えているんです。これは自らが渦の、つまり水を中心であるということを示しているんですよ」

そう言っミリーの方をチラッと見る。

「案外ミリーさんも水竜族だったりして。あはは、なんちゃって。でもまあ上位の竜は人間に変化出来ますからね」

ヒントが楽しそうに語っていたのに対してミリーは顔面蒼白だった。

「そういえば二人は飯まだだよな？」

竜族の講義を終えて素に戻ったヒントは俺たちに親しみを感じたのか敬語ではなくなっていた。

「まだ食ってない。ペコ腹」

「私もお腹空きすぎてお尻と頭がくっつきそうです」

「ペコ腹じゃなくて腹ペコだし、くっつくのはお腹と背中だよ!」

と俺たち二人のボケにつっこめる位には打ち解けたのであった。

竜ヲタ（後書き）

一応予備情報として

コルク村編〓シロー登場編

ギルド編〓主要人物登場編

という感じとなっております

そこから先は結末以外未定なんで作者自身もどうなるか楽しみでもあり不安でもあります

ではこれからもよろしく願います！

ティカの怒り

あたしはティカ！ティカ・ファーフードよ！！このガルトの街を治めるファーフード家の次女なの。五つ上のお兄様は最近、王都アステリに行っているから遊んでももらえないし、二つ上のお姉様も最近はお父様の補佐で構ってくれないの！！だからあたしは暇に暇で暇だったのよ。こうなったら街中に出て街人たちの視線を集めてやるうと思ってお忍びで街へ出たのに全然注目されないの！！何で！？

しばらく歩いていると街人たちの噂がいくらか聞こえてきてその原因が分かったわ。どうやら奇妙な二人組がいるらしいの。一人は何とあの裏切りの一族。もう一人の方は黒眼黒髪の少年らしいわ。確かに黒眼黒髪は珍しいわね。もしかしたら魔族なのかもしれないわね。もうこうなったら直接確かめるしかないわ！！

あたしは街を練り歩き回ったわ。そしてようやく見つけたの！！でもおかしいわね。黒眼黒髪の方の少年はいたけど一緒にいるのは裏切りの一族の女じゃないわ。裏切りの一族は皆赤い髪をしているもの。でもあの女は水色。至って普通の女じゃない。所詮は街の噂だわ。ってあの女頭に角があるじゃない！？亜人！？亜人なのね！！！！

「シャルビイ大丈夫かな」

「大丈夫ですよ。彼女殺しても死ななそうですし」

黒眼黒髪と亜人はどうやら街をブラブラしているだけのようね。会話の中に出てきたシャルビイっていうのは確か裏切りの一族の女の名前だったはずよ。

許せないわ！！裏切りの一族、黒眼黒髪、亜人！こんなあたしより目立つ組み合わせは許せないわ！この街で一番目立っているのはあたしでないとダメなのよ！！

こうなったら直接ボコボコにして恥を晒させて街から追い出すしかないわ。

あたしはチャンスを見て黒眼黒髪に軽くぶつかった。今だわ！！

「お、わりい」

「…（パクパク）」

先に謝られてしまったわ。どうしよう。とりあえず引き止めなきゃ！

「ちよつと待ちなさいよ！」

ビシッと指をさして黒眼黒髪を引き止め…られない！？ならもう一回よ。

「ちよつと待ちなさいよ！！」

今のは絶対に聞こえたはずよ。なのに何で先に行っちゃうの！？もしかしてわざと無視してる？このあたしを？ゆ、ゆゆゆ許せないわ！！あたしはツカツカと離れていく黒眼黒髪に近づいて行く。

「アンタよアンタ！！その黒眼黒髪！！ちよつと待ちなさいって言ってるのよおっ！！！」

そこまで言うてようやく黒眼黒髪が振り向いたわ。あ、さっきまでは気付かなかったけどかなりのイケメンじゃない。タイプかも！

「お嬢ちゃん何か俺に用かい？」

「お、お嬢ちゃん！？アンタ人にぶつかっておいて何なのその態度！！馬鹿なの！？」

あたしは反射的に答えていたわ。だってお嬢ちゃんってヒドいじゃない？あたしだってもう16歳よ。確かに身長は少し小さいし、胸も控え目だけど…。でも失礼だわ！！

この瞬間黒眼黒髪の死刑が決定したわ。そうしてあたしは城に戻って決闘したの。まあ結果はあたしの圧勝だったけどね！！

あたしは今、決闘に勝ったからホクホク顔で街中を歩いているわ。なんだかスツキリしてとってもいい気分よ。お兄様やお姉様に構ってもらえた時と同じ位ね。

ぶらぶらしていると近くから聞いたことのあるような声がして来たわ。

「どうよ？俺イチ押しのリックルスープの味は」

あの声は確か、騎士団の副隊長。ヒント・ハーテナーだったわね。誰かと食事でもしてるのかしら。もしかして彼女かもね。だったら少しイジメてやろうかしら。そう思って振り返った先には予想外の人物がいたわ。

黒眼黒髪と亜人！？何でヒントと一緒にいるのよ！！

「うまうま。初めての味だぜ」

「はい。すごく美味しいです。あっさりしてて」

「ふふふ。そうだろそうだろ」

「何で隊長が得意気なんですか」

ええ！？ミステイオまでいるじゃない！！どうしてよ。あの二人はあたしの敵だったのよ。だからコテンパンにして辱めてこの街にいられないようにしてやったのに何で仲良くなっちゃってんの！？信じられないわ。もう嫌だ。

あたしは気付くとその場から走り出していた。

「お嬢様：！？」

チラッと最後に誰かの声が聞こえたような気がした。

劣等感

「お前らリックルスूपって知ってるか？」

ヒントがニヤリと笑いながら言った。別に全然カッコよくないけどな。

「知らないな。うまいのか？」

「ああ、俺自身はこの街一番のうまうまだと思っている」

「そんなにうまうまなんですか？」

「うーうーうまうまだ」

なるほど。こっちの世界でうーうーうまうまはこうやって使うのか。てかそもそもうまうまって…。俺も今度使ってみよう！

「ならさっそく行こうぜ」

「ああ、場所はギルドのある通りの一本隣の通りだ」

そうして今度こそ門を出ようと一歩踏み出すと後ろから声が聞こえた。

「おい。どこに行くんだ？」

ミステイオは報告が終わったのか。こちらに戻って来たようだ。俺たちは一斉に振り返った。

「飯食いに行くんですよ、隊長」

「そうか。ならさっき殺…迷惑を掛けた詫びだ。奢らせてくれ」

「お前今殺し掛けたって言おうとしたろ！！でも飯は奢ってくれてあざっす！！」

「お前イケメンなのに残念なタイプの人間だな…」

ヒントとミリーは何故か溜め息を吐いている。何故だ？まあミスデイオも訳が分かってないようだしいいか。

「メシメシメシ」

「シロー様ってもっとクールなキャラだと思ってました。実は楽し

いお方なんですね」

「まあね。なんかテンション上がると騒ぎなくなっちゃうんだよね」

「それはいかんな。騎士ならば常に冷静を…」

「騎士じゃねえよ！」

「…そうだったな」

再び勘違いドジっこぶりを披露して一人沈むミスティオ。ヒントは隣でカラカラと笑っている。

「そういえばティカって何であんなに人の話を聞かないの？」

「それは私も気になります」

その質問にヒントとミスティオは顔を見合わせる。どうやら目だけで会話しているようだ。

「そうだな。まあお前らはお嬢様の被害者な訳だからな。特別に教えてもいいけど…」

「他言無用で頼む」

ヒントの言葉にミスティオが続いた。それに俺とミリーは頷く。

「まずお嬢様には兄と姉がいてな。五つ上のスレイター様と二つ上のウルリア様ってのがいるんだ。スレイター様は昔から>武<の才能が凄かったらしくてな。つい何日か前に王都騎士団からスカウトが来て王都アステリに行っちゃったんだ」

王都騎士団。これも前にシャルビイが言っていたが入団の最低条件が>魔<と>武<の二つを使いこなせることだったはずだ。つまりティカの兄はミスティオと同等、もしくはそれ以上の実力があるのだろう。

「それでウルリア様の方は身体は弱いが政治手腕に非常に長けていてな、現ファーフード家当主の右腕としてメキメキと頭角をあらわしているんだ。最近でこそ顕著にお嬢様との差があらわれたが、これはずっと前からそうだったんだ。優秀な兄と姉。

それに比べて元気が取り柄だけのお嬢様。これはずっとお嬢様にとつての恐怖でありコンプレックスだったんだ。皆、お兄様とお姉様

ばかりを見て誰一人自分を見てくれないってね。だからお姉様は目立とうとする。そうでなきゃ自分のことを見て貰えないって思ってるんだ。そんなことないのにな。当主様も奥様もスレイター様もウルリア様も俺たち騎士団も街の皆だってちゃんとお嬢様を見てる。そしていつだって心配してる。俺はいつかお嬢様に気付いて欲しいんだ。一人じゃないってことを。虚勢を張らずにそのままでもいいんだってことを……」

お店に着きそれぞれ無言で席に座る。それぞれ何か考えているようだ。メニューを聞きに来た店員にはミスティオがリックルスープ四つと答えていた。

「じゃあティカちゃんがシロー様に絡んできたのは……」

「お嬢様よりも目立っていたからだろうな。噂ではあのシャルビィ・ルーランも君達の仲間なんだろう？それは目立つなというのは無理だと思うがな」

店員が驚きの短さでリックルスープを運んで来た。さすがに人気料理なだけあってすぐ出せるように準備しているのか。

「よし！暗い話はこれで終わりだ。よし食うぞー」

ヒントが無理矢理場を明るくして食事が始まった。俺は一口リックルスープを口に運ぶ。

「どうよ？俺イチ押しのリックルスープの味は」

ヒントが得意気にしている。何か無性に悔しいが確かに美味しい。

「うまうま。初めての味だぜ」

そしてさっそくさつき覚えたうまうまを使ってみた。どうやら使い方に間違いは無いようだ。

「はい。すごく美味しいです。あっさりしてて」

ミリーも美味しそうにスープを飲んでいる。うまうま使わないのかよ。

「ふふふ。そうだろそうだろ」

「何で隊長が得意気なんですか」

その時、バタバタと音がした。俺は振り返る。するとそこには見

覚えのある金髪ツインテールの少女の後ろ姿があった。俺の動きに合わせて視線を移した三人もそれを見て驚いているようだった。

「お嬢様……！？」

ヒントが慌てたように声を出したがそれはティカには届かず彼女は走り去っていつてしまった。

<探索>

「お嬢様：！？」

突如走り去っていったティカにヒントは声をかけるがそれは届かなかった。

「どうしてお嬢様が：？逃げ出した：？」

ヒントは混乱しているようだ。ミスティオとミリーはまだ現状をよく把握出来ていないようでポケットとしている。俺は普通にリックルスープを飲んでいた。

「ティカは目立つ俺たちをここから追い出したかったんだろ？だったら俺とお前らが一緒にいたらマズいんでね？」

俺のその言葉にハツとする三人。そしてミスティオは走り出した。

「ヒント！お前は騎士団のメンバーに至急連絡して搜索させる！」

「了解しました！！」

「シローたちも周りを搜してくれ！」

「はいっ！！」

ミリーが勢いよく返事する。孤児を育てていたミリーにとってみればティカも子供のようなものなのだろう。あのような話を聞いたらなおさらだろう。

「行きましようシロー様」

「落ち着け。とりあえず無闇に動くのは得策じゃない」

「じゃあどうすれば：！？」

落ち着けといってもそう簡単に落ち着くはずもなく慌てた様子でミリーは尋ねてくる。

「魔法を使う」

俺は席を立ち、地面にしゃがみ込み手をつける。周りの人たちからの注目されるが仕方ない。地面に俺を囲むように光が発生し、それが枝の様に周りへと伸びていく。

「>探索<」

光は更に伸びていきやがて光が見えなくなるほど薄くなっていた。
俺は目を瞑る。

「……………」

「…何をしたんですか？」

「……………」

「……あのシロー様？」

「……………」

「……………うつ…シローさまあ」

「……………なるほど」

目を開けると何故かミリーが泣きそうになっていた。

「どしたんだミリー？」

「知りません。シロー様なんか」

「ブイツとそっぽを向かれた。何か俺悪いことしたか？」

「まあいい。ティカはどうやら裏路地の方へ入っていったみたいだな」

「どうしてそんな事分かるんですか？」

「今俺が使った魔法は>探索<っていう光魔法なんだ。これは俺の
>魔<を光に変えて四方に伸ばして他人のカードに侵入し、そこから神経を辿って他人が見た記憶や情報を手に入れる魔法だ」

「…それ犯罪じゃないですか？」

「緊急事態だ。仕方ない」

ミリーはどうも釈然としない様子だったが今はそれどころではない
と判断したようで口を閉ざしている。

「ミリーはそこを右に曲がってミステイオを連れ戻してくれ」

俺は素早く指示を飛ばす。ミリーたちが後で俺に追いつけるように
>共有<で俺が見た場所の記憶を渡しておく。

そのまま俺とミリーは二手に別れる。人ごみを上手くかわしながら
ティカが通ったであろう道を通ってゆく。時々ぶつかる人が顔を
しかめたり罵声を浴びせてきたりしたが、構っている余裕はない。

まだ昼時で太陽が真上にあるせいか随分と暑い。いやもしかしたら焦っているのかもしれない。直感だから何とも言えないが嫌な予感がする。

「ティカ！」

目的の裏路地に入るとそこには誰もいない。俺が記憶で見た場所はここで間違いない。だがあれから当然時間は進んでいるのだからティカがそのままここに居続ける訳もない。

「いるんだろティカ」

だが俺は不思議と直感していた。ここにティカがいます。どうやって隠れているのかは知らないが確実にここにいるはずだ。

しかしその場の>魔くを探っても芳しい反応は得られなかった。どうしようか考えているとミリーとミスティオの二人が俺に迫ってきて来た。

「シロー様！」

「お嬢様は！？」

二人の表情には不安と焦燥、それとわずかばかりの期待が見えた。俺は静かに首を横に振ると二人が落胆の表情を見せる。

「ただティカはここにいる。間違いない」

「いるってここに隠れてるって事ですか？」

「ああ。だが周囲に魔法を使用した形跡は見られない。だが気配は感じる。ミスティオが俺たちと戦った時に使った時も似たように感じたが同じ魔法か？」

「いや。私のは光魔法で誤魔化しただけだ。少なくともこんな光のない裏路地で出来るものではない」

なるほど。恐らくあの時ミスティオが使っていたのは幻覚系の光魔法と騎士として身に付けた>武くで>魔くと気配を隠す技術を用いたのだろう。まあ完璧ではないらしくやや気配が漏れ出していたが。

だが今回は違う。気配は隠している様子はない。だが何かオブラートに包まれたように薄くなっており半ば直感に頼らざるを得なくなっている。もしかしたら何かしらの不確定要素が紛れ込んでいる

のかもしれないと意識を集中させる。

「……!？」

すると前方に一際影が濃くなっている場所を発見した。俺はそれに近づこうと足を一步踏み出す。

その瞬間、濃い影が四方に弾けた。俺はミリーとミスティオをとっさに庇う。

「……!？」

どちらかの驚くような声がした。それに合わせるように振り返るとそこには全身が漆黒に包まれたティカの姿があった。

黒い影

それは初め、俺の使う魔法の>影人形<かと思った。しかしそうではないとすぐに気付く。目の前にいる漆黒に包まれた異様なティカからは魔法を発動している様子を感じない。ただ漆黒に包まれていだけで先ほどまでのティカと全く変わらないのだ。強いて言えばうるさくないという事くらいだ。

「…お、お嬢様？」

ミスティオが狼狽しながらも漆黒のティカに歩み寄ろうとする。

しかしティカの足元からはそれを拒絶するかのような黒い影伸び、ミスティオを突き刺そうとする。

「…っ！！」

それをミスティオをギリギリでかわし最小限の動きで大剣を振り影を斬る。斬られた影は蒸発するように姿を消した。この狭い裏路地でミスティオの大剣は不利だ。しかも相手はティカ。いくら異様になつていようがティカをミスティオが斬れるはずもない。

「ミスティオ下がれ」

それと同時にミリーとミスティオの間を縫うように>鎌鼬<を発動させる。もちろん威力はかなり抑えてある。

しかし放った>鎌鼬<はティカの身体に吸収された。

「魔法が効かないのか？」

俺は再び>鎌鼬<を発動させる。威力は先ほどよりはかなり強い。しかし結果としてそれはティカを傷付けることはなかった。

ただし>鎌鼬<は先ほどのようにティカの身体に吸収されることなく貫通していったのだ。これにはミリーとミスティオも目を丸くしている。

「…魔法はある程度強くないと吸収される。しかし威力が強くても

攻撃自体は効果なし」

恐らく物理攻撃の方も同じだろう。ミスティオが影を斬れたのはあれが枝だったからだ。本体である幹の部分には斬った所でなんらダメージを与えられないだろう。

「シロー様、攻撃が効かないならば癒やしを。>癒やしの涙<」

ミリーが唱えた癒やしの魔法はティカの右腕を蒸発させた。

『アアアアアッ！！！！』

右腕を消されたティカが悲鳴を上げる。しかしすぐに影が伸び黒い右腕は再生させる。

「効くことには効くが、全力でやったらティカそのものが蒸発しかないな」

「ならば光魔法だ。>閃光<！」

今度はミスティオが光魔法を唱える。光の届かなかった裏路地にパツと光が灯る。しかしティカには全く効いていない。

「…光魔法も効かないだと…？なら一体何が効くんだ」

仕返しとばかり今度はティカの足元の影が伸びてくる。先ほどまでとは速さが全然違う。ミリーが水の防壁を発動してそれを防ぐ。

「ミスティオ！！」

ミスティオの足元に壁を伝うようにやってきた影が突然現れる。ミスティオはそれを避けようとするが間に合わない。

「っ…！！」

影に絡まれたミスティオは腕を振り抵抗するも一向にそれが振り払われる様子はない。むしろ影は更にミスティオを浸食していく。

あつという間にミスティオは影に取り付かれティカ同様影共の操り人形になってしまった。

「殺すしかないか…」

殺すことなら簡単だ。物理攻撃だろうが魔法だろうが影が回復する前に全身を消滅させてしまえばいい。こいつらに対する対処法が分からない以上、無闇に被害が拡大する前に消滅させてしまったほうが良い。それが今は最善の策である。

「ダメです！中にはティカちゃんとミステイオさんが…！」

ミリーは悲痛な様子で叫ぶ。これでは殺すに殺せないな。空間魔法を使って一時的に動きを止めて、その間にヒント達騎士団と合流して策を練る。恐らくこれが今は最高の策であろう。

最善と最高は違う。もし空間魔法が破られてしまえば確実に被害は広がる。だがもしかしたらティカとミステイオは救える。だからこれは最高の策なのである。成功した時には最高を結果をもたらすから。

「>神域く！」

神のみにしか破ることは出来ないと言われる結果。現にミリーと俺との戦いでもシャルビイを守り抜いた結果だ。

これで影共を中に閉じ込める。外からの攻撃が中に決して届かないのと同様、中からの攻撃も決して外へは届かないからだ。影共は>神域<に包まれ結界の内側に閉じ込められる。

「よし。今からヒント達と合流して策を練るぞ！」

「はい…！」

ミリーと俺はすぐさまその場から立ち去る。ついでにこの場所に迷い込んでくる奴がいないように>人払い<と>隠匿<の両方を仕掛けておく。

そうして俺たちは街中を搜索しているであろう騎士団と合流するため表へと戻るのだった。

作戦会議

あの後すぐに騎士団と合流した俺らは一旦城へと戻っていた。そこからすぐにヒントは事の概要を当主に説明。俺たちは作戦会議のため城の一室に集合していた。

「それで一体何がどうなっているんだい？」

そう穏やかに問い掛けてくるのは現ファーフード家当主、つまりティカの父親だ。身長が低く威厳があまりない。何故かタンクトップのような服を着ている。その脇に座っているのはティカの姉であるウルリア・ファーフード。当主の右腕でも呼ばれている才女だ。恐らく母親似なのだろう。身長が高く銀髪で薄紫の口紅をしている。彼女はこちらに疑わしげな視線を見せてくる。

「報告でも聞いていると思うがティカとミスティオが謎の影に捕まり操られている」

「おい。お前当主様の前だぞ！敬語使え」

小声で怒るといふ奇妙な技で俺を叱るヒント。

「いやあ。別に敬語とか気にしなくていいよ」

当主は聞こえていたらしく何故か照れながら返答した。大の大人（タンクトップを着ている）がモジモジしている。気持ち悪い。よく見るとそのタンクトップには「君と見る夕日」という文字が書いている。ズボンには虹色のものをはいているし、裸足で靴をはいていない。なのに毛糸の手袋をしている。

「ごめんなさい。お父様のセンスは少しズレているの」

俺が当主をガン見しているのに気付いたのかウルリアが言った。もちろんウルリアのセンスは至って普通である。

「そうかい？僕自身はなかなかイケてると思うんだけどねえ」

当主が自分の服装を見て首を傾げている。こればかりは他の人も弁護する様子は見られない。

「話を戻すぞ。まずはあんた等に俺が見た記憶を共有させる」
そう言つて記憶の＞共有くを発動させる。部屋中が一斉に静かになる。

しばらくして俺の記憶を見終わつた人たちが顔を青くしている。

「まずこれが知りたい。あの影は魔物か？」

「僕の知る限りあんな魔物いないねえ」

「俺も知らないな」

「私も知らないわ」

三人が否定する。残つた騎士たちも口々に否定する。ならばあの影は新種、亜種、もしくは全く別の生き物かもしれない。

「そうか。解決策はあると思うか？記憶を見て分かる通り生半可な攻撃は通用しない。しかし強すぎるとティカたちごと殺してしまう」

「うーん。普通の魔法が効かないなら祈祷魔法はなんかどうかな」

「祈祷魔法？」

「うん。これはマイナーだからあんまり知られていないんだけど神様の力をかりて魔族や魔物を封印したり、負の力がたまつた場所を浄化したりする魔法なんだ。まあ厳密には魔力じゃなくて神様の力を使うから魔法とはいひ難いんだけどね。当てはまる属性もないしなるほど。俺が前に子どもたちの魂を封印したのもこの祈祷魔法に属する訳か。

「なるほど。この中に祈祷魔法が使える者はいるのか？」

「微力ながら私が」

ウルリアが名乗りをあげる。ウルリアの得意魔法は風と祈祷だそう
だ。

「危険だぞ？」

「大丈夫よ。可愛い妹を救うためなら多少の危険くらい関係ないわ」
ウルリアは覚悟を決めているようだ。ならこれ以上俺には何かを言う権利は存在しない。

「人数はあまり多すぎるのも良くない。メンバーは俺、ミリー、ヒント、ウルリアだ」

「わかったよ。なら他の騎士にはいつも通りにしてもらおうかな。僕たちの不安が街人たちに伝わるのは避けたいからね」

『ハッ！！！』

当主の言葉にヒントを除いた騎士たちが一斉に返事をする。どうやら当主はただのダサイ奴ではなく頭がキレるようだ。

「行くぞ」

ウルリアには街中で目立たないようにフードを被ってもらい俺たちは出発した。

黒

「これは…あなたも祈祷魔法が使えるの？」

現場に着くと真っ先にウルリアが口を開いた。それを俺は短く否定する。

「空間魔法だ」

「へえ。上級魔法も使えるのね。あなた一体何者？」

疑問も投げつつもどこか面白そうにウルリアが語りかけてくる。ヒントもあからさまにこちらを見ている訳ではないが意識はこちらへ向いている。

「ただの旅人だ。ギルドランクFだしね…」

「ふうん。まあいいわ。それじゃあ祈祷魔法を使うから結界を解除してくれるかしら」

「了解。ヒントとミリーも防御に徹してくれ」

「おう」

「はい」

二人の返事を確認すると俺は>神域<を解く。すると雪崩のように黒い影がこちらを襲ってくる。

「うげえっ！？こ、>光壁<！」

「>水壁<！！」

ヒントとミリーがそれぞれの魔法で進行してくる雪崩を止める。ウルリアはこれに一切心を乱される事なく聞いたこともない言語で詠唱を続けている。

「>鎌鼬<」

俺は正面以外からやってくる影の枝を>鎌鼬<で刈り取っていく。枝自体は大したことないが数が数なので面倒だ。「キモッ！！ヤバっ！？」

絶叫しながらもヒントは絶妙なタイミングで影を防いでいく。やがて雪崩が止まりようやく漆黒に包まれたティカとミスティオが姿を現す。

「隊長：お嬢様：」

ミスティオが漆黒に染まった大剣を構える。すると疾風の如くこちらへと駆けてくる。

「隊長は俺が抑えます！！」

ヒントが自らの剣を抜きミスティオの一撃を受け止める。ミリーはウルリアを中心にさらに、水壁くを強化させる。

ヒントはミスティオの剣技をギリギリの所で受け流していく。狭い裏路地で壁を伝いミスティオが上から奇襲を仕掛ける。ヒントはそれを後方へ下がってかわし、ミスティオの着地と同時に突きをする。それは見事にミスティオの左肩を貫通するも攻撃が効いた様子はない。

「まじかよ」

ヒントは顔をしかめながらも再び間合いをとり構える。ミスティオは防御をする必要がないので特攻の様子を見せている。

そこであることに俺は気付いた。ミスティオの身体からは影の枝が出ていないことに。もしかしたら枝を出すのは、魔くを使う魔法使いのみなのかもしれない。しかしその代償なのかティカは自ら攻撃してくる様子はないし、あまり動いたりもしない。逆に、武くを扱うミスティオの方は枝こそ使わないが防御が必要ない分こちらが不利だ。

いや待てよ。ミスティオは確か、武くも、魔くも使えるのはずだ。
「ヒント！！」

俺の叫びよりも僅かに早くミスティオの大剣から影の枝が飛び出てくる。ヒントは剣の側面で何とか払い落とすも、その隙にミスティオの大剣が迫る。

「>鎌鼬く！」

俺はヒントにその刃が届く前に大剣を弾く。ヒントは崩れた体勢を

すぐさま立て直す。

「出来たわ！」

詠唱が終わったウルリアは両腕を真上に掲げて最後の一言を唱える。

「>親愛なる光く！」

その瞬間、温かい光が満ちる。枝たちが消滅してゆく。そして閃光が俺たちを包み、晴れる。

「……う……あ……」

影を取り除かれたミスティオがうめきながら地面に倒れ込む。慌ててヒントがそれを支える。

「……………そんな……」

ウルリアの顔が絶望に染まる。

ミスティオの影は消滅したがティカの影は消え去ってはいなかったのだ。

どうしてミスティオの影は消滅してティカの影は消滅しなかったのか。それは恐らくティカの影の方が強い、すなわち闇が濃いからだろう。先ほどの攻撃の仕方からも分かるように影は乗っ取った人物の影響を強く受ける。強さも例外ではないはずだ。

つまり影は乗っ取った人物の心の闇を力にしているのだ。負の欲望を強制的に引き出していると言ってもいい。その形があの黒い影たちだ。

もしティカを影から解放したいのならティカの心の闇を取り除く必要がある。だがそれは不可能だ。心の闇とは誰にでもある。ならば強制的に取り付いている影を抜うしかない。先ほどよりも強力な祈祷魔法を唱えて。

「時間が掛かってもいい。あれよりも強力な祈祷魔法はあるか？」

「無理よ！あれが精一杯よ」

「そうか。ならアレしかないか」

俺はティカの放つ枝を払いながらティカの方へと歩いて行く。するとミリーが不安そうに尋ねる。

「シロー様？」

それには反応せずに俺はティカの前までたどり着いた。

俺はティカに触れる。するとあっという間に俺を影たちが包んでいく。

「シロー様!!」

最後にミリーの叫びが聞こえ、俺の視界がブラックアウトした。

精神世界

目を開けるとそこは真っ白い世界だった。なんかデジャヴを感じるが気にしたら負けである。

「ここはまた…神様のところか？」

そんな俺の独り言に答える声があった。

「違うよ。ここは僕の精神世界さ」

現れたのは真っ白な俺だった。髪も瞳も服も肌も異常なほど白い俺。かつてこの世界に召喚される途中で出会ったもう一人の俺。

「ホワイトシローか」

「何か嫌だな。その呼び方」

クスクスとホワイトシローが笑うが本気で嫌という訳ではないらしい。

「なあ俺もやつぱ影に呑み込まれたのか？」

その問いに今度は短くクスリと笑うホワイトシロー。同じ俺のくせに何かム力つくな。いや同じ俺だからこそム力つくのか？

「そんな訳ないじゃん。あの程度の格下に侵される僕じゃないよ。

まあ外の人間たちから見れば僕も影に呑み込まれたように見えるんだけどね」

ん？紛らわしいな。俺のことも僕って呼んで、ホワイトシローのことも僕って呼んでるよ。

しかしよく分からないが大丈夫らしい。だがこれではティカを救うことが出来ない。

「大丈夫だよ。同じ影になって内側から彼女を救おうって考えてしょ？彼女の心に直接問い掛けて闇を薄くしてから影を抜うっていうでもそんなものは僕には必要ない」

「必要ない？」

「うん。今回はそのために僕をここに呼んだんだよ。大分力を取り戻したようだしね」

力を取り戻した？

「ふふ。そうさ。前に僕と会った時、僕は僕が白くなっただけの存在だった。でも僕は根幹世界ベースに召喚されたことにより大分力を取り戻した。だから僕も僕の模倣とは違う本来の僕に戻りつつあるのさ」

口調が前と違うのもそのせいさ、とホワイトシローが付け加える。てゆうかさつき心を読まれたな。これも力が戻ったおかげなのか。「そういうこと。それで僕としては僕にもう一段階上に逝って欲しいんだ」

「行くの字が違くない？」

「いや。合ってるよ。何せこれから僕が手に入れる力は神様の力だからね。十神技っていう神様のみが使える十の技だよ」

そう言ってホワイトシローが俺の頭に手を置く。すると頭の中に十神技の知識が流れ込んでくる。

「これで彼女を救う方法が分かったでしょ？分かつてとは思うけど十神技は一から十までである。一は基本の基本。十こそが神様の神髄なんだ。今の僕じゃ十までは使えないだろうけどね」

「ああ。分かつてる。そういえばさつき言ってた根幹世界ベースってなんだ？」

「知らないのかい。今君がいる世界のことだよ。全て世界の基本の形で最も始めに創られた世界」

知らなかった。確かに疑問はあった。電子マネーのような通貨にメーイルのようなシステム。地球がこの世界のを模倣したのか。

「うんうん。まだ他にも色々あるんだけどね」

「へえ。楽しみだな。ま、とりあえず今は地上に戻るか。サンキューなホワイトシロー」

「うん。じゃあまた最後に一つ」

嫌な予感。前回はフラグ発言かと思いやきや何も起きなかった。

「今回は真面目だよ」

そう言ってホワイトシローは目を細めて笑う。その目は俺の目を捉

えている。

「全てを受け入れて。喜びや楽しさだけではなく、悲しみも哀れみも。そうすれば僕はきっと」

「白の完全無欠になれる」

十神技

精神世界からの帰還と同時に身体に纏わりついている影が弾ける。俺は再び影に纏わりつかれないうちに後ろに下がる。

「シロー様！大丈夫ですか！？」

「問題ない。四人とも少し下がっている」

ミリーとウルリアはそのまま後ろに下がり、ヒントはミステイオを抱えながら後ろへと下がった。影の枝たちを>鎌鼬<でサクサクと切り落しながら身体のを抜いていく。

「なによ…これ…」

俺の力に真つ先に反応したのはウルリアだった。すぐにミリーも気付いたようで驚いたような顔をしている。

それは俺の身体から今までとは違う神聖な力が溢れていたからだ。>魔<でも>武<でもない神にのみ使うことを許された力>神<。

すなわち神力。それに伴い俺の身体にも変化が起きる。髪が白く染まり、瞳も服も白くなっていく。肌も不健康なくらい白くなった。その姿はホワイトシローと全く同じであった。唯一の違いは意識は俺のものであるということ。

影の枝たちが警戒してか恐れてか、こちらに攻めて来なくなった。俺はそれを好都合とばかりに身体に纏う>神<を強化する。そしてただ一言告げる。

「>浄化<」

先ほどのウルリアほどの光は無い。温かい風が波のように緩やかに広がり収束する。するとティカに纏わりついていた影が跡形もなく消えていた。威力はウルリアの祈祷魔法の何倍もあったようだ。

それもそうか。本来>浄化<は神のみが使える力。それが十神技としては最も軽い一の技だとしても人の子の祈祷魔法程度に劣る訳

もない。

「ティカ!!」

ウルリアがティカの方へと走っていく。影から解放されたティカは未だ焦点の合わない瞳で駆け寄ってくるウルリアを見つめていた。感動の場面だ。ミリーも涙ぐんでいるし、ヒントも優しく笑っている。

「ちょっと待てい」

俺は素早くウルリアの側まで移動し首根っこを掴んだ。

「きゃっ！なにするよ!?」

さすがに感動の再会をぶち壊されてウルリアが怒った。ミリーからもヒントからも空気読め的な視線が突き刺さる。俺はそれも気にせずティカの方へと意識を向ける。

「おいティカ。お前は自分が何をしたのか分かってるのか？」

その言葉でようやくティカの瞳に光が戻り、途端に怯えたように身をすくめる。

「まさかお前、自分も被害者だなんて思ってないよな？」

俺はそんなティカに構わず言葉を続ける。誰も何も言えない。いや言わない。皆分かっているのだ。今回の事件はティカのせいで起きたと。

「影に纏わりつかれたからどうのって話じゃねえよな。分かるか？」

お前のせいで人が死にかけたんだ」

「あ、あたしはただ…!!」

ようやくティカが反応した。しかし瞳にはまだ怯えが残っていた。

「ただ何だよ」

「見て欲しかったのよ!!アンタらが負けて、あたしが勝ったのにヒントもミステイオもあたしじゃなくてアンタらを見てて…!それで…それで…!!」

泣きながら、それでもティカは自分の想いを吐き出していく。

「すごく嫌だった…!あたしの周りの皆はあたしより優秀で…!だから誰もあたしを見てくれないのよ!!」

「じゃあお前は誰かを見ていたのか？自分が見られたいってだけでお前は誰も見てなかったんじゃないのか？」

「……ち、ちが……」

「違わねーよ。お前は誰も見なかった。だから気付かないのさ。お前の事を見てくれている人がどれだけいるのかを」

そう言つて座り込んでいるティカの頭に手を乗せる。こいつには一回見せてやらないといけない。甘いかもしれないがそうすればきつと気付くはずだから。

「>探索<>共有<」

そう言つて俺は街の人たちのティカへの想いを探索していく。そしてそれをティカと共有する。

『今日はティカちゃん来ないねあ』『さっきティカちゃんと黒髪の奴らをストーカーしてたぜ』『ティカちゃん萌えー』『ティカお姉ちゃんがこの前アメくれたのー！』『まるで孫みたいでなあ。可愛くてたまらんわい』『お嬢は大丈夫ですか？』『あの娘っ子に食わす新メニューが出来たぜ、ぐへへ』

この街の人々のティカへの飾らざる想い。それはティカの闇を溶かしていく。

『ティカ、どうか無事でいてくれ……！』

父の想い。

『無事で良かった……本当に良かった……』

目の前にいる姉、ウルリアの想い。

『お嬢様……良かった』

ミスティオを支えながらも優しく微笑んでいるヒントの想い。

『お……嬢……様』

気を失いながらもティカを心配するミスティオの想い。

「あ、ああ……あああああああつっ！」

それら全てを知つてティカの瞳からは先ほどまでとは違う、澄んだ大粒の涙が溢れてくる。ウルリアがティカを抱き締める。

「うわわああああん……！」

そうしてティカは思いっきり泣いた。ウルリアに支えられたまま。

メンバー

あれから数日たった。

あの後俺らは夜遅くに宿へ戻るとシャルビイという名の般若が待っており夜通し説教された。ようやく朝になって眠れるようになり泥のように眠った。思った以上に十神技は力を使っらしい。

それから再びシャルビイとミリーを連れて城へと戻り、当主から褒美を貰った。ミリーは遠慮しようとしていたがそれでは相手側の示しが見つけないと言って俺が受け取った。ミスティオも無事に回復したようで一安心だ。ティカは何故か俺らの前に姿を現さなかった。ちなみにヒントとはフリストを交換した。ヒントはあまりカードを気にしていないらしくカードを見せずに交換出来たので楽だった。

そこからは各々好きなように過ごし今に至る。俺ら三人はギルドの前に集合していた。

「この前は助けてくれてありがとうございました!!」
目の前には大きな荷物を背負ったティカがいた。

「いやそれはいいんだが…その大きな荷物は何…?」

「えへへ、実は師匠に付いて行くことにしたのよ!!」
照れたようにティカが答える。というか師匠って何だ?それに付いて行くって?

「実はあの後、お父様たちと相談して、あたしはまだ世間知らずだから色々今のうちに世界を見ておけっとなったのよ!それでどうせなら助けてくれた師匠たちと一緒にの方がいいなってことで来たわ!!」

バーンという効果音が出そうな位腰に手を当てキメ顔をしているティカ。

「おいおい、勝手に決め…」

「はいこれ、お父様からの手紙ね」

“あのお金はティカの受け取り料込み込みだよん　　パパンより”

「あほんだらー!!!」

とりあえずム力つく手紙をビリビリに破り捨てた。ミリーとシャルビイは呆れたような顔をしている。

　　というかこの前俺らが城に行った時にティカが姿を出さなかったのって絶対にこの荷造りをしてたからだな。

「はあ。まあ良いか」

「やった!!!よろしくね師匠たち!」

嬉しそうにティカが飛び跳ねている。まるで小動物みたいだ。無駄に可愛いな。何だか抱きしめたく…

「シロー様?」「シロー」

なりませんでした。

「じゃあ、はい!!!これがあたしのカードよ!!!」

名前：ティカ・ファーフード

年齢：16

出身：ガルト

所属：ガルト

t p t：3憶

Fリスト：243

ランク：D

チーム：なし

二つ名：なし

称号：ファーフードの一族

「金がばねえ」

「ランクはDか」

「Fリスト多いですねえ」

ちなみに上から俺、シャルビィ、ミリーの順番だ。

「じゃあ次は私のだ」

「私のもどうぞ」

シャルビィとミリーもカードを見せて互いにFリストを交換する。

「ええー！？あんた亜人じゃなくて竜なの！？」

「ええまあ」

驚くティカにあまりリアクションの芳しくないミリー。最後に俺のカードを差し出す。

「……………ほえ！？」

あまりの驚きで言葉を失っているようだ。

「あんたランクFなの！？」

「「そつち！？」」

思わず三人でハモってしまった。普通は異世界とか称号で驚くべきだろう。ティカはどうやら何となくズレているようだ。

「そう言えば思ったんだけど師匠たちってチーム組んでないの？」

「チーム？」

「うん、てつきり一緒にいるからチームを組んでるんだとばかり……チームか。そう言えばそんなシステムもあつたねえ。」

「組んで無いなら皆で組みませんか？」

キラキラとした瞳でミリーが提案する。

「その提案ナイスよミリー！！」

ビシッとミリーを指差してティカがその提案に乗ってくる。

「まあ私も構わないが」

やや控え目にシャルビィも賛成を示す。

「俺もチームつくるのは構わないが何か色々規定とかあんじゃねーの？」

「いや大した事はない。受け付けにチーム結成の意を述べれば後は

泉にカードを入れるだけで作れる。人数は最低三人で上限はないから四人の私たちは問題ない」

「へえー。上限はないのか」

「ああ。騎士団とかも基本ギルドのチーム扱いなんだ。だから場合によっては複数のチームに所属することが出来る。あと私たちに必要なのはチーム名だけだ」

なるほどね。基本的にギルドは全ての国に存在しているから基準が分かりやすいのか。チームにもランクはあって、それが騎士団や軍のランク。国の戦力みたいな形になっている訳だ。

という事で俺たち四人はチームを結成することになった。

チーム結成

「問題はチーム名を何にするかだな」

するとティカが真っ先に手を挙げて言う。

「はいはい！！あたし的には『ティカ様と愉快的な師匠たち』が…」
「却下」

「なんでよっ！！」

ティカは無視して話を続ける。次に挙手したのはミリーだった。

「『シローとドキドキハーレム』なんていか…」
「却下」

「そ、そんな…」

ミリーが愕然とした表情を浮かべしゃがんで地面にのの字を書き始める。

「『乙女部隊』はどうだ？」

シャルビイがキラキラさせた瞳で語ってきた。

「そもそも乙女でも部隊でもないし」

「何っ！？私は乙女だぞ、失礼な！！」

「いやシャルじゃなくて俺が乙女じゃねーんだよ！！」
「ああ、なるほど」

どうやらシャルビイは納得したようだ。それにしてもさっきからマトモな案が一つも出てこないな。

「さっきから偉そーにしているからにはさぞいい名前があるんでしょーね！！」

「そうだなあ。『シローの最強傭兵団』とかどうよ」
「『却下』」

撃沈。

「なら『救いの手』というのはどうだ？」

シャルビィからついに初のマトモな意見が出た。

「何か意味はあるんでしょうか？」

ミリーがシャルビィに名前の由来を問う。ティカは黙って耳を傾けている。

「救われたからだ。シローに。それはお前達も同じはずだ」

シャルビィは裏切りの一族としての呪いを祝福に変えて貰った。

ミリーは失ったと思った大切な人たちをもう一度抱き締めることが出来た。

ティカは今まで無いと思っていた居場所が本当はあることを教えてもらった。

彼女たちは救われたのだ。橘四郎というたった一人の人間に。

「それに私は裏切りの一族。ミリーは竜。ティカは貴族。シローに至っては異世界人ときたもんだ。たとえ種族が違っていても、身分が違っていても、世界が違っていても、私たちは分かり合える。全員を救うことは出来ないかもしれないけど誰でも救うことは出来る。故に縛られない私たちは誰かを救う手になることが出来る。だから『救いの手』だ。それに最終的に世界も救わないといけないらしいからな。どうだ？」シャルビィはゆっくりと俺たちを見回す。

「私は賛成です」

「あたしもよ！！」

「俺もだ」

こうして俺らのチーム名は『救いの手』で決定となった。

その後、チームを登録した俺たちは今後どうするかについて話し

合った。

「あたしはバロックがいい！！おしゃれの街だし」

「私は王都アステリだな」

「私はシロー様の行く所ならどこでも」

三人がそれぞれの意見を述べる。選択肢は二つだ。おしゃれの街バロックか王都アステリ。王都っていうことは国の中心だし、もしかしたら美人の王女さまとかいるかもしれない。

よし王都アステリにしよう。決してやましい理由で選んだ訳ではない。

「王都アステリにしよう」

「ええー！！なんでよ」

「おしゃれの街に行ってもしょうがないだろ」

「……………確かに」

行き先は王都アステリに決定した。ここからは各自バラけて旅に必要なものを揃えることとなった。

神々の集まり

そこには幾つもの白い影たちで溢れかえっていた。中心に立つ年寄りのような形をした影が周りの影たちに告げる。

「ついにワシの世界で黒の獣が目覚め始めたわい。まだごく一部じやがのう」

すると周りがざわめき出す。しばらくざわついた後、一人の影が一歩前へと出て来た。

「その黒の眷属はどうしたんだよ」

「橘四郎という若者が退けたようじゃ」

すると再び周りがざわつき始める。

「橘四郎ってあんな様の世界の人間じゃなかったよな？」

「元は私の世界の人間よ、ガンラン」

男、ガンランの問いに若く美しい女性が答えた。

「ほう、アースの世界の住人か。何者なんだ。その橘四郎って奴はよ？」

ガンランはクククと意地の悪い笑いをしながら獲物を見るような眼で女、アースを見た。

「ガンラン！！今はそんなことどーだっていーのよっ！！問題なのは黒の獣の目覚めよっ！！どうなの準世界神様！？」

背の低い少女の影が老人、準世界神のベースに続きをうながす。

「そうじゃのー。恐らくワシの世界は根幹世界じゃから黒の獣が目覚めにより他の世界にも異変は起きるの。特に人間は黒、すなわち闇の耐性が低いから吞まれかねん」

「なら！！人間は滅ぼせばいい！！！！だいたい人間は不完全すぎる！！！神の姿を模しながらもあんなにも不完全な人間を生かしておく必要がどこにある！？人間が黒に吞まれ、暴れ出したら世界は壊滅

するんだぞ！！」

どこか神経質そうな男の影が叫ぶように言った。周りの影たちも少なからず頷いているものがある。

「ならん。人間の創造は世界神様の意志でもある。ワシらが人間を滅する訳にもいかぬわ」

「ならそーゆう肝心の世界神様はどこにいるんですか！？最近ちつとも姿を現さないじゃないですか！！」

「世界神様は別の用事で今は手が離せないの。これは大事な事よ」
「アースがヒステリックな男に牽制するように言った。ガンランは何が面白いのか笑っている。」

「そういうことじゃ。幸いまだ黒の獣はまだ目覚めかけておるだけじゃ。問題なのは眷族じゃがこれは人間たちが何とかするじゃろう。眷属どもも橘四郎や祈祷魔法の使い手たちを中心に何とかするじゃろう。じゃからワシらはその間に黒の獣との戦いに備えて力を蓄えておかねばならん。分かれれば今日はこれで解散じゃ」

そう言うのと周りにいた白い影たちが一斉に消えていく。最後に残ったのは準世界神ベースとガンラン、アースの三人（柱？）であった。
「ククク、世界神様が何を考えてるかは知らんがせいぜい俺を楽しませてくれよ」

ガンランは睨みつけるように言ってその場を去っていった。

「ガンランは血の気が多すぎていかんのう」

ホッホッホと準世界神ベースは愉快そうに笑っている。

「準世界神様、本当に橘四郎は大丈夫なんでしょうか？」

アースはどこか遠くを見るような感じで言った。

「大丈夫じゃよ。全て世界神様の計画通りじゃ。まあ最もワシも計画の一部しか知らんがのう」

「計画：ですか？」

「そうじゃ。神々の計画は運命と同義でもあるんじゃないから大丈夫じゃよ」

準世界神はさり気なくアースの引き締まったお尻に手を伸ばす。し

かし途中でアースの手によってペシンと払われる。

「セクハラです」

「ホッホッホッ、冗談じゃよ、冗談」

「……………（ジー）」

「うぐっ…わ、ワシは悪くないんじゃ！そのお尻がワシを呼んでいたんじゃー！！」

アースの非難の視線に耐えきれなくなった準世界神は頭を抱えて叫びながらその場から姿を消していった。

「はぁ…本当に大丈夫なんでしょうかね」

最後にぽつりとそう呟きアースも姿を消してしまった。

森の攻防

とある森の中に二つの足音が響く。

「待ちなさい！我らの神聖なる森を汚したその罪、アナタの命で償ってもらわ！」

声を上げたのは銀色の髪に浅黒い肌、尖った耳が特徴の美しいダークエルフだった。年齢は二十代前半のように見えるがエルフは長寿なので見た目と実年齢は一致しないのがほとんどだ。

「ギャハハハ、待てって言われて誰が待つんだよバーカ！！」

もう一人は酷く下品な喋り方をする女だった。こちらも見えた目は二十代前半のようだ。やや黒みがかった赤い髪に浅黒い肌。装備も黒みがかった赤で統一されており背中には双剣を背負っている。

「このっ……！」

ダークエルフの方が女へ向けて弓から矢を放つ。

「ギャハ、そんなチンケな弓が『黒の眷族』に効くと思ってんのかあっ……！」

そう言つて『黒の眷族』と名乗った女は素手で弓を受け止める。しかしその瞬間、弓から光が溢れる。

「なっ……！」

「エルフの使う弓がただの弓だと思っていたのかしら？この弓には森の精霊たちの力が宿っているのよ」

「エルフ風情が小賢しい真似をっ……！」

光で腕が火傷したように傷付いている女は背中から双剣を抜き構える。

「ギャハハハ、殺す！お前は綺麗に殺してやるよ。『黒の眷族』のジェアナ・ルーランの名にかけてなあっ……！」

双方から黒い炎が溢れる。その炎は禍々しい妖気を放っている。
「浄化せよ」

ダークエルフの女が黒い炎に向けて数本の弓矢を放つ。

「>黒炎円舞<」

ジェアナはその弓矢を舞うように切り落としていく。黒い炎が森の木々を燃やしてゆく。

「森がつ…！>水精霊の癒やし<！！」

ダークエルフは慌てて森へ水の精霊の加護がある癒やしの水をバラまく。

しかしそれは戦闘では決定的な隙となる。

「ギャハッ、どこ見てんだよおっ！！」

ダークエルフが周りに水をバラまいている一瞬の間に間合いを詰めたジェアナは双剣で切りかかった。

「ぐあああっ！！」

ダークエルフの女は地面に倒れる。

「ギャハハハ、さて今すぐ首と胴体を永遠にお別れさせてやるよ」

ジェアナは倒れているダークエルフに双剣を見せつけるようにゆらゆらとさせる。

そしてダークエルフの女の首を切り捨てようとしたその時、何処からともなく男の声が聞こえてきた。

「おい、ジェアナ。イレギュラーだ。ガルトの街に潜伏させていた眷属がやられた」

それを聞いてジェアナはピタリと剣を止めた。ダークエルフと剣の間はわずか数ミリ程度しかなかった。

「はあ！？能力自体はザコだが眷属を倒すにはそれなりの加護が必要なんだぜい？ガルトにそんな奴いたかよ」

「詳しくは俺も知らん。打ち破ったのはファーフード家の人間と冒険者らしい。恐らく眷属を倒したのは冒険者の方だろう。ファーフード家にそれほどの力量の者は今居ないはずだからな」

「まあな。そのためにわざわざファーフード家の長男が街を出たタイミングを狙ったんだからなあ」

ジェアナは双剣を背中に戻し、視線をダークエルフから外す。

『ああ。でその冒険者の方なんだが特徴的な奴らでな。もう街を出たらしい。行き先は恐らくアステリだろうな』

「へえー。どんな奴らなんだい。場合によっちゃあ即殺しに行くかもね」

ギャハハハと楽しそうにジェアナは笑う。下品な喋りに下品な笑い方だが決して醜くは見えない。

『四人組らしい。黒眼黒髪の男、水色の髪的一本角の亜人、フアーフード家の次女、赤眼赤髪の女だ』

一番最後のワードにジェアナがピクリと反応する。

『恐らく君の考えている通りだよ』

「そうかい。ギャハハハ、楽しくなってきたねえ！決めた。今からアステリへ向かう」

『そうか。なら俺もアステリへ向かおう。そっちで合流だ』

「はいよ」

それを最後に声は聞こえなくなり、ジェアナも姿を消した。

残ったのは辛うじて一命を取り留めたダークエルフの女だけだった。

「…アステリ……四人……黒眼……黒髪……」

そのワードだけをしっかりと頭に叩き込みダークエルフの女は気を失った。

野宿は嫌

「……………飽きた」

突然の俺の発言に三人がこちらを向く。

「飽きたって何が？」

「歩くのに飽きたんだよ。魔法でピューンと行っちゃダメなのかよ」
そう。俺たちは今ガルトの街を出発して王都アステリに向かって
いるのだ。しかし街を出てからずっとひたすらに草原の中を歩いて
るだけだ。それに俺は飽きていた。

「魔法は目立つ。無駄に使う必要もないだろう」

「それに皆さんとピクニックしてるみたいで私は楽しいですよ」

シャルビィとミリーは優等生発言をした。ティカは俺と同じように
思っていたらしく喋りこそしないが態度ですぐ分かる。

「まあしょーがない。歩くしかないか」

「うむ。シローはアステリに着いたら何かプランはあるか？」

「んー、仲間を増やしたいね」

「なにになに！？あたし専用のパシリでも探してくれんの！？」

ティカの発言は無視することにした。ミリーはティカの発言で何故
か説教モードに入ってしまった、ティカに仲間とは何ぞやと説き始め
た。

「ミリーは回復担当、ティカは魔法担当、シャルは近距離担当だ。
とすると遠距離担当の奴が一人欲しいな。あと弟子も」

「遠距離担当については私も同意見だが、弟子はどうしてだ？」

「師弟関係は男のロマンだからさ！」

シャルビィは少し引いた。やはり女には男のロマンが分からないの
だろう。シャルビィなら下手な男より男らしいから分かってくれる
と思ったんだが。

「シロー今なんか失礼な事考えてなかったか？」

ニコニコ笑顔のシャルビィ。しかし眼は笑っていないかった。

「考えてないです」

「まあいい。次はないと思え」

「……はい」

俺たちは無駄話をしながらもひたすら歩いているが一向に何も見えてこない。

「なあ近くに村とかないのか？」

「ないですよ。恐らく今日は野宿かと……」

ミリーのその言葉に俺とティカはガクツとうなだれる。ティカは大きな荷物を背負っていたのでうなだれた時にその荷物に潰されて力エルみたいな声を出していた。

「ティカちゃん、何一人でコントやってるんですか？」

「コントじゃないわよ！！見てないで助けなさいよミリー！」

「ああああ、それは大変」

「……あ！ちよつと行かないで！！し、師匠……！！」

ミリーは結局助けずにシャルビィの方へと行ってしまった。ティカは諦めて俺に助けを求めてくる。

「全く、こんな大きな荷物背負ってるからだろ……」

「いいのよ！女の子にはこれ位が普通なの……！！」

俺はティカの上に乗っている荷物を片手で持ち上げる。

「しょーがねーな。空間魔法を使って別次元で……」

そこで俺は言葉を止めた。あることを思い付いたからだ。ティカが何故か変人でも見るかのように俺を見ているが気にしない。

「寝床がないなら創ればいいのさ！」

「はあ？師匠頭腐った？」

「くくく、黙ってみている小娘」

俺はまず地面に手をつける。創造の魔法で一発で家を創ってもいいのだが、何かしらの媒体があった方が効率がいい。

「>拠点設定<」

土が盛り上がり分解され新たに構築されていく。大きな音にシャルビィとミリーは何事かとこちらを振り返っている。

「……し、師匠……これはさすがに……」

ティカがあつという間に出来上がった家を見て絶句している。

「屋敷……なのか……？」

「神殿並みですが……」

シャルビィとミリーもティカと同じく絶句している。

出来上がった家は俺の想像以上に凄まじかった。特に具体的なイメージがなかったので大きくなりすぎたのだろう。

3階建てで屋上とテラスがついている。見た目は完全に地球の家なのだが素材の方がこちらの物なのでちぐはぐに見える。広さは貴族の屋敷にあるので、それが3階建てだと考えるとかなり大きい。

「完璧だぜ。次は>次元部屋<!!」

俺の前にドアが現れる。そこに大量の>魔<を流し込み別次元との扉を固定させる。

「すごい量の>魔<ですね」

「まさに次元が違うな」

「なかなか上手い事言うわね!!」

後ろがガヤガヤしてるが気にせずに>魔<を注いでいく。しばらくすると扉が固定したので、更に次の魔法を発動させる。

「>併合<」

家の扉と別次元の扉を併合させることで家を別次元へ送る。恐らくこれで別次元の扉を開けば家の中に入れるようになったはずだ。

「よし、これで大丈夫だな。お前らも>オープン<って言えば家に入れるようにしといたから」

「いや……私は>魔<がほとんど使えないんだが」

「私も別次元の扉を開くほど魔力持っていないですよ」

「あたしは気合いでいけるわよ!!……きつと」

「大丈夫だよ。扉を開くのはカードを開くのも同じような感じだか

ら。最も扉を開けるのは俺が認めた人間だけだね」

俺の言葉は三人は呆れたような視線を送ってくる。少々やりすぎたかと思っただけにしない事にした。

ティカの荷物を家の中に放り込んで、俺たちは再び歩き出した。

家の中

結局夜になるまで歩いてからその日は俺が造った家で寝る事となった。

「>オープン<」

扉を出現させて俺たちは中へと入る。するとティカが入った瞬間に宣言する。

「あたしは一番広い部屋貰うわ!」

「はいはい。部屋は全部三階にある。一番広いのは一番奥の部屋だ」

「行ってくるわ!!」

そう言ってティカはバタバタと階段を登って行ってしまった。行動がまるで子供だな。

「お前らは部屋の希望とかあるか?」

「私はシロー様の隣の部屋が…」

「私は特にないな。部屋が貰えるだけでもありがたい」

という訳で結局、部屋は階段側から俺、ミリー、シャルビイ、ティカとなった。まだ三階にはあと何部屋か余っているので仲間が増えたらそこを使ってもらえばいい。

「他の階には何があるんだ?」

「二階には台所にリビング、客室がある。一階には風呂と修煉場。地下には倉庫と工房。三階の各部屋にはテラスとトイレがついている。屋上なんかもある」

「テラスとか屋上って…異次元なの以外とかあるんですか?」

「ああ。基本は扉を開いた場所の風景が見える。見えるだけで干渉は出来ないがな」

別次元といっても別の世界に行っている訳ではない。同じ世界の別の次元にいるのだ。分かりやすく言えば幽霊みたいな感じだ。こちらから干渉出来ない代わりにあちらからも干渉出来ない。

「へえ、凄いですね」

「どうも。お前らも寝る前に風呂とか入ってきたらどうだ？」

「そうだな。行ってくる」

「一緒に洗いつこしましうねシャル」

「え、いや、それは……ちょっと……」

「いいからいいから」

と男にとってはムフフな会話をしながら二人は風呂場へと向かって行った。ここで誘惑に負けたら俺はシャルに惨殺されるだろうから覗いたりはしないが。

俺は三階へと登り、自分の部屋に入る。すぐにベッドに飛び込むようにして倒れ込む。すぐに睡魔は訪れた。

「シロー様、晩御飯の用意が出来ました」

ドアがノックされ外からミリーの声が聞こえてくる。俺は眠りから引き戻され、気だるさを残したまま立ち上がる。

「ああ、今行く」

扉を開けて、リビングへ向かう。隣にはミリーがいる。

「風呂どうだった？」

「はい！すつごく気持ち良かったです！私、水竜なんで水浴びとかお風呂大好きなんですよ」

嬉しそうに語るミリーにつられてついつい俺も嬉しくなる。リビングに入り、席につくとそこにはもう全員揃っていた。

「ティカも風呂入ったのか」

「ええ、師匠も早くお風呂に入った方がいいわよ」

「いや俺にはこれがある。＞浄化＜」

一瞬、全身が白くなり自らに＞浄化＜を掛ける。これは汚れなら何でも浄化してくれる便利な神技だ。風呂いらずの優れもの。

「師匠……それは……」

「ちょっとアレですねえ」

「うむ、アレだな」

三人は俺をジト目で見ながら口を揃えて言う。

「『能力の無駄使い』」

何も言い返せなかった。そもそも男は女に口論では勝てないように出来てるしな。事実、姉貴たちにも俺は口論で一回も勝てなかった。弟には勝てたが。

「んじゃ、いただきます」

俺は手をあわせて言う。するとティカはこちらを見ながら聞いてきた。

「そのいただきますって何？」

「これは飯を食う前に飯を作ってくれた人や食材に感謝を示す的な何かだよ」

「的な何かっててきとーね。まあいいわ、いただきます！」

ティカが俺を真似するように言った。するとそれにシャルビィとミリーが続いた。

「『いただきます』」

そして四人で飯を食ってその日は幕を閉じた。

特訓

「つーわけで特訓しようと思う」

翌日、朝ご飯を食べる為にリビングに集まった四人にそう告げた。

「はぁ…特訓ですか？」

「ああ、四人それぞれにメニューを考えてある。王都に着いてこの前の影みたいなのが現れないとは限らないからな」

「…そう言われちゃ、嫌でも断れないじゃない」

ティカが渋々頷く。ティカとしては影に取り憑かれた手前嫌とは言えないのだろう。まあ嫌と言ってもやらせるが。

「私はもちろん構わない」

「私もです」

俺は一回三人を見回す。恐らくこれからの戦いは厳しいものとなるだろう。だからこそ仲間には傷付いてもらいたくない。

「ならまずティカ、お前は>雷矢くを覚えてもらおう」

俺のその台詞にティカは怪訝そうな顔をする。

「>雷矢くなんて初級魔法とづくに覚えてるわよ」

「いーや、とにかくお前には>雷矢くを覚えてもらう。詳細は後で話す」

ティカは不満気な顔をしていたがあまりティカばかりに構ってもいられないので次はミリーの方を見る。

「お前にはソイツを鍛えてもらう」

そう言つて俺はミリーの頭に生えている一方角を指差した。

「角…ですか？」

「ああ。んで最後にシャルか。シャルは魔法使えるか？」

「いや使えん」

「なら>魔くを纏うことは出来るか？」

「ああ、それくらいならな。＞武くを纏うのと大差ないからな」

「ならお前にはソイツを鍛えてもらおう」

俺はシャルの持っている細剣を指差してニヤリと笑った。これで三人の特訓内容が決まった。後は王都に着くまでにどれだけモノにさせられるかだ。

それから一週間してようやく王都アステリに着いた。特訓のせいで一日に進む速度が遅くなり到着まで思っていたより時間がかかってしまった。

「よ、ようやく着いたわ！もう特訓はいやあ……」

「うふふ、シロー様街ですよ。なので特訓は止めてデートをしましょう」

「ようやく着いたか。正直特訓はもう勘弁して欲しい」

皆、特訓で頭おかしくなったのかな。ティカとシャルビィは同じ事言ってるし。とりあえずはギルドに行くとするか。

「おい、呆けてないでギルド行くぞ」

トリップ中の三人を引き摺って歩く。しばらくすると三人ともトリップから帰ってきた。

「まずは俺達はギルドランクを上げよう。金も必要だし」

「お金ならあたしが沢山持つてるわよ」

ティカは貴族なので金銭感覚が俺達より鈍いのだろう。

「それは貯めておけ。自分達で稼げるならそれに越した事はないからな」

「ふん」

「依頼はチームで請けるんですか？」

ミリーが質問をしてくる。それについては俺よりもシャルビィの方が詳しいだろう。

「シャルどれが一番効率がいいかな」

「そうだな…最初はソロである程度ランクが上げてそれからチームで行動するのが一番だと思うが」

「という方向で皆さんよろしく」

俺は最後においしい所だけでもらって三人をまとめた。話しているうちにギルドに着いていたので俺が先頭で扉へ入る。

中へ入ると奥から複数の視線を感じた。多分ここでは新顔だからだろう。俺たちは気にせずに依頼板の所へと向かう。すると奥から一人の男がやって来た。

「おいおい、兄ちゃんよ。三人も美人連れてるとは随分生意気だなあ。ギルドは遊びじゃないんだぜ？」

その男の台詞に同調するように奥にいた奴らも笑う。かなり下品な笑い方だ。

「ほらどうしたよ？何か言い返してみろよ。怖くてまともに喋る事も出来ねーのかよ」

シャルビイが動かない俺に痺れを切らしたようで男に文句を言おうとする。しかしそれを俺は眼で止め、男の方を見る。

「馬鹿すぎて喋る氣も失せたただけだ」

「ほお、態度も随分と生意気だなあ。知ってるか？ギルドは強い奴が正義だ。だから悪いことは言わねー。女共を渡せば見逃してやる」

「なら俺の方が強いから俺が正義だな。それとこいつらを物扱いするな。俺の大事な仲間だ」

俺の言葉は予想以上に男の氣に障ったらしく、いきなり男が殴りかかってきた。男の拳には>武くが流れている。

奥の奴らは死んだな、あのガキ共と思ったが結果は違った。俺は>武くを纏った男の拳を素手で受け止め、不敵に笑う。

「うぜー」

そう言つて一瞬で男の背後に回り込み、その首に手刀を叩き込んだ。男は呆氣なく氣絶して倒れ込む。

こうしていきなりケンカで俺たちはアステリでのギルドデビューを果たした。

狙い

石で出来た頑丈な扉が開く。暗い室内に光が入り込み、中を照らす。扉を開けた人物は逆光によりシルエットしか見えない。だがどうやら女性であるようだ。

彼女はカツカツと階段を下っていく。中は全て石で出来ているので足音がやけに反響する。階段を下まで降ると再び目の前に扉が現れる。その扉を前に彼女は口を開く。

「『黒の眷族』黒炎、ジェアナ・ルーランだ」

するとギィツと耳障りな音と共に重苦しい扉が開く。

「ギャハハ、もう全員揃ってるのかい。せっかちな奴らだね」

彼女は笑いながら中へ入り周りにいる人々を見渡す。

まずジェアナの目に入ったのは緑色の髪をオールバックにして眼鏡をかけている優男。スーツに身を包み、隙のない姿勢を見せている。彼はジェアナの視線に気付くと短く告げる。

「座れ」

「あいよ、黒風さん」

ジェアナは特に抵抗する様子もなく言われた通り席に座る。するとジェアナの反対側にいる人物から声がかかる。

「よお、嬢ちゃん。久々だなあ」

声をかけたのはいかにも傭兵崩れといった厳つい男だ。恐らく四十歳は越えているだろう。彼は熊の獣人で好戦的な男だ。

「嬢ちゃんじゃねえよ、黒雷さんよお」

そしてジェアナは未だに発言をしない他の二人を見る。

一人は十歳位の子供で頭から二本の角がちょこんと申し訳程度に生えている。見た目の通り鬼人の子供だ。灰色の髪を揺らしながら気持ち良さそうに寝ている。起きると五月蠅いので寝たまま放置されているのだろう。

もう一人は冷たい双眸で無表情の女だ。白く艶やかな髪を垂らし、まさに氷の美女と言っても過言ではない位だ。しかし顔面にはしる一本の刀傷がその美貌を台無しにしていた。

「さて、お前らに集まって貰ったのは俺たちのこれからについての話し合いをするためだ」

眼鏡の優男、黒風が全員に問いかける。彼が実質的なリーダーであり参謀だ。

「私は強い男と戦えればそれでいい」

まず最初に発言したのは傷の女だった。次にいつの間にか起きたのか鬼の子供が元気に手を挙げながら発言する。

「はいはい！僕は王女さまのおっぱい揉みたいっ」

その発言に獣人の男、黒雷はガハハハと豪快に笑う。そんな黒雷にジェアナは呆れたような視線を向ける。

「そうだな、王女もいいがまず俺に提案があるんだ」

「ギャハ、提案があるならまどろっこしい事言わずに最初から言えよ」

「あれは場の雰囲気を整えるためだ。とりあえず俺からの提案はコレだ」

そう言つて黒風は懐から四枚の写真（厳密には魔法で風景を写した物）を取り出す。

「こいつらを始末する。お前らも知ってると思うが先日黒雷がガルトに放った眷属が消された。その眷属を殺つたのがこいつらだ」

「ほう、面白そうじゃねえか。俺は黒風に賛成だぜ」

黒風の提案に真っ先に黒雷が賛成する。続いてジェアナと傷の女が賛成し、最後に渋々鬼の子供が賛成した。

「さて問題はどいつがどいつを担当するかだが：希望はあるか？」

黒風の問いに真っ先に答えたのは意外にも傷の女だった。傷の女は一枚の写真を指差す。

「男をもらっ」

「なら黒氷は黒眼黒髪を担当で」

傷の女、黒氷はニヤリと笑う。写真の中にいるのは黒眼黒髪以外全員女だったので男を殺したい黒氷は誰かに獲物を取られる前に指名したのだ。

「あたしは赤い髪の女をもらうよ」

「了解、黒炎は赤い髪の女な。んでお前らは？」

すると次は鬼の子供がまた手を挙げながら言う。

「はいはい！僕はこいつ！一番弱そうだもんねー」

「なるほど。黒土はファーフードの次女を選んだか。なら黒雷、お前は亜人の女を担当しろ」

鬼の子供、黒土はふひひひと悪戯をする前の子供のように無邪気に笑っている。

「あいよ。んでお前さんはどうすんだ黒風」

「俺はとりあえず情報収集だ。んじゃ、そういう事で今日は解散！」
そう合図を最後に五人はバラバラにその場から離れていった。

ダークエルフ

アステリのギルドで華々しいデビューをした俺たちは現在バラバラに行動中だ。シャルビイは護衛任務でバロックまで行っており、ティカはソロでも狩れる魔物たちを狩っている。ミリーは雑用系の依頼で子ども達の面倒を見ている。

そして俺はというと一人退屈している。転移魔法で遠くの依頼でもすぐに片付ける事が出来たのであつという間にランクが上がったのだ。もっともギルド職員は驚いたような顔をしていたが。

「お金も貯まったし、武器でも見に行くか」

ファンタジーなのに自身の武器を持っていない事に気付いた俺は武器屋に行く事にした。武器なら自分の力で創り出す事が出来るんだが、やはり男としては伝説の武器やら魔剣やらに惹かれるものがあるからだ。まあそうそう街の武器屋に魔剣があるとは思えないが。

王都の見物も兼ねてふらふらと色々な所を見回りながら遠回りに武器屋を目指す。さすが王都というだけあつて大通りはかなり賑わっている。それでもやはり俺の黒眼黒髪は珍しいようで行き交う人々の視線が多数感じられる。

しばらく歩くと武器屋に着いたので中に入ってみる。中は思ったより広く綺麗で洒落た感じだ。武器屋に洒落た感じはいらんと思うが。

「いらつしゃい。何かお探しかい？」

店主と思わしき女性が葉巻を加えながら声を掛けて来た。見た目は若い。容姿は格好いいお姉さんといった感じだ。

「普通に武器を探しに」

「そうかい。得意な得物は？」

「特にない。変わった武器とか伝説の武器が欲しい」

俺がそう告げると店主の女性は大笑いをした。葉巻もすっかり落と

してしまっている。店主はそれを足で踏み、火を消す。

「そうだね。変わった武器というよりよく分からない武器ならあるよ」

「どんな武器なんだ？」

「それがねえ、エネルギーを充填する回路はついているのに、魔くでも、武くでも反応しない武器なんだよね」

「故障とかじゃなく？」

「いやそれはないよ。何なら見てみるかい？」

「ああ」

そう言っていると店主は店の奥へと消えて行った。この時点で武器についてのある程度の予想は出来ている。すると直ぐに店主が小さな木箱を抱えて戻って来た。

「これだよホラ」

店主が木箱のフタを開けるとそこには黒い光沢のある球体が収まっていた。やはり思った通りだ。

「なるほど。いくらだ？」

「おや？買うのかい。だったら30万tptだよ」

「はいよ」

カードから言われた額を引き出し渡す。店主は扱いに困っていたモノが売れたので上機嫌だ。俺はそれに構わずささと店から出て行った。

俺はとりあえず球体をポケットを扉にして家の中に放り込んでおく。そのまま隠れるように路地裏へと入って行く。

すると後ろから一本の弓矢が飛んで来た。俺はそれを振り返りもせずを受け止めた。直後、弓矢が急激な光を放つが特にダメージは無かった。

「何の用だ？」

振り返り俺がそう呼びかけると角からフードを被った人物が出て来た。手には弓を持っている。俺を狙った人物に間違いない。

「いつから気付いていたの？」

聞こえて来たのは意外にも女性の声だった。

「宿屋を出てからだ」

「つまり最初からってことね」

はぁ、と溜め息を吐いてから女性はフードを取る。

まず目に入っただのは尖った耳と褐色の肌。そして銀色の髪。ダークエルフだ。かなりの美女だ。

「で、もう一度聞く。何のようだ？」

しばらく彼女は考えた後、口を開いた。

「助けて欲しいの」

予想外の台詞に思わず顔をしかめる。いきなり襲ってきておいて現れた途端に助けてくれなんてアホらしすぎる。だが何故か話だけでも聞いてみるべきだと直感が告げている。

「いきなり襲ったことについては謝るわ。ただ貴方の実力が知りたかったの。貴方がアイツらに対抗できるかどうか」

「アイツら？」

「ええ、私たちダークエルフの里に黒い火を放とうとした女とその仲間よ」

俺はそのダークエルフから詳しい話を聞いてみることにした。

話

詳しい話はこうだ。

先日、ダークエルフの村が黒い炎と黒い影に襲われたらしい。そこで犯人を追いつけたネミリア（彼女の名前）は返り討ちにされるも犯人たちの会話を聞いて俺たちに辿り着いたらしい。

「あの黒い影には普通の魔法は効きません。黒い炎の方は通常の炎よりも数倍の威力があります。犯人も魔法耐性はかなり高いようですが効かないという訳ではないみたいです。例外で精霊魔法には弱いみたいです」

「なるほど。だが犯人を捕まえるなら部外者の俺たちよりエルフ同士で組んだ方が良くないか？」

するとネミリアは悲しさと悔しさの入り混じったような表情をする。「ダークエルフの里は襲撃のせいでは壊滅状態で……こちらに割ける人員がいらないんです」

「……………わかった。協力しよう」

俺の目的は元々、この世界の破滅の阻止だ。怪しい動きをしている奴らがいるならその情報を少しでも知りたい。

それにダークエルフの一族に貸しを作っておくのも悪くない。何かの時に助けて貰えるかもしれないからな。

「本当！？ありがとうシロー君！」

ネミリアは顔をほころばせた。年上のお姉さんって感じの人がこんな無邪気に喜ぶのを見るとドキッとする。

「ああ、それで村を襲ったヤツの特徴は？」

「確か……自分の事を『黒の眷族』って呼んでたわ。名前はジェアナ……くすんだ赤い髪に淀んだ赤い眼、浅黒い肌に下品な喋り方をする女だったわ」

「結構分かりやすそうだな見た目だな。一応、他のメンバーにも連絡

しておくか」

俺はそう言つてチームのメンバー全員にネミリアから聞いた情報を書いて>光字<で送つた。それからチラリとネミリアの後方にある建物へ視線を向ける。

「んじゃ、まず協力するにあたつてお互いの実力を把握しておこう。とりあえず近くの草原に行こう」

「ええ、わかつたわ」

二人で路地裏から出ると街の外へ向かつて歩き出す。

「ネミリアの得意な属性は？」

「風よ。水も使えるけどあくまで使えるってレベル。シロー君は？正直、シロー君は止めて欲しいが、どうせ言つても聞かないだろう。何となくそう思つたので特に何も言わない事にした。

「大体の属性は使える。まあ器用貧乏つて奴だな」

「へー、凄いわね。それに見た所、前衛もなかなか出来そうだしね」

「分かるのか？」

「多少はね」

たわいもないお喋りをしながら街を出る。目の前はすでに草原なのだがもう少し先へ行く事にする。

「>先駆車<」

久しぶりにあの真つ黒なバイクを出す。隣でネミリアが息を呑むのが分かる。俺はそつとネミリアの耳に口を近づける。

「何者かにつけられてる。少し街から離れよう」

ネミリアが驚きを露わにする。俺は先にバイクに跨り、ネミリアに後ろに乗るように促す。ネミリアはやや躊躇いながらも俺の後ろに乗った。バイクを発進し、素早く街から離れる。

「す、凄いわねコレ…」

「まあな」

互いにより喋る事も無く、心地良い風を浴びながら草原を進んで行く。しばらく進んで街が見えなくなる位まで来るとバイクを止めた。

「とりあえずネミリアは俺の作る結界の中にいてくれ」

「え…でも…」

「少なくとも敵はネミリアに気付かれないで尾行することの出来る人物だ。勝てないとは言わないが分が悪いだろう。それに俺たちは会ったばかりだから連携なんて取れないしな」

「…わかったわ。なら今回はシロー君の実力をを見せて貰うって事で」
「ああ。んじゃ>神域<」

俺はネミリアが納得したのを見て結界をはる。これでネミリアに関しては安心だ。

「さてと…出て来いよ」

すると前方に黒い霧のような物が現れ収束していく。やがてそこから一人の人物が現れた。

氷の美女。現れたのはそんな感じの女性だった。白い髪に、灰色に近い水色の瞳。冷たい双眸でこちらを無表情に見ている。しかし顔を横切るようにに一本の刀傷がその美貌を台無しにしていた。傷物の人形といったイメージだ。

「『黒の眷族』レスカー・レインド。コードネーム黒氷。対象の男を抹殺する」

そして戦闘の火蓋が切って落とされた。

遭遇戦（ミリーの場合1）（前書き）

これから少しずつ一話一話の文字数を上げていくつもりです（笑）

気付いたら昔の倍になってたよ作戦です、はい

遭遇戦（ミリーの場合1）

四郎が黒氷レスカー・レインドと遭遇する僅か前、ミリー・サウノーズンは王都の外にいた。

『なんかヤバイ奴らが俺らを狙ってるらしい。この前のガルトに影を送った奴らだ。お前ら気をつける』

四郎から送られてきた>光字<を読んだミリーは視線を上げる。

「という事らしいですね。黒雷さん」

ミリーは自身の目の前にいる傭兵崩れの男、黒雷ジェンガ・カサールドを睨み付けた。

「ガハハハ、事情が分かつてるなら遠慮なく殺させてもらうぜ亜人のお嬢ちゃん」

ジェンガは豪快に笑いながら懷から酒を取り出し一気飲みする。

「残念ですが貴男に殺される程私は弱くありません」

発端は今日の昼頃。雑用系の依頼を終え昼食を食べようとしていた時だった。不穏な気配を感じたミリーは尾行している事に気付いたことを悟られぬように王都の外まで尾行者を誘導したのだ。

元々亜人や竜、魔物、魔族などは人間に比べて気配に敏感なため尾行そのものが困難なのだ。

「そうかい。なら精々俺も楽しませてくれやつ！」

ジェンガが身体に黒い雷を纏い駆けて来る。その速度は異常だ。ミリーは突進してくるジェンガを右へ避けてかわす。

「>水千花<！」

ミリーの周りに水で出来た数百の花が浮かぶ。ミリーはジェンガの攻撃をかわしながらそれを当てていく。

「こんなもん痛くも痒くもないわいっ！」

正に剛力とでも呼べる勢いで水の花を手刀で斬っていくジェンガ。

その様子にミリーはほくそ笑む。

「>氷結床<」

するとミリーの足元が凍っていき、すぐにジェンガの足元まで到達する。ジェンガは今、水の花を斬っていたせいで全身ずぶ濡れだ。

「ぬぐっ…！」

瞬間、ジェンガの全身が氷に包まれた。

「呆気ないですね」

ミリーが氷を砕こうとしたその時、凍っているはずのジェンガから大量の魔力が漏れる。しかもかなり邪悪な。

「…これはっ！？」

ミリーは慌てて後方へと下がる。氷にヒビが入り、内側から黒い雷が溢れて来る。ミリーは本能的に悟っていた。

これはヤバいと。

氷が粉々に砕け、中からジェンガが出てくる。

「ガハハハハハハハハハハ！！！！殴る潰す殺す」

ジェンガはどこから取り出したのか、いつの間にか右手に大きなハンマーを持っている。そのハンマーからは黒い雷が放電している。

「>ダイナミックウェーブ<！！！」

ジェンガがハンマーを振り下ろすと大きな地震と共に大地に黒い雷がはしる。

「ああああっ！！！」

ジェンガから離れていたミリーも例外ではなく、黒い雷に感電する。

「まだまだあっ！！！」

いつの間にか距離を詰めていたジェンガはハンマーを横に振り抜く。それはミリーの脇に直撃し、ミリーは数十メートル近く吹っ飛んでいく。

「くうっ…」

ハンマー自体の打撃は竜であるミリーには大したダメージにはならない。問題は黒い雷の方だ。普通の雷属性の攻撃よりも数倍、いや数十倍の威力がある。

「>水竜の纏く」

今この場でミリーは竜化する事は出来ない。四郎との戦いの時は理性が吹っ飛んでいたので竜化してしまったが、竜化とはそんなに簡単にするものではない。竜化するだけで大地や空気などに多大な影響を与えたりと負の要素が多いからだ。

そこでこの>水竜の纏くの出番だ。先ほどジェンガが身体に雷を纏っていたのと同じような魔法だ。唯一違うのは纏っている水の形が人型ではなく竜型であるということだ。水で作った竜の形の鎧だ。
「はあっ!!」

ミリーはジェンガにブレスを吐く。ジェンガはそれをハンマーで叩くように防ぐ。その隙にミリーの尾がジェンガへと向かう。ジェンガは左手から黒い雷を撒き散らし尾を吹き飛ばす。しかし元々は水なのでミリーには何のダメージもない上にすぐに回復する。

その様子を見てジェンガは一旦後方へと下がる。

「亜人じゃなくて竜だったとはな。面白い!!」

ジェンガの身体から再び魔力が溢れる。その魔力はあまりにも邪悪だった。まるで魔力よりも深い魔であるかのような。

「>黒鳴く!!」

黒い雷がミリーの>水竜の纏くを消し去る。

「なっ……!!?」

黒い雷はそのまま威力が落ちる事なくミリーへ直撃する。ミリーは成す術もなく喰らってしまふ。悲鳴と共に地面に倒れる。

「楽しかったぜ、お嬢ちゃん」

ジェンガはそう言ってミリーの前でハンマーを振り上げる。既にハンマーは黒い雷を纏っていない。

そしてジェンガはミリーへ向けてハンマーを振り下ろした。

「……?」

何故かハンマーはミリーを叩き潰す事なく横に逸れた。ジェンガはもう一度ハンマーを振り下ろすが何故かまた横へ逸れてしまった。

「…無駄ですよ」

その声を聞いてジェンガは慌てて後ろへ下がる。

ミリーはひどくゆっくりとした動作で立ち上がる。ミリーにとってこの状態は不覚以外の何物でもなかった。

「何をした。お嬢ちゃん」

出し惜しみをしたからだ。ミリーは自分の力を過信しすぎていたのだ。実際それは強ち間違いとは言えない。本来の竜の状態では獣人なんて相手ではない。

だが今、竜にはなれない。それが全てだ。

「本当ならまだ使いたく無かったんですが仕方ありません」

ミリーから急に溢れ出した威圧感にジェンガは獣人の本能から危険を感じ取った。ジェンガは再びハンマーに黒い雷を纏わせ臨戦態勢に入る。

「見せてあげましょう。シロー様との愛の結晶を」

遭遇戦（シャルビイの場合1＋ティカ）

これもまた四郎が黒氷レスカー・レインドと対峙するその僅か前、ティカ・ファーフードは森の中にいた。討伐依頼でミミミズという巨大な木のミミズを討伐し終えた帰り道だった。四郎からの「光字」には気付かずにのんびりと帰路についていた。

森林の隙間から漏れる光が心地良く、ティカは睡魔にかられる。森に自生している薬草などをチマチマ採りながらふらふらと歩いていく。

それからしばらく歩いていると木の根元に倒れている男の子を発見した。頭からちょこんと可愛らしい角が生えている。

「鬼かしら？」

ティカはしゃがんで倒れている男の子の頬をつんつんする。しかし何も反応はない。

「まさか行き倒れ！？ヤバいじゃない！助けないと！」

ティカはとりあえず男の子の上半身を起こし、木に寄りかからせる。「よく分からないけどこういう時は雷を浴びせるのが一番よねっ。ショック療法つてやつかしら」

明らかに間違っている回答だが周りにツッコむ人間がいないためティカは止まらない。鼻歌を歌いながら指先に僅かな電気を集めるティカ。

「それじゃ、いくわよ」

ポイツと指先の電撃を少年に浴びせたティカ。少年の身体がびくんびくんと痙攣した。

「ひ、ひえっ……！」

自分でやった事に対してかなりビビっているティカ。口を大きく開けて慌てている。すると少年のまぶたがゆっくりと開く。

「う……ここは……」

「ほつ……さすがあたしね。貴方、大丈夫かしら？」

少年の瞳がティカを捉え徐々に焦点が合っていく。

「……………うげっ！しまった！！」

少年は慌てて飛ぶようにしてティカと距離をとる。そんな少年の様子にティカは訝しげな眼を向ける。

「お、おおお前！どうして僕を助けたんだ！！」

少年はビシッとティカを指差す。

「そりゃ行き倒れがいたら助けるでしょ、普通」

「そ、そうなのか。だけど僕はお前の敵だぞ！」

「敵……？」

「そうさっ。僕はお前がミミミズと戦って弱っている所を後ろからボカーンとしてやるつもりだったのさ！……途中で見失っちゃったけど……」

早口でティカに並ぶ位のマシンガントークで話す少年。ティカはとりあえず大人しく少年の話を聞いておく事にした。

「でも怖くて震えた訳じゃないもんね！ただ木の近くで武者震いしてただけだもんね！！」

身ぶり手ぶりで話す少年。

「だから今日はこの位で勘弁してやるもんね！」

そう言って少年はティカに背を向けてバタバタと走って行く。しかし途中でピタリと止まりこちらを振り返る。

「た、助けてくれてありがとう……」

それだけ言って再び少年は走り去ってしまった。ティカはポカンとしてるだけで話にはほとんどついていく事が出来なかった。ただ唯一分かった事は……

「そっちは森の奥よ……？」

その夜、森に少年の叫びが木霊したという。

シャルビィ・ルーランは護衛任務を終え、娯楽都市ともおしゃれの街とも呼ばれるバロックにいた。珍しいそうなお菓子を買って家の中へ入れていく。お金も大分貯まった。

「ふふん」

ご機嫌なシャルビィは鼻歌を歌いながら街中を歩いて行く。時折、周りの人から邪気のある視線を感じるがもう慣れた。それよりもシャルビィにとつては男たちからのいやらしい視線の方が苦痛だった。

「全く…男というのは…」

そう呟いた時だった。後ろの方から複数の悲鳴が上がった。反射的に振り返る。

するとそこには黒く燃え上がる炎があつた。

「な、何が…!?」

シャルビィは警戒しながらも細剣を構える。一瞬の油断が命取りになることをシャルビィは知っている。視線を周りにはしらせる。

「ギャハハ！なーにビツてんだよシャル」

炎の中心にいたのはシャルビィにとつて馴染み深い存在だった。

「姉…さん…？」

シャルビィが昔、姉としたっていた人物。正確には従姉だが。そのシャルビィの声が疑問形だったのは再会が久々だったからだけではない。あまりにもシャルビィが知っている姉と今目の前にいる姉はかけ離れていたからだ。

赤く輝いていた髪は今は黒みを帯び、瞳も淀んでいる。その口調もシャルビィが知っている口調とは全くの別物だった。そしてなによりシャルビィが知っている姉はこんな事をする人物ではなかった。

「ギャハ、あんたはまだあたしを姉と呼ぶんだね」

「姉さん…どうして…？」

シャルビィのその台詞には色々な意味が込められていた。どうしてそんなに変わったのか。どうしてここにいいのか。どうしてこんな

事をしたのか。

そんなシャルビィの想いに姉、ジェアナ・ルーランは告げる。

「どうしてって、あんたを殺すためだよっ！」

ジェアナの周りに再び黒い炎が吹き荒れる。

「ギャハハ、あたしは『黒の眷族』黒炎のジェアナ・ルーラン様だ

！あんたの命、あたしが燃やすよ！！」

そうしてジェアナとシャルビィの戦いが始まった。

遭遇戦（シャルビイの場合2）

吹き荒れる黒い炎をただ芸もなくかわすだけのシャルビイ。心中には戸惑いがひしめいており、反撃をしようという考え自体浮かばない。

「どうしたシャル、逃げてばっかじゃ勝てないぜえ？」

ギヤハハと笑いながら黒い炎を無差別に放ち続けるジェアナ。その瞳には狂気と歓喜に満ちている。今まで自分を姉と慕い続けていた妹を追い込んでいるという快感。既にジェアナは人として壊れていた。

「姉さん…やめてくれ！私は戦いたくない！」

「ならただ死ね。邪神器グリードに斬り奪われてなあ！」

ジェアナは双剣を構え、黒くて邪悪な魔力を双剣へ注ぐ。すると双剣が黒い影に覆われていく。ジェアナは漆黒の双剣を振るう。

「くっ…」

シャルビイは辛うじてその刃をかわす。シャルビイを捉えられなかった刃は後ろの壁に突き刺さる。その瞬間、壁が灰になった。

「なっ！？」

「ギヤハハ、驚いたかい！？この剣は邪神器つてなあ、あたし達の>邪くを吸って特殊な能力を発現させることが出来るのさ。この剣の能力は触れたモノを灰に還す能力さ」

「……………」

ここに来てようやくシャルビイの思考が正常に戻った。

目の前にある危険は確実に自分を殺す。いやそれだけではなく、この街すらも殺すだろう。

その事に気付いた以上シャルビイは甘えてはいられなかった。自らの身体に>武くを纏う。そして対象を静かに観察する。

「ギャハハ、よーやつとやる気になったかい」

「…ああ、私は姉さんを止める！」

シャルビィは足に>武<を集中させて瞬発力を高め、炎の間を高速移動する。肉体にかかる負荷は大きい。

一気にジェアナから離れてそのまま街の外へ向け全力で走る。ジェアナはシャルビィが街を壊されたくなくて移動した事に気付いていたが、あえて気付いていないふりをシャルビィの後を追った。

本来、ジェアナは>魔<を専門にしている>武<を使う事は出来ない。しかし『黒の眷族』として手に入れた力がジェアナの身体能力を底上げしていた。そのためシャルビィに追い付く事は出来なくても姿を見失わずに追うこと位は容易に出来た。

飛び越えるように街門を越え、草原に二つの影が降り立つ。

「ギャハ、鬼ごっこは終わりがいい？」

「ああ…そうだ」

シャルビィとジェアナはお互い睨み合う。始めにシャルビィが動く。フェイントを交えた動作で幾重もの形の剣筋を作る。ジェアナはこれを双剣で防ぎつつ、背後から黒い炎を放出し牽制する。

シャルビィは密度を更に増やした>武<を細剣に纏わせることで黒い炎を切り裂く。その隙に脇から双剣が煌めく。シャルビィはそれを何とかかわす。一撃でもかすったら御陀仏だ。自然とシャルビィの意識は双剣へ向く。

「>舞黒炎<」

ジェアナが双剣と黒い炎と共に舞う。左の剣が上がれば右の剣は下がり、黒い炎は優雅に踊り狂う。黒き雅を携えた舞の前にシャルビィは剣をかわすだけで精一杯だ。黒い炎が衣服をチリチリと燃やす。シャルビィは後方へ下がり距離を空ける。すると黒い炎の蛇が轟音を撒き散らしながらシャルビィに迫る。シャルビィは蛇の大きく開けられた口を裂くように細剣で切り裂く。

「なかなかやるねえ！>舞黒炎<だけじゃなく>黒炎蛇<までいなされるなんてね！でも次で最後さ！邪神器>グリード<！！！」

双剣、邪神器>グリード<に大量の>邪<を注ぎ、刃に黒い炎を纏わせる。その黒い炎は蛇のようにうねり狂っている。まるで二本の炎の鞭である。

「…ならば私も本気を出そう…」

全力の相手には全力を出すのが礼儀だとばかりにシャルビィは力を集中させる。

「シロー感謝しよう。私にコレを教えてくれたことを…」

未だに未完成ながらも特訓により一部だけ使えるようになった力を解放させる。

「>武装化<」

これは四郎の使う>武神化<の劣化版。あるいは限定版。全身に纏っている>武<の上に>魔<を重ねる>武神化<に対し、>武装化<は腕と武器に纏わせた>武<の上に>魔<を重ねる技。

シャルビィの白い細剣が赤く染まる。腕にはいつの間にか深紅の装甲がついている。

「いくぞ」

シャルビィが目にも見えない速度で細剣を振るう。すると細剣がジエアナを貫かんとして伸びる。ジエアナはとつさに炎の鞭で伸びてきた細剣を灰に還す。シャルビィは細剣が全て灰に還る前に先端だけを切り落とす。

ジエアナが二本の鞭を器用に振るう。交わるように迫る鞭の軌道にシャルビィは細剣の焦点を合わせる。すると鞭の軌道上に赤い刃が現れ鞭を迎撃する。

赤い刃が灰に還されている間に、炎の鞭を潜るように姿勢を低くしてジエアナに迫る。ジエアナの目前で細剣を伸ばす。

「ちっ…！」

ジエアナは首だけの動きで剣をかわすが首が僅かに斬られる。首筋に血の玉が浮かぶ。それに気付いたジエアナは笑みを浮かべる。

「いいねえ、最高じゃん…！」

シャルビィの背後に戻って来た鞭が迫る。それを左腕を後ろに出す

事により、細剣の軌道上から赤い刃を幾重にも出現させる。

シャルビィは刃と鞭の衝突に合わせ、ジェアナの脇を転がるように抜ける。一気にジェアナの背後に回ったシャルビィは細剣を振るい、赤い刃を飛ばす。

「ぐあっ……!!」

振り返るのが僅かに遅れたジェアナは背中にもともに赤い刃を浴びる。大量に出血しジェアナは地面に倒れる。

「私の勝ちだ、姉さん」

シャルビィは目を瞑りそう宣言した。

遭遇戦（ミリーの場合2）

「見せてあげましょう。シロー様との愛の結晶を」

敵かな雰囲気を醸し出し宣言するミリー。もしこの場にティカがいたら「愛の結晶じゃないでしょ！！」とツツコミを入れていただろう。

「ガハハ、最高だお嬢ちゃん！」

ジェンガはハンマーを振り上げる。その動作は荒々しく自らの力を貫かんとしている者の動きだ。一方、ミリーは両手を広げる。その動作は流れるように美しく、瞳には慈愛が浮かんでいた。

「唸りな！邪神器>狼く！！」

ジェンガは黒い魔力>邪くを邪神器に注ぎ込み飛び上がる。邪神器であるハンマーを自分より下に置き、決るように地面に叩き付ける。轟音と共に大地がひび割れ隆起する。その激しい大地のうねりがミリーが呑み込む。ジェンガは地面に足を下ろし、ミリーが呑み込まれた場所を凝視した。その瞳には驚愕が浮かんでいた。

「無傷…だと…？」

ミリーは隆起した大地の隙間を縫うようにして優雅に出て来た。その身体には傷一つない。ミリーは口元に笑みを浮かべる。四郎たちの前で浮かべる笑みとは全く違う妖艶な笑みを。

「>流心・欄外く。私は水竜の一族です。水竜は自らが流れの中心であるのを示すために角が生えています。私の使った魔法はその角を使ったものです。まあ簡単に言えば流れを操ったということです」

「おいおい、お嬢ちゃん。そんな簡単にネタばらししていいのかい？」

ジェンガが意地悪そうな瞳をミリーへ向ける。

「構いません。バレた所で貴方が私に勝てないのは変わりないです

から」

「でもその魔法は能動的には使えない、だろう？」

ジェンガはガラガラと喉を震わせて笑う。ミリーも愛想笑いをする。正直、二人とも気味が悪かった。

「そうですね？ですが問題はありません。攻撃しなければ私を倒す事は出来ないんですから」

その言葉を皮切りに二人は戦闘を再開する。獣人の特性を最大限生かして高速で移動するジェンガ。風を切る音が響く。それに対しミリーは自ら動こうとはしない。ただ周りに視線を這わせてただ観察する。

ジェンガがミリーの右後方から鋭い蹴りを放ってくる。空中で足場がないのにその威力は異常だ。しかしミリーは>流心・欄外<でその流れを排除する。蹴りが外れるのを予想していたジェンガは自らの身体の後ろに隠していた邪神器>狼<を振り抜く。>邪<を取り込んだハンマー黒い雷を放電する。

「>流心・渦中<」

黒い雷は全てミリーの角に引き寄せられた。そのままハンマーを流れるような動作でかわしながら黒い雷を纏った角をジェンガへ向ける。

「…なっ!？」

角から放たれた雷撃はジェンガへ直撃する。バチバチという凶悪な音と共にジェンガの身体から黒い煙が上がった。その身はすでに満身創痍だ。

「言つとくが俺はこの程度では負けんぞ!!邪神器>狼<!!」

ハンマーに全力の>邪<を注ぐ。するとハンマーが全て黒い雷へと変換される。

「>流心・流浪<」

盛大な光によって二人の姿がかき消される。その衝突が終わった後、立っていたのは一人だった。

「私の勝ちですね」

ジエンガは地面に倒れている。意識はあるようだが、邪くを出し切ったため身体が動かないのだ。その動かない身体を酷使してジエンガは顔を上げる。

「まさか…お嬢ちゃんに負けるとはな」

その発言にミリーはクスクスと笑う。

「お嬢ちゃんお嬢ちゃんって言いますけど私の方が年上ですよ。竜ですから」

「ガハハ…確かにな…それはすまなかったな、お嬢ちゃん」

謝りながらもお嬢ちゃんと呼ぶのを止めないジエンガにミリーは苦笑で応えた。

「なあ…あんたらの中で一番強いのはお嬢ちゃんか？」

「いえ。一番強いのはシロー様です。ただ…」

「…ただ？」

「…ただ、チームの中で一番無慈悲なのは私です」

そう言つてミリーは残り僅かな魔くで、水矢くを作り撃ち出す。それはジエンガの心臓を呆気なく貫いた。その後ミリーは地面に落ちている邪神器、狼くを回収してその場を去った。

やがて黒雷ジエンガの死体は身体が砂となり風と共に大地へと還つていった。そんな彼の最期の表情は恐怖ではなく誰よりも満足気な表情だったという。

遭遇戦（四郎の場合）

「『黒の眷族』レスカー・レインド。コードネーム黒氷。対象の男を抹殺する」

レスカーがそう告げた瞬間、周りの空気が一気に冷やされる。瞳の白い部分が黒く染まり、犬歯が伸び耳が尖る。

「お前魔族か」

俺の問い掛けには答えずにレスカーはあまりにも黒い>魔<のようなものを纏う。

この力がただの邪悪な気配がするだけの>魔<だとは考えられない。可能性としては>神<の対の力である可能性。

「>黒氷柱<」

レスカーの方から黒い氷柱が数十本飛んでくる。俺はその氷柱を足場にし空中へと駆け上がる。そこに狙いすましたようにレスカーが現れ至近距離から伸びた爪で攻撃してくる。俺はそれを右手だけでいなすが手に違和感を感じたため、レスカーとの距離を空ける。

そこで俺の掌を見ると綺麗に凍り付いていた。先程までレスカーと組み合っていた場所に煌めきが見える。恐らく大気中の水分が凝固したのだろう。どうやら相手の黒氷というのは伊達ではないらしい。とりあえず手に一瞬だけ>武<を大量に流し込み、氷を弾けさせる。レスカーの方へと視線を向けると彼女は何やら唱えている。

それに気付いたと同時に俺の足下に巨大な魔法陣が現れる。

「大規模魔法か」

魔法が発動する前に>神域<で自らの身体の周りに結界をはる。魔法陣の輝きが最大となり下から大量の黒い氷が出現し、草原を一面黒い氷の世界へと変えた。これでは迂闊に>神域<から出る事が出来ない。

まさか大規模魔法を使ってくるとは予想外だった。大規模魔法というのは戦争用の魔法のことで大勢の魔法使い達が何人も集まって陣を組み行うものだ。特徴としては魔法のイメージを定着させるために魔法の発動する位置に魔法陣を出現させる必要がある。本来、どの魔法だろうが発動させるのに魔法陣を使った方がイメージがより定着し威力が上がる。しかし魔法陣を出すのは致命的なタイムロスとなる上、魔法の出現場所も丸分かりなので対人戦などではあまり使用しない。その分戦争なら逃げ場などないので魔法陣が現れても問題ないとして威力優先で魔法陣が使われるのだ。おまけに複数の魔法使いのイメージを共通させるが大変だからという理由もある。

レスカーはその何人もの魔法使いが集まってようやく使う事の出来る大規模魔法をたった一人で行ったのだ。これは驚嘆するべき事実であろう。しかし大規模魔法の発動に魔法陣を出現させたという事は魔法のイメージが定着していないと言ふことだ。ならば恐らく大規模魔法の上位である殲滅魔法を使える事はないだろうと推測できる。

「>武神化<」

>神域<を解除し>武<の上に>魔<を重ねる。灰色の鎧の全身を覆われる。今回は周りに何も浮いていないシンプルなタイプの>武神化<だ。

俺は力ずくで黒い氷を壊す。氷が砕ける音にしては異質なガキインという音がする。恐らくこの黒い氷は金属以上の硬度なのだろう。

「さてと、色々聞きたい事があるんだがいいかな？」

「>黒氷槍<」

レスカーの前から突き出すように黒い氷の槍が飛んでくる。俺はそれを真正面から左手一本で受け止める。槍を握った力が強過ぎて氷が粉々に砕ける。レスカーは面食らったような顔をしている。

「とりあえず倒してから話を聞かか」

灰色の鎧を武器に何も考えずに体当たりをする。レスカーはとっさ

に身体を氷で覆ったが衝撃までは殺せずに転がるように大地に投げ捨てられる。

そのまま追撃をしようとするすると左右から二体の黒い氷で出来た人形が現れる。左右から繰り出される絶妙なタイミングの攻撃に俺は回避を選択する。距離を開けて音速の拳を放ち、氷人形を砕く。バラバラになった氷の破片は見えない刃となり俺の方へと卒倒する。

「芸が細かいな」

右足で大地を思い切り踏み鳴らし、砂礫を巻き上げる。砂礫が氷を相殺する。一気に視界が悪くなった。

その隙を狙ったかのようにレスカーが俺の後ろに回り込んでくる。レスカーから黒い霧が撒き散らされる。視界が更に悪くなる。

「>凝固<」

途端に黒い霧が収縮し、俺に纏わりついてくる。黒い氷が鎧を浸食せんと進攻してくる。俺は>武神化<を解いて、氷も一緒に霧散させた。

「>光祝砲<」

右手からレスカーに向かいレーザービームを放つ。直線軌道で分かりやすいがかなりの速さなので軌道が分かっても避けられまい。レスカーはかわせるだけかわし、残りは氷で防いだ。上手い判断だ。どちらか片方だけだったらかなりのダメージを喰らっていただろう。

「邪神器>レヴィアタン<」

レスカーは懷から螺旋状にねじれたアイスピックを取り出した。それに大量の黒い>魔<を注ぎ込む。

アイスピックが巨大化し俺へと迫って来る。それを左手でいなそうとする。すると左手にアイスピックが絡みついた。

「ん？」

そのままアイスピックが俺の腹部を貫いた。腹から大量の血液が零れ落ちる。普通なら三分も保たずにお陀仏だろう。

「故に私はねじれる」

レスカーはまるで俺を親の仇であるかのように憎しみの籠もった眼で見つめてくる。

「そろそろ真面目に戦うか」

腹をアイスピックで貫かれたまま俺はレスカーに向かってニヤリと笑いかけた。

『黒の眷族』

「>遡及<」

俺は腹に穴の空いた身体を数分前の綺麗な身体に戻した。

「馬鹿なっ!？」

「>火玉<」

火属性で最も簡単な初級魔法>火玉<を掌に出す。俺はそれにひたすら魔力を込める。サッカーボール程のサイズになった所で大きくさせるのを止め、中の魔力の密度を増やしていく。

「知ってるか? 炎には限界温度がないんだぜ」

すでに手の上の>火玉<はドロドロになって時々我慢しきれないかのように炎が零れる。まるで小型の太陽だ。レスカーは黒氷で最大限の盾を作る。

俺は出来上がった凶悪な>火玉<をレスカーへと投げる。>火玉

<は強大なエネルギーを撒き散らしながら氷の盾を蹂躪していく。

氷の盾を全て貫いた所で俺は>火玉<を消す。もしこれが直撃した場合レスカーは間違いなく死ぬだろう。しかしレスカーにはいくつか聞きたい事があるので殺す訳にはいかない。

間髪入れずに>鎌鼬<を放ち、レスカーの足を切る。まさか攻撃が足に来ると思ったのかレスカーは無様にバランスを崩し倒れた。俺は倒れたレスカーの喉元に炎で作った剣を突き付ける。

「殺せ……」

何かを諦めたかのようにレスカーは呟いた。だが殺すつもりは毛頭ない。貴重な情報源だ。

「質問に答える。お前がさっきまで使っていたアレは>魔<か?」

「……敗者は勝者に逆らえない。アレは>魔<よりも邪悪な力>邪<だ」

>邪<という言葉に聞き覚えはない。しかし推測は出来る。あの>邪<という力は神器を動かしていた。レスカーは邪神器といていたが大した違いはないだろう。魔剣と聖剣のようなものだ。通常神器を動かすのは>魔<でも>武<でもない。神々の力である>神<だ。

しかしレスカーは>邪<を使って神器を起動させた。という事はつまり>邪<は>神<と同質なものであるという事だ。恐らく>魔<と>武<が同質で対になっているのと同じで>邪<も>神<と同質で対になっている力なのだろう。

「そうか。なら『黒の眷族』というのは？」

「……『黒き獣』に力を与えられた者たちのこと。>邪<もその力のうちの一つ」

「なるほど。ならガルトの街に現れた影はお前らと何か関係あるのか？」

「あれは『黒の眷属』。あの力を抑え込めれば『黒の眷族』になれる」

なるほど。眷属と眷族の違いか。眷属は自我が無くただ破壊を尽くすだけの存在だった。力自体は大した事ないが祈祷魔法や精霊魔法、十神技くらいしか効かない厄介な奴だ。

一方、眷属の力を抑え込み眷族になれば自我を取り戻せる訳だ。更に強靱な肉体と>邪<も手に入れられる。しかし不死身性はなくなる。

「次で最後だ。お前らの組織は何人いる？」

「…分からない。私が知っているのは黒氷の私と黒風、黒雷、黒炎、黒土だけ。黒風以外は貴方の仲間を殺しに行っているはず…」

黒風だけは動いてないのか。理由は弱いからなのか。それとも司令塔だからなのか。もし黒風が司令塔だというのなら他にも仲間がいる可能性が大きい。

「…終わったなら早く殺して」

レスカーはもう疲れたという風にこちらを無表情に見つめてきた。

「いやだ」

「…どうして。私は男に負けた…。それだけじゃない。汚れた力に縋り誇りを棄てた愚か者…。だから殺して」

それは壊れたステレオなのか。ただ言葉を吐き出し続ける。聞いて欲しいから話すのではなく、話すという事自体が大切なのだろう。

「私は男という存在に耐えられない…。私をいやらしい眼で見てくる男…。私より弱いと知って私を女のくせにとバカにする男…。だから私は誓った…。私を犯そうとした男たちに付けた傷と同じ傷を顔に付けて…。男には負けないと…。でも結局私はバカだった…。純粋に強くなりたいたいという願いはいつの間にか男に負けたくないという憎悪にすり替わった…。そして安易に汚れた力に手を出した…」

その呟きは走馬灯なのか後悔なのか。俺には知る事が出来ない。だがこれだけは言える。

「そんな俺がお前を殺さなくちゃいけないー理由にはなんねーよ。」

第一、俺は人は絶対に殺さない。絶対にだ」

「…………なぜ」

「人には無限の可能性があるからさ。例えばどれだけ堕ちても人に道がないなんて事はない。人間はそういう風に造られてるからな。もし道がないなんて思ってる奴がいるなら、そいつは自分で勝手に選択肢を作って可能性を狭めているだけさ」

俺の言葉にレスカーは沈黙で応える。レスカーにはレスカーの考えが、いや選択肢がある。後は彼女がどれを選ぶか選ばないかだ。

「黒い力なんかを手にした私でも道はあるの…？」

「あるよ」

「普通の女にも…。強い女にも…。優しい女にも…。なろうと思えば成れるの？」

「ああ」

「なら…。戻りたい…。私が黒くなるよりも前に…。誰かを信じる事が出来ていた私に戻りたいっ…」

レスカーの瞳から涙が、唇から想いが溢れ出す。

「なら俺が少しだけ手伝ってやるよ」

倒れ込んで泣いたままのレスカーへ向け左腕を伸ばす。身体に＜神＞を纏う。俺の身体が純白に染まる。

「＞浄化＜＞治癒＜」

するとレスカーの身体が暖かい光に包まれる。体内に巢喰う『黒い獣』の力が浄化され、身体と精神が癒えていく。レスカーは心地良さそうに瞳を閉じている。顔の傷が消え、黒い力も消え、後に残ったのはただ一人のレスカー・レインドという女性だった。

「あとはお前次第だ。好きに生きな」

そう言っただけ俺は背を向ける。もうこれ以上ここにおいても仕方がない。まずは仲間と合流してお互いの無事を確認しなければならぬ。

俺は＞神域＜の中にいたネミリアを回収し、とりあえず王都へと戻った。

回収

「いやあ、まさかこれ程とはな」

ジェアナとの対決を終えたシャルビイの前に現れたのはスーツを着た眼鏡の優男だった。

「貴様：何者だ？」

突如現れた乱入者にシャルビイは警戒しながらも問う。

「『黒の眷族』だ。そこに転がってる同胞を拾いにきた」

そう言つて優男、黒風はジェアナを指差す。ジェアナはすでに気絶していて動く気配はない。

シャルビイは黒風の言葉を聞いた瞬間細剣に手をかける。

「おっと…今お前達と遊んでる隙はないんだ」

黒風はいつの間にかシャルビイの背後に回り込んでおり、肩にはジェアナを抱えている。シャルビイは驚愕で眼を大きく見開く。

「いつの間に…」

「まあ風使いだからな。速さには自信があんだよ。つてことで他の奴らも回収しないといけないからじゃーな！」

黒風の周りに突如風が吹き荒れる。シャルビイは思わず目を瞑る。再びシャルビイが目を開けた時、そこには既に誰もいなかった。

シャルビイの所から素早く移動してきた黒風はこれからの動向について考えていた。

「さてと…ジェアナは回収したから…えーと…黒雷と黒氷の…邪くは感じられないから死んだのかな。黒土は…こっちに來てるっぽい

から合流するか」

黒風はジェアナを抱えたまま黒土のいるであろう方向へと歩いていく。しばらく歩いていると見覚えのあるシルエットが見えた。

「おーい！黒風！僕だよー！！」

十歳くらいの少年が黒風を見つけて走ってくる。ぶんぶん和大げさに手を振っている。頭からは小さな二本の角が申し訳程度に生えている。黒土である。

「ごめーん！殺すの失敗しちゃった感じ」

にへらーと笑いながら黒土が開き直った感じで喋った。黒風も半ば予想はしていたのでさほど気にしてはいない。

「生きてるだけでも上出来だ」

「他のみんなは？」

「黒雷と黒氷は多分死んだ」

黒土はそれを聞いて沈黙する。眼には涙が浮かんでいる。

「これからどーするの？」

「……他のメンバーと合流する」

「…他の？」

「ああ。黒闇と黒剣、黒金の三人だ」

「へえー。知らない名前だなあ」

他にも仲間がいると聞いて安心したのか黒土は既に笑顔になっている。子供らしい無邪気な笑顔だ。黒風もそれを見て微笑んでいる。

「あいつらは帝国側にいるからな。だからとりあえずは帝国を目指すつもりだ」

「えー、歩くの嫌だし。まだ王女様のおっぱい揉んでないっ！」

地面に転がって嫌嫌嫌嫌と全身でアピールする黒土。さすがに黒風もこれには溜め息を吐いた。

「諦める。元々王女は足と目が悪くて部屋から出れないらしいしな」

「ちえつ。しょーがない。黒炎ので我慢するかあ」

「ギャハ、誰ので我慢するってえ？」

いつの間にか復活したジェアナが後ろから黒土の頭を鷲掴みした。

黒土は恐怖で顔が引きつっている。

「あわわわわ…」

そんな黒土を見かねたのか黒風は助け舟を出した。

「黒炎、身体は大丈夫なのか？」

「…ああ。まだ少し痛みが大した事はないよ」

「そうか。とりあえず奴らの事は放置しておいて帝国に向かう事にした」

「あいよ」

ジェアナは特に不満そうな様子もなく素直に頷いた。正直、黒風は反対されると思っていたのでジェアナのその反応に拍子抜けだった。

「道中で仲間を造れたら造っていいこう」

黒風は最後にそれだけ言って歩き出した。

報告しよう

「皆無事だったか」

あれから王都に集結した俺たちは全員の無事と事の詳細の確認をしていた。

「はい。シロー様も無事で何よりです」

ミリーが俺に笑顔を向けてくる。ティカはさつきからチラチラとネミリアの方を見ている。

「ああ。んじゃまずは事の詳細を確認する前に……ネミリア」
すると俺の一步後ろに控えていたネミリアが前へと出てくる。

「ネミリア・ウィンストよ。故郷のルソトを燃やそうとした奴らを潰すために来たわ。よろしく」

「ネミリアにもチームに入って貰おうと思っているから、ソロ活動の成果の報告も兼ねて互いにギルドカードを見せ合おう」

俺の言葉に皆が頷く。

「なら新人の私からね」

そう言ってまずはネミリアがギルドカードをオープンさせる。

名前：ネミリア・ウィンスト（ダークエルフ）

年齢：142

出身：ルソト

所属：アステリ

tp t：12万

Fリスト：48

ランク：D

チーム：なし

二つ名：なし

称号：精霊使い

「ならば私ですね」

続いてミリーがギルドカードをオープンさせる。

名前：ミリー・サウノーズン（竜）

年齢：526

出身：ドラゴア

所属：シロー様

tp t：150万

Fリスト：24

ランク：C

チーム：救いの手

二つ名：なし

称号：竜神の娘

「りゅ、竜！？うそでしょ！？」

「お前所属変えろや！！」

俺もネミリアも思わず驚いてしまった。驚いた内容は全然違っけれど。次にティカが元気よくギルドカードをオープンさせる。

名前：ティカ・ファーフード

年齢：16

出身：ガルト

所属：アステリ

tp t：3億

Fリスト：246

ランク：B

チーム：救いの手

二つ名：なし

称号：ファーフードの一族

「なら次は私か…」

何故か暗い面持ちでシャルビィがギルドカードをオープンさせる。

名前：シャルビィ・ルーラン

年齢：18

出身：ミリセンブルク

所属：アステリ

t p t：4千万

Fリスト：10

ランク：S

チーム：救いの手

二つ名：鮮血の舞姫

称号：裏切りの一族

「んじゃ最後は俺かな」

名前：シロー・タチバナ

年齢：18

出身：異世界

所属：アステリ

t p t：1千万

Fリスト：6

ランク：A

チーム：救いの手

二つ名：最速王

称号：神の希望

「……………は？」

俺のギルドカードのあまりの異質さにネミリアがフリーズしてしまっていた。それを見てティカがネミリアの肩をとん、と叩く。

「気持ち分かるわよっ。でも師匠は化け物だから気にしたら負けよっ!!」

右拳をグツと握りティカが力説していた。化け物とか酷いだろ。というかそんな力説すんな。

「シロー様、この二つ名の>最速王<って何ですか?」

「ああ…これは俺が受けた依頼を即行で片付けてたらいつの間にかついてた」

「なるほど。さすがシロー様ですね」

ミリーは何故か自分の事のように喜んでいる。

その後、全員ネミリアとフリストを交換し、事の詳細を報告しあった。シャルビイが最後まで暗い顔をしていたが原因は何か分からなかった。

「さて…これから俺らはどう動くべきか」

すると真っ先にティカが手を挙げて発言する。

「はいはい!あたしは王都騎士団にいるスレイターお兄様に会いに行くわ!」

そういえばティカには兄がいたんだっただな。剣の腕を買われ王都騎士団に入団したとか言ってたし。本来、次期当主であるティカの兄が騎士をしているのは可笑しな話だ。恐らく当主として泊をつけるためなのだろう。実績があれば民も安心するしな。

「そうか。ならミリー、ティカに着いて行ってくれないか?」

「はい、わかりました」

ミリーもすんなり了承する。ティカも特に何も言わないので大丈夫という事だろう。

「私はもう少し情報を集めたいわ」

次はネミリアが意見を述べた。するとそれ意外にもシャルビイが答えた。

「なら私も同行しよう」

「あら、ありがとうね。シャルちゃん」

「ちゃ、ちゃん付けは止めてくれ……」

シャルビィが顔を青くしながら懇願していた。

「なら俺は単独行動かな。ちよいと気になる奴もいるしね」

「気になる奴？」

「ああ、上手くいけば大きな力になるかもしれないし」

「シロー様……一応聞きますがそのお相手は男性の方ですよね？」

「……………ソダヨ」

「間がありましたよシロー様！女なんですね！？」

ミリーはわなわなと震えている。ティカからは白い眼が向けられている。シャルビィは溜め息を吐いて肩をすくめている。ネミリアに至っては笑っている。

「ま、まあとにかく重要な人物って事だよ」

迫ってくるミリーをなんとか落ち着かせる。

「……………まあいいです。シロー様を信じていますから」

とあからさまに信じていなさそうな顔で言われたが蒸し返すのも嫌なのでそれには触れないでおいた。

「今日は皆も疲れただろうからゆつくり休もう。以上、解散！」

俺がそう言つと皆バラバラと自分の部屋へと戻っていく。俺はそれを見送つてからベッドに倒れ込んだ。まだ寝るには早いがとりあえず仮眠だ。夜中にここを抜け出しても大丈夫なようにな。

王女の願い

もう何年でしょうか？

私がここから出られなくなって。光が閉ざされて。自分の足で満足に歩く事も美しい街並みを見る事も叶わない。そんな毎日には絶望しかありませんでした。

でも私は王女です。甘えは許されません。どんなに辛くても王族としての義務は全うしなければなりません。それが私たちを信じてついてきてくれる者たちへの在り方というものです。

もちろん足が動かなくなってから、目が見えなくなってから何もなかった訳ではありません。お父様が国中から優秀な魔法使いを呼んで私を治療させようと思いました。でも結果は散々たるものでした。

原因不明。

それが私の不自由に貼られたレッテルでした。普通の魔法使いでは駄目ならと、次は精霊使いたちを呼び出しましたが芳しい結果は出ませんでした。

祈祷魔法使いは呼び出しませんでした。何故なら私自身が世界でも有数の祈祷魔法の使い手だからです。だから祈祷魔法では治らない事は誰よりもよく分かっていました。

そして私は自室から出る事は無くなりました。お父様が私の病状がこれ以上悪くならないようにと配慮してくれた結果です。いくら目が見えないからと言っても外に出られないのは悲しい事でした。

だから私は窓からいつも街を見ていました。もちろん見ていたといっても実際に見えていた訳ではありません。ただ窓を開けて街に溢れる生活の音を感じていただけです。そんな活気のある人たちを見ていると私もなんだか元気になってくるような気がしたからです。

でも感情とはそれだけの美しいものではありませんでした。ただ無邪気に街を歩く人たちが羨ましくもあり、妬ましくもあったのです。私には自身を飾ることは出来ても、自らの足で歩く事はできません。その事実を思い知らされるたびに私は泣きました。何も見えない目からは涙が溢れるだけ。

そして今宵も窓を開けて静まり返った街の音を聴いていました。

「もし神がいるのなら何故私だったのでしょうか。毎日欠かさずに神に祈りを捧げていました。今だって欠かしていません。なのに何故……」

祈禱魔法は神への祈りの大きさと決まります。私は世界でも有数の祈禱魔法使いです。それはつまり私がそれだけ神へ祈っているという事です。

「私はもう一度、太陽が、アステリの人びとが見たいです。自分の足で大地を感じたいです」

私のそんな呟きはいつものように夜空へと吸い込まれていくはずでした。でも今宵は違いました。私の呟きに応える声があったのです。「それがお前の願いか？」

いつの間にか私の部屋の隅に男の人が立っていました。私は目が見えないのでよく分かりませんが声に悪意はないように感じられます。「だ、誰ですか!？」

私は慌てて脇に置いてある護身用の短刀を手に取ります。どうやってここへ侵入してきたのか。それは分かりませんが恐らく彼は相当な手練れです。何故なら目が見えなくなっただけで他の感覚が鋭くなった私ですら声を掛けられるまで気付く事が出来なかったからです。

「橘四郎」

「え？」

「俺の名前だよ。こつち風に言つとシロー・タチバナかな」

彼は悪戯が成功した子供のように楽しそうに笑っています。本来なら不審者なのですから衛兵を呼ばなければなりません。毒気が抜かれて私は思わず短刀を置いてしまいました。

「えっと…シロー様は私に何かご用なんですか？」

「そうそう。王族とのパイプが欲しくてね」

随分と率直な方ですね。

「それで素直に私がいと言うとお思いですか？」

相手の真意を見極めるために私は少々棘のある感じで答えます。

「思ってない。だからお前に奇跡をプレゼントしてやるよ」

その言葉に私は思わず眉間に皺を寄せてしまいます。

「奇跡とはそう簡単に起きるものではありません。それに容易く口に出していいものでもありません」

私は神を信じています。だからこそ奇跡というものは信じていますし願っています。しかし例えば奇跡が起こって欲しいと口に出しても奇跡を起こすとは口に出しません。奇跡とは人が起こしていいものではないのですから。

「建て前なんざどーでもいい。お前の本音を聞かせろ」

彼の言葉は私の意見をばつさりと切りました。建て前。確かにそうかもしれませんが。私は奇跡でも奇跡じゃなくても元気になればいいと思っています。ただ奇跡という事に縋っているだけ。

「元気になりたいです」

「それが例え悪魔の誘いであつたとしてもか？」

「はい」

建て前を崩されれば後は簡単でした。元気になりたい。街を、人を、家族を見たい。共に歩きたい。それさえ叶えば私にはもう何もいりません。

「なら見えないお前に魅せてやるよ。奇跡を」

彼はそう言っで私の頭に手を起きました。思わず身体がビクリと反応してしまいました。彼の手から伝わってくる温もりはとても温かいものでした。

すると彼の身体から急激に>魔くのようなものに包まれていきました。>魔くのようなものと言ったのは私の知っている>魔くとは違うように感じたからです。それよりももっと温かい何か。

「>治癒<」

私の上から温かいものが降り注いできました。それはとても心地良く素敵なものでした。

「もう大丈夫だ。見えるし歩けるはずだ」

あまりの心地良さに恍惚としている私に彼は声を掛けてきました。半信半疑のままいつも閉じている瞼を開けると…。

「まぶしい…」

大量の光が私の中になだれ込んできました。夜のはずなのにそれはとても眩しく感じました。

「見えるだろ？」

そこようやく私は彼の方を見ました。黒い髪に黒い瞳。そして整った顔立ち。失礼だと分かりながらも私は彼をまじまじと見つめてしまいました。

「おはよー王女様」

彼はその美しい顔を少しだけ意地悪そうに歪めてからそう言ったのです。

おはよー王女

「おはよー王女様」

俺は未だ呆けている王女様にそう声を掛けた。

正直、王女を治す自信はあった。これから『黒の眷族』たちと戦うのには俺たち以外の力が必要だ。それだけでなくもし俺が本当に神様の言う通りに世界の破滅を防がなくてはならないなら、個人では対抗するには厳しいものがあるだろう。

だからこそ強力なパイプが必要だったのだ。特に今回、シャルビイのいたバロックの街では一般人の死者まで出ている。これを俺たちで誤魔化すのは無理だし捕まったりするのも論外だ。

そしてパイプを作るのならいずれ共闘するであろう国家が一度好都合だったのだ。パイプを作る方法は悩んだがアステリ王国には不自由王女がいると聞いてピンときた。

「それで、目が見えるようになった感想は？」

俺の質問に王女が涙する。

「嬉しい…もう一度…光が見れるなんて…嬉しいです…」

そう言って王女はワンワンと泣き出した。これで衛兵が駆け付けて来ても面倒だったので周りに>サイレントくを仕掛けておいた。

「まだそれで終わりじゃないだろ？足も治ってるんだ。こっちまで来いよ」

俺の言葉に誘導されるように王女が窓から離れる。そのまま子供のようにヨロヨロと歩きながら何とか俺の所まで辿り着く。俺は王女を倒れないように支えてやる。

「足は治したけど筋肉までは回復させてないからまあリハビリは自分で頑張ってくれ」

王女をお姫様だっこをしてベッドへと運ぶ。まさにお姫様だっこだ

な。王女はあうあうと言いながら顔を赤らめて恥ずかしそうにしていた。

「あ、ありがとうございます…」

「ああ。んじゃフリスト交換しよーか。パイプ作るのが俺の目的だし」

「は、はい！」

王女がカードをオープンさせる。もちろんだが王女様なのでギルドには登録していない。

名前：ヒュアリス・アステリ・サンドライン

年齢：15

出身：アステリ

所属：アステリ

tp t：500万

フリスト：80

15歳なのか。もう少し年下かと思ってた。まあ動いたり出来ないんだから華奢なのは当然なことだろうけどな。

「んじゃ、俺のも」

俺もギルドカードをオープンさせて王女、ヒュアリスに見せる。すると彼女の表情がみるみる驚きに染まっていく。

「い、異世界って！？どこなんですか！？」

「異世界は異世界」

「しかも神の希望って…何者なんですか貴方は！？」

「シロー・タチバナ」

ヒュアリスはパニックに陥っている。まあ仕方ないだろう。突然現れた人間が自分の病を治し、その人物は異世界人でした、なんて。今どき御伽噺でも流行らない。

「最後にこれだけは言っておこう」

俺は真剣にヒュアリスを見つめる。心なしか彼女の顔は赤い。俺に

惚れたのかもしれないな。だがそれは俺が彼女を治したことによる恩義からくる勘違いな感情だ。そのうち彼女もそれに気付くだろう。「な、何ですか？」

「……………バロツクのことヨロシク！」

それだけ言って俺は闇に消えた。これで完全に隠蔽はしてくれなくても多少の配慮はしてもらえるだろう。

これでとりあえず安心…かな。

「……………バロツクのことヨロシク！」

と彼はそれだけ言って突然消えてしまいました。

「え？ええ！？バロツクって何のことですかー！？」

私の叫びも虚しく、何も反応はありませんでした。>光字<を使って連絡を取ってもいいのですが何だか無粋な気がしてする気にはなれませんでした。

結局、次の日に私の専属メイドのサリーに聞いてみるとバロツクで爆発事件が起こったとのこと。私は物凄く驚きました。まあ周りの人たちは私が回復してることに驚いていましたけどね。

私はとりあえず彼に言われた通り、バロツクの件に情報規制を敷いて、事件の詳細を調べます。でもこれは普通の調査団には頼めないで信用のおける人に頼む必要があります。

私が選んだ人は当然、メイドのサリーです。彼女はメイド兼護衛でとても優秀な人なので大抵の事は頼めば何とかあります。あまり頼り過ぎるのもいけないんですが、サリーの事は姉のように思っているのです。いつい甘えてしまいます。

「姫様、何故そのような事をお調べに？もしかして姫様のご病気が治った事に関係しているのでしょうか？」

さすがサリー。鋭いです。お父様とお母様には何とか毎晩唱え続け

ていた祈祷魔法のおかげだと誤魔化しておいたのですが、さすがにそれではサリーは誤魔化し切れなかったようです。

「……………そうです。私を治してくれた方との約束で…」

「治してくれた方？祈祷魔法のおかげでは無かったんですか？」

私は真実を話す事にしました。私を助けてくれた彼のことを。

「シローという名前は聞いたことないですね。しかし黒眼黒髪ですか…」

「知ってるんですか？」

「ええ。最近ギルドで最速王と呼ばれる人物が黒眼黒髪だったかと…」

「最速王…。確かに彼のギルドカードにはそんな事書いてあったよ
うな…」

「なら間違いないですね。ではバロックの件とその人物のことは私の方で色々調べておきますので姫様は無理をなさらないで下さいね」
そう言ってサリーはニコリと笑いました。でも眼は笑っていませんでした。

私の選択肢は素直に頷く以外ありませんでした。

商会に持ち込む 1

「うん……」

王女と別れた後、宿で一夜を明かし今は街の中をうろついている。というのも王族とのパイプだけでは足りないと思っっているからだ。恐らくこれから王族からの何かしらのアプローチがあるだろうが俺としてはこれ以上面倒事は勘弁だ。仕官なんかもするつもりは一切ない。世界を救うだけで精一杯だ。

つまりアプローチをかわすためにも王族とは別のパイプが欲しいという事だ。王族とのパイプは恩義、義理で繋がっているのもう一つは別の形にしたい。これは同時の裏切りを避けるためだ。

もし両方とも恩義で繋がっていた場合、何かしらの時に同時に切り捨てられる可能性があるということだ。しかし片一方が恩義で、もう片一方が金銭による繋がりだったならば、両方同時に裏切りられる可能性は限りなく低くなるのだ。

俺が狙っているのは商会だ。俺はこの世界の人間ではない。ならばこの世界にない技術や娯楽を持ち込むのはどうかという考えた。しかもこれなら金も大量に手に入るので一石二鳥だ。

今のところ考えているのは本だ。料理という線も考えたがこの食べ物地球と全然違うので再現出来る自信がない。技術に関しては論外だ。俺には特別な知識など何もない。それに本なら簡単に作れるしな。

という訳で今は街でこの世界の様々な本を見て回っている。思っていたより本がどこにでも売っている事を見ると意外にも紙はそれほど貴重なものではないらしい。それに同じ本が量産されているので印刷技術もそこそ発達しているのだろう。これは俺にとってラッキーだ。

「すいませーん」

とりあえず出版社らしき場所に入ってみる。すると中から髭がダンディーなオジサンが出てきた。渋くてかなり格好いいんだが（笑）「何かご用で？」

執事とも取れるような優雅な動きをするダンディーさん。

「本のアイデアがあるんだが」

「作家希望という事ですか？」

「ああ」

「ふむ。ではどうぞ、中へお入り下さい」

ダンディーさんに中へと案内される。中は思ったより豪華で高級そうな壺や絵画が見受けられた。やはり思った通りここはなかなか有能な商会のようだ。俺はとある一室に通され座らされる。従業員らしき人物が紅茶を淹れてくれた。

「さて、作家といたしましたな。どんなアイデアをお持ちで？」

「推理小説と恋愛小説だ」

ファンタジーだと売れない危険性がある。なんせこの世界がファンタジーだしな。もしかして英雄譚なら売れるかもしれないがわざわざ賭けに出る必要もあるまい。

「恋愛小説は分かりますが推理小説とは聞いたことありません」俺は手っ取り早く現物を渡す。もちろん俺が書いたやつだ。アステリに着くまで皆特訓ばかりだったのでそこで推理小説と恋愛小説を書いたのだ。内容は地球ではありきたりのパクリ作品だけだね。

「…ふむ…ふむふむ……ううむ……むむむっ！」

パラパラと恋愛小説をめくっていくダンディーさん。どうやら速読をしているようだ。

「素晴らしい！この恋愛小説は！！」

どうやらお気に召したらしい。こちらの本は堅苦しい物語ばかりでほとんどが貴族視点のものなので似通った作品しかない。なので俺は平民視点の物語。シンデレラ・ストーリーを書いたのだ。

「ではこちらも……ふむ…ん……うむ……おお！」

推理小説を読んでいるダンディーさんの表情がコロコロと変わる。

ちなみにこちらのストーリーは単純。貴族の宅で起きた使用人殺人事件をその貴族の息子が解決するというものだ。

「すごいすな！どちらも素晴らしい！！」

ダンディーさんはべた褒めだった。しかしそれだけでは終わらない。

「実はもう一冊ありまして…」

ニヤリと悪代官風に笑う俺。するとダンディーさんも気分が乗っているようで髭を撫でながら軽く笑う。

「どうぞ」

俺が差し出し物を見てダンディーさんが驚愕する。俺はそれを愉快そうに眺める。

「…こ、これは？」

予想以上に食い付いてきた。この時が資金もパイプも両方手に入ったと確信した瞬間だった。

商會に持ち込む2

「か、革命だ…」

俺の差し出した一冊を読み終えてダンディーさんが震えながら呟いた。わなわなしている。

「どうでしょうか？出版出来ますかね」

とりあえず答えは分かりきっているが尋ねておく。こういうやりとりも商売には必要不可欠なのである。

「三冊とも素晴らしい！特に最後のは別格ですな。こんなものは初めて見ました。斬新な発想ですな。絵で物語を綴るとは」

そう、俺が最後に差し出したのは漫画だ。この世界には漫画が存在していなかったのでチャンスだと思ってとりあえず描いてみたのだ。ソロでランク上げしている合間に。

推理小説、恋愛小説、漫画をとりあえず書いて、この世界に流通していないものを出版してもらおうと思っていたので三冊とも市場には無かったのは幸いだ。

「では出版は可能でしょうか？」

「ええ、ええ！もちろん！申し遅れました。私の名前はセバスチンと申します」

と興奮しながら名乗ってきたダンディーさんもといセバスチンさん。セバスチャンではないらしい。まあ執事っぽいけど執事じゃないしな。微妙なズレが生んだ奇跡なのだろう。

「私はシロー・タチバナ。ペンネームはロー・タバナです」

「ではローさんと呼び致しましょう。ただいま契約書を持って参りますので、しばしお待ち下さい」

セバスチンさんは席を立てて部屋から出て行く。入れ替わりに従業員が入ってきてカップを盆に乗せて戻っていった。この従業員も動

きはそのまま執事だ。

しばらくするとセバスチンさんが紙束を持って戻って来る。

「お待たせしました。こちらが契約書です」

手渡された契約書をザッと確認する。どうやらまともな契約書のようで俺に利益が入って来ないなんて事はないだろう。サインをして紙束をセバスチンさんへと渡す。

「ええ。契約を確認致しました。では何か質問などありますか？」

「本はいつ頃市場に？」

「そうですね、この三冊は恐らく最優先で印刷に回されるので市場に並ぶまでひと月。ローさんの手元にお金がいくのは大体半年後くらいですかね」

「なるほど」

「質問は以上ですか？」

「ええ」

「ではこれからセバス商会を宜しくお願い致します」

最後に挨拶だけをして俺は邸を去った。しかしセバス商会。恐ろしい名前だ。まるで執事のための商会みたいじゃないか。まあセバスの後に省略されているのはチャンではなくチンだと思うが。

「さてと……出来れば貴族との間にもパイプが欲しいんだがなあ」
そう言ってからすぐに貴族とのパイプは既にあつたことを思い出した。

ファーフード家である。ティカがいるのはもちろんの事、ティカを救出したという事もファーフード家との繋がりをより強固なものとしている。

「実は意外にお嬢様なんだよな、ティカって」

アステリ王国は主に王都アステリを含めた六つの大都市から成り立っている。そのうちの一つがガルトなのだ。つまりその大都市の領主をしているファーフード家はかなりの大貴族なのだ。ただ六つの大都市の中では一番下だが。

という事は既にこの国とのパイプは手に入れたことになる。なら

ばもうこの国にこれ以上いる必要もない。他の国へ移り、新たなパイプを作るべきだろう。場所としては帝国が獣人国が一番近い。果たしてどちらにするべきか。

そんな事を考えながら街の中を彷徨っているとふと街人たちの会話が耳に入ってきた。

「今年の武道大会は帝国らしいぜ」「うげ、帝国は治安悪いんだよなあ。見に行きたいけど怖いな」「確かになあ」「最近山賊たちも活動が活発化して来るとか言うし」

武道大会？

帝国でそんな事をやるのか。となるとかなり大勢の人が集まるはずだ。もしかしたら『黒の眷族』がどさくさに紛れて何かしら行動を起こすかもしれない。逆に帝国以外を襲うという選択肢もあるかもしれないが、それは大会が開かれても他の国の警備が薄くなるといふ事にはならないので大丈夫なはずだ。

「とすると次の行き先は帝国か…」

さっきの人たちの話を聞いた感じだと帝国は治安が悪いらしい。正直あまり行く気はしないが仕事だと諦めるしかない。まあ英雄が仕事ってどうよと思わなくもないが。

帝国行きは今俺たちがしている活動が終わらせてからだろう。問題は武道大会の日程だがその気になれば1日で着けるだろうし問題はない。

次のパイプは帝国に繋げるか。結局その日はそれで終わった。

エリーのお仕事1

こんにちは。私、エリーです。今サリー先輩の命令でギルドに来ています。サリー先輩は人使いが荒いので私たちメイドズはいつもビクビクです。しかも今回は姫様からの依頼らしいので断るに断れません。

それで今回の命令ですがとある人物の調査のようです。黒眼黒髪の男性で、二つ名が最速王という人らしいです。なんか最速王ってあんまり格好よくないですね。多分最速っていう位だから鳥みたいにキツイ顔立ちでひよろひよろなんじゃないでしょうか？妄想もとい想像が膨らみます。

「すみませ〜ん。お聞きしたいことがあるんですけどお」

私はやや控え目に受け付けの人に話し掛けます。なんだか周りの人たちからすっごく注目されています。冒険者の人たちはゴツい人が多いので怖いです。やはりこんな所にメイド服で来たのは失敗でした。目立っていいけません。先輩許すまじ。

「はい、どうかしましたか？」

「あの〜、最速王って人に会いたいんですがあ」

「申し訳ありませんが当ギルドでは依頼以外での冒険者の紹介を禁止しておりますので」

笑顔で絶対拒絶オーラを放っている受け付けの人。怖いです。最近怖いものだらけですよっ。

「そ、そこを何とか…」

「申し訳ありません」

さすがプロです。受け付けの鑑です。でも私も仕事です。いくら相手がキングオブ受け付けでもやらねばならいのです。

「お願いし…」

「申し訳ありません」

「お願」

「申し訳ありません」

「…」

「申し訳ありません」

お母様、都会は怖い所です。話も聞こうとしてくれません。もう私は田舎へ帰りたいです…。まあ本当はアステリ出身ですけどね
うっ…仕方ありません。諦めて大通りの方で地味に聞き込みでもしますか。ギルド怖いですし。私はクルツと華麗かつ優雅にターンして走り出そうとします。

ドンッ

思いつきり失敗して人にぶつかっちゃいました。

「大丈夫か？」

私はぶつかった相手がゴリラみたいに怖い人でないことを祈りながら恐る恐る顔を上げてみます。

「え？」

なんと！そこにいたのはまさに渦中の人物、最速王その人でした。間違いありません。黒くて鋭い眼に艶やかな黒い髪。かなりのイケメンです！も、ももももしかして、これが恋ですか！？恋なんですか！？

「おい？」

最速王さん（急に親しげになった）が私の顔を覗き込んできます。ち、近いです！近いですから！

「ただ大丈夫ですっ！い、いつの間にかいらしたんですか？」

「いや最初から」

「はへ？」

「だからお前がギルドに入ってきた所から」

という事は私がここに入って来た時には既に最速王さんはここに

たのですか。なら私のあの恥ずかしい駄々こねている所もバッチリ鑑賞済みなのですか！？」

「な、何で始めに声を掛けてくれなかったんですか！！」

「いや知らない奴が自分を探してたらとりあえず様子をみるだろう」
正論でした！

「それで俺に何の用事だ？」

そうでした。私は悪逆非道のサリー先輩に命令という名の脅しを受けていたのです。

「あ、貴方の事がもつと知りたいんですうつ！」

一瞬でギルドが沈黙に支配されてしまいました。どうしたのでしょうか？

って、私の台詞が原因じゃないですか！？あれじゃあまるで私が告白してるみたいじゃないですか！！ち、ちち違いますよ！違うんですよ！確かに最速王さんは格好いいですけど、まだ告白とか早いですよ！もつとここの街中で偶然で出会って二人で買い物とか、そういうのをしてから告白ですよ！！

あわわわわ！！誤解を解かなきゃ。そうですよ、これは仕事です仕事仕事。

「あ、あのさっきのは違って……ってええ！！??」

いつの間にか最速王さんがいなくなってるじゃないですか！ビックリですよ、横暴ですよ。私が出口の方を見ると既に最速王さんが扉に手を掛けています。

「ま、待ってくださいあーいつー！！」

私は慌てて彼を追い掛けます。彼が出て行った扉を通り、ギルドの外に出ます。しかしそこにはもう彼の姿はありませんでした。

「そう……。最速王さんは紳士でもなく意地悪でもなくミステリアスだったのですね……」

この後、事のあらましをサリー先輩に報告したらこっぴどく叱られました。はい、次は頑張ります……。もうお説教は嫌ですから……。

エリーのお仕事1（後書き）

サブキャラ大切

王女派にはこれから頑張ってもらつ予定です

主に主人公一行が暴れた後処理を（笑

謝罪

シャルビィとネミリアは街で情報収集をしていた。といっても実際はただ街を歩き回っているだけだ。街の中を歩いている人たちの会話を聞いて情報を仕入れているのだ。そのため二人の間に会話は無い。

今の所たいした情報は得られていない。ほとんどが武道大会の話だ。他には辛うじて王女様の回復とバロックの街で起きたテロが聞けるくらいだ。

「他の街に行こうからしね。これ以上は大した情報も得られなさそうだし」

「そうだな。ただバロックはあれだし…」

「なら六大都市じゃない小さな街へ行きましょう。案外そういう所の方が情報があつたりするし」

「そうだな。しかし近場の街だとこと大して変わらないだろう少し離れた街に行こう」

「そうねえー、コルク村とかどうかしら？」

「確か…ガルトの近くにある村だったな」

「ええ。途中でガルトに寄ればその情報も多少は仕入れられるかもしれないしね」

二人は話し合いの末、行き先をコルク村へと決定した。コルク村だとして帰ってくるだけで一週間はかかるので出発する前に皆に許可を取るうという話になりメンバーに「光字」を書いて送る。

すると四郎から全員返信が来た。

『コルク村に行くなら俺が送ってやるよ。それならすぐに行って来るぞ』

わざわざ楽に行けるのに時間を掛ける必要もないと判断して四郎に

コルク村への送り迎えを頼む事にした。

「うつつす」

返信をするとすぐに二人の前に四郎が現れた。

「悪いわね、わざわざ」

「気にすんな。どうせ変なメイドに絡まれてただけだしな」

「「？」」

「まあいい。とりあえずコルク村に転移させるぜ。あそこなら行つた事あるから簡単に送れる」

するとその言葉にシャルビィが反応した。

「コルク村に行つた事があるのか？」

「ああ。ガルトに来る前に少しな。んじゃ送るぜ。＞転移：コルク村＜」

二人の身体が淡い光に包まれてゆく。次第に光は強くなりその場を覆い尽くす。やがて光は収束する。光が無くなつた後、そこには二人の姿はなかった。

「完了。さて宿に戻るかな」

四郎たちには亜空間に造つた立派な家があるのだが街にいる間は普通に宿を取るようになっているのだ。その方が街の雰囲気味わえるからという理由らしい。

光が収束した後、目に入つた景色は二人にとって見覚えのないものだった。

「す、凄いわね…。転移魔法なんて。彼は本当に一体何者なのかしら？」

ネミリアの驚きにシャルビィは同意するように頷く。その表情は苦笑いだ。

「確かにな。それよりもここがコルク村か…」

思つたよりも地味だな、という言葉でシャルビィは辛うじて飲み込

んだ。よく知りもしない場所を勝手に主観だけで判断するのは愚かだと思っただからだ。

「さっさと情報を集めちゃいましょ」

そう言っただけで村へと入ろうとするネミリアをシャルビィが止める。

「ま、待ってくれ！」

「どうしたの？」

「ネミリアに言わなくてはならない事がある……」

シャルビィの苦しそうな、それでも踏み切ったかのような表情を見てネミリアも真剣に聞きに入る。

「何かしら？」

「……ネミリアの里を襲った黒い炎の女についてだ……。あ、あれは私の姉なんだ」

シャルビィの告白にネミリアは思わず息を呑む。

「本当にすまないと思っただけ。いくら身内とはいえエルフの森を燃やそうとしたんだ。覚悟は出来ている。私を殺してくれても構わない……」

頭を下げるように首を差し出すシャルビィ。姉、実際は従姉だがそれがエルフの森を燃やそうとしたのだ。これは国の首都を爆発させるのに等しい。そんなことをすれば一族全員が断頭台行き確定だ。

だからシャルビィは首をネミリアに差し出した。身内の罪に対する償いとして。それを見たネミリアは思わず笑ってしまった。

「ふふっ」

「な、何が可笑しい！？」

「いえ、あまりにも貴女が真剣だから。でもね、貴女が姉の罪を被る必要はないのよ？」

思わぬ言葉に動揺するシャルビィ。

「だが本来そんな事したら一族皆殺しのはずだ」

「それは人間の話でしょ？ 私たちはエルフ。エルフにはエルフの掟があるわ。成人を越えた者の罪は自身が全て背負うっていうね。だから貴女が罰される事はないわ。だから頭を上げて」

ネミリアは諭すようにゆつくりと語りかける。

「だ、だが…」

「反論は受け付けないわ。それに貴女に責任を追及しないだけで貴女の姉にはしっかりとけじめをつけてもらうつもりだもの」

ネミリアの眼が厳しいものとなる。シャルビイはそれに対して何も言えないし、言うてはならないと思った。シャルビイの責任を追及しないという事は彼女は完全に部外者であるという事に他ならないのだから。

「ありがとうネミリア」

シャルビイはそう言って顔を上げる。そこには先ほどのような苦渋に満ちた表情でなく、清々しい顔をしたシャルビイがいた。もちろん自分が姉と慕っていたジェアナについて想う所は色々ある。

それでも今はネミリアと話し合えた事にシャルビイは何より満足していた。コルク村を前にして少しだけ距離が近づいた二人であった。

スレイターに会おう1

ティカとミリーは王都騎士団の詰め所に来ていた。訪問の理由はティカの兄であるスレイターに会うためだ。

「詰め所なのに何でこんなに大きいのよ！」

「王都ですからね。」

二人は呑気な会話をしながら窓口にいる兵士に話し掛ける。

「すいません、スレイター・ファーフードに会いたいんですが」

「スレイターならさつき第二部隊長と一緒に森へ行っちゃったよ」

「そうですか。いつ頃帰ってくるのかは？」

「んー、早くても明後日かね。」

「そうですか。ありがとうございました」

兵士にお礼を言うてから窓口を離れる。そのまま大通りの方へと歩いていく。

「どうしましょう？」

ミリーとしてはここで明後日まで待つていても森まで探しに行つてもどちらでも構わないので決定権をティカに託す。

「そうね、どうせならピクニックも兼ねて森へ行くのもいいんじゃない？」

「ならネミリアとシャルビイはコルク村ですからシロー様を誘つて三人で行きましょう。」

ミリーがるんるん気分です四郎を呼び出す。するとすぐに周りが光に包まれそこから四郎が現れる。

「来たぞ。いきなりピクニックに行こうって言われてもさっぱりなんだが」

四郎を交えて先ほどの兵士から聞いた話について話し合う。

「森に行つたなら討伐だろ。ピクニックするには危ないんじゃない」

か？」

「何で討伐って決まってるのよ。秘薬とか探しにいつてるだけかもしれないじゃない」

四郎の意見にピクニック気分だったティカが頬を膨らませながら意見を述べる。

「あのなあ、騎士団が薬探しにわざわざ森に行く訳ねーだろ。仮に行ったとしても騎士団が動かなきゃならない程危険な場所に秘薬があるってことだろ」

「うぐ…た、確かに」

呆れたように喋る四郎。実は宿で寝ようとしてた所を呼び出されたためご機嫌ななめなのだ。

「という事はやっぱりピクニックをするという事ですね」

「おいミリー、俺の話聞いてたか？」

「もちのろんです。シロー様の話を聞き逃すなんて有り得ませんよ」
やけに嬉しそうにミリーが語る。その脇にいるティカは少しだけ顔を引きつらせているが。

「なら何でそんな結論になる」

「だって敵がいてもいなくてもシロー様がいれば絶対安心じゃないですか」

するとティカが急に水を得た魚並みにミリーの意見に便乗し始める。
「そうよ！師匠がいればどこだってピクニック出来るわよ！そうと決まればさっそく出発よ！！」

ティカは言うだけ言って街門がある方向へと歩き出そうとする。しかし四郎に服の首根っこを掴まれ止められる。

「…ぐえっ…な、何すんのよ！！」

「落ち着けよティカ。まだ誰も行くとは言っていないだろ」

「え？師匠行かないの？」

ティカがわざとらしく大きく眼を見開く。ちらりとミリーにアイコンタクトをとる。ミリーも眼だけで頷く。

「そんな…シロー様が行かないピクニックなんて……それはもうパ

ニックですよ……」

よよよ、とふらつてから顔を伏せて泣き真似をするミリー。

「何でミリー泣いてんだよ！てかパニックって何だよっ！」

普段はクールを装ってはいるが四郎は案外沸点が低いので、ミリーとティカのコンビに見事に引っかった。

「……あー！師匠ミリーを泣かせたー！！」

少しかだけ棒読みのティカ。

「いやお前これ絶対嘘泣きだろ！」

「うう……シロー様ひどいです……。私はただピクニックに行きたかっただけなのに……」

こんな風に騒いでいれば、ここは街中なので当然視線が集まる訳で……。

「わ、わかった！ピクニックに行こう。だからその嘘泣きはやめろ」
そう言うミリーがガバツと顔を上げる。満面の笑みだ。

「さすがシロー様です！それじゃあティカちゃん。行きますよ」

先ほど四郎がティカにしたようにミリーがシローの首根っこを掴み、ズルズルと引きずって行く。さすがの四郎でもこれには抵抗出来なかった。

「り、理不尽だ……」

引きずられながらも四郎は涙ながらに語った。ティカは一緒に仕組んでいたとはいえミリーの怖さを改めて実感した。そんな二人の気持ちに全く気付いていないある意味おめでたなミリーは四郎を引きずったまま鼻歌を歌いながら街門へと向かって行った。

その光景を一部始終見ていた街人たち、特に男性はやっぱりに女に逆らうべきではないなと再認識し肩身が狭そうにしながらその場を去って行ったという。

スレイターに会おう2

カトン・ターカーは焦っていた。そしてそれ以上に興奮していた。カトンにとって戦場はあくまでもオマケでしかなかった。欲しいのは名誉から釣れる女や酒であり決して戦いではない。名誉を求めたおかげで女には困らなかつたし、数多くの女と寝られた。

しかし今となつては女にも酒にもそれ程の価値を感じない。理由は簡単だ。カトンにも愛すべき人が出来たからである。自分のような人間を好いてくれて支えてくれる愛しき妻。それだけでカトンには十分だった。

そんな妻に心配を掛けなくなかつた。だから第二部隊長になつてからは引退を見据えつつ、若手の育成に力を注いだ。

そして出会つた。スレイター・ファーフードに。貴族、しかもファーフード家の長男なのに騎士をしているという変わり者である。

しかしその実力はかなりのものだった。その実力を初めて見た時にカトンは決めた。彼に全てを教えることが出来たら引退しよう、と。そして今日は実戦も兼ねて森へ来ていた。一応、近頃森で起きている様々な異常を調査するという形をとつてだが。

「逃げろ、スレイター」

しかしその異常の原因というのが二人の想像していたよも遥かに危険なものだった。

「しかし隊長――」

異常の原因は一匹の魔物だったのだ。それも災害級と称される程の。「お前はアステリへ戻り、王都騎士団全部隊に連絡するんだ。それまでは俺の命をもって時間を稼ぐ」

>ドラッグマーク<

ありとあらゆる腐敗をもたらす異形の騎士。全身が毒々しい紫色の鎧で出来ており、中身は空洞だがそこには常に人間の悪意が渦巻いているという災害級の魔物だ。

その強さは王都騎士団が総掛かりで戦ってもギリギリ勝てるかどうかだ。最近、森で起きていた異常は全てドラッグメーカーによる腐敗が原因だったのだ。

そんな化け物が今二人の前にいる。もしここで二人とも死んでしまったらこの危機を他の誰にもか伝える事が出来ない。それは王都アステリのひいてはアステリ王国の危機に直結する。故に一人が足止めをしている間にもう一人が危機を知らせに行く、というのが一番の策なのだ。

だがカトンが足止めを希望した理由はそれだけではない。この優秀な後輩を死なせたくなかったからだ。そしてそれ以上に自身にとって限界以上の敵と戦えるのがカトンにとって喜びだったのだ。カトンは決して戦いが好きではない。それでも幼少の頃から戦い続けていたのだ。それはもうカトンの一部だった。故に自身の力を全てを開放出来るというのは喜ばしい事だったのだ。

「分かりました！必ず戻ります！必ず戻りますから！！」

スレイターはその先の台詞をあえて言わずに走り出した。カトンはそんな頼もしい後輩を見送りつつ剣を構える。ドラッグメーカーを見据える。

「来い化け物。このカトン・ターカーが相手だ」

街の外へ引きずられていった俺は謝罪に謝罪を繰り返しようやくミリーから解放された。

「非道い目にあったぜ」

「シロー様が悪いです」

ミリーが可愛らしく頬を膨らませながら言う。ティカが後ろでくすくすと笑っている。

「とりあえず森へ行くか。あそこの森でいんだろ？」

俺は少し先にある緑を指差す。森はなかなかの規模のようだ。少な

くともコルク村の脇にあつた森よりは大きい。

「そうよ。さつそく行きましよ」

ティカが俺とミリーを抜いて先頭に出る。ティカはお嬢様なのでこういうアウトドアな事はあまりしたことがないのだろう。ワクワクしてるのが見て取れる。

「ふふ、ティカちゃん楽しそうね」

「そーだな」

なんとなく心が安らぐ。ここに来てからは色々あつたからな。あまり休んだりもしてなかったし。

「師匠、ミリー、早く行くわよー！」

「はしやぎすぎだろオイ」

「ティカちゃん子供みたい」

「あたしは子供じゃないわよ！しゅ、淑女よっ！」

「ぶっ」

俺が笑つた瞬間にティカから蹴りが飛んでくる。油断していたのでモロに顔面に喰らってしまった。

「いふあい」

「自業自得よ」

ぶんすかと怒つたティカはミリーに絡まっている。いつの間にそんなに仲良くなつたんだ。

「シロー様早く行きますよ」

三人でわいわいと騒ぎながら森まで歩いていく。

森の入り口まで来た時、かなりの違和感を感じた。隣にいるミリーに目配せをする。ミリーもこちらを見ていた。

「どうやらまた一波乱ありそうだな」

俺は二人に聞こえないように呟いた。

スレイターに会おう3

「さつさとスレイターを探すか」

「ちよつとなにお兄様を呼びすてにしてんのよ!」

相も変わらずティカは沸点が低い上に騒がしい。まあこれ位騒いでいれば向こうも俺たちの存在に気付くだろうから構わないが。

「はいはい」

とりあえず返事だけはしておく。

「……………」

「ミリーどした?」

森に入ってから喋らなくなったミリーに声を掛ける。やはり原因はこの不吉な違和感なのだろう。

「嫌な予感がします」

ミリーは竜だから第六感が人間より優れている。だからこそミリーのその言葉を無碍に扱う事は出来ない。

「嫌な予感?」

「ええ、恐らくは何かしらの魔物がいるのかもしれませんが」

「師匠とミリーがいれば大抵なんとかなるから平気でしょ」

深刻そうなミリーに対し、ティカはあくまでも樂觀的だ。俺ももちろん深刻に捉えてはいるがミリー程ではない。

「もし何かヤバいならさつさと済ませた方がいいかもな。スレイタ

ーさんの所に一気に転移するか?」

「嫌よ!そんなの風情がないじゃない」

「お前なあ、自分の兄貴が危ないかもしれないんだぜ?」

「お兄様はそう簡単にやられる程ヤワじゃないわよ」

ティカがここまで言うのだから弱くはないのだろう。しかし所詮はただの人間だ。絶対とは言い切れない。

「ティカちゃんの言う通りこのまま普通に探しましょう。下手に転

移で魔力を使ったら魔物に感知されるかもしれないですし。出来る事なら彼らと合流する前に問題を片付けたい方が良いかと」

なるほど。さすがミリーだ。伊達に何百年も生きてる訳じゃないな。「シロー様、何か失礼な事考えてないですか？」

す、鋭い。やはり女性に年齢の話をするのは地雷だったか。ミリーの笑顔が凄く恐い。眼が笑ってないし。

「考えてない…です」

ミリーの迫力に思わず敬語になってしまった。ティカがこっちを見てにやにやしてるのが非常にムカつく。

ガサガサッ

不意に俺らの後方の茂みから音がした。とつさに俺とミリーは臨戦態勢に入る。ティカは普通に驚いている。

「誰だっ！」

大声を出し威嚇する。すると茂みの中から一匹の魔物が出て来た。

見た事のない魔物だ。馬のようだが頭が二つある。しかも鬣がうねうねと動いている。

「えっ!？」

しかしどうやらミリーは知っているようだ。

「知ってるのか？」

「恐らく>カプセルユニコーン<かと」

それを聞いたティカが眼を大きく見開く。よく見ると身体が震えている。さっきまであんなに強気だったというのに。それ程ヤバい魔物なのか。

「カプセルユニコーンって災害級じゃない…」

「災害級？」

「ええ。文字通り災害級の魔物の事です。現在災害級に指定されている魔物は十種しかいません。その内の一種>カプセルユニコーン<です。特徴は鬣が千切れカプセルが出て来る事です」

災害級か。初めて聞いたな。しかも十種類しかないのか。

「そのカプセルは何が入ってるんだ？」

「分かりません。風を起こすかもしれませんが、魔物が出てくるかもしれません。最悪病原菌や殲滅魔法が出てくる可能性だってあります。とにかく何が出てくるか全く分かりません。しかも本体もユニコーンと同じ程の速度があり非常に厄介です」

カプセルユニコーンは俺らを見てヒヒーンと鳴くとカプセルを二つ落とし、去って行ってしまった。

「……おい、どっか行っちゃったぞ」

「そうですね。しかしまだカプセルが残っています。油断はしないでおいで下さい」

それを聞いてようやくティカが武器を構える。下手にカプセルを刺激すると何が起きるか分からないのでその場で待機する。

二つのカプセルにヒビが入り、中から魔物が出てきた。どうやら二体とも同じ魔物が出て来たようだ。紫色の鎧で出来た人型の魔物だ。

「…そ、そんな！よりもよって>ドラッグマーカー<！？なんで災害級から災害級が出てくるのよっ！！」

ティカが半ばヤケクソ気味に叫んだ。ミリーも額に汗を浮かべている。

「こいつも災害級なのか？」

硬直している二人にとりあえず尋ねる。答えたのはミリーだった。

「はい。カプセルユニコーンと同じ災害級魔物>ドラッグマーカー<。腐敗にして不敗の異形の騎士です。気をつけて下さい」

「了解。俺は右のを殺る。ミリーは左のだ。ティカは援護を頼む」
そして森での死闘は幕を開けた。

スレイターに会おう4

ドラッグマーカーが何かを仕掛けてくる前に俺は動き出す。瞬時に間合いを詰め蹴りを繰り出す。しかしそれはドラッグマーカーの左腕だけで防がれる。

「なっ…!？」

これにはさすがに驚かずにはいらなかった。蹴りといっても普通の蹴りじゃない。神の技すら使える俺の蹴りだ。それを片腕だけで止めたのだ。

「シロー様っ！」

ミリーの叫びと同時に右足に激痛がはしる。右足に目を向けるとそこにはあったはずの足が溶けていつている。

「>遡及<！」

被害が広がる前に足の時間を蹴りを放つ前まで戻す。

「なるほどね。自分に触れたものを腐敗させられるのか」

ドラッグマーカーとの距離を空ける。しかし足元が急にぬかるみバランスを崩す。地面が腐敗してせいで足が沈んだのだ。

「>鎌鼬<」

物理耐性はかなりのものと分かったので次は魔法耐性の方を調べる。この程度の魔法は小手調べだ。

しかし鎌鼬がドラッグマーカーの身体に触れた瞬間腐敗して消滅してしまった。

「おいおい。どうやって殺せばいいんだよ」

「ドラッグマーカーに並大抵の攻撃は通用しません」

俺とミリーが話している間に二体のドラッグマーカーがこちらへと近づいて来る。ティカが作戦を練っている俺らの代わりに牽制程度に魔法を放つ。

「なら並大抵じゃない攻撃をすればいい」

俺はニヤリと笑うとミリーもそれに倣ってニヤリと笑った。

「私もそう思います」

「ティカ！奴らの足止めをしろ！！」

するとそれを聞いたティカが眉をしかめながらも了承する。

「>雷網<！！」

ドラッググマーカーの足元に雷が出現し網のように絡みついた。いわゆる麻痺状態である。

「あんまり長くは保たないわよ！！」

俺はポケットに手を入れ、先日買って放置していた武器を亜空間から取り出す。

「それは…鉄球ですか？」

「ああ。多分、神器かそれに準ずる武器だ」

そう言って俺はそれに>神<を注ぎ込む。>神<を使った事により俺の身体が純白へと変わる。

「喰らえ！」

俺は>神<をたっぷり注ぎ込んだ鉄球をドラッググマーカーへと投げ込む。それはドラッググマーカーにぶつかりと同時に二つに増える。そしてその二つが腐敗する前に鉄球は更に四つに増える。

鉄球は腐敗する前にひたすらに増えていきあつという間にドラッググマーカーを包み込んだ。金属同士がぶつかり合う不愉快な音が響く。

「私も忘れてもらっては困ります。>流心・流浪<」

ミリーはドラッググマーカーに近寄り直接手で触れた。もし普通にそんな事をしたら腕は腐敗し絶命するのが落ちだろう。

しかしミリーは自身の流れを操る事により自らに来るはずだった腐敗を全てドラッググマーカー自身へと向けたのだ。一見この作戦は無意味のように見える。なんせ腐敗はドラッググマーカー自身には効かないかもしれないからだ。

それでもミリーがこの技を使ったのは絶対に効くという確信があ

ったからだ。根拠は地面だ。もしドラッグマーカーが触れたもの全てを腐敗させるのなら真つ先に腐るのは大地だ。

だが大地は別段腐敗してはいない。ここで思い出されるのはさっきドラッグマーカーが地面の一部を腐敗させた事だ。これにより一つの推測が立てられる。

もしかしたらドラッグマーカーは任意に腐敗させる対象を選べるのではないか。ならばドラッグマーカーの鎧も対象にしていらないだけで腐敗させられるのではないか。という事だ。

そして結果は予想通りだったという訳だ。

「終わりましたね」

「終わったな」

「はあ…はあ…終わったわね」

災害級を相手にしたというのに全く疲れた様子を見せない俺とミリィ。それに対しティカは大分お疲れのようだ。

「やっぱり魔物だからな。手加減しないで殺しても平気だからやりやすい」

「そうですね。対人戦となるたけ手の内を見せないようにしたり、殺したりしないようにと色々縛りが多いですからね」

ミリィがやれやれといった感じに溜め息を吐く。

「とりあえず急いでスレイターさんを探そうぜ。もしかしたら他にも何か強力な魔物がいるかもしれないしな」

「そうよっ！早くお兄様を探さなきゃ！！」

そう言つて俺たちはスレイターさんたちの搜索を再開した。

もちろんドラッグマーカーの腐敗の被害が下手に広がらないよう

に最後に俺がその場を>浄化くしたのは言うまでもない。

スレイターに会おう5

ドラッグマーカーを倒した俺たちは今森の中を魔物の気配を追うように歩いていた。

「どうして>ドラッグマーカー<は>カプセルユニコーン<のカプセルの中にいたんだ？」

「確かに気になりますね。>カプセルユニコーン<はカプセルにお気に入りのものを無理やり詰め込みます。さつきカプセルの中に入っていたのは>ドラッグマーカー<です。それはつまり災害級をカプセルに無理やり詰め込んだという事です。不可能ではありませんが不可解ではありますね」

そうだ。ドラッグマーカーは腐敗の能力を持っている。簡単に捕まえられるとは思えないし、仮に捕まえたとしても腐敗で抜け出せるはずだ。あの鬣が変化したカプセルの強度が腐敗の能力を上回っているとは考え難い。なんせドラッグマーカー自身をも腐敗させるほどのものだ。たかがカプセル程度を腐敗させるなんて雑作もないはずだ。

「誰かの差し金…『黒の獣』絡みか？」

「少なくとも『黒の獣』は関係なさそうですね。黒の力を使っているかもしれません」

俺とミリーはうんうんと悩んでいる。不意に後ろにいたティカが呟くように言った。

「もしかしてカプセルの中で育ったんじゃない？」

「「は？」」

思わず二人揃ってティカの方を振り返る。その動きがあまりにシンクロしていたためかティカは驚いてビクリと身体を震わせた。

「い、いやだから…カプセルの中に鎧をしばらく入れておいたら>

ドラッグマーク<に進化するんじゃないかなって思ったのよ」

「さすがにティカちゃんそれは…。大体鎧が魔物になるなんて」

ミリーの指摘に恥ずかしそうに顔を赤らめてそっぽを向いたティカ。
「た、ただ何となく思ったから言っただけよ！ダメなら聞き流してよっ」

「……………いや」

「どうかしたんですかシロー様」

「いや、ティカの意見は多分合っている」

するとティカがパアツと顔を輝かせる。拗ねたり疲れたり照れたり笑顔になったりとティカは本当に忙しいやつだ。

「えっ？本当に！？」

「ああ。唯一違うのはカプセルの中に入れてたのは鎧じゃなくて兵士の死体だって所だ」

俺が真剣に言うのと二人は何とも言えない表情をする。

「…兵士の死体ですか」

「ああ。恐らく>カプセルユニコーン<は兵士の死体をカプセルに入れてたんだ。中に入れた死体は時間と共に腐っていく。そして最後にカプセルの中に残るのは鎧と兵士の無念だけだ。恐らくこれが>ドラッグマーク<の正体。戦場で無念の死を遂げた兵士の怨念が具現化したもの」

「…………でもそれなら>ドラッグマーク<って何で大量発生しないのよ。>カプセルユニコーン<が戦場で死体を拾ったらかかりの数<の>ドラッグマーク<が出来ることになるじゃない」

確かにティカの疑問ももっともだな。ミリーも同じように納得していないような表情をしてるし。

「それは多分怨念のレベルの違いだろうな。拾った死体に宿る怨念のレベルが低ければ出来上がる>ドラッグマーク<のレベル、つまり腐敗能力が低いものが生まれる事になる。基本ユニコーンなんて森にいるもんなんだし大概の>ドラッグマーク<は大した強さじゃなくて森の魔物たちに狩られていたんだろ。稀に森の魔物が

狩れなかった強者の>ドラッグマーカ<が人里に出て来て怨念を晴らしていたからそれが災害級に指定されたんだと思う」

「なるほど。確かに辻褄は合いますね。なら私たちが戦った>ドラッグマーカ<というのは…」

「ただの雑魚」

それを聞いてティカが抗議してくる。まあティカにしてみれば十分強敵だったのだから仕方ないといえば仕方ないのだろう。

「ですが何故今までその事実気付く人がいなかったんでしょうか？>カプセルユニコーン<だってこんなに王都に近い森にいるというのに」

「いや多分この森に元々>カプセルユニコーン<は生息していないはずだ」

「じゃあ他の場所からわざわざ移動してきたって事？」

今日のティカはいつもより冴えてるな。やはりピクニックでテンションが上がって頭の回転も速くなったのだろうか。

「ああ。他にも本来生息していない場所に新たな魔物が現れるような事例が最近いくつも確認されている」

コルク村にいたデカブトムシとか大きいワームとか。他にも王都で受けた依頼に似たような感じのがいくつかあったしな。

「なるほどね。じゃあその原因ってのは何なのよ？」

「原因は恐らく『黒の獣』だろうな。そんな化け物が復活しようとしてるんだ。第六感が鋭い魔物なんかは既にそれを察知して生き残るために色々動いてるんだらうよ」

「やはり最終的には『黒の獣』ですか…。もしこのまま魔物たちの動きが活性化していったら世界は大混乱に陥りますよ。予想よりも遙かに悪い状態ですね」

「ああ」

俺たちは会話をこれで打ち切り再び、搜索と討伐の二つを視野に入れ森を奥へと進んで行くのであった。

スレイターに会おう6

森の中は迷路の中。ただ真つすぐ走っていく事すら難しいものだ。そんな中、スレイター・ファーフードは迷わずにただ真つすぐに走っていた。慌てているにも関わらずだ。それは才能と努力の二つが拮抗して初めて手に入れられるものだ。

しかし今のスレイターにとってそんな事は些細な問題だった。必要なのは強い味方。すなわち王都騎士団。自らの師であるカトン・ターカーを救うために必要な力だ。

スレイター一人ではカトンを救う事が出来ない。その事実はスレイターにとつて胸が切り裂かれそうな程辛いものだった。まだ王都騎士団に入つて数週間程度だ。その日数だけを見るなら大した思い入れもないように見える。事実まだ王都騎士団自体にはそれ程思い入れはない。

思い入れがあるのはカトン・ターカー個人にだ。その思い入れの理由は単純だ。

純粹な憧れ。

僅か14歳で傭兵として名を挙げ、17歳には国内最強といわれる王都騎士団で第二部隊長となつた憧れの人。今は25歳で美人の奥さんが出来て以来女遊びを止めた愛妻家としても有名だ。

だからこそカトンの隣に立つ資格がない自分の事が悔しくて惨めだった。スレイターは自分に言い聞かせる。今出来る事はただ助けを求める事だけ。

そんな様々な葛藤に身を焼かれそうになりながらも休む事なく森の中を駆ける。そしてそこで信じられないものを見た。

「……なっ!？」

そこにいたのはガルトにいるはずの大切な妹だった。

この森の中心近くに大きな気配がある事には既に四郎、ミリー両名共に気付いていた。もちろんティカは論外である。その大きな気配のせいで他の生き物たちの気配が霞んでしまい、搜索がしにくくなってしまう。

「おい、何か来るぞ。構えろ」

四郎の指示にミリーとティカが構える。しかし二人は得物を持っていないので構えは当然徒手空拳である。

森の奥から一つの影が三人の目の前に現れた。

「……なっ!？」

突然目の前に現れた人物は四郎たちを見て驚いたような表情をしている。

「お兄様!？」

その膠着の中、真っ先に反応したのはティカだった。その台詞で今飛び出して来た相手がスレイターだと気付いた四郎は沈黙を保つ事を選択した。

「ティカ!？どうしてここに…!」

「どうしてつてももちろんお兄様を助けに来たのよ!」

どうやらティカを含めたファーフード家の面々はティカが冒険者として旅に出た事をスレイターに伝えていなかったらしく彼ははた目で分かるほどに狼狽していた。

「…助けにつて…今すぐここから離れるんだ! たった今この森で災害級の存在が確認された。もう一介の冒険者たちの解決出来る範疇じゃない。俺はこのまま王都騎士団まで応援を要請しに行く」

「要請なら今すぐ>光字<で連絡すればいいじゃない」

そう言ったティカに四郎は口を挟んだ。

「ジャミングだ。どうやらこの森は>光字<を送るのに必要な力が

妨害されてるらしい」

簡単に言えば電波が通じてないという事なのだがそれをティカに説明するのも大変なので簡潔に述べた。

「その通りだ。…ええとそれで君たちは？」

「シロー・タチバナ。妹さんの所属してるチーム>救いの手<のリーダーだ」

「同じく>救いの手<所属のミリー・サウノーズンです」

「そうか。妹が世話になってるな。さっきの話を聞いていたなら分かると思うが今すぐここを離れた方がいい」

スレイターは真剣な顔をして三人に忠告する。いや忠告というよりも命令に近いものだった。それを聞いて四郎がニヤリと笑う。

「そいつは出来ないな。俺はこの奥にいる>ドラッグマーカ<を倒しに来たんだからな」

「っ！？何故君はそれを知ってるんだ。それに>ドラッグマーカ<を倒しに来たなんて冗談もほどにししてくれ」

呆れたように肩をすくめるスレイター。口調が慌てているからなのかいまいち一貫性がない。貴族としての口調とスレイター個人の口調が入り混じっている感じだ。

「冗談じゃないさ。とにかく俺は奥へ行く」

四郎はそれだけ言って奥へと走り出す。それに続くようにミリーも走り出す。その場に残されたのはティカとスレイターだけだった。

「な、何なんだアイツらは！！自分から死に行くなんてバカげている！」

そう言いつつも二人が>ドラッグマーカ<の所に向かった事によりカトンの生存の確率が上がったので内心は複雑な気持ちだった。

「大丈夫よお兄様！あの二人はかなり強いし。特に師匠なんて通常時で災害級だし」

「…お前があゝの二人を信じてるのは分かった。俺が二人の様子を見に行くからお前は王都へ連絡に行ってくれ」

妹の仲間を見捨てる訳にはいかず苦肉の策を選択するスレイター。

しかしティカはそんな事は意に介さない。

「あたしも二人の所へ行くわ」

結局その場からティカも走り去ってしまいスレイターだけが残された。

「分かったよ！分かりましたよ！！行けばいんだろクソっ！！」

スレイターは半ばヤケクソ気味に叫んで三人を追いつけて行った。

スレイターに会おう

戦いはえらく一方的だった。ドラッグマーカ―に突撃を仕掛けたカトン。しかし剣があつという間に腐敗し捨てざるを得なくなる。

「化け物がっ!!」

近寄ってくるドラッグマーカ―との距離を取りつつ鎧の関節部分の隙間を目掛けてナイフを投擲していく。もちろん何の効果もない。幸いドラッグマーカ―は移動速度が速くないので未だ致命傷になるような攻撃はもらっていない。もっともドラッグマーカ―に少しでも触れたら即致命傷決定だが。

「……せいっ!!」

今ので手持ちのナイフが全て無くなったので身体に纏っていた>武<を解除する。詰み状態である。しかもドラッグマーカ―を引き寄せるために>武<を多めに纏っていたので体力の消耗が激しい。

「ここまでか…」

カトンは先に逃がした弟子の顔を思い出し苦笑する。ドラッグマーカ―が目の前まで来てカトンの腕に触れた。

「うぐあっ!!」

腕が腐敗していく。このまま放っておけばすぐに全身腐敗して終わりだろう。ドラッグマーカ―は追撃をかけてくる様子はなくカトンの奥を見ている。

すると突然ドラッグマーカ―が後方へと飛び退いた。そこに一迅の風が駆け抜けた。その風は腐敗していた腕を根こそぎ刈り取った。

「…っぐうっ!!」

予想外のダメージに思わず声を上げるカトン。しかしお陰で腐敗の進行が止まった。未だ痛みに顔を歪めているカトンに後ろから声が掛かった。

「大丈夫かよ」

カトンが振り向くとそこにいたのはここらでは珍しい黒眼黒髪的美少年だった。もちろん四郎である。その後ろにはミリーが控えている。

「ミリー、奴の足止め頼む」

「はい」

ミリーは一人ドラッグマーカーへと向かう。その後ろで四郎はカトンを回復させるためにカトンの患部を調べる。

「腕だけだな。＞遡及く」

＞治癒くだと無駄に力を使う上、あまり人前で白い姿になるのはまずいと判断して＞遡及くを選択した四郎。

「…う、腕が!？」

わずか数秒の間にカトンの腕は数分前の状態へと戻る。あまりの非常識にカトンはまともに口を開く事すら出来なくなっている。

「すぐにスレイターさんも来るからとりあえずそこで休んどけ」

四郎はそれだけ言ってミリーの方へと向き直る。

「どうだミリー？」

「…だめですね。隙をみて＞渦流・流浪くで腐敗を鎧へ押し返したんですが効果はありませんでした」

「やっぱりな。どうやらこのドラッグマーカーはさっきのよりも怨念が深いらしい」

恐らくこれでは自分の鉄球も効かないだろうと四郎は判断しミリーと作戦を練る。

「シロー様の＞浄化くで怨念は消せないんですか？」

「怨念は消せても腐敗を消せる訳じゃない。さっき＞浄化くを使つたのはドラッグマーカーが死んだ後に残した怨念を浄化するためだ」

解決策が出て来ない内に後ろにいたティカとスレイターたちがようやく四郎たちに追いついた。

「お前ら勝手に行きやがって!!それと隊長ご無事で何よりです…

！
」

「師匠足速すぎよ！台風かつ！！」

どうやらティカのやかましさは兄譲りらしい。文句を言うだけ言った二人はカトンの脇に寄りミリーと四郎の戦闘を見守る事を選ぶ。

「……………」

しかし四郎はそんな二人を無視するかのように黙って思考を続ける。四郎がだんまりで動かなくなったのでミリーは再び一人でドラッグマーカーの相手をする。水や氷の矢を使って巧みに攻撃していく。もっとも効果は一切ないが。

「……………よし」

不意に四郎が思考の世界から戻ってくる。

「何か思い付きましたか？」

「ああ。ミリーは少しの間足止めを頼む」

「さつきからずっと足止めしてますが？」

少し棘があるミリーに事実なので言い返す事が出来ない四郎。少しだけ眉がヒクヒクしている。

「…とにかく、目には目を、歯には歯を、災害級には災害級をだ！

！
」

四郎はとりあえず誤魔化すように大声で啖呵をきった。

スレイターに会おう8

「…とにかく、目には目を、歯には歯を、災害級には災害級をだ
し！」

四郎は半ばヤケクソ気味に叫んでから自らの身体に>神<を纏う。
すると全身が純白に染まる。後ろにいるスレイターとカトンが息を
呑んでいる。

「よしやるか」

四郎は両手を広げ、目を瞑り、空を見上げた。その身体からは神々
しい程の>神<が溢れ出ている。

「し、師匠何を…？」

ティカが四郎には聞こえない位小さい声で呟いた。恐らく脇にいた
スレイターとカトンには聞こえていたと思うが。

ミリーはドラッグマーカの相手をしながら背後の四郎から感じる
圧倒的な威圧感に冷や汗をかいていた。竜の中でもこれほどの威
圧感を出せるのはそうそういない、と。改めて四郎の規格外さに驚
かされた。しかしそれでも四郎がしようとしている事の検討はつか
なかったが。

四郎がポーズを決めてから10秒、20秒と経過していくが何も
起きない。スレイターやティカが内心失敗なのかと思っていると突
然カトンが低い声で呟いた。

「そ、空が…」

その言葉に釣られてスレイターとティカが空を見上げると先ほどま
で燦々と輝いていた太陽が姿を隠し、その代わり空は分厚い雲で覆
われていた。しかもよく見ると曇っているのはこの森の上空だけで
あった。

「ま、まさか師匠…」

「おいおい、こりや何の夢だ」

「現実…か…？」

ティカは四郎の規格外さに顔を引きつらせ、スレイターは現実逃避気味に目を逸らす。カトンはさっき本当は自分が腐敗で死んだのではないかと真剣に思い始めた。

「ミリー、離れろ」

ミリーはすぐにドラッグマーカーから離れティカたちの所まで下がる。そしてやはり上空を見上げ目を大きく見開いて驚いている。

「喰らえ>天球儀<」

するとドラッグマーカーの上空にある分厚い雲から眩い光と共に轟音が響き渡る。雲から生み出された天然の雷がドラッグマーカーへと直撃する。その圧倒的な破壊力により土煙が消える頃にはドラッグマーカーは跡形も無くなっていた。ドラッグマーカーがいた場所はクレーターなみに挟れておりその凄まじさ物語っている。

四郎が使ったのは十神技のうちの一つ。下から三番目の技だ。先ほど四郎も叫んでいた通り名前は>天球儀<。天候を操る技だ。つまり雷だけでなく雪や台風、大雨などが自由に操る事が出来るのだ。威力も範囲も自由自在だ。まさに災害級という訳だ。普通の魔法に例えれば恐らく殲滅魔法よりも一ランク上のものといった感じだろう。

「ふう…終わったか」

四郎は>神<を解除し、その場に座り込む。いくら下から三番目の技といっても神の技なのでそれなりに消耗が激しいのだろう。

四郎が座り込んだのを見てミリーが近付いて来る。それに続くようにティカ、スレイター、カトンも四郎へと近寄ってきた。

「大丈夫ですか、シロー様？」

「少し疲れた。まあ初めて使った技だからな。加減も分からなかったし」

四郎が苦笑しながら答える。

「ていうか師匠…ついに天気まで操るなんて…災害級以上に災害級

よね…」

「本当に人なのかよ…竜とかじゃねーのかよ」

「凄まじいの一言だな」

各々勝手な事を述べ始めた。ミリーはそれを聞いて笑っているだけだ。普段はシロー様、シロー様と言っているわりには何故かこういう時四郎を庇ったりしないのだ。

「これedyouやく落ち着いたな。スレイターさんにも会えたし」

「そういえば一体俺に何の用なんだ？」

四郎に言われて初めて妹がわざわざ会いに来たのを思い出し話を切り出す。

「情報のやり取りがしたいんだ。王都騎士団と」

「俺らと？」

その台詞に食い付いたのはスレイターではなくカトンだった。

「ああ。ええと…」

「王都騎士団第二部隊長カトン・ターカード」

「俺はチーム>救いの手<のリーダー、シロー・タチバナだ」

その後にスレイター、ティカ、ミリーと自己紹介をしていく。

「それで俺らと情報のやり取りをしたいってのはどうゆう事だ？」

「そうだな…王都騎士団は気付いてるか？最近の異常に」

「……異常というと魔物の異常発生か？」

カトンは少し考えてから答えた。他の三人は黙って二人の会話を聞いている。

「ああ。今回のコレもそうだ。本来その場所にいるはずのない魔物がそこにいる、という事件が最近多くなってきている。俺たちはそれについて調査しているんだ」

『黒の獣』の事は今は切り出さない。言っても恐らくは信じてもらえないだろうからだ。

「調査…誰かからの依頼なのか？」

「ああ。王女様からの密命だ」

さも事実かのように四郎は調査について語り出した。

スレイターに会おう

「ああ。王女様からの密命だ」

ここで四郎は大きな嘘を吐いた。自分たちの背後に国がいることを匂わせることで余計な探りを排除しようという考えたのだ。

「お、王女様：からだとは…？」

カトンは驚きと不信感が半々に籠もった眼で四郎を見つめた。王女は少なくとも四郎に借り、それも人生を救われたという大きな借りが存在するので何かあれば協力してくれるだろうと踏んでいるのだ。フリストにも登録してあるので連絡もいつでも出来る上、わざわざ四郎たちの後ろを追って来ている人物がいるのだ。いくらでも誤魔化しが効く。

「ああ。とは言ってもこの密命を正式に受けたのは最近だ。王女様の目と足を治すっていう大仕事が終わったからなし崩し的にそのまま頼まれたんだ」

四郎は正式に、という言葉強調しながら言った。嘘と真実を織り交ぜて巧みに誘導する四郎。王女の目と足を治した、というのをさも当然かのように言うことで真実味を帯びさせるのだ。もっとも王女を治療したのは事実であるが。

「ティカ、彼が言ってる事は本当なのか？」

ここに来てようやくスレイターが話に参加して来た。四郎ではなくティカに尋ねたのは三人の中で一番信頼出来るからだろう。

「……王女様を治したのは本当よ。それに異常について調べているのも本当」

ティカを含む>救いの手<のメンバーには王女の治療をしたのが自分だと伝えているので素直な事実だけを伝えるティカ。その愚直な所はティカの長所でもあり短所でもある。

「なるほどな。異常と王女様の病気について調べていて、第一優先

の王女様の治療が終わったから正式に異常の捜査についての許可をもらった訳か」

十あるうちの十を全て語る必要はない。相手は優秀なのだから一を語って都合のいい十へと誘導するだけでいいのだ。王女の許可なんか貰っていないし、貰った所で国王の許可ではないのだから大した使い道があるとも思えない。

だが政治的なやり取りではなく個人のやり取りならば王女というフリーズは大きく作用する。そこを四郎は狙ったのだ。個人として交渉を仕掛け、それがいつの間にか>救いの手<と王都騎士団との繋がりになる事を。

「そーゆーこと。でもいくら俺たちでもチームで調べるには限界がある。だからティカと兄妹であるスレイターさん、ひいてはそのスレイターさんが所属する王都騎士団にも協力してもらおうと思ったんだ」

「だが俺たちはアステリからは大して動けないし、ましてや他の国にいったりは出来ないからあまり役に立たないんじゃないか？」

カトンは四郎の事を信用したかはとりあえず置いて疑問に思った事を口にした。しかし疑問を口にしたという事は話を呑み込んでいるという事である。よってこの時点で四郎からの協力を引き受けたようなものである。

「俺たちは近々帝国に行くんだ」

「帝国って…大会か？」

「ああ。もしこの異常が人為的なものであるにしろないにしろ、大会で大勢の人が集まるんだ。当然情報も集まる」

「なるほどな。その帝国に行っている間の情報が欲しいという訳か」

「そゆこと。協力してくれるか？」

「ああ。密命とはいえ王女様からの依頼だ。断る理由がない」

そう言ってカトンが手を差し出す。四郎はこっちの世界でも握手なんて風習があるんだなと思いつつもその手を握る。

「よろしく」

こうして無事、王都騎士団からの協力を取り付けたのだ。もつとも今は第二部隊だけという微妙な状態だが。

「ちなみに第一部隊長はどんな人？」

これから協力を取り付ける予定なので四郎としては是非聞いておきたい所だった。出来ればカトンに説得して欲しいと考えたりもしているが。

「強いぜ」

「変わった男：いや女か？」

スレイターの答えはシンプルだったがカトンの答えはいまいち要領をえない。

「一筋縄では？」

「「いかない」」

ここだけは二人揃って同じ答えを出した。四郎は頭を抱え込んだ。

「まあアイツの説得なら俺がしておこう」

結局、最後はカトンの空気を読んだ発言により無事お話は終わった。

過去？

スレイターたちとの交渉を終えた四郎一味は宿へと帰って来ていた。既にシャルビィとネミリアもコルク村から回収し終えている。

「米食いてー」

皆で夕食を食べている時、四郎が不意にそう言った。

「米って何よ？」

だいたいこの手の会話に最初に喰い付いてくるのはティカだ。メンバーの中で年齢も一番低く、お嬢様だったため好奇心旺盛なのである。

「ライスだよライス」

「ほう…ライスとはまた珍しいな」

「知ってんのか、シャル」

「ああ。私の出身地の近くにある村の名産品だ。もっとも名産品といっても小さい村だから大して出回ってはいないけどな」

「へー。俺のいた世界の俺の国だとライスは主食だったんだよね」

「なるほど。故郷の味が恋しいって訳ね。シローちゃんホームシック？」

ネミリアがにやにやとしながら四郎を抱き寄せようとする。しかしその手を妨害する手があった。

「うふふ、シロー様ったら寂しいなら私の胸で泣いて下さいね」

もちろんミリーだ。ミリーは四郎にベタ惚れどころか盲信しているのでネミリアの軽薄な行動を許せなかったのだらう。

「いや寂しくないから」

しかし相手は四郎。フラグは立てるが回収する気はさらさら無いようである。あっさりとネミリアとミリーの発言を一刀両断してしまった。

「師匠モテモテね」

「本人にその気はないようだがな」

などとティカとシャルビィが話し合っている。しかしこの二人も四郎を憎からず想っている。

「そういえば師匠の世界ってどんな所だったの？」

急に思い付いたようにティカが尋ねる。四郎にティカだけでなく全員の視線が集まる。どうやら全員四郎のいた世界の事が気になるようだ。正確には四郎の世界ではなく、四郎の過去、だと思うが。

「ん？魔法がない世界だったぜ」

「えっ！？でも師匠って魔法使ってるじゃん」

「まあね。あっちの世界で魔法使ってたのは俺くらいしかいなかったし」

そう言うのとティカが呆れたような顔をする。

「やっぱり師匠は化け物ね。魔法がない世界で魔法を使うなんて」
四郎以外の全員がうんうんと頷いている。

「確かに。だからあんまり向こうじゃ魔法は使わなかったし。まあ俺が魔法使えるのを知ってたのは家族と茜くらいだし」

四郎は自分が迂闊な発言をした事に気付いていない。しかしそれを見逃す程、女性陣は甘くは無かった。

「……茜？」「……」

その結果、全員見事にハモった。

「茜って誰ですか？シロー様」

「ん？彼女」

「か、かかかか彼女！！？？」

ミリーが四郎の爆弾発言にテンパってしまっている。ミリーだけでなく他の女性陣も同様だ。

「ああ。まあ付き合ってるって言っても形だけみたいなもんだったけどな。どちらかというとボディーガード兼つゆばらしい的を感じだつたし」

四郎はからからと笑いながら懐かしそうに話す。

「好き合ってたんではないんですか？」

四郎の発言で余裕を取り戻したミリーは真実を確かめるべく更に踏み込む。

「全然」

「ならどうして付き合ってたんですか？」

「そいつは秘密だ」

それだけ言って席を立つ四郎。ごちそうさまでだけ言って食堂から出て行ってしまった。残ったメンバーはお互いに顔を見合わせている。

「どう思います？さっきのシロー様の発言」

「師匠が好き合ってないって言うんなら本当じゃない？無意味に嘘を吐くような人じゃないし」

「無意味な嘘はね……」

昼間にスレイターたちを説得していた時に嘘を言いまくっていたが、そんな事はすっかり忘れているティカだった。

「だが好きでもそうでないにしろあまり話したそうではなかったな」

「そうね、私はまだ新入りだけど他の皆はシローちゃんの過去について何か知らないのかしら？」

「知らないな」

「知らないわよ」

「知らないです」

ここに来てようやく四人は気付いた。自分たちを導いた男について何も知らない事を。

圧倒的な力を持ち、人を救い、更には世界そのものまで救おうとしている異世界から来た少年。

結局、この日は四郎について知っている限りをお互いに話し合うというガールズトークで四人は盛り上がった。

部屋に戻った四郎は冷や汗をかいていた。

「あ、あぶねえ。言えねーよなあ。魔法使ってんのをすっかり見られて、そのあげく脅されて付き合うことになったなんて……」
自分の恥ずかしい過去がバレずにホッとしている四郎だった。

王国出発

「つーわけで武道大会に出たいから帝国へ行こう」

「シロー様大会に出場するんですか？」

「それ反則じゃない？師匠人間じゃないし」

ティカの容赦のない攻撃に呻く四郎。四郎がいくら人間離れしていると言っても人外人外と呼ばれば当然傷付くのだ。

「どうせなら出た方が良くないか？優勝すれば知名度も上がるし」

「知名度を上げたいのか？」

「いや知名度が上がれば交渉の時とかでも信用されやすいなあと思つて」

全く聞いた事もないような男と武道大会で優勝した男とではその信用度は天と地の差だろう。

「なるほどね。さすがシローちゃん。じゃあ私たちはシローちゃんが大会に出ている間に情報を集めておいた方がいいわね」

「えー！あたし観戦したいんだけど」

「私もシロー様の活躍を見逃す訳にはいきません」

「私は出場するつもりだ」

ミリーとティカは観戦、シャルビイは出場すると言い出した。ネミリアは頭を抱えている。

「はあ。仕方ないわね。なら大会期間中は大人しくしてましょ」

「いいのか？」

「いいも何もそうする以外に選択肢はないじゃない」

> 救いの手くは正直、個々の戦闘力はかなり強い。最近ではティカも強くなってきた上、それぞれの戦闘タイプのバランスがいいのでこのチームに勝てるチームはほとんどないだろう。しかしその分個性も強いので団体行動というものに向かないのだ。

好奇心優先で動くティカ。四郎至上主義のミリー。情報を集めるためいつの間にかふらりと姿を消しているネミリア。軍人氣質で堅いシャルビィ。最後には全てが型破りな四郎。この面子が一つのチームにまとまっている事自体がすでに奇跡なのだ。もちろん、奇跡といっても橘四郎が起こした奇跡だが。

「んじゃ、大会期間中は祭りを楽しみますかね」

「そうね。祭りは楽しむものだね」

「よし、決まったなら早速帝国へ行くわよー!!」

ティカが勢い良く宣言する。その一方でネミリアと四郎は暗い顔をしている。

「協調性…コレが次の私たちの課題のようね」

「そうだな」

四郎は大げさに肩をすくめて返事する。

それからお互いに王国を出るために準備をする。四郎は特に何も無かったが女の子は色々大変という事らしい。

「お待たせしました」

しばらくしてミリーたちがやって来る。四郎は短く返事をして歩き出す。

「帝国まではどのルートで行くのですか？」

「ランド大橋を通るルートだ」

「ランド大橋？サクラ大橋ではないのか？」

四郎が予定しているルートを答えるとシャルビィが疑問を挟んできた。

王国と帝国の間には大きなスズ力運河が流れている。そのため王国から帝国に渡るには船で渡るか、橋を使うしかないのだ。そして王都アステリから一番近い橋はサクラ大橋なのだが何故か四郎はランド大橋を選択したのだ。

「ランド大橋から入った方が多分混んでないから」

「なるほど」

シャルビィ、ネミリア、ミリーは四郎が言った事が理解出来たよう

だ。しかしティカは首を傾げている。

「何だよ？」

「武道大会で今の時期は国の出入りが激しいんだ。だから帝国に一番近いサクラ大橋は混んでるだろうって言ったのさ。そんな混んでる道に行くより情報を拾いながら遠回りした方がいいだろ？」

「確かに！」

結局サクラ大橋ではなくランド大橋を通るルートで決定した。

「帝国でのパイプ作りには何か考えでもあるの？」

アステリを出るとネミリアが尋ねてきた。あまり人には聞かせたくない話だからアステリでは尋ねなかったのだろう。

「向こうにいる皇子と宰相に接近するつもりだ」

そう言うとなミリアが疑問を浮かべる。

「皇子は分かるけど宰相に接近してどうするの？」

「金だ。帝国に金を寄付する」

「……どうして？」

「ネミリアなら分かってると思うが帝国は今金がない。それを武道大会で取り返そうとしているが恐らくは成功しない。だから俺が金をやるのさ」

「そんなにお金なんかあるの？」

「今はまだない。だが半年後にはかなりの大金が懐に転がり込んで来てるはずだ。その金をそっくりそのまま寄付してやるのさ。もちろん国の赤字を黒字に変える程ではないが個人で払った額としては破格のものになるはずだ」

もちろん四郎が言ってる半年後のお金とは印税のことである。

「はあー。さすがシローちゃんね」

ネミリアは呆れながらそう言った。

こうして彼らは帝国へと出発した。

道はある訳です

四郎たちがアステリを出て3日が経った。途中、四郎たちの亜空間にある家を見てネミリアが驚いたりはしていたが旅は概ね順調だ。「歩くの…飽きた」

ランド大橋へ向かう道中。例によって例の如く、一番最初に音をあげたのは四郎だった。

「師匠…いつも歩くの嫌がるよね」

「うるせー。現代っ子は歩かないんだよ」

まるで子供のようにぶーたれる四郎。そこには普段のクールな様相はどこにもない。ただのワガママな子供だった。

「なんつーか、こう…ズバーっと思いたいんだよね、俺は」

「旅は風情がないと面白くないじゃない」

ネミリアが髪をかき上げながらそう言った。その肌にはうっすら汗が浮かんでいる。

「そうだな。それに忍耐力と持久力のトレーニングにもなる」

「それに皆で話ながら歩くのは楽しいですし」

シャルビィとミリーも持論を展開し、四郎を追い詰める。

「…………泣けてくるぜ。＞浮遊<」

四郎はそう言うてから魔法を発動させる。文字通り浮かぶ魔法だ。スピードは歩く程度しか出ず、高度も地上から1メートルくらいまでしか浮かばないのであまり人気のない魔法だ。＞魔くの燃費も悪い。

しかし今の四郎には好都合だった。これなら皆と話しながら楽しんで進む事が出来る。消耗するのは＞魔くだけだが、四郎の＞魔くは未だ底なしなので問題はない。

「うわっ！師匠せこっ！！」

「あらあら」

「シロー様…無駄に凄いです」

「阿呆め」

全員の非難が集中するが四郎はどこ吹く風だ。まるでベッドの上にいるかのようになくつろいだ体勢で宙に浮かんでいる。

「そろそろ村とかないのか？」

「そうですね、もうそろそろハラ村が見えて来てもいいと思うんですが…」

「ハラ村？」

「はい。ランド大橋の最も近くにある村ですよ。色とりどりの花に囲まれた村らしいです」

ミリーが目を輝かせながら答える。ミリーもやはり女の子(?)なので花とかは好きなのだろう。

「でもよ、本当にそんなに花咲いてるのか？」

四郎はそう言ってから周りを見渡す。周りは一面砂だらけで砂漠のようになっていた。草も僅かながら生えてはいるが本当に申し訳程度でしかない。

「そうね…あまり精霊も活発に活動してないようだしね」

「そんな事分かるのか？」

「精霊を見る事は出来ないけど感じる事くらいなら出来るのよ。エルフだしね」

ネミリアは尖った耳を更にたてるかのように耳に神経を集中させている。エルフの耳が尖っているのは精霊という存在をより身近に感じるためだ。

「へえー、俺は時々精霊見えるけどな。精霊ってカラフルな小さい光のことだろ？」

「…ええっ！？シローちゃん精霊が見えるの？」

ネミリアが驚いたような顔をしている。他のメンバーはまたか、という呆れ半分、疲れ半分といった表情をしている。

「ああ。白くなった時に見える」

白くなった時というのはもちろん、神くを纏った時の状態の事である。

「シローちゃんって本当に何者…？」

「師匠の事考えてたら埒があかないわよ。気にしたら負けよ」

ティカが胸をはってそう答える。何故かドヤ顔をしている。

「そ、そうね…ティカちゃんの言うとおりだわ」

ネミリアは雑念を祓うかのように軽く頭を振った。すると先頭を歩いているシャルビィから急に声を上げた。

「村が見えたぞ！」

その言葉に釣られて全員が前方を見る。朧気ながらも先の方に村らしきものが見える。

「…やっぱ花ねーじゃん」

「おかしいですね…。パンフレットには彩の村、ハラ村って書いてあったんですけどね」

「パンフレットかよっ！」

四郎は久々にツツコミをした。四郎にツツコミをさせる事が出来るのはミリーくらいだろう。

「とにかく行ってみよう。何かあったのかもしれないしな」

シャルビィが四郎のツツコミを華麗に無視して話を元に戻す。

「そうよ。花楽しみにしてたのに許せないわ！原因があるならとちめてやるわっ…！」

ティカもご立腹のようだ。ミリーとネミリアも頷いている。

「……俺は美味しい飯があればいいんだけどな」

そうひっそりと呟いた声は誰にも届かなかった。結局四郎には花より団子という事なのだろう。

こうして四郎一行はランド大橋の最寄り村、ハラ村に着いたのだった。

ハラ村

「いやー、花とか以前に廃れてるよな」

村に入った四郎は遠慮なしに感想を言った。隣にいるティカもうんうんと頷いている。

「何かあつたんでしょうか？」

「うむ、活気がないな」

「とりあえず村人に話を聞いてみるか。このまま素通りするってのもいだけないしな」

「そうですね」

少し先の方にいた村人らしき年寄りに話し掛ける。

「おや、どうなされました？お客人方」

村人はシワだらけの顔で優しく微笑んだ。純朴な笑顔だ。これだけでこの村が素晴らしいものと分かる。枯渴している村には枯渴した人が伴うものだ。その逆も然りという訳である。

「いえ：ここはハラ村ですよね？」

「はいはい、そうですね。残念ながら美しい花たちは枯れてしまっただけだねえ。ここがハラ村ですな」

「枯れた？」

「ええ、何ヶ月か雨が降らなくなつてねえ。それで村自慢の花も全部おしやんですよ。おかげで観光客も来なくなつて、食物も育たない……。いやはや：お客人方には関係ない話をしてしまいましたな」

老人が悲しそうな顔で笑う。その表情には疲れと嘆きがありありと見てとれる。四郎たちはお互いに顔を見合わせる。

「気にしないで下さい。聞いたのは俺たちの方ですから」

そう言つて老人と別れる。とりあえず宿屋の方へと歩いていく。

「雨を降らせばいい訳か」

「出来るのか？」

森での一件を詳しく知らないシャルビィは四郎に尋ねる。

「ああ。出来るよ。ただ問題は俺が今ここで雨を降らしても一時的な解決にしかないって事だ」

そうなのだ。例えば今ここで雨を降らしても、それはその場しのぎにしかない。次またすぐに雨が降るという保証にはならないのだ。もしかしたら無理矢理雨を降らせる分、更に雨が降りにくくなるかもしれない。四郎にもそこら辺の細かい事は分らないのだ。

「でもやらないよりもマシじゃない？」

「そうだな。だが勢いだけでやるというのは良くない。何で急に雨が降らなくなったかが知りたい」

「やっぱり『黒の獣』とやらなんじゃない？」

ネミリアがまず一番大きな可能性をあげる。最近世界中で起きている魔物の異常発生も『黒の獣』が原因なのだ。事情を知っている人は真っ先に『黒の獣』を疑うだろう。

「可能性は高いな。あとは魔物か人間の仕業か。陸地で水分を吸収する魔物とかいるか？」

「聞いた事ないな」

「なら人間？ けど何故水分を吸収してるんだ？」

「やっぱり人為的な仕業というよりも災害説の方が有力ですね」

ミリーが言うと全員がそれに頷く。しかし天災なのだとしたら余計に解決する糸口が見えて来なくなる。

「……………」

「どしたの師匠？ 何か気になることでもあった？」

皆が四郎に注目する。

「いや…何ヶ月か雨が降らなかつただけで随分と廃れたなと思って四郎が言いたいのは廃れる速さの事だ。本来、色とりどりの花が咲き誇る村として有名な村の周囲が砂漠にも近いものとなっている。雨が降らなかつただけにしては廃れる速さが尋常ではない。

「確かにそうね。さっきも言ったけど精霊たちの動きがここはあま

り活発ではないわ」

ネミリアも精霊を感じとれるため、その異常な廃れる速さに違和感を持ったようだ。

「ですけどそれでもやはり魔物や人間の仕業と言うのは無理があるかと思います」

「ああ。分かってる。俺が言いたいののはこれがただの災害なのか『黒の獣』の影響なのかって事だ」

「なるほど。ならこれは『黒の獣』の影響ということか」

シャルビィが四郎の言いたい事に気付いたようにで結論を先に言ってしまった。ミリーとネミリアはその一言で四郎が何を言いたいかを理解したがティカはいまいち分かっていないようだ。

「どーゆーこと？」

「つまりこの土地は『黒の獣』の影響で日照りが続き、急速に砂漠化していつてゐるってことだ。普通の災害じゃこんな事は起きないからな」

「なるほどね。でも何でこの土地だけがそんな事になってんのよ？」

「さあな。それは調べてみないと分からん」

四郎は目の前にいる宿屋に入っていく。情報収集をするつもりなのだろう。何故この土地だけが『黒の獣』の影響を受けているのか。

「いらつしゃい。久々の客だねえ」

宿屋に入って四郎たちを出迎えたのは美人の看板娘：ではなく恰幅のいいおばちゃんだった。

「5人で一泊。全員個室で食事ありで頼む」

「はいよ。合計12000tptだね」

四郎は自分のカードから指定された額のtptを振り込む。

「おばちゃん、ここに何か変わった言い伝えとか変わった物とかない？」

四郎が振り込みながら世間話をするかのように尋ねる。

「そうさねえ、花が枯れた時にそういう何か代わりになるものを村中で探したんだけどねえ。結局見つかったのは小汚い祠だけだっ

たよ」

「祠？」

「そうだよ。村の東の外れにある小さな祠だよ。でも見に行ってもつまらないと思うよ」

「そうですか…。残念です。何か面白いものがあればと思ったんですけど」

「少しだけ残念そうな顔をしながら四郎は会話を切り上げる。そして皆の顔を確認してからゆっくり頷いた。

「どうやら祠とやらに行ってみる必要があるそうだな」

祠

村の東の外れに小さな祠があると聞いた四郎たちはさっそくその場所の搜索に当たっていた。

「ひ、東つてどっちよ!? 右!? 左!?」

ここにきて方向音痴が発覚したティカは一人でギャンギャンと喚いていた。というか阿呆すぎて他のメンバーは思わず閉口してしまっていた。

「はあ。東はこっちだよ」

「シロー様、そっちは北です」

ミリーに訂正されうなだれる四郎。

「漫才してないで早くいきましょ」

ネミリアが先頭で東の方へと歩いて行く。シャルビイは眠いのか欠伸をかみ殺しながらそれについて行く。

「にしても祠ねえ。怪しいねえ」

村の端つこまでくるとそこから先は林だった。林といっても草は半ば枯れかけていて、風が吹けば吹き飛びそうな程弱々しかった。

「あれじゃないかしら?」

ネミリアが指差した方向に小さな小屋らしきものが見えた。

近寄ってみると案の定それは祠だった。

「黒い祠…」

「これはいよいよきな臭いわね」

「もしかしてここは『黒の獣』をまつっていた祠なのか?」

シャルビイの意見に四郎を除く全員が息を呑む。

「邪神信仰のようなものという事ですね」

「それってヤバイじゃない!?! つまりあの村の人たちは皆敵かもしれないって事でしょ!?!」

しゃがんで祠を観察していたティカが勢い良く立ち上がる。ミリーがティカの手を掴んで落ち着かせる。

「大丈夫です。あの村人さんたちは関係ないですよ」

「何でそう言い切れるのよ」

「この祠の状態です。よく見てみて下さい」

黒い祠は所々色が落ち着いて白くなっている。小さな傷も多く、素人目から見てもかなり傷んでるだろうというのがうかがえる。

「ボロボロね」

「そうです。もしあの村の人たちが邪神信仰を今でも掲げているならこの祠がこんなにボロボロなのはおかしいです」

「なるほど。手入れをしてないからあの村人たちは白って訳ね！」

ティカが大きく頷いた。ネミリアとシャルビイも小さく頷いていた。「にしても信仰してたのに何でこんなに祠が小さいのかしら？」

「信仰といっても邪神だからな。あまり大っぴらには出来なかったんじゃないか？」

「それもそうね」

ネミリアはシャルビイの意見にあっさりと納得する。

「シロー様？」

ここにきてようやくミリーが今まで沈黙を貫いていた四郎に話し掛ける。

「……………」

しかし四郎はそれに答えない。無視しているというよりも考えるのに集中していて聞こえていないといった感じだ。

「何か気になることでもあるのかしら？」

そう言いながらネミリアは四郎の方に手を置く。四郎ははっとした顔をしてから返事した。

「いや本当にこれは邪神信仰の祠なのかなって思っ」

「どういう事です？」

ミリーが頬を膨らませながら聞く。先ほどミリーが呼び掛けても返事しなかったのにネミリアの時には返事をしたので拗ねているのだ。

「いやもしここが邪神信仰をしていたのなら何でこの村が被害を受けるんだ？」

「そ、それは信仰を忘れた天罰のようなものではないのか？」

「確かにその可能性もある。だが俺は違うと思う」

「じゃあこの祠は何なのよ？」

ティカが少し苛立ちながら四郎に尋ねる。ティカはまどろっこしいのは嫌いなのだ。

「恐らく『黒の獣』を封印している場所だと思う」

「……！？」

四人が一斉に驚く。

「あの村人たちは今回の天災で初めてこの祠に気付いたと言っただけですけどおかしくないか？いくら林があるからといっても祠が完全に見えなくなる訳じゃない。なのに村人たちが今まで気付かなかったのは……」

「何らかの力で隠蔽されていたって事ですか？」

ミリーが四郎に続けるように言って確認する。

「そうだ。つまり『黒の獣』を封印していた祠が目覚め始めた『黒の獣』の力に耐え切れなくなつて現れたって訳だ。それにお前らはこの祠を黒くて所々色落ちしてるって思ってるだろうが恐らくは逆だ」

そこで四郎は一息つく。あまり長々と喋るのは得意ではないのだ。

「白い祠が『黒の獣』の力に負けて黒くなつたんだ。それにここが『黒の獣』を封印していた場所ならここが『黒の獣』の影響が出るのも頷ける。それとこの祠と同じ様に『黒の獣』を封印している場所がこの世界の何処かにまだいくつかあるだろう。こんな小さい祠で完全に封印出来る訳ないしな」

四郎はそう言つてもう終わりだとばかりに立ち上がる。それを四人は驚嘆しながら見ていた。

四郎は言わなかったがここに封印されているのが邪神ではなく『黒の獣』と考えたのにも理由がある。

それはここが根幹世界だからだ。かつてホワイトシローが言っていた言葉だ。神の一柱程度なら何処にでも封印、この場合は封神出来るだろう。しかし神ですら下手に手出しが出来ない『黒の獣』をそこら辺に封印する事は出来ない。だからこそ最も大きくて深いこの根幹世界に封印したのだろうと踏んだのだ。

そしてその日、四郎たちはハラ村に一泊して、翌日ランド大橋へと向うためハラ村から出て行ったのであった。もちろん天球儀で雨を降らせるのも忘れなかった。一時的でも降らないよりはマシだと考えたからだ。ハラ村の人たちは突然の雨に歓喜したという。

ランド大橋

「ようこそ……『男の世界』へ………」

ランド大橋を目にして四郎は思わずそう呟いてしまった。

この橋を造るのにどれだけの期間が、どれだけの男たちが汗を流したか。それを考えるとそう言わざるを得なかった。

「師匠いきなり何言ってるのよ？」

ティカがジト目で四郎を見つめてくる。

「言わずにはいらなかったんだ。俺の好きな本の好きな台詞さ」
本当は本というより漫画なのだが、まだ四郎の描いた漫画も出回っていない以上漫画と言っても通じないだろうと考えただ。

「も、もしかしてアツチ系の艶本ですか？」勘違いしたミリーが引いた顔をしながら尋ねてくる。

「ちげーよっ！俺はノーマルだ！！」

あらぬ誤解をされそうになり慌ててツツコミを入れる四郎。

「こんにちは、あなた達も武道大会観戦ですか？」

ランド大橋の入り口にある国境越えの関所で警備兵に声を掛けられる。

「はい、そうです」

「ならカードをここに入れて下さい」

そう言つて警備兵が指差したのはアレだった。口に手を入れて真偽を確かめる的なアレだ。

四郎たちは言われた通りに口にカードを入れる。やり方はギルドの泉にカードを入れる時と同じだ。

『モンダイナイヨ。ゼンインオツケーダヨ』

と許可を貰った。アレが喋るとはさすがファンタジー。とか下らない事を四郎は考えていた。

「はいありがとうございました。今ので許可証がカードの中に入りましたのでこのまま橋を渡っていただいて結構ですよ」

警備兵にそう言われ四郎は真つ先に関所を通り橋へと入る。浮かれているのが丸分かりだ。ティカも四郎を追うように橋へと駆けていく。

「はしゃいでるな」

「はしゃいでますねえ」

「はしゃいでるわね」

残された三人はその光景を微笑ましそうに眺めていた。

「てか河でかつ!？」

四郎が橋から河を見て驚いている。四郎が知っている川というのはもつと狭くて急な流れのものだ。

「すごいわね!こんな大きな河は初めて見たわ」

隣から覗き込んでいるティカも感嘆の声を上げている。ティカもありガルトから出ないので河とかには馴染みがないのだ。

「まさに大河だなあ」

うんうんと頷きながら四郎は満足そうな顔をしている。

「いつ見てもすごいな」

いつの間にか追い付いていたシャルビィたちも各々感想を述べていく。

広大な河。それ自体が一つの大きな流れであることを主張しながらもゆつたりと流れるその様はまさに壮観だった。水も澄み切っているとは言い難いがそれが逆に年季を感じさせる。

しばらく河を楽しんだ四郎たちは今は普通に橋の上を歩いている。

「いやゝすごかったなあ。どうせ世界を回ってくなら他にも色々見てみたいなあ」

「私の故郷にも雲の柱っていう名所がありますよ」

四郎の呟きにミリーが少しだけ自慢気に答えた。

「良かったら今度見に行きませんか?両親にもシロー様の事を紹介したいですし」

「紹介って…友人としてだよな?」

ミリーの有無を言わさない笑顔にビビりつつも四郎は勇気を出して

確かめてみる。

「友人？いいえ未来の旦那様です」

「断定！？」

四郎はミリーの故郷に行く事がありせんようにとその場でこっそりと祈る。

「私たちエルフの森にも中央に世界樹っていう凄い大樹があるわよ」
「おお。すげーな」

四郎は眼をキラキラと輝かせている。もちろんティカもだ。

「そ、そんなシロー様が私の話の時より輝いているなんて！？やっぱりネミリアと私だとお姉さんキャラが被ってるから……」

とミリーは一人うなだれていた。そんなミリーの肩にシャルビィがそつと手を置いた。

「…ありがとうシャル…」

ミリーは仲間の優しさに思わず涙を流す。二人の友情が深まった。

「世界樹ってやっぱり大精霊とかがいるのか？」

「いや…精霊に上下はないわよ」

それを聞いて四郎は少しだけ落ち込む。四郎の事だから大精霊とかがいた方がファンタジーらしくていいとか考えていたのだろう。

「にしてもやっぱり橋デカいなあ」

「大橋ですからね」

いつの間にか復活したミリーが自然に四郎の隣についた。

こうして>救いの手くのメンバーはランド大橋を渡り帝国へと入国したのであった。

兄と妹

四郎たちは無事ランド大橋を超えて帝国入りを果たしていた。

帝国というのはサファイア帝国の事であり現在は皇帝グレジン・サファイアにより統治されている。大陸の西方に位置し西海に接している。海の方こうには竜の国、ドラゴアとも交流がある。王国とも仲は良い。

そして今四郎たちはハルシヨンという街に来ていた。

「ここが帝国か」

「はい。ここから武道大会が行われる帝都メサイアまではそう離れていないので楽に行けると思えますよ」

帝都メサイアは今いるハルシヨンから南に行かねばならない。ちなみに北には山脈があり、そこは国境となっている。

「じゃあさつさと…」

「どうせならハルシヨンで観光していくわよっ！」

ティカがノリノリで四郎の腕を引っ張って行く。ランド大橋から引き続きティカは浮かれている。

「あ…おい！嫌だよ。観光なんて面倒だ…」

「師匠うるさい」

四郎はティカにずるずると引きずられてそのまま人混みに消えてしまった。

「あらあら行っちゃいましたね」

「そうね。私たちはどうする？」

「宿屋でも探すか。四郎には後で>光字<を送っておけばいいだろう」

そう言って三人も人混みの中に消えて行った。

「…………はぐれちった」

いつの間にかティカとはぐれてしまった四郎は特に慌てた様子もなく言った。

立ち止まっても仕方ないと思った四郎はとりあえず歩く。とはいっても土地勘がないので歩いてても余計に自分の居場所が分からなくなるだけだった。

「困った…」

「…何が困ったの？」

突然声を掛けられた四郎はゆっくりと背後を振り返った。そこには美少女だった。

真っ白な髪の毛に赤い瞳。目尻が垂れており可愛いという表現がぴったりの女の子だ。恐らく12歳くらいだろう。

「いや友達とはぐれちゃってね」

「…金髪の女の子？」

「そうそう。何で知ってるんだ？」

「…さつき一緒にいるの見た」

少女がつまらなさそうに答えた。あまり表情の変化がないので恐らくこれが地なのだろう。

「そーゆー君は一人でどうしたの？」

四郎は少女が恐がらないように優しく問い掛ける。

「…迷子なの」

「……………そ、そうなのか」

思わずフリーズしてしまった四郎。

「俺はシロー・タチバナ。君は？」

「アミア」

とりあえず名前を聞くとあっさりと答える少女アミア。

「そっか。アミアちゃんか。一人で来たの？」

「…うん。お兄ちゃんと」

「お兄ちゃん？」

「…うん。でもお兄ちゃん美人が俺を呼んでいるって言っていないくなっちゃった」

「……………」

思わず閉口する四郎。それはそうだろう。そんな阿呆な行動するのはもちろんの事、こんな幼い妹まで残して行ってしまうのだ。これで黙らずにいつ黙ればあいのだ。

「…でもお兄ちゃんすぐに戻ってくる。どうせフラれるから」
「何でそう思うの？」

「…お兄ちゃん顔はいいけどガツツきすぎだから」
意外にまともな理由に四郎は感心する。

「…そうか。アミアちゃんも大変だな」

落ち着きのないティカに振り回される四郎はアミアにシンパシーを感じたようだ。

「…うん。シローさんも大変そう」

「ははは…」

乾いた笑いを浮かべる四郎。

「これからアミアちゃんはどつするの？」

「…ここにいる。多分お兄ちゃんが見つけてくれる」

「ならそれまで俺もここにいてあげるよ。一人だと色々と危ないからね」

「…ありがと」

そんなやり取りをしてからしばらく待っていると不意に人混みの奥から声が聞こえた。

「おおーい、アミアー！！どこですか」

何となく気が抜けるような声だ。

「…こつち」

アミアは小さくそう呟いただけなのに兄とやはその声に気付いたようで真っ直ぐ四郎のいる方まで歩いて来た。

「いやはや、やっと見つけたよアミア。ダメだぞ勝手にはぐれちゃ」
現れた青年は隣にいる四郎については全く眼に入っていないようで
すぐにアミアと話し込む。

「はぐれたのはお兄ちゃん」

「ぎくうっ!?!」

「…しかもまたナンパ失敗?」

「ぬぺっ!?!?!」

アミアに言い負かされて青年は沈んでしまった。

「すんませんでしたっ!」

「…いい。シローさんが助けてくれたから」

そこでようやく四郎に気付いた青年。

「まじかつ!お兄さん妹が迷惑かけてすんませんっ!」

「あ、ああ…気にすんなよ。ええと…」

迷惑かけたのはお前だろうと言おうとして止めたのは四郎なりの配慮
なのだろう。

「俺はジャンだぜ。ジャン・ジャンクス!よろしくお兄さんっ!」
青年はそう名乗った。

ビザじゃなくピッツァ

お互いに自己紹介を終えた三人はハルシランのメインストリートを歩いていった。ちなみにティカからはシャルビィたちと合流したと連絡が入った。

「王都よりも道がデカいなあ」

四郎は素直に驚きの声を上げる。帝国の一都市が王国の王都よりも道端が大きいのだ。驚くのも当然だろう。

「ん？シローは帝国初めてなのか」

「ああ。だから王都よりも道端が広いのにビックリしてな」

「…馬車がたくさん通るから」

今まで黙っていたアミアが急に声を上げた。口ぶりからしてハルシランの通りが広い理由を説明しているのだろうと四郎は推測する。

「補足すると帝国は王国より貴族の権力がデカいんだ。だから道とかも貴族が通り安いように整備されてんのさ」

「なるほどね。てことは貴族に逆らったりしたら」

「…バツサリ」

王国にも貴族がいたがそれ程権力は強くなかった。故に貴族といつてあまり威張り散らす人物も少なく平民あつての国という考えに基づいていたので平民だからどうのこうのという事件は比較的少なかったのだ。

しかし帝国は貴族の権力が強いという。今は皇帝が善政を敷いているので目立った問題はないが昔はかなり非道かつたらしい。

「まあ俺としては平民とか貴族とか本当にどーでもいいけどなっ」

「…右に同じ」

そう言つてジャンはカラカラと笑った。アミアは無表情だつたが。

「てか可愛い女の子こそが正義な訳だよ。分かるか？心の友よ」

ジャンは真面目腐った顔でそう宣言する。

「分らないし心の友でもない」

「…お兄ちゃん気持ち悪い」

「ぐべらあっ！！？？」

四郎とアミアの辛辣な台詞にダメージを受けるジャン。道のど真ん中で廃人みたくなってしまうて極めて迷惑な状態だ。

「おい、起きろー」

四郎はジャンを軽くつつくが反応はない。何故か彼の周りまで燃え尽きたように真っ白になっていたが四郎はギャグ補正という事で納得しておいた。

「…それじゃ起きない。お手本。…あ！あそこに可愛い女の子が…」

「へい、そのビューティーちゃん！お兄さんと一緒にお茶でもどーだーい！？」

いきなり立ち上がったジャンはそのままクルクルとバレリーナのように回転しながらどこかへ消えてしまった。

「ええと…大丈夫なのか？」

「…大丈夫」

「ならいいや」

四郎もジャンの性格と奇行に慣れてきたのでアミアが大丈夫と言うなら大丈夫だろうと判断する。

「腹減ったから何か喰うかな。アミアちゃんはお腹空いてる？」

「…頭とお尻がくつつく位に」

「それを言うならお腹と背中だろー！！」

予想外のアミアのボケに相手が年下という事も忘れ素の口調でつつこむ四郎。

「…冗談。お腹ぺこぺこ」

「何か食べたい物でもあるか？」

「…ピッツア」

「なんだピザか」

「…発音が違う。ピッツア」

何だか有無を言わせぬ迫力があつたので素直に従う四郎。何故この兄妹の前では上手くクールキャラが保てないらしい。

「ピッツアか。俺もそんな気分だったぜっ」

いつの間にか戻って来たジャンが会話に参加する。

「急に来たな…。どっかいいい店あるか？」

「…この通りには美味しいピッツアのお店が4軒あります」

「なんで説明口調なのさマイシスター」

「…ピッツアのお店に対する敬意。…じゅるる」

アミアが口から涎を垂らしながら言う。恐らくすでに頭の中ではピザ…いやピッツアを食べる事でいっぱいなのだろう。

「じゃあ一番近い店にしよう」

「…わかった。ここなの」

「…はやっ!？」

すでにお店は目と鼻の先だった。あまりの事に四郎とジャンは揃って声を上げた。

「…話しながらさりげなく誘導してたから」

「最初からピザ…ピッツアを食べるつもりだったのか」

「アミアは三度の飯よりピッツアが好きなんだ」

「三度の飯よりってか三度の飯がピッツアだな」

「ああ。しかもどんだけ食ってもあいつ太らないんだぜ。羨ましいよなあ。まあ身長も伸びてないけどな!ぷぷっ」

ジャンがそう言って笑った途端。神速とも言える速度でジャンの股関が蹴られた。

「きゅぺっ!?!??」

「…一言余計」

ジャンは股関を押さえながら地面に沈んでいった。四郎も思わず股関を押さえる。周りにいる男たちも同じようにしている。

「…早くピッツア食べる」

そう言ってアミアはマイペースに店の中へと入って行った。四郎も仕方なくジャンを引きずって店内へと入る。

「面白い兄妹だな」

四郎は思わずそう呟いた。

ピッツアを食べよう

店内に入つてとりあえず空いてる席に座った三人。アミアが真剣にメニューを選んでいたのでその間、四郎とジャンは二人で下らない話に花を咲かせていた。

「やっぱりよ、こう普段クールなのにデレると破壊力がやべーよな」
「軍人が好きなのか？」

「ちつげーよ！！普段クールをイコールで軍人に結び付けんなや！」
四郎は鈍感というよりあまり恋愛というものに興味がないのでこういう話には疎い。それなのに恋愛小説を書けたのは単にベースの作品があつたからに他ならない。

「んでなあ見た目はやっぱり美人系…いや可愛い系…うむむ…四郎はどっちだ？」

「可愛い系？」

「なんで疑問形なんだよ…」

ジャンはこれ見よがしに大きく溜め息を吐く。やはり四郎ではその手の話をするには物足りないようだ。

「…すあません。コレとコレ…」

いつの間にかメニューを決めたらしいアミアは店員を呼んで注文をしていた。

「…以外全部下さい」

「…はあっ！！？？」

あまりの爆弾発言に再び四郎とジャンの声が重なる。四郎は内心でやっぱり兄妹だけあってジャンとアミアは似てるな、とか考えていた。

「かしこまりました」

店員は驚く事なく颯爽と厨房まで戻って行った。さすがはプロだと

言わざるを得ない。

「アミアさん、頼みすぎじゃないですかね……」

「……ピッツアを選ぶなんて事私には出来ない」

アミアがゆっくりと首を横に振る。まるで手術が失敗した時の医者
のようだ。その表情には悲壮感が溢れている。

「お、俺の金が……」

うなだれるジャンの肩にそっと手を置く四郎。

「俺も少し出してやるよ」

「さんきゅなシロー」

お互いガッチリと握手をする。

それからしばらくすると三人のテーブルはピッツアで埋め尽くさ
れた。

「……」

既に男二人は廃人になっている。正直これだけの量があると見るだ
けでも胃に悪い気がしてならない。

「……ピッツア ピッツア」

アミアはそう言ってパクパクと可愛らしく食べていく。二人はその
姿を見て廃人から復活した。

「よっしゃ俺も食うか！」

「いただきます」

二人も自分の一番近くにあったピッツアにかぶりつく。

「うめえじゃん」

「美味しいな」

三人はしばらく無言でピッツアを食べ続ける。すると不意にアミア
が顔を上げた。

「……もうお腹一杯」

その台詞に二人は食べかけのピッツアをボトリと落とす。

「ちょ……冗談キツイぜアミア」

アミアの皿に目を向けるとまだ一枚の半分しか食べていない。それ
なのにアミアはもうお腹一杯と言ったのだ。

「…私はピッツアの前では冗談を言わないの。…もう無理」

「だったらこんなに頼むなよっ!!」

ヤケクソ気味にジャンが次から次へと口にピッツアを詰めていく。頬がリスみたいにパンパンに膨れている。四郎もさすがにこれだけ頼んでおいて残す訳にはいかないと食べ続ける。

「…ピッツア美味しかった」

アミアはそんな事も気にせずに感想だけ言ってそのまま眠ってしまった。

「し、死ぬ…」

のどに詰まったのを慌てて水で流すジャン。その眼にはうつすらと涙が浮かんでいる。

そこから格闘すること一時間。ようやくテーブルの上の品を全て平らげた。今は二人とも座席に寝転がって苦しそうに呻いている。

周りからは「お疲れ」とか「よく頑張ったな」などと温かい言葉がかけられる。

「もう一生…」

「…ピッツアは食わねー」

最後にそれだけ言って彼らは死んだ。という訳でもなく少し休憩してから店を去った。お会計も凄まじくジャンは真っ白になっていた。四郎はギルドで稼いでいるのであまり問題はなかったが。

「わりいな。こんな事に突き合わせちゃって」

「いいよ、気にすんな。面白かったし。まあもう二度とピッツアは食わねーけどな」

申し訳なさそうな顔をしているジャンにそう伝えると少しだけ表情が明るくなった。

「そういえばお前って連れがいんだよな？」

「ああ。そうだけどそれがどした？」

ジャンが急に質問をして来たのでそれに答える四郎。

「その連れってさ、もしかして>救いの手<のメンバーか？」

「…っ!?!どこでそれを？」

「おい警戒すんなよ。ただ単にお前らが有名だから知ってただけだよ。黒眼黒髪の最速王が率いるチームってね」

それを聞いて安堵する四郎。

「何だよ、脅かすなよ」

「ははは、ビビったか？」

ジャンはカラカラと笑う。四郎は何も思わなかったが、その笑い方はどこか蛇に似ていた。

説教

「おっと…そろそろ俺ら帰らねーと」

ピツアを食べ終えてメインストリートをぶらぶらしているとジャンがそう言った。

「そうなのか？」

「ああ、仕事？なんだよ」

「なんで疑問形」

「なんとなくだぜ。つーわけでお前には世話になったな」

「…世話になったな」

アミアもジャンの口調を真似て言う。だがあまり似合っていない。

「いや楽しかったし気にすんな」

「そっか、そう言って貰えるとサンキューだな。んじゃまたいつか会えるといいな」

「そうだな」

そう言つてジャンとアミアは去つて行つた。別れの挨拶をしなかったのはまた会えると信じているからなのだろう。

「さてと、俺も宿に行くか」

歩いて行く二人には背を向けて反対方向へと歩き出す四郎。その心は重かった。

何故ならはぐれたティカを探しもせず他の人たちと遊んでいたのだ。合流したら確実にシャルビィとミリーに怒られるだろう。ミリーはティカには甘々なのだ。

四郎は出来るだけゆっくりと歩いて行く。無駄な足掻きだがやらないよりはマシだと思つたのだろう。それでも歩いていればいつかは目的地に着く。

「シロー様、何か言う事はありませんか？」

「ティカは放っておいて遊んで帰って来るとはいい度胸だな」

予想通り宿に着くとそこには二匹の般若がいた。

「師匠さまあ」

「ふふふ」

ティカとネミリアを意地悪そうに笑っている。助けてくれそうな気配は皆無である。

「いや…ほら…俺も山狩り並みには搜索したんですよ？」

慌てて言い訳をする四郎。しかしこの場で言い訳が逆効果だということにテンパっている四郎は気付かない。

「うふふふ、面白い言い訳ですね。もっと詳しく聞かせて下さい」
ガシツと首根っこを掴まれ連行される四郎。その後ろにシャルビイが付いて行く。

結局その日、説教は深夜まで続いた。

四郎と別れたジャンとアミアはメインストリートからは離れ、今は馬車に揺られていた。

「どうだったアミア？」

「…噂以上の人でした」

「へえ。お前にそんな評価をさせるなんて本当に凄いんだなあ。>
救いの手くって」

ジャンが自身の髪をいじりながら楽しそうに言う。アミアの方は無表情を貫いているが。

「何とかしてこっちに引き込めないかねえ」

「…恐らく難しいでしょうね。それに引き込んだとしても貴族たちが黙って見ている訳がありません。余計な火種が増えるだけです」

「いやいや。もしかしたら火種どころか無能な貴族共を焼き尽くしてくれるかもよ？」

冗談ではなく本気だという事をアピールするかのようアミアの眼

を真剣に見つめるジャン。

「…そこまでの期待は危険です」

アミアは首を横に振る。

「はあ。せっかく美人が多いチームだって聞いたのに残念だ」

するとアミアがジト目でジャンを睨んで来る。

「…そっちが本音ですか？」

「いやいやいやいや全然だわ全然。全くそんな事はないよ」

「……まあいいです。それで彼らの監視はどうしますか？あまり危険そうではありませんでしたが帝国領にいる以上は監視をつけた方がよいかと思いますが」

「うーん、本来ならたかが数人のチームに監視をつける事なんて有り得ないんだけどねえ。メンバーがメンバーだしね」

黒眼黒髪で謎の技術でアステリ王国の王女を治した少年。種族不明な亜人。王国一の嫌われ者の裏切りの一族。王国の大貴族の三女。神出鬼没なダークエルフ。

一人でもかなり異質だというのにそれがチームを組んでいる。これは異常な事なのだ。

「監視をつけといた方がいいね。ついでに王国からの監視も監視しといてくれ」

それだけ言ってジャンは眼を閉じる。どうやら眠るつもりらしい。

「…かしこまりました。チームの監視にはメイナー、監視の監視にはリンをつけます」

アミアは懷から紙を取り出し、そこに何やら色々と書き始める。恐らく今の監視に関する書類を作っているのだろう。

「…そういえば武道大会はどうなされますか？」

するとジャンは眼を瞑ったまま答える。

「あー、俺は出るわ。お前も出るか？」

「…いえ、仕事がありますので」

「相変わらず真面目だねえ。そんなんじゃ疲れちまうぜ？少し肩の力を抜いた方がいいぜ」

「……ジャン様は力を抜きすぎかと……」
ジャンはそれには返事をせず眠ったふりをした。それを見てアミ
アは大きく溜め息を吐いた。

引きこもり

長い長い説教が終わった翌日、四郎は宿で死に体になっていた。

「……シロー様、これから街へ出るんですが一緒に行きませんか？」

「……ピツアはやだ」

四郎の的外れの返答に眉をひそめるミリィ。四郎の格好は某錬金術師の漫画の人体錬成で出て来た人みたいになっている。

「少しお説教しすぎましたかね……」

「いやあいつはあれ位しないと反省しないだろう」

何故か少しドヤ顔をしているシャルビィ。出会った当初から振り回されてばかりだったのでようやく仕返しが出来て嬉しいのだろう。

「反省つてか廃人じゃん。目が死んだ魚みたいになってるじゃない」
「あれはもう使えないわよ。さっさと行きましょ」

ネミリアが無情にも四郎をバツサリと切り捨てる。それを期に女性陣は街へと繰り出して行った。

「……………」

それを濁った瞳のまま見送った四郎は女性陣が完全にいなくなっているのを確認してから復活した。

「……あ、危なかった。もう少しで廃人になる所だったぜ。奴らは情けっちゅうもんを知らんのかね」

ブツブツと文句を垂れながら、宿に置いてある安っぽい木製の椅子に腰掛ける。机の上に書きかけの原稿用紙を置く。

「さてと、何を書きますかねー」

個人的に書き（パクツ）てみたい作品はいくつかる。なのでいくつか候補をあげてみることにした。

まずは推理小説の続編。これは無難なので出来ればネタ切れまで残しておきたい。

あとは逆ファンタジー物。ファンタジーとは魔法やら魔物やらの事だ。逆ファンタジーは文字通りその逆。魔物も魔物もない世界の話を書くのだ。ただ場合によってはSFに分類されそうではあるが。

「うーむ、これがスランプってやつかな」

他には恋愛小説。といってもラノベに近い形態のものだ。ネタなら一応自身の経験があるので書けない事もない。ただ四郎としては気が進まない。

あとは漫画。ひとつなぎの秘宝を巡る空賊の漫画だ。他にも奇妙な冒険をさせたりもしてみたい。

「とりあえずこの二つを新しく書くか」

結局四郎が選んだのは恋愛小説と奇妙な冒険をする漫画だった。

そうと決まれば四郎は机に向かい一気にペンを動かしていく。あつという間に原稿が埋まっていく。

恋愛小説の概要はフォードという少年が有名貴族の息女、ヘイシアに秘密を見られ彼女の執事になるという話だ。

もう一方の奇妙な冒険の方はジョット・ジョーカーという青年が『立ち直る者』という力を手に入れて冒険する話だ。

それからしばらく執筆作業が続いた。その間は飲まず食わずでひたすら集中し続けた四郎。

「ふう。今日はこれくらいでいっかな」

ペンを机に置く。カタリと音がして部屋は静寂に包まれた。四郎は特に何をするでもなくただ腕を組んで瞳を閉じている。

「…どうやら帰って来たみたいだな」

瞑想もどきが続いていると外から賑やかな声が聞こえて来たのでミリーたちだろうと当たりをつける。椅子から立ち上がり、部屋のドアを開く。

「おかえり。何か面白いもんでもあった？」

「ただいま帰りました。シロー様復活したんですね」

「ピッツァ食べたわよっ。とろけるチーズが最高だったわ」

ティカが嬉しそうにピッツアの話をする。四郎はそれを蒼い顔をしながら聞いている。

「ついて行かなくてマジで良かったわ」

どうやら昨日のピッツア騒動は四郎の心はかなり大きな傷を残したようだ。

「これ以上この街にいてもあれだし明日にはメサイアに向かうか」とりあえずトラウマが刺激されないように早くハルシヨンから離れたい四郎。それらしい理由をつけて正当化している。

「そうね。別にこの街に用事もないしね。大した情報もなかったし」
ネミリアがつまらなそうに言う。両手に大きな荷物を持っているので表情と行動がちくはぐで面白い。

「なら今日は荷物をまとめましょう」

「そんなまとめるほど荷物ないだろ」

「女の子には色々あるんですよ」

前にも似たような事を言われた四郎は「そうだったね」としか言えない。

「じゃあ明日はいよいよ帝都メサイアへ向けて出発ね！」

「どんな所だろうな。わざわざ都で武道大会を開く位なんだからかなり大きいとみたぜ」

ティカと四郎は興奮を隠し切れないようでそわそわしている。

「大会では遠慮しないからな四郎」

シャルビイはシャルビイで武道大会に想いを馳せている。

「もちろんだ」

四郎もにっかりと笑ってそれに答える。ミリーとネミリアは同じように微笑みながら三人を見ている。ミリーの懸念通り、やっぱりお姉さんキャラが被っている二人だった。

結局この日深夜までわいわいと盛り上がり、全員昼過ぎまで起きれず出発するのが遅れたのは言うまでもない。

何度でも言おう

「何度も言うようで悪いけどさ…」

ハルシヲンを出発した四郎たちは予定通り帝都メサイアを目指していた。

「歩くのが嫌だっ！」

そして現在、いつも通り四郎の歩きたくない病が始まったのだ。やはり現代っ子は軟弱らしい。

「それならこの前みたいに浮けばいいじゃん」

ティカが迷惑そうな顔をしながら答える。他のメンバーは最早見向きもしない。

「同じネタは二回はやらないのさ」

まるで手品師のような信条を掲げる四郎。

「という訳で俺は先行する。＞先駆車＜」

久々に漆黒のバイクを呼び出す四郎。基本的にチームで行動する時は使えないのであまり出番がない残念なバイクだ。

「は？先行するって？」

「つまらんから先を見に行くだけだ。しばらくしたら戻るから」

それだけ言ってバイクに跨り、エンジンを入れる。消費されるのは四郎の魔力。アクセルを回し急発進する。

「ちょ、ちよつと…！」

突然の行動にティカの思考は追いつかない。基本アホの子なので仕方ない事ではあるが。

「いやはや爽快爽快」

あつという間にティカたちを置き去りにした四郎は久々のバイクに興奮していた。

「何か面白いものないかな」

キヨロキヨロと周りを見渡しながら走り続ける四郎。

すると前方に人がいるのを発見する。桃色の髪をした女の子だ。

「何でこんな所に人がいんだ？」

気になった四郎は女の子に話し掛けてようと思い、バイクを寄せる。

「おい！！」

大きな声で呼び掛けると肩がビクリと大きく揺れて、それから恐る恐るといった感じに女の子はこちらを向いた。

「こんな所で何してんだ？」

バイクから降り、それを仕舞う。女の子はこちらを見て明らかに安堵しているようだ。

「そ、その…あの…」

どもっていて答えてくれそうにないので、四郎は不躰だと思いながらも彼女を観察する。

まず耳があった。頭の上に。猫か犬かは分からないがどうやら獣人らしい。桃色の髪はおかつぱのようになっておりそれだけで清らかな雰囲気を感じ取れる。胸は控え目らしく服装はお世話にも綺麗と言えない。首には首輪が付いている。

「……もしかして脱走奴隷？」

四郎が思い当たった事を言うとドンピシャだったようで彼女は眼を大きく見開く。そこから涙が溢れてくる。

「…ち、ちがつ…ボクは…う、ううう…」

四郎は頭をポリポリと搔いてどうしようかと思案する。このまま見捨てるのはあまりにも不憫だ。

「安心しろ。別にお前をどうこうするつもりはないから」

すると少女が四郎の言葉の真偽を確かめるかのように瞳を覗き込んできく。四郎はその瞳を真正面から受け止める。

「ほ、本当にボクにヒドい事したり…しない？」

恐る恐る少女が尋ねて来る。

「しないよ。俺はシロー・タチバナだ。よろしく」

「…ボクはメイナー。狐の獣人だよ。…奴隷だから姓はないよ」

メイナーと名乗った少女は首輪を触りながら辛そうにしている。

「その首輪は外しちゃダメなのか？」

そんなメイナーの仕草を見ていた四郎は堪えきれずに尋ねる。

「これは無理に外そうとするとボクの身体の中にあるが石と反応して爆発しちゃうから…脱走とか命令違反を起こさせないように付いてるの」

「ん？じゃあ何で脱走したお前は爆発してないんだ？」

「それはボクが狐の獣人だから。珍しいから爆発させずに連れ戻そうとしてるんだよ」

狐の獣人だから捕まったのに狐の獣人だから逃げれるなんて可笑しな話だよね、と言ってメイナーは泣きそうながら笑った。

「……よし！なら俺がその首輪外してやるよ」

「え…？」

メイナーが頭に疑問符を浮かべているのを無視して四郎は意識を集中させる。

すると四郎の身体が真っ白に塗りたくられる。

「きれい…」

それを見ていたメイナーは思わずそう呟いた。しかし四郎には聞こえて無かったようでそのまま十神技を使う体勢に入る。

「>組換く」

それだけ告げるとメイナーの首輪とお腹のあたりが青白く光った。

その光が収まると首輪がまるで腐ったかのように崩れ落ちた。

「これでもう大丈夫だ」

「え…首輪が…」

メイナーは茫然自失としている。とりあえず四郎は創造魔法でワンピースを創って渡してやるのだった。

結局メイナーは何が何だか分からないままティカたちの所へ四郎に連れて行かれた。

監視役

「シロー様、そちらの女性は何？」

ミリーがにこにこ笑いながら尋ねて来る。その背後からは黒いオリが溢れ出しており、四郎は思わず畏縮してしまった。

「ひ、拾った……」

「拾った？」

「お、おう。脱走奴隷だったから首輪を外してやったんだ」

それを聞いてミリーたちが驚いた顔をした。

「外したって……奴隷の首輪を外したんですか！？どうやって……」

「>組換くっていう十神技のうちの四段目の技を使った」

メイナーも含めまいち納得いつてないようなメンバーのため四郎は>組換くについて説明をする。

>組換くとは文字通り物質の構造を変えるものだ。錬金術の凄い版だと考えてくれればいい。ただ十神技としては地味で創造魔法なんかの方が難易度や自由度は上だ。

ではなぜ>組換くが十神技に入っていて創造魔法は十神技に入っていないのか。理由は簡単に創造魔法は元々、ある十神技から派生した魔法なのだ。なので正確に分類するとその十神技の内に含まれてしまうので新たな十神技として扱う事は出来ないのだ。

「シローちゃんは相変わらず桁違いよね。お嬢ちゃんお名前は？私はネミリア。ダークエルフよ」

話を聞いてポカーンと呆けているメイナーにネミリアが自己紹介をする。

「あ……ボクはメイナー。狐の獣人だよ」

それを期に他のメンバーが次々と自己紹介をしていく。四郎の心配をよそにメイナーはすっかりミリーたちと仲良くなってしまった。

「メイナー、お前はこれからどうするつもりだ？ 獣人の国に帰りたいなら時間はかかるが送ってやるぜ？」

「……あそこに戻っても誰もいないから……。ボクはシローさんたちと一緒にいたい……」

うつむきながらもメイナーは確かにそう言った。皆それに閉口する。風で髪が靡くのみで他に動きはない。この場にいる皆が皆、違う事を考えていた。

四郎はこの先にメイナーを連れて行く危険性について考えていたし、ミリーはメイナーの言葉の意味を推測し彼女の気持ちについて考えていた。シャルビイはメイナーを奴隷としていた人物について考えていし、ティカはこれからメイナーと一緒に楽しそうだなと漠然とした事を考えていた。そしてネミリアはメイナーの真意がどこにあるのかを。

ただメイナーの心の内は分からない。まだこちら側ではないのだから。

「いいぜ」

やがて四郎がそう結論を出した。結局このチームは四郎が中心なのだ。メイナーのチーム加入に反対する者はいなかった。

「……え？」

「だからいいぜって言うてんの」

メイナーの頭をくしゃつと撫でながら四郎は笑った。メイナーはそれを見て何故か赤面した。

「で、でもボク強くないよ？」

「なら強くなればいい。最初から強い奴なんていやしないさ」

「いやいや師匠は絶対最初っから強かったでしょ」

ティカがせつかくのいい雰囲気をぶち壊した。他の皆が思っただけも敢えて言わなかった事を言ってしまったのだ。

「そんな事ねーよ。俺も最初は弱かったよ。誰よりもずつとな」

どこか昔を懐かしむような顔をしながら告げた四郎。その表情の奥には色々なものが眠っているのだろ。そこにはそう思わずにはい

られないような何かがあった。

「ならボクも強くなる」

メイナーは拳を強く握る。桃色の髪の少女がそんな事をしてても可愛
いだけだった。それが口にするような者はいなかった。

「頑張れよ」

その後、亜空間にある家の一室をメイナーに与えた。その日メイ
ナーは色々な事が一気に起こりすぎて興奮して眠れなかった。

「…首輪の反応がロストしました」

四郎たちより一足先に帝都メサイアに着いていたジャンはアミアか
ら監視役に関する報告を受けていた。

「へえ。それはつまり奴隷の首輪を外したって事か。やっぱりやる
なあ。シローは」

ジャンたちが帝都に戻る前に急ぎで四郎たちの元へと監視役として
送ったメイナーの奴隷の首輪が途絶えたのだ。

「…笑い事ではありません。このままメイナーが裏切ったら何も得
られません。こちらの大損です」

「いいよいいよ。やっぱり可愛い女の子はそれだけで正義だしね。
自由に生きたいならそうさせればいいさ」

ジャンの相変わらずの態度にアミアも慣れているのかそれ以上は何
も言わなかった。

「…希望、それとも絶望か…」

最後に小さくジャンがそう呟いた。

深夜

メイナーをチームに迎えたその日の深夜、ネミリアは四郎の部屋を訪ねていた。

「シローちゃん、ちょっといいかしら？」

ガチャリと扉が開く音がしてから中から四郎が出て来る。

「どした？」

「話があるの」

四郎はネミリアに部屋に入るように促す。中へ入ってみるとそこには何も無かった。

ベッドに机に椅子。その程度だ。まるで生活感がない。ネミリアの部屋も私物が少ないとはいえ少なくとも生活感はある。ティカに至ってはまさに年頃の女の子といった感じの部屋だ。

「見ても別に面白い部屋じゃないぞ」

「そのようね。生活感がまるで無いわ」

「大抵の事は魔法でどうにかなるからな。寝る場所と書く場所があればそれでいいのさ」

特に興味もなさそうに四郎が答える。

やはり異常だ、ネミリアはそう思った。四郎は人として超越しているだけではない。人として欠けてもいる。まるで完全なのに不完全のようだ。

「そんな事言うために来たんじゃないだろ？俺は眠いんだが…」

欠伸をかみ殺しながら四郎は背伸びをする。それを見てネミリアは本題に入ろうとする。

「メイナーのことか？」

「っ！？」

しかし先に四郎に言われてしまった。これで会話の主導権は全て四

郎に握られてしまった。

「そうよ。どうして分かったの？」

「新しい仲間が加入した日に普段訪ねて来ない人物が部屋を訪ねて来る。そこから出る答えは一つしかないだろ？」

それは誰にでも分かるような簡単な理屈。普段のネミリアならこれに気付かない程馬鹿ではない。しかし今、ネミリアの心には動揺がある。それが思考を極端に鈍らせたのだ。

「確かにそうね。それじゃあ私が何を言いたいか分かるからし？」

「メイナーがただの奴隷じゃあないってことだろ？」

四郎はどこから取り出したのかコーヒーをカップに注いでいる。

「そうよ。なのにシローちゃんは彼女を仲間にすると言った。少し不用心すぎるんじゃないかしら？それとも自分の力を過信しているのかしら？」

四郎が無言で差し出して来たコーヒーを受け取り、一口飲むネミリア。ブラックだったようで顔をしかめている。

「いや…どっちでもねーよ。アイツはただの監視役だ。だからこれはチャンスだと思ったのさ」

今度は四郎からスティックシュガーを受け取りカップに入れてかき混ぜる。

「チャンス？」

「ああ。監視役を送るって事は敵だろうが何だろうがそれなりの奴が俺たちを気にしているという事だ。これを利用しない手はない。敵なら監視役から辿っていつて潰せばいい。味方なら監視役がいればいつでも協力を仰げる」

四郎は監視役すらも利用して己のパイプを広めようというのだ。強欲、ではない。これは暴食だ。全てを欲するのではなく全てを喰らい尽くす。それが橘四郎という人物の本質の中の特質だ。

「だけど私たちの情報も筒抜けになるのよ？はつきり言ってデメリツトの方が多いわ」

ネミリアは人ではない。ダークエルフだ。見た目こそまだ二十代だ

が実年齢はそれ以上だ。だからこそ情報が戦いの要であるという事を知っているのだ。

「俺たちの敵は『黒の獣』だ。圧倒的な力を前にすれば情報に価値はない。だからこそ情報云々とかいうのに負ける訳にはいかないんだ。というより負ける程度の奴じゃあダメなんだ」

「仲間を試すというのか？」

「違う。確実にステップアップするための障害を作っているだけだ。それに最初も言ったが監視役を送った奴が敵だとは限らない。もし味方になってくれそうなら協力を仰ぐつもりだ。圧倒的な力な力を前にしてちつぽけな俺たち人間が出来るのは精々数の力行使する事くらいだ」

四郎はそれだけ言ってコーヒーを口に含む。ネミリアは何やら考え込んでいる。

「なるほどね。確かにこの先出て来る敵も確実に強くなってくるはず。それら全てに対して私たちが有利な条件で戦えるとは限らない。だからこそそれを身をもって教えさせるって訳ね」

ようやく納得いったようでネミリアはコクコクと何度も小さく頷いている。

「分かってくれたなら何よりだ」

「ええ。それで？」

余裕を取り戻し優雅にコーヒーを口に運ぶ。

「それで、つてのは？」

「それであの少女を監視役として送ってきた人物について心当たりはあるの？つて聞いているのよ」

「心当たりつて程でもないがあるにはある」

ネミリアの身体に一瞬緊張がはしる。四郎はそれを知ってか知らずがタメるようにもつたいつけてから言う。

「…この帝国の重鎮貴族。恐らく黒幕はジャン・ジャンクだろう」

「それはシローちゃんかハルシヨンで出会ったっていう？」

「ああそうだ。だからとりあえずネミリアはジャンについて調べと

いてくれ」

四郎はそれだけ言つて二人分のカップを片付けた。そしてようやく四郎は眠る事が出来た。

エリーのお仕事2

こんにちは皆さん。お久しぶりです。私、エリーです。皆さんも知ってると思いますが現在私は大変な任務についております。

シロー一味（これだと悪者みたいですね）の監視です。最近彼らは帝国に入ってしまったので私も泣く泣く王国から帝国へ来ました。とりあえず感想としてはランド大橋すごかったです！

それで今はハルシヨンという街で監視という名の観光をしている所です。ふふふ、ここにはあの魔王もといサリー先輩の手が届かないから自由で……あれ？>光字<が届きました。

『サボったら決るbyサリー』

「…魔王はやはり魔王でした…」

それでも私は屈しません。だいたい私は国に勤めてるんです。つまり公務員ですよ。なので五時にはお仕事終わりですから！というか決るってどこを決るつもりなんでしょう？

「さて…そろそろ私もこの街を出ますかね」

そうなんです。実はシロー一味はすでもうこの街を出てしまっているんです。いつまで経ってもシロー一味が起きて来ないからちよつと息抜きでお買い物に出たらその間にいなくなっちゃってたんです。まあ行き先は帝都メサイアだって分かってるからあまり問題はないんですね。

「…っ!？」

不意に私は殺気を感じて思わず飛び退きました。殺気がした方向へ視線を向けるとそこに一人の女性が立っていました。

ボサボサの茶色の髪に死んだ魚のような眼。身長は女性にしてはかなり高く180センチくらいでしょうか。良くも悪くもスレンダー

「な体型です。服装もだらしく着崩しています。全体的に見ればただの残念な女性ですがかなりの美人です。何故か桃色の眼鏡を掛けています。かなり似合っていないです。」

「君がシロー一味を監視している王国の人間かい？」

眼鏡をくいつと上げながらその女性は尋ねてきました。どうやら私の素性も知っているようです。こんな街中で戦闘を行う訳にもいきませんからとりあえず隙を見て逃げる事にしましょう。

「そうです。貴女は？」

ダメもとで私も尋ねてみます。すると意外にもあっさりと返事が返ってきました。

「私も君と同じだよ」

「私と同じ？という事は貴女も……」

「そうだ。レズだ」

「違いますよ！！私はレズじゃないですよ！！」

これだけのやり取りで分かりました。相手はかなりの手練れです。何せこの私があつという間に相手のペースに巻き込まれてしまいましたから。

「ふむ、なんだ違うのか。それは残念だ」

そう言った瞬間彼女の姿が一瞬ブレた後、消えました。

「……っ！？どこに……」

「せっかくのいい胸なのに」

いつの間にか私の後ろに現れていた彼女に胸を思い切り鷲掴みされました。

「ひ、ひゃあ！！??」

変な声が出てしまい周りから注目されてしまいました。視線が痛いんです。

「安心しな。危害は加えない。私も君と同じ監視役だ。違いは王国か帝国かの違いさ」

気さくにそう言ってウィンクしてから私を離す彼女。

「そうですか。まあここで敵対はしたくないので有り難いですが」

私では彼女に適いそうにないので危害を加えないというのはかなり有り難いです。最もまだ完全に信用した訳ではないですけど。

「でしょ？そるに監視役つてつまらないから。どうせなら一緒に行動した方が楽しくていい。という訳で私の名前はリン。よろしく」

「私の名前はエリーです。まだ認めた訳ではありませんがとりあえずよろしくお願いします」

わざわざ敵対する理由もないですから素直に受け入れました。決して独りで淋しかったという訳ではありませんよ！一緒にお買い物出来たらなあゝなんて微塵も思っていないませんでしたし！

「よろしくエリー。それで君は何でまだこんな所にいるんだい？」

「ちよつと色々あったので……」

眼を逸らして答える私。うつかりして見逃しましたなんて言える訳ないですからね。

「まあいい。とりあえず追おう」

リンが歩き出したので私もそれについて行きます。なんだかさつきからずつと主導権を握られっ放しですね。

「私をそんなに見つめてどうしたエリー？欲情したか？」

「してないですよ！！」

私にも仲間（？）が出来たのは嬉しいですが痴女というのは残念です。

「何だつまらん。ちなみに私は欲情しっぱなしだ」

リンさんはまた眼鏡をくいと上げながら言いました。眼鏡を上げるのは決めポーズなんでしょうか。とりあえず言える事はリンさん怖いです。私は何だか無事にこの任務を終えられるか不安になりました。

みんな修行

「いいか、はつきり言うがお前は弱い！」

朝食の Pasta をもぐもぐしながら四郎はメイナーに言った。まだ眼が半開きだ。恐らく寝不足なのだろう。

「うぐ…確かにボクは弱いけどそんなにハッキリ言わなくても…」
痛い所を突かれたメイナーは思わずたじろぐ。その姿勢は中途半端にパンを口に運ぼうとしている所で止まっている。

「うるへー、とにかく特訓だ特訓！」

寝起きの四郎には遠慮や配慮が一切ないようである。

「質が悪いな」

シャルビイは我関せずと黙々と食事をとっている。他の者も同様だ。
「で、でも特訓って何をすればいいの…？」

「……………」

どうやら何も考えていなかったようで四郎の動きがピタリと止まる。
しばらく思索してから四郎は言った。

「アレにしよう。よし決めたアレだ」

「アレって何？」

「アレはアレさ。ただ準備に時間が掛かるからしばらくは別の特訓をして貰う。だからとりあえずは拳士かなあ」

食事を再開する四郎。メイナーは複雑な表情をしながら頷いていた。

「シロー様、私たちの特訓については何かありますか？」

「うーん、ミリーは角についてはほぼ習得してるから大丈夫じゃない？強いて言うなら部分竜化が出来るかと有り難い」

「なるほど。では明日からそちらの訓練もしてみようと思います」

ミリーは満足げな表情をする。四郎は続いてネミリアに視線を向ける。

「ネミリアにも特訓して貰うぜ」

「何をやればいいのかしら？」

ネミリアは意外にも乗り気のように聞き返してくる。

「精霊魔法の強化だ。とりあえず瞑想から始めて今までよりも精霊との繋がりを身近なものにしてみよう」

「なるほどね。瞑想というのはよく分からないけど大体分かったわ」
次に四郎はシャルビィに視線を向ける。シャルビィも食事を一旦止めて顔を上げる。

「シャルビィは＞武装化＜を覚えてるからそのまま＞武神化＜の訓練に入って貰う」

「ああ。任せてくれ」

シャルビィも二つ返事で頷く。四郎は最後にティカに視線を向ける。

「ティカは？＞雷矢＜はもう出来るようになった？」

「そんなに大量には撃てないけど大丈夫よ」

えっへんと胸を張ってティカが答える。ちなみに当然ながら揺れる程の胸はない。

「なら次はまた＞雷矢＜を覚えて貰おう」

「ええー！？何でよっ！！新手のイジメ！？」

ティカがギャンギャンと喚き散らす。四郎はそれを意にも介さない。
「安心しろ。お前は＞雷矢＜だけでどんな敵にも勝てるようになるから」

「本当に？」

ティカが上目遣いで四郎を見上げる。全く効果はないようだ。

「ああ。ただ今回覚えて貰う＞雷矢＜はこの前よりも難しいからな」

「ええ！？アレより難しいの！？」

ティカがテーブルを思い切り叩いて立ち上がる。

「ティカちゃん、お行儀が悪いですよ」

「あ、ごめんなさい」

ミリーに注意され素直に謝ってすぐに席に座り直す。

「まあお前なら出来るから大丈夫だ。だから頑張れよ」

四郎はそう励ます。

「分かったわよ。相変わらず師匠は無茶なんだから」

頬を膨らませながらティカは文句を言っている。メイナーはどうやらそれが面白かったようでクスリと笑っている。

「そういえばシローさんは特訓しないの？」

メイナーのその言葉に全員が固まった。それからすぐにティカが怪しげに笑い出した。

「うふふふふふ、そうよ、私たちだけ特訓して師匠だけ特訓しないなんて納得出来ないわ」

「そうだな。日々の鍛錬も重要だがシローはそれすらしている様子もないしな。そんなんだといざという時に困るぞ」

「シローちゃんも切り札を作っておいた方がいいわよ」

「そうです。シロー様の凛々しいお姿……ハアハア」

メイナーの言葉により皆から口々に非難される四郎。額には脂汗が浮かんでいる。

「ていうかミリーだけ意見じゃなくて欲望じゃねーか！」

「いいから特訓して下さいシロー様。もぎますよ」

「どこを!？」

「ふふふ、どこでも、ですよ」

ミリーが指を唇に添えながら色っぽく言う。四郎はリアルに命の危機を感じていた。

「……いやいや、俺には執筆もあるしそんなに暇じゃ」

「往生際が悪いわよ師匠。シャル、捕まえちゃって」

慌てて逃げ出そうとする四郎の首根っこを掴むシャルビィ。

「えと……大丈夫なの？」

自分の発言のせいで四郎が酷い目にあっているのを見てビクビクしているメイナー。

「大丈夫よ。こんなの日常茶飯事だもの」

ネミリアがメイナーを落ち着かせる。

「おい、お前ら！何和んでだ。助けろおおおっ！……！」
そのままズルズルと四郎は訓練場へと連行されていった。

酔ってない！

特訓という名のイジメから無事（？）帰還した四郎はリビングでぶちぶちと文句を垂れていた。

「ちくしょー。マジあいつら何なんだよ。鬼よか質が悪いぜ」

そのままグビツとお酒を口に運ぶ。日本ではお酒は二十歳からだがこちらでは年齢制限がないので四郎でも気軽に飲めるのだ。

「美味いつ！」

「シローさん、お酒はほどにした方が…」

あまりの飲みっぷりにメイナーが心配して注意をする。しかしそれでも四郎はどこ吹く風だ。

「まあまあまあ、落ち着けよメイナー。ほらお前も飲め」

ワインの入っているボトルを差し出す。ちなみに結構なお値段の奴だ。

「い、いやボクはお酒は…」

「ああはあん！？俺の酒が飲めねーってのか！！」

「いやそういう訳じゃなくて…」

困った顔をしながら周りを見渡すメイナー。キッチンにいるミリーと目が合ったのでアイコンタクトを取る。

「（ミリーさん、助けて。ボクじゃ無理！）」

「（なら私がシロー様のお相手をしますから隙を見て逃げ出して下さい）」

「（うん！）」

この間、わずか0.5秒。話通りミリーが新しいお酒を持って近寄って来る。

「シロー様、新しいお酒持ってきましたよ」

「おっ、気が利くね。さすがミリー」

さつそくお酒を受け取って一気飲みする四郎。

「いい飲みっぷりですねえ」

この隙にメイナーはこそそとリビングを出て行った。入れ替わりにシャルビィがリビングに入ってくる。

「酒臭いな。今日はシローか、珍しいな」

四郎は普段お酒を飲まない。日本の常識が四郎の常識であつたため、こちらに来てもしまいち踏み込めなかったのだ。

なのでいつもここでお酒を飲んでいるのはミリーとネミリアだ。

二人とも見た目は若いがそれなりの年齢のためグビグビ飲んでしまふのだ。

「はい、シロー様あゝん」

ミリーが嬉しそうにおつまみを四郎の口へと運んでいる。四郎はなすがままだ。

「酔っているのかシロー」

「前々寄つてないよ」

「何か発音が可笑しくないか？」

「木のせい期のせい」

どうやら四郎は完全に酔っ払ってしまったらしく微妙に発音がズレている。

「ミリーおつまみ」

「はいはい、あゝん」

親から餌を貰う雛の如く、四郎はおつまみを消費していく。

「せっかくだし私も同席しよう」

見ているだけなのに耐えられなくなったのかシャルビィも席に座る。

「はい、シャルちゃんどうぞ」

ミリーにお酒を注がれる。それを一気に飲み干す。

「お！いい飲みっぷりじゃねーかシャル」

四郎がテーブルをバンバンと叩きながら笑う。

「そつれひょ？わらひ、おさけらいすきからな」

シャルビィはお酒にかなり弱いらしく最初の一杯で呂律が回らなく

なってしまった。

「あらあらシャルちゃんも相変わらずですねえ」

ミリーもそう言いながら次々とお酒を消費していく。

酒の臭いに釣られたのかネミリアもいつの間にか席に着いておりお酒を飲み出した。

「やっぱビールは欠かせないわよねえ」

「ネミリアさんもいらっしやいましたか」

ミリーとネミリアはグラスを軽くぶつけて乾杯をする。

「鮭は飲んでも吞まれるなっ！」

四郎がいきなり立ち上がって言った。発音が違うせいでまるでジョーズの劣化版みたいな感じの台詞になってしまっている。

「しろーかつこいいなあ」

シャルビイも頭が上手く回っていないため適当な返しをする。

「シロー様さすがです」

こちらは酔っていないが四郎信者なので選択肢は誉めるしか存在していない。

「シローちゃん可愛いわね」

こちらはこちらで獲物を狙う猛禽類のような眼になっている。

大分力オスな状態になってきた所にティカを連れてメイナーが戻って来た。

「…うそお!？」

さつきよりも力オスな状態になっているのを見て驚くメイナー。ティカの顔も引きつっている。

「おう、お前らも飲めよ」

逃げようとする二人をガツチリと捕まえて無理やり座らせる四郎。

「あわわ…」

「ちょ、ちよつと…」

小さく抵抗するも酔っ払い達に一睨みされて閉口する二人。それはまるで哀れな子羊だった。

「のめ」

シャルビイが問答無用でメイナーの口にワインを突っ込む。吹き出さないように仕方なく受け入れるメイナー。

「ティカちゃんもどうぞ」

メイナーのを見ている隙にミリーに無理やり入れられたビールを涙目になりながら飲み込むティカ。

「あ、頭がボーっとしてきたかも…」

「あれ？師匠が二人いる…双子？」

どうやらこの二人もお酒にあまり免疫がなかったらしくすぐに酔っ払ってしまった。

この宴は全員が酔いつぶれる深夜まで行われた。その中で一番最後まで残っていたのはミリーだった。

着きそう

「頭が痛いわ…」

ティカが頭を抱えながら歩いている。隣には四郎がいる。

「頭が悪いの間違いじゃないか？」

「違うわよ！！誰かさんに無理やりお酒飲まされたせいで二日酔いなよ！」

そう叫んでからティカは再び頭を抱えた。どうやら自分の声が頭に響いたようだ。

「ミリーのせいかな」

「原因は師匠だけだね！」

二日酔いにしては無駄に元氣そうにはつちやけている。メイナーとシャルビィなんかは気分が悪そうに俯いているというのに。

「うっ、頭が…」

「不覚にも酒に吞まれてしまったか…」

ぶつぶつと言っている二人。もちろんネミリアとミリーは全く酔った様子はない。

「もうそろそろメサイアに着きますから頑張つて下さい」

ミリーが二日酔いメンバーを励ます。しかしそれに一番食い付いたのは四郎だった。

「マジか。ようやくこの徒歩地獄から解放されるのか」

両手を組み、神へ祈りを捧げるポーズを取る。余程嬉しいらしい。

「街へ入ったらどうするのかしら？」

「んー、とりあえず大会へのエントリーをするかな」

「確か本戦に出れるのは八人だったな」

シャルビィが気分が悪そうなまま会話に参加する。

「てことは八つのブロックに分けて予選って事か」

どこから取り出したのかリングをシャリシャリかじりながら話す四郎。ティカがそのリングを羨ましそうに見つめている。

「……ティカとメイナーにもリングをやるう」

視線に堪えきれなくなった四郎は仕方なくポケットからリングを二つ取り出しティカとメイナーに渡す。

「さんきゅー」

「ありがとっ」

二人は意外にもそのままリングを丸かじりする。

「んで、エントリーが終わったら大会が始まるまでは観光かな」

「まあ妥当ね。私は街に入ったら別行動させてもらうけど構わないかしら？」

「ああ、お前が動きやすいようにしてくれ」

残ったリングの芯を投げ捨てる。ポイ捨てだが生ゴミなのでそれを非難する人物はいない。

そこからしばらくは皆無言で歩いた。二日酔い組もしんどそうにしながらも文句を言ったりする者はいなかった。四郎も二日酔い組が文句を言っていないのに自分だけ文句を言う訳もいかず大人しく歩いていた。

道中に今まで違って彩りに溢れていた。草原を歩いているのは変わらないのだが色とりどりの花が咲いているのだ。

「これも『黒の獣』の影響なのか？」

「分かん。帝国に来るのは初めてだからな」

「メイナーは何か知ってる？」

「ううん。ボクも帝国をちゃんと歩くのは初めてだから」

メイナーのその言葉を聞いてミリー、ティカ、シャルビィが顔を伏せる。メイナーが奴隷だったという事を思い出しているのだろう。

「そっか、それじゃあ判断出来ないか」

「ごめんなさい」

「お前が気にする事じゃねーよ」

四郎は無意識のうちにメイナーの頭を撫でる。年齢はほとんど変わ

らないはずなのだがいつも年下扱いしてしまう。

「でも『黒の獣』の影響で豊かになるってありえない？」

「確かに『黒の獣』だけじゃな。けどもし『黒の獣』の封印を解こうとしてる奴ならどうだろうな」

ティカだけでなくネミリアやミリーまでも眉をひそめる。

「どういう事？」

「いや『黒の獣』を復活させて利用しようとしてる奴がいるかもしれないって事」

「否定は出来ないけれど『黒の獣』を人の力で操れるとは思えないわ」

「同感だ。今のはただの戯言だから気にしないでくれ」

それから四郎は眠そうに欠伸をした。ミリーは四郎が言った事をにしているのか未だに思案顔だ。

「（もし操ろうとしているのが人ではなかったら…）」

ミリーはそこまで考えて頭を振る。ここから先は考えなくなかったのだ。

「あ！街だ！！」

メイナーが前方を指差して言った。獣人だから視力がいいのだろう。見えたと言われても四郎たちにはいまいちピンと来ない。

「見えねー」

「あつちにあるじゃん！！」

誰も理解してくれないので少し怒り気味のメイナー。頬を膨らませて尻尾を立てている。狐というよりはどちらかと言うと猫みたいだ。

「ああ、見えたわ」

そこから次にネミリアが街を見つける事が出来た。その後はすぐに皆遠くに街があるのを確認した。

帝都メサイアはもうすぐそこまで迫っていた。

到着

「という訳でやって来ました帝都メサイア!!」

四郎は両手を広げて喜びを表す。外から見たメサイアはまさに圧巻だった。今まで見た街の中では圧倒的存在感を放っていた。

黒を基調とした街壁は難攻不落を思わせ、その奥に見える街の光に誘われる。街そのものの大きさもかなりのものだ。街の中心に高く聳え立つのは宮殿なのだろう。

「シローちゃん、大はしゃぎね」

「師匠子供ね」

「最初の頃のクールキャラは何処へ…」

この世界に馴れてきたからか四郎も随分と感情を表すようになった。こちらに来た頃は誰一人知り合いはいなかった。それ故に思慮を欠かさず冷静を常としていた。しかし元来、四郎はお調子者なので馴染んでしまえばクールでいる必要もない。信頼出来る仲間も増え、ようやく四郎は本当の自分に戻れるのだ。

「クールだったのはキャラ作りだからな。気にすんな」

頭の後ろで腕を組ながら気楽そうに四郎は言った。

一行は街門を通り、中へ入る。まず一番目に付いたのは人だった。人多っ!？」

ティカがメンバーを代表して言った。恐らくほとんどの人が武道大会目当てだろう。

「何人くらいエントリーするんかねー」

「予想よりも多そうだな」

とりあえず四郎とシャルビィは大会にエントリーするために闘技場へと向かう。ネミリアは情報収集を行うため一人だけで離脱した。残りのメンバーは予想より人が多いので早めに宿を取りに行くとの

ことだ。

「闘技場ってアレだよな」

「多分そうだろう」

四郎が指差した先にドームがある。

「強い奴いるといいな」

雑談をしながら闘技場の方へと歩いて行く。すれ違う人々の話題も大会一色だ。公式に賭けも行われているらしい。

「いらっしやい。参加希望者かい？」

闘技場の入り口にある受付に声を掛けようとしたら先に声を掛けられた四郎。出鼻を挫かれたような感じた。

「ああ。俺とコイツだ」

隣にいるシャルビィを指差す。受付の男は二人を一瞥してから視線を戻す。

「参加資格はランクB以上で犯罪歴がない事だ。大丈夫ならこの水晶に手を当ててくれ」

言われた通りに二人は水晶に手を当てる。すると水晶が光り中から文字が浮き出てきた。

「シロー・タチバナ。変わった名前だな。君はBブロックだ」

「おう」

「シャルビィ・ルーラン。君はFブロックだな。これでエントリィは終わったから頑張ってくれたまえ」

受付の男がそう言った瞬間、場が殺気で包まれる。一人や二人どころではない。この場にいるほとんどの人間が四郎たちに殺気を放っているのだ。受付の男が笑う。

「なるほどね。出場権は手に入れたけどまだ出場資格を手に入れないって事か」

「全く下らんな。これならシローの方がまだマシだ」

「ちょ、どゆこと!？」

余裕そうな、いや実際に余裕なんだがその態度が気に喰わなかったのか一人の男が声を荒らげる。

「デメエら余裕ぶつこいてんじゃねーぞ！！ぶつ殺されてーか！！」
「黙れ」

この場を打ち消すように四郎が殺気を放出する。そのまま受付の男に話し掛ける。

「どうすれば俺らは大会に出れるんだ？」

受付の男は四郎の殺気にやられていないようで飄々としている。

「合格だよ、合格。予想以上だよ。まさか一戦も交えずに圧倒するなんてね」

お手上げといった風に受付の男は両手を軽く上げる。

「大会の本戦は一週間後。予選は明後日からAブロックから順番にやるから遅刻しないでね。遅刻は即失格だから。どんな理由があるうとも、ね？」

そこから更に大会の細かいルールを聞いていった。殺しは禁止らしい。一応見栄え上ステージはあるが場外はないらしい。時間も無制限とのことだ。ただし予選は生き残り戦らしく場外があるらしい。「ちなみに本戦に出場出来たら、その人が所属してるチームはタダで会場に入れるから。大体これ位だけど何か質問はあるかい？」

「優勝候補と有力選手が知りたい」

すかさずにシャルビイがそう言った。四郎はあまり興味無かったがとりあえず頷いておいた。

「そうだねー、この五人かなあ」

>青の騎獅<…前回優勝者

>筋肉爆弾<…前回準優勝者

>女髪<…Sランカー

>ラッキーピンク<…有力チームのリーダー

>ハーミット<…正体不明のSランカー

「って感じかな。これ以上は教えられないから。もういいかい？」

「ああ、助かった」

エントリーも説明も終わり、二人はそのままミリーたちと合流するため街の中へと戻って行った。

「いやあ、今年は荒れそうだねー」

最後に受付の男がそう呟いた。

壇上に上がる資格1

「今回の大会はどうよ、強い奴いんのか？」

男が肉を喰らいながら隣にいるフードの人物に話し掛ける。

上半身裸のその男は身体の至る所に傷があり、室内だと言うのにスキンヘッドのせいで頭が輝いて見える。

「そうっすねー、いるんじゃないっすかねー」

フードの方は興味なさげに答える。

「相も変わらずやる気がないな>ハーミット<は」

ガチャガチャと音を立てながら次々と食べ物飲み込んでいく男に
対しフードの人物>ハーミット<は静かにコーヒーを飲んでいる。

まるで対照的な二人だ。

「自分はいくまで暇つぶしっすからね。闘いを求めてる>筋肉爆弾<さんとは違うっすよ」

>筋肉爆弾<と呼ばれた男は「確かに」と言っ下品に大声で笑った。

「そーいえば>最速王<が参加するかもって噂を聞いたっす」

>ハーミット<は街中でたまたま聞いた話を>筋肉爆弾<に話してみた。すると>筋肉爆弾<は首を傾げる。

「>最速王<?聞いた事ねーなあ」

「まあ主に王国で名を上げた人っすからねー」

「二つ名からして滅茶苦茶足が速いのか?何か大した事なさげだが」
それを聞いて>ハーミット<はクスクスと笑った。

「違うっすよ。>最速王<の最速は依頼達成が最速って事っす。何でもアステリのギルドにある討伐系の依頼の達成レコードを全て塗り替えたとかー」

「なっ!?!それは本当か?不正ではなく?」

>筋肉爆弾<は思わず食べるのを中断して>ハーミット<の顔を覗き込む。ただ認識阻害の魔法を掛けている>ハーミット<の顔は見えなかったが。

「さあ？でも不正はギルドの泉があるから無理っすよ。だからもし噂が本当ならかなり強いんじゃないっすかね」

「ハハハ、今年は楽しめそうだな！！」

「あなたは毎年楽しんでるっすけどね」

ひとしきり相槌をうつてから>ハーミット<は席を立つ。

「それじゃ自分はもう戻りますんで、本戦で会いましょうー」

ヒラヒラと手を振りながら>ハーミット<は帰って言った。

「あいつちゃっかり俺にコーヒー代押し付けていきやがったな。まあいいけどな！」

>筋肉爆弾<もそのまま食事を再開した。

「はうう、緊張するよお。ミミちゃん」

小柄な身体に桃色の長い髪。それと対照的に大きな胸。そんなアンバランスな少女が目には涙をためて今にも泣きそうな顔をしていた。何故か頭には頭巾を被っておりそれが余計に彼女を幼く見せた。

「どうしたんですかリーダー」

ミミちゃんと呼ばれた女性は少女の方を振り返る。

「怖いよ、なんでナナが大会に出るのよ」

「それは貴女が私たちのチーム>姫の花飾り<のリーダーだからです」

「ナナじゃなくてミミちゃんが出ればいいのに。ナナじゃ予選敗退だよー」

「大丈夫です。>ラッキーピンク<の貴女がそう簡単に負けるはずがありませんから」

キッパリとミミは宣言する。それは自信であると同時に絶対の事実。チーム>姫の花飾り<は女性だけのチームだ。不遇な扱いを受ける女性冒険者を集めたのが始まりの伝統あるチームだ。そしてその六代目のリーダーをしている>ラッキーピンク<があっさりと負けるはずがないのだ。

しかも>ラッキーピンク<は男性との勝負に負けた事がない。逆に言えば男性は絶対に>ラッキーピンク<に勝つ事が出来ないのだ。「うー、わかったよ。ミミちゃんがそう言うなら仕方ないもん……」

少々ふてくされながらも渋々了承する>ラッキーピンク<。

「でももし優勝したらナナにご褒美ちょうだいっ!」

そう言っただけでミミの腕に絡みつくと>ラッキーピンク<。端から見ればただの仲の良い姉妹にしか見えない。

「ふふ、さっきまで予選敗退とか言っていたのにもう優勝した時の話ですか?」

ミミは意地悪そうにそう尋ねた。すると>ラッキーピンク<はうつ、と言っただけで一瞬返事に詰まる。そんな可愛らしい様子をミミは微笑みながら見ている。姉妹というより母娘に近いような気がする。

「ナナは絶対勝つもんねー」

「怖さは?」

「もう無いよー!」

にぱー、と両手を広げてアピールする>ラッキーピンク<。思わずミミは頭を撫でる。

「くすぐった〜い」

そう言いながらも満更でも無さそうだった>ラッキーピンク<だった。

壇上に立つ資格2

薄暗いバーのような所に女はいた。長く艶やかな髪を持つ女だった。しかし髪が長すぎて顔の半分が隠れてしまっている。足下にまで伸びた美しい黒髪は見る人にある種の畏怖を抱かせた。

「貴方がここに来るなんて珍しい事もあるわね」

カクテルを上品に飲みながら女は隣りに座った男に話し掛けた。

「久しぶりに会った親友に対して随分失礼じゃん」

「親友？笑えない冗談は止して。それで？何で貴方がここにいるのかしら？」

「君と同じさ>女髪く。大会に出るんだ」

それを聞いた>女髪くは舌打ちをした。それから残っているカクテルを一気に喉へ流し込んだ。

「最っ悪ね。よりによって貴方が出るなんて」

憎々しげな表情をする>女髪く。といつても髪で顔が隠れていて表情は見えないが。バーに流れているジャズがやけに響く。

「これでも迷ったんだよ。出場するかどうか。まさに>優柔不断くだね」

自分の二つ名を自嘲気味に言っつて笑う男>優柔不断く。それを>女髪くは気味悪そうに見ている。

「引きこもりの貴方がどうして大会になんか出るのかしら？納得のいく理由を教えてちょうだい」

「えゝ？そうだなあ、教えてもいいけど…。いややっぱり教えたくないかも…」

「どっちよー！ハッキリなさい」

>女髪くは言っつてから「しまった」と思った。

「いやいや。ハッキリって言われても困るね。何せ僕は>優柔不断

「くだからね」

「……………」

「ははは、そんなに怒らないでよ。いや怒った君も可愛いからいいけど。顔見えてないの可愛いってどうして分かるんだろうね？やっぱ雰囲気かな。つまりはそういう雰囲気だったのかな？」

> 優柔不断くは急に饒舌になりベラベラと喋り出した。

「どうでもいいから早く理由を教えてちょうだい」

「だから雰囲気だって。これは僕の勘なんだけどね。今回の大会は荒れるよ？そりゃあもう今まで眠っていた化け物が目覚める位に」
> 優柔不断くは喋り続ける。しかもとても楽しそうに。対照的に、女髪くの方はだんだんと不機嫌そうになっていく。

「随分大袈裟な例えね。化け物が目覚めるなんて」

「いんや。例えじゃないよ。これは僕が考古学者として導き出した結論だからね。全国各地を練り練り歩いてね」

> 優柔不断くにしては真面目な口振りに、女髪くは思わず彼の言った事を考える。

「どうゆう事？」

「そのまんまさ。大陸の下に眠る化け物の封印が解けかかっているのさ」

「信じられないわね」

「そんなの僕だって同じさ。ただ最近は色々と異常が多いからね。そう考えると辻褄が合うんだよ」

それは、> 優柔不断くの考古学者としての勘。しかしその裏には確かなる事実に基づいている。恐らく彼は一般人の中で限りなく真相に近い場所にいるのだろう。

「まあいいわよ。今はとりあえず大会を楽しむ。それだけよ」

> 女髪くは暗にこの話にはこれ以上興味はないと伝えていたので、> 優柔不断くも黙らざるをえなかった。

「今年も、青の騎獅くが出るらしいわ。去年は僅差で負けたけど今年は勝つわ」

「うゝん、僕としては>ラッキーピンク<に要注意かな。男は絶対に勝てないって聞いているしね。他にも気になるルーキーもいるし」
ルーキーという言葉に>女髪<がピクリと反応する。未知の敵に警戒心を抱くのは冒険者としては当然の事だ。

「気になるかい？ 気になるよね。僕は優しいから教えてあげるよ。」

>最速王<っていう二つ名の人らしいね」

それだけ言って黙り込む>優柔不断<。

「それだけかい！？」

「そうだよ。あんまりよく知らないし。でも強いらしいよ。予備選も戦わずに乗り切ったらしいしね」

予備選というのは四郎たちがエントリーして直後に起きた騒ぎの事だ。予選の前の予選という訳だ。

「それが事実なら確かに脅威に成りうるわね」

もう何杯目かになるカクテルを飲み込む。いつも>優柔不断<と飲むと普段の倍以上飲む事になる>女髪<。

「あんまり飲み過ぎは良くないよ」

「原因は貴方よ。少しは自覚してちょうだい」

「自覚してるよー」

「なら余計に質が悪いわね。>優柔不断<というよりただの不愉快よね、貴方って」

酔っているからか>女髪<が少しキツめの事を言う。しかしそれでも言われた本人はどこ吹く風だ。

「いやあ、大分酔ってるね。これ以上は僕の命に関わるからそろそろ帰ろうかな」

「なら早く帰ってちょうだい」

「はいはい。それじゃあまた本戦で会おうね」

そう言って>優柔不断<は一瞬でその場から消えた。それを見届けてから>女髪<も代金を支払い千鳥足で宿へと戻って行った。

予選 1

『野郎共、準備はいいかー！！！？今さら待ったは無しだぜい！！』

司会の男がそう言う就先ほどまでざわついていた会場が一瞬で静かになった。皆待っているのだ。大会が始まるのを。

『それでは！！ただ今から第16回武道大会予選を開始する！！！』
『ワアアアアアアー！！！！！！』

会場のボルテージがMAXに達した。始まりを告げた最高の娯楽に人々は歓喜する。

『予選Aブロックの選手は前へ！』

ゾロゾロと50人近くの間人がステージの周りに集まった。この全員が予選参加者だ。

『ルールは簡単、最後まで立っていた奴が勝者だ！！それでは予選Aブロック始め！！』

司会の号令と共にすぐさま男たちが動き出す。

『ぶっ殺してやらあ！！！！』

『邪魔じゃボケがっ！！！！』

ステージ上に魔法や剣撃が吹き荒れる。観客もそれぞれ好きな人物を応援している。しかしその中でも一際目立つ応援団があった。

『リーダー！！！！しっかり！！！！』

『頑張つてー！！！！』

若い女性たちによる集まり。>姫の花飾りくのメンバーだ。チーム全員が桃色の制服を着ている。

『あわわ、はわわ……！！』

応援されている当の本人>ラッキーマークはそれ所ではない。次々と襲いかかる攻撃を何とか避けきっているのだ。

「な、何で皆ななを狙うのー!?」

>ラッキーピンク<はそう叫ぶがそれも当然である。>ラッキーピンク<はかなりの実力者だ。他の有象無象からしてみれば脅威でしかない。故にAブロックの選手のほとんどが>ラッキーピンク<に特攻を仕掛けたのだ。

しかしその攻撃は未だに一度も>ラッキーピンク<に当たっては
いない。次第に男たちに焦りが生じ始める。

「な、何で効かないんだ!?」

「化け物…」

「うー失礼な人たちね! なな怒ったんだから!」

>ラッキーピンク<が両手を前にかざす。すると会場がざわつく。

『おおーっと!?>ラッキーピンク<が構えたっ! いよいよ出る
のか、あの技が! ?』

司会の男が興奮しながら実況をする。

「もう知らないんだからっ!>私は悪くないもんつく!」

>ラッキーピンク<がそう叫んだ瞬間、彼女以外の選手がずっこけた。しかもミラクルな事に全員気絶している。

『で、出たー! ! !>ラッキーピンク<の代名詞とも言える技が
っ! ! !』

会場が拍手に包まれる。この会場にいるほとんどの観客は今の奇跡の技に興奮しているだけだが舞台裏にいる人たちは違った。

「すごいな。一体何をしたんだ?」

シャルビィが隣にいる四郎に問い掛ける。四郎の方も即答せずに少し考え込んでから答える。

「言霊…だな。恐らく祈祷魔法の一種だろう」

「大丈夫なのか? 次にアイツと当たるのはシローだろ? 攻撃も何故だか当たらないし」

「ああ、大丈夫だ。恐らく俺なら勝てる。ていうか多分男なら俺しか勝てないかもな」

四郎は微かに笑いながらそう言うとシャルビィが頭に疑問符を浮か

「どういう事だ？」

それだけ言つて四郎は次に始まる予選に備えて控え室へと戻る。シャルビィはその場に残つた。このまま次の試合もここで見るつもりなのだろう。

『試合しゅーりよーっつ！！！やはり生き残ったのは>ラッキーピンク<だったあ！！という訳で予選Aブロック、選手全員気絶により勝者>ラッキーピンク<！！！！』

ワアアアアアアー！！！！と最初の叫びよりも大きな叫びと共に>ラッキーピンク<に盛大な拍手が贈られる。

ペコペコと頭を下げる>ラッキーピンク。顔が真っ赤なのは注目されて恥ずかしいからだろう。

> 姫の花飾り<のメンバーからダメ出しをくらう>ラッキーピンク。結局彼女は顔を赤くしたまんまそそくさと退場した。

『さあさあ予想通りというか予想以上というかさすがの貫禄>ラッキーパーンク<!! いやむしろ貫禄は皆無だったが!!!! とりあえずこれだけは言わせて貰おうか!>ラッキーパーンク<萌えー!!!!』

司会が腕を上突き上げて叫んだ。すると観客（主に男）が司会と同じように「萌えー！！」と叫んで無駄に盛り上がった。もちろん残りの観客はどん引きしていた。

『さあさあさあ続いてはBブロックだあ！！今回このブロックには有力選手が二名いるぜい！！』

ステージの前にはゾロゾロとBブロックのメンバーが集まって来ている。その中に四郎の姿もあった。

一人はもちろん昨年準優勝者＞筋肉爆弾くだーっ！！！！

＜筋肉爆弾＞が片手を上げる。すると会場もそれだけで盛り上がる。

『そしてもう一人は最近王国で売り出し中のチーム＜救いの手＞のリーダー、＜最速王＞だーっ！！』

四郎もとりあえず片手を上げる。しかし＜筋肉爆弾＞程は会場は盛り上がらない。

『それでは予選Bブロック試合始めっ！！』

そして四郎の予選が始まった。

予選 2

試合の開始と共に人々が爆せる。それは圧倒的な破壊。

「おらおらおら！！どーしたよっ！！歯ごたえ無さ過ぎだぜえっ！
」

>筋肉爆弾くが拳を振るう度に爆せる。

腹を、背中を、首を、腕を、頭を、拳一つで圧倒する。それは純粹な憤怒であつて強欲であつた。

『飛ぶっ！>筋肉爆弾くの前に次々と紙切れの如く飛ばされる選手たち！！さすが昨年の準優勝者だあつっ！！』

観客席からも盛大な応援が贈られる。それが>筋肉爆弾くに更なる勢いをつける。

派手に人々が場外にまで吹き飛ばされる。だがそれと同じくらい糸が切れた人形のようにその場に崩れ落ちる者たちがいた。もちろん四郎の仕業だ。

精密機械の如く急所だけを突き一撃で敵を沈める。それは同じ圧倒的でも>筋肉爆弾くとは全く逆である。

無慈悲に、理不尽に、不条理に、敵は何も気付かぬままにほふられる。それはまるで冷たい刃。

『何という事だあーっ！！我々が>筋肉爆弾くに集中している間に>最速王くも動いていたー！！その名に恥じぬ強さだあーっ！』

司会の発言でようやく観客も気付く。四郎が>筋肉爆弾く以上の人数を倒している事に。

「なるほど、お前が>最速王くか。噂以上だな」

>筋肉爆弾くが殺気を飛ばしながら睨んでくる。それは獲物を前にした捕食者の眼だ。

「悪いけど俺はあんたを知らないぜ。何せ田舎出身なんでね」

殺気を飄々と流しながらおどけて見せる四郎。観客は固唾を呑んでこの二人の行く末を見つめている。

「そうか。なら教えてやろう。俺の>武<をなっ!!」

足下に溜めた>武<を爆発させ、轟音と共に四郎へと迫る。そのま
ま一氣に拳を振り抜く。

しかしその拳は四郎の右腕でよって流される。四郎はそのまま相
手の体格がよいのを利用して懷へと潜り込む。流した腕とは逆の左
腕を>筋肉爆弾<の脇に叩き込む。

「ぐっ!」

殴った勢いをそのまま利用して後方へと下がり体勢を整える。その
隙に>筋肉爆弾<が再び間合いを詰めてくる。四郎の先ほどのパン
チは効いていないようだ。

「>散弾拳<!!!!」

四郎の動きを警戒して必要以上の間合いに踏み込まず>武<を飛ば
す>筋肉爆弾<。

「>水壁<」

四郎は瞬時に>武<から>魔<へと切り換える。同時に使わないの
は他の参加者に手の内を見せたくないからだ。>水壁<は>散弾拳
<を全て防ぎきる。

「甘いッ!!!!」

>筋肉爆弾<は四郎の出した>水壁<の影に隠れ奇襲をかける。

見えづらい下からの攻撃に四郎の反応が一瞬遅れる。>武<で出
来た刃は四郎の脇を挟った。

「うおっ!?!」

思わぬダメージに四郎のバランスが崩れる。それを見逃す>筋肉爆
弾<ではない。そのまま身体ごと突っ込み爆せる。

会場に轟音が響き渡る。耳を割るかのような轟音だ。何人もの観
客が耳を押さえている。

『き、決まったーっ!!完っ全に決まったあっ!!これはさすが
の>最速王<も戦闘不能か!?!』

司会が今さらながら解説を入れる。しかしその解説を聞いている人間はほとんどいない。

バチャツと何かが崩れた音がした。崩れたのは四郎の身体だった。

「>水分身くだと!？」

>筋肉爆弾くは眼を見開く。しかしそのまま硬直したりはしなかった。彼は驚きつつも周囲を確認する。しかし四郎はどこにもいない。『なにいつ!？絶体絶命かと思われた>最速王くは>水分身くだった!?!』

司会がそう叫んだ所で>筋肉爆弾くの後ろの景色が一瞬霞んだ。

「ここだ」

「…っ!？」

いきなり後ろに現れた四郎。いや四郎はそもそも最初から>筋肉爆弾くの後ろにいたのだ。最初というのは>散弾拳くの前からという事だ。

光系魔法で自身の周りの光を歪ませて姿を隠していたのだ。といってもこの魔法は姿を隠すだけのものだ。気配や呼吸は隠せない。

故に真に評価すべきは魔法で隠れていたという事ではなくそれを>筋肉爆弾くに悟らせなかった事だ。

「遅い」

四郎は>筋肉爆弾くが最初に行ったように足下で>武くを爆発させ一気に加速する。

「壱!」

突き抜けるように四郎は相手の顎を蹴り上げる。>筋肉爆弾くの重い身体が宙に浮く。

「貳!」

浮き上がった身体の足を蹴り空中で相手の身体を地面と平行にする。

「参!」

落ちてきた身体の重心を殴り上げ相手の身体を自分の頭くらいまで浮き上がらせる。

「>大車輪く!」

そのまま無差別に乱打をする。ありとあらゆる角度からの攻撃に空中で相手の身体がお手玉のように回転する。

「終！」

最後に拳を爆発させ渾身の一撃を叩き込んだ四郎。>筋肉爆弾<は成す術もなく地面へと落下する。ピクリとも動かない。

「やべ…やり過ぎたかな。まあ死んではいいいだろ」

四郎は勝利を確信して背を向ける。その背後から司会の勝利宣言が聞こえた。

『なんとまさか勝ったのは>最速王<だあーっ！Bブロック勝者>最速王<！！』

観客からの盛大な拍手に包まれながらも四郎は落ち着き払った様子でその場を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5504v/>

白の完全無欠

2011年10月17日23時15分発行